十二角関係

山田風太郎

山田風太郎傑作大全 ②



廣済堂文庫

カバーイラスト=毛利 彰
カバーデザイン=原田幸生



十三角関係

山田風太郎

山田風太郎傑作大全②

廣済堂文庫

524
や7-2
543

山田風太郎 十三角関係 山田風太郎傑作大全②

廣済堂文庫

ISBN4-331-60525-6
C0193 ¥543E
9784331605257
1920193005431
定価 本体543円 +税

昭和30年代初め、東京S町遊廓「恋ぐるま」の女主人車戸旗江が殺害され死体をバラバラに切断されるという事件が起きた。色街で人望の篤い医師荊木歓喜は、従業員たちにすこぶる評判がよい彼女が何故殺害されたのか疑問を抱き、警察とは別に独自に犯人捜しを始める。にわか探偵の捜査が進むにつれ驚くべき複雑な人間関係が浮き彫りに。事件の謎は明かされるものの、その背後には驚愕の真相が隠されていた……。

ミステリー&ハードノベルス
廣済堂文庫

山田風太郎
やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した**「達磨峠の事件」**がデビュー作。**昭和**23年「眼中の悪魔」で第2回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

十三角関係
定価 本体543円 +税
平成8年6月1日 初版
平成10年10月30日 2刷
著 者 山田風太郎
発行所 廣済堂出版

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎傑作大全 2

十三角関係

山田風太郎

廣済堂文庫

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎　十三角関係

廣済堂文庫

ミステリー
&
ハードノベルス

2230①

廣済堂文庫注文カード

山田風太郎傑作大全 2

十三角関係

山田風太郎

廣済堂出版

定価 本体543円＋税

〈524〉や―7―2

部数

570

書店・取次店

ISBN4-331-60525-6 C0193 ¥543E

廣済堂文庫売上カード

ISBN4-331-60525-6 C0193 ¥543E

524 や―7―2

十三角関係

山田風太郎傑作大全 2

廣済堂文庫

山田風太郎

☆本カード一〇枚を一口として貴店様印を押し、小社までお送り下さい。貴店様の売上資料にさせて頂きます。

廣済堂出版
〒105 東京都港区芝3-4-12
営業 03(5445)1202
関西支社 06(444)5911

山田風太郎　十三角関係

山田風太郎

遊廓のマダムが惨殺された大衆歓楽街。
複雑にひしめく人間と犯人の素顔は?

ミステリー＆ハードノベルス　廣済堂文庫

廣済堂文庫

ミステリー＆ハードノベルス

廣済堂文庫
ミステリー＆ハードノベルス
好評発売中!!

木谷恭介　薩摩いにしえ殺人事件
謎のメモと五億円もの割引金融債。
歴史の闇にひそむ殺意の軌跡とは!?

峰　隆一郎　円四郎斬鬼剣
女を悶え狂わす淫刀を手に入れた剣
の達人に次々と刺客が襲いかかる！

宮城賢秀　定町廻り活殺剣
謎の銘刀を探し求めて江戸に暗躍す
る集団と内与力・裏探索方との死闘

富島健夫　恋人と実験者と
年上のいとこと初めて情事を体験し
た少年は性の奥深さと愉悦を知り…

山田風太郎　妖異金瓶梅
中国文学の奇書『金瓶梅』の世界を
風太郎流解釈で展開する傑作長篇

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎傑作大全 2

十三角関係

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

第一章　車裂（くるまざき）の美女

幕があがった。

おぼろな闇のなかに、一箇の、赤い風ぐるまがまわっていた。それは、直径が一間（けん）以上もある、あの和蘭陀（おらんだ）の風景画によくみられるような、巨大な羽根車（はねぐるま）だった。そのかたちは、いかにもどこかで牧歌でもきこえてきそうである。けれど、その色は、網膜も染まりそうなほど真っ赤だった。真っ赤なひかりをはなちつつ、ユックリとまわっていた。ユックリ、ユックリ、ユックリと――そうだ、まるでなにかをぶらさげているように重々しく。……いや、みるがいい、その赤い風車（ふうしゃ）は、たしかになにかをぶら下げている。あれはいったいなんだろう？　大きな十字架のような四片の羽根に、ひとつずつ、仄（ほの）白い物体が吊（つ）られているのだ。

赤い風車はまわる。あれは一本の足ではないか。つぎの羽根の吊っているのも、人間の足ではないか。恐ろしい十字架はまわる。そのつぎは、腸詰（ちょうつめ）みたいにたばねた二本の腕ではないか。そして最後に、真紅（しんく）の毫光（ごうこう）にもえたつようにみえるのは、美しい女の首ではなかったか？

——荊木歓喜が、その不思議な少女にみちびかれて、この吐気のする悪夢のような殺人事件の、しかも華麗とも凄惨とも評しようのない開幕の場にいあわせたのは、なかば偶然にちがいなかった。

「駅まで千鳥足で二十分」

その夜、荊木歓喜は、壁にそんな紙を貼りつけた、東京S町の遊廓の入口にある小さな焼鳥屋で、焼酎をのんでいた。

歳の瀬にちかい冬のことで、時刻も九時半にちかかったが、こういう場所の盛りはこれからである。ひやかしてあるくには、やはり酒の力をかりる必要があるのか、こがらしのなかをあるきつかれて、あたたかな火の色にさそわれるのか、または精力の補給に、あぶらの多い肉をもとめるのか、店は、今夜も、猿のように赤い顔の、狼みたいに騒々しい客でいっぱいだった。

「レバ、肝臓。……タン、舌。……フクロ、子宮。……タマ、睾丸。……」

となりの三人の大学生が、肉をやく煙と匂いにかすんだ天井からぶらさがった「ホルモン料理」と銘打った紙きれを読んでいた。

「そのへんはわかるが、マメ、腎臓とはなんだい？」

「そりゃ、腎臓というやつが、そらまめの恰好しとるからですな」

と、歓喜がよこからぶすっといった。

よこから口を出されて、大学生はけげんそうにふりかえって、ちょっと気味わるそうな表情になった。むりもない、大兵肥満だが、まるで乞食みたいなモジャモジャ頭、おまけに右の

頬っぺたに、クッキリ三日月のような傷のあとがういている。——が、コップ一杯の焼酎を、きゅーっとひといきにのんで、にっと笑った顔が、ふしぎに愛嬌のある童顔となったのに、ついつりこまれて、

「ははあ、なるほど、それじゃ、ガツ、胃袋。……テッポー、腸下。……テバヤキ、雛鳥ってのはなんです？」

「さあ、そいつは、わしにもわからんて。なかんずく、テッポーの腸下、その腸下というやつがわからん。腸下などという臓器は解剖でみたことがない、とわしはここの大将に注意したんじゃが」

真っ赤におこった炭火からあげた串刺しのテッポーにタレをかけていた焼鳥屋の亭主が、笑いながらいった。

「へ、へ、学生さん、その先生は、いやに汚ねえが、そうみえてれっきとしたお医者だからね。いつもその紙きれをみて、あたしに文句をいってしようがねえんですよ。腸の下ってえと、生殖器か、なあんてね」

「どりゃ、それではそろそろ女の腸下をくいにゆくか」

と、サラリーマンらしいふたりづれがつぶやいて立ちあがったので、店はどっとわきかえった。色もわからないほどあぶらじみたのれんのすきまから、平和で、享楽的で、活力にみちた笑い声と、あたたかで香ばしい湯気が、冷たくて哀しい冬の夜霧のなかへ波うちながられ出ていった。

——そののれんをかきわけて、少女が顔をのぞかせたのは、そのときだった。

「あのう……恋ぐるまって、どこでしょうか」

なにげなく顔をあげた亭主の眼が、パチパチまばたきをしたので、みんなふりむいた。のれんのあいだからのぞいているのは、まだ十七八の、愛くるしい円顔（まるがお）の少女だった。しかも、この毒々しい女たちとちがって、化粧もしていない、セーラー服の姿だったのである。

このおくは、七十五軒の、いずれおとらぬ奇怪な建物が、迷路をかたちづくっているし、ここらでほかにものをきくような店もないから、思いあぐねて立ちよったものだろう。「恋ぐるま」というのは、妓楼の名のひとつだった。

「恋ぐるまってえのは……ここをまっすぐにいって、二つめのかどを左へおれて、そこから四つめの……いや、ニュー曙（あけぼの）のあるのは三つめだから、そうそう、三つめのかどを右へまわって……どうも口でいってもわからねえな。旦那旦那、すんませんが、そっちへ案内してやってくれませんかい？」

「オッケー」

と、たちあがっていたふたりのサラリーマンが手をふって、あみだにかぶった帽子でのれんをわけて出ていった。

「いまの女の子は、高校生じゃないか」

と、大学生たちが顔を見合わせた。

「高校生が、いまごろ女郎屋に、なんの用事があるんだろうね？」

「姉かなんか、はたらいているのじゃないか」

「そういう家庭の女の子ともみえなかったよ。ちょっと上品で、利口そうな顔をしていた。——」

荊木歓喜が、またぶすっとひとりごとをいった。

「そういう家庭の息子ともみえんもので、遊廓に酒をのみにくる大学生もある」

「ちげえねえ！」

と、亭主がひたいをたたいたので、ニヤニヤ笑う大学生を、またどっと笑いの渦がつつんだ。

荊木歓喜は、こんどはニコリともしないで、

「おやじ。もう一杯。それからこのドラ息子たちにも一杯ずつ」

「あ、御馳走さま！　しかしね、おじさん、こういうところにくるのも、修行のひとつですよ」

「むかしは、そうじゃったが」

「いまだっておなじですよ。おじさんは、お医者だってね。キンゼイ報告によると、男性の性慾は二十歳（はたち）以前に絶頂に達するというじゃないですか。そういうエネルギーをスポーツにそそげって説もありますけどね、あれもなかなか時間をくうもので、わるくすると勉強と本末顚倒しかねない。それより、こういうところで、かるく、サラリと——」

しゃあしゃあとしていう。歓喜先生はまじめな顔で、

「なるほど」

「なに、このほうなら、本末顚倒するほどお金がかかりませんよ。ガール・フレンドという手もありますけどね。あれはうまくゆけばタダだけど、やっぱりねえ、あとくされがのこるし、こっちの方が合理的ですよ。それに、ぼくたちだって、いつか結婚するでしょう？　そんなとき、女を知らなければ――セックスの芸術を知らなければ、その結婚がどんなにみじめなものであるか、ひいてはフラウに対してもどんな不幸をあたえるか――おい、フクロいっちょう！」

「なるほど」

「ぼくはタマをもらおうかな」

と、もうひとりも軍鶏みたいにくびをほそくのばして、

「おゝ、女郎屋よ！　赤線区域よ！　これは不合理にみちた日本が、世界にほこるべき唯一の合理的機構ですよ。あんた方の世代は戦争にまけたから、なんでも外国にないものは野蛮だとおもわれるかもしれんが、ぼくたちにそんな劣等感はない。公平に、科学的精神を以てこれをみれば、実に天才的な機構です。外国に遊廓はないかもしれんが、もっと不潔な売春婦はうんといる。バートランド・ラッセルも、日本の吉原をホメてますからな。そのラッセルがいうには、です。道学者は、男どもがじぶんの教えにしたがえば売春はなくなるだろうと主張するし、もちろん、しごく尤な言い分ではある、だが、男どもがこの教えにてんで従わないことは、道学者じしんがよく承知していることだ、とね。売春禁止法案はおそらく通らんし、通っても長つづきはしないし、長つづきしても、法案提出者の婦人代議士たちの想像もしない不幸な副産物がとび出してくるでしょう。……」

「そう、なりますかな」

「ただ、おしむらくは、女郎屋の経営者がもうけすぎることですよ。あれを慈善事業に供出させろ、とまではいわんが、もっとこんな遊廓の芸術的雰囲気の向上に投資させなくちゃあいかん。せめて、徳川時代の吉原のクラスまでにね！　だいたい、いまの経営者たちはエスプリがない、太夫、禿、ありんす言葉、裲襠に伽羅の駒下駄にあの後光みたいなかんざし、あの風俗をそっくり再現させりゃあ、千客万来、その人気たるやシネラマや原子力展覧会やアメリカの球団やプロレスになかなかヒケはとらんと思うんだが」

そして彼らは、酔っぱらってコップを箸でたたきながら、「ラ・マルセイエーズ」をうたい出した。

「あのう……恋ぐるまって、どこでしょうか？」

ふりむいて、亭主がまた眼をパチパチさせた。さっきの高校生がまたのぞいている。

「あれ？　いまつれてってくれた旦那がたはどうしたい？」

「あのひとたち……すぐそこで女のひとたちにつかまって……ひっぱってゆかれちゃったんです。……」

「ウフ、なあんだ、女の腸下をくいにゆく、なんてえらそうなことをいって、てめえのほうが腸下にくわれちゃったんじゃあねえか」

と、亭主が舌打ちしたので、またみんなどっと笑いくずれた。大学生が歌をやめて、

「ぼくがつれてってやろうか」

「いかん、いかん、おまえさんがたも、その合理的な腸下にくわれそうじゃ。わしがゆこうよ」

と荊木歓喜が、コップをかちりとおくと、フラフラとたちあがった。あるき出すと、ガックリ、ガックリとちんばである。

魁偉なうしろ影がのれんから夜靄のなかへきえると、大学生たちは顔を見あわせた。

「おやじさん、あれでもほんもののお医者?」

肉をきっていた亭主が、庖丁をあげて、赤い顔をした。どういうわけか、ひどく憤慨したようである。

「ほんものもほんもの、たいへんな名医でさあ。汚ねえのは、患者からろくに銭もとらねえからで」

「へへえ。いや、そんなつもりでいったのじゃないさ。あんなにのんだくれで、さばけた医者があるかと思って……」

「なるほど、のんだくれ、焼酎を一升ものむからね。それだけが、タマにキズだね。そして今夜みてえに、のんでも金をはらわねえ。いよいよタマに大キズだね。しかし、それも女たちから金をとらねえことが多いからでさあ。あたしゃあの先生から、酒代をもらおうたあ思わないね」

「女たちから?」

「ここの女たち、裏町のおかみさんたちの、生んじゃいけねえ子、生んじゃこまる子を、タダ

で始末してくれるんでさ。病気だっておなじこと。……なんでも中国からの引揚者だそうだが、いまもって医院も病院もねえ。御苑ちかくのボロアパートの二階に住んでいなさるそうで。……そのくせ、あの先生、ここらあたりの与太公やボスに、えらく顔がききますぜ。なんしろ警察の署長と親友だそうですから」

「どうして?」

「どうしてなんだか、あたしにもよくわからねえんだが、……いや、署長と親友のわけはわかってるんですよ。あの先生、ああみえて、この四五年このあたりで起った人殺しで、警察のほうにゃかいもく見当もつかない事件の犯人をひっくくったそうで。――わからねえというのあ、そこのことでさ。ごらんのとおり、のんべえで、ぶしょう者で、人なつこくて、どっちかといやあ、あたまのわるい豪傑みたいにみえる人ですからね。しかもさ、与太公たちに一目おかれてるってのあ、あの先生、わるいことした野郎つかまえても、その悪いことに相応の理由がありゃあ、そのまま知らあん顔してくれるからだってことですよ。……」

――荊木歓喜先生は、憮然として遊廓のなかを、高校生の少女とあるいていた。

赤く塗った軒、紫石の柱、壁の卑猥な彫刻、五彩のネオン、全体のかたちまでが、これ以上毒々しく、これ以上怪奇な趣向はかんがえられないような家々が、右に左に、はてしもなくつながり、からみあい、その下に、毒蝶のような化粧をこらした女たちが立って、むちゅうで客を呼んでいた。ひるま白日の下でみるとはまったくの別世界に、陳腐なたとえだが、まるで不

夜城か天女のようにみえるのは、なにもかも朧(おぼろ)おぼろにうるませる夜の靄のせいであったろう。

歓喜先生は、人さまのすることに、あまり文句をいいたいたちではない。まして、こんな年ごろの娘さんにはお手あげだ。しかし、彼はときどき、チラチラと少女のほうを横眼でみた。ビニールの小さな包みをかかえた彼女が、みちみち、その清純な愛くるしい顔を、たえずキョロキョロと左右の風景にむけていたからだった。そのかがやく眼には、嫌悪や恐怖よりも、もっとつよい好奇のいろがあった。いや、好奇よりも、もっとつよい憧憬にちかいひかりがあった。

とうとう歓喜先生はいった。

「お嬢さん、あんた、恋ぐるまへ、なんの用でいらっしゃる？」

「はい、おばさまに御用があって」

「おばさま？　おばさまとは、恋ぐるまのマダムか」

「ええ、車戸(くるまど)のおばさま」

「これはおどろいた。あんた、あのマダムとお知りあいなのか」

「ええ、あたしのお母さまと車戸のおばさまが、女学校時代の御親友なんですって。それでお母さまのおつかいでゆくんです」

「ほう。すると……あんたのおうちも、その……おなじような御商売かな」

「まさか！　あたしの父は医者ですわ。いえ、医者でしたわ」

「医者でした？　お父さんはお亡くなりになったのですか」

少女は急にうなだれた。

「いいえ、ある事情があって、いまやめてるの」

「ほほう。……こうみえて、実はわしも医者じゃが。……それで安心したが、それじゃ、あんたはいままでもここへ来たことはおありかな」

「まあ！　おじさま、どうかしていらっしゃるんじゃない？　いままで来たことがあるなら、恋ぐるまの場所をおききすることないわ」

「なるほど、これは一本まいった。でも、マダムは知っておいでだろう？」

「知ってるわ、よく知ってるわ。ここにははじめてですけど、本郷のお宅にはなんども遊びにゆきましたもの。おばさま、ほんとにすばらしい方(かた)よ。おじさまも御存知？」

「知ってる、知ってる。あれは、ええ女じゃ。年増じゃが、あれだけの別嬪(べっぴん)は、マダム麾下(きか)百人の女郎女給のなかにもあるまいて。……」

「いやなおじさま、ええ女じゃ、なんて……」

「あゝいや、そんなつもりでいったのではない。別嬪も別嬪じゃが、あの商売上手は女にはめずらしい。いや、そういう凄腕の女はほかにないこともなかろうが、あの白無垢鉄火の度胸と、天空海濶(かいかつ)のふとッ腹は、女代議士のなかにもあるまい。まして絶世の美女にはいよいよめずらしい。わしは大好きで、且尊敬しとります」

「あゝ、やっぱりファンはあたしだけじゃないのねえ。ほんとにきれいでチャーミングでご親切なおばさまね。おうちもたいへんよ、自家用車も二台あるし、別荘も伊東と軽井沢にあるそ

うだし、……去年、息子さんの三樹（みき）さんの誕生日にお祝いのパーティがあったの、女優さんや、落語家や、ジャズ歌手や、代議士まで呼ばれて、そりゃすごかったわよ。……」

荊木歓喜は、ちょっと不安になったような眼で少女をながめやった。話のあいだも、両側の女たちが声をかけたり、腰をかがめるのに、いちいちうなずいていたのが、こんどは会釈もせず、

「お嬢さん、おうちはどこ？」

「目黒なんです」

「目黒から……いまの時刻……こんなところへ、お母さんがお使いをさせなさったのか？」

「おじさまのおっしゃる意味わかるわ」

高校生は微笑した。明滅するネオンに哀愁の色がうかんだ。

「へんだとお思いになるでしょ？　でも、ほんとうなの。……あたしのお母さま、いま精神病院に入院中なのよ」

「ほほう、それは、それは」

「こんなところへお使いはじめてですけど、そんなへんなお使いははじめてじゃあないのよ。十字架を数寄屋橋から捨ててきておくれとたのんだり、お茶の水のニコライ聖堂のお庭の木の葉をとってきておくれといったり……ほんとにへんな御用、この風呂敷のなかにあるのは、お母さまのむかしから持ってらっしゃる聖書（バイブル）よ。きょう夕方、病院へいったら、おうちへかえってその聖書をすぐ車戸のおばさまへおとどけしてちょうだい、といってきかないの。……」

「なるほど、マダムは毎晩吉原の店からまわって、こっちへ出張してくるが……それにしては、ちょっと時刻がおそすぎる。マダムはいるかどうか。……それで、病院はどこの？」

「代々木の——曾谷（そや）精神病院なんですの」

「あゝ、あの曾谷博士の——あれは私立じゃが、いい病院じゃ、曾谷博士なら、わしも知っとる。えらい先生じゃて。——じゃが、失礼じゃが、きちがいの用だ。博士はなんといわれましたかな？」

「院長先生にはお会いしませんでしたけど、看護人の鴉田（からすだ）さんが、まあお母さまのおっしゃるとおりにしてあげて下さい、というものですから。……お母さまは、もうほとんど恢復しているんです。そして聖書をおばさまにわたししたら、受取をもらってきてちょうだいっていうんですの。……」

「ほほう。……」

しばらく、だまってあるいて、

「名は、なんとおっしゃるのかな？　お嬢さんは」

「あたし、伴圭子（ばんけいこ）」

歓喜先生は、くたびれた。

こんなに、ひとさまのことを訊（き）いたのは、近来めずらしい。相手があまりにあどけない少女だから、ついつい話しこんだが、そんなことをきいてみたところでどうにもしようのないことだ。夜の魔窟へ、そこに君臨する女王をたずねて、狂女から聖書をとどける美少女、そんな言

葉をつらねてみても、歓喜先生には、とんと神秘的な感情などうかんでこない。

「そうか、それはまあ御苦労なことで、マダムもさぞ感涙をながすことじゃろうて。——ところで、恋ぐるまは、あそこです。ほら、店のまえの壁に、でっかい風車のネオンのまわっておるのが——おや？」

赤い風車はまわっていなかった。ネオンはきえていた。むかいあった店のネオンはついているが、さらでだに照明力の弱いネオンはふかい夜靄に吸われて、「恋ぐるま」前面の壁は模糊としてくらい。

壁の下には、洞窟のような入口があって、そこから蛍光燈の蒼い光が妖霧のように吐き出されている。そこに三人の女がたっていた。いうまでもなく「恋ぐるま」の遊女たちだが、ネオンのきえているのは意に介する風もなく、往来を千鳥足でゆきすぎる嫖客に、

「いらしって、いらしって、ねえ、ちょっといらしってよ」

「お泊まりしてってよ。サービスするからさあ、ねえったら、ねえ」

と、よびかけている。

歓喜先生は少女を待たせておいて、女たちのところへいった。

「おい、風車がまわっておらんが、ネオンは故障か」

「ヘイ！　歓喜先生、こんばんは。いいえ、ママさんが消したのよ」

「どうして？」

「アイドンノー。このすぐ上のお部屋にいると、窓からネオンの赤い光がチラチラまわって、

いやなんでしょう」

と、鮎子という女がしゃべっていると、ホールのソファで会社員らしい男に抱きついていたまゆみという女が顔をむけて、

「あら、ママさんはさっき、十時になったらネオンをつけてっていってたわよ。いま、何時？」

「十時十分すぎ。——」

「じゃ、時間はもういいわね。……でも、今夜ママさんのところへずいぶん人が訪ねてきたようだけど、もうネオンつけていいのかしら？」

「お客は、みんなかえっちゃったんじゃあない？」

「あら、紋ちゃんがかえってきた。ちょいと紋ちゃん、ママさんにきいて、ネオンつけてちょうだい」

ちょうど外からぶらりとかえってきたジャンパー姿の紋太という若い衆が、「あいよ」とこたえて、煙草を片手に、ホールの隅からあがる細い階段の下へあるいてゆくのをあとに、歓喜先生は、往来へもどっていった。

「お嬢さん、マダムはいるそうです。いってみなさるがいい」

そのとき、歓喜先生の背が、ぽっと赤くなった。ネオンがつけられたのだ。どうじに、しょんぼりと立っている少女の顔もあかく染まった、赤いひかりが、ゆるやかに少女の顔をまわりはじめる。

「じゃ、わしはこれで……」

荊木歓喜はふっと声をのんだ。仰のいて、風車のネオンをみている少女の瞳が、曼陀羅華でもたべたようにひろがるのがみえたからだ。

チラチラと赤い波がその顔をわたるにつれて、縞とも皺ともつかぬ翳が、みみずのようにねじくれて、あどけないその眼と鼻と唇に、ぞっとするような恐怖の相をえがいた。

「どうなすった？」

なにげなくふりむいた荊木歓喜は、突然、総身の毛がそそけ立つのを感じた。

真紅の風車は、音もなくまわりはじめている。ユックリ、ユックリと。——それは、いままでいくどもみた。いままで見ないものが、それにくっついている。凄まじいほど赤いかがやきをはなつ巨大な四枚の羽根に、朧おぼろと、異形のものが吊られて、しずかにあがり、まわり、さがっている。……

凝然とたちすくんでいる歓喜と少女の異様な気配に、のろのろとちかよってきた二人の女のうち、まゆみがその風車をあおいでいるうち、どういうわけか、急にケタケタと笑い出した。悲鳴よりも、もっと恐ろしい、息をきざむような笑いを。——

いかにもそれは、ユーモラスな夢魔的光景であり、凄惨なる童画的風景であった。四枚の羽根ぐるまにぶらさげられているのは、一本ずつの人間の足であり、二本にたばねた腕であり、そして、血みどろの美女の首だったのだ。

「マダム。……」

荊木歓喜が、とび出すような眼で、歯ぎしりするような叫びをもらした。

妓楼「恋ぐるま」の壁面に、滑稽なばかりにあさましい見世物として無惨な屍をさらされていたのは、その家をはじめとして、五指をかぞえる女郎屋のマダム、車戸旗江だったのである。

路上に崩おれた少女の制服のうえを、ゆらゆらと赤い漣はわたりつづけている。……

第二章　七人の訪問者

特殊飲食店「恋ぐるま」女給まゆみの証言。

——あたい、どうしてあのとき笑ったりなんかしたのかしら、いいえ、ちっとも可笑しいことはなんかありゃしないのにね。可笑しいどころか、あれからまもなくからだじゅうにふるえがきて、たべたもの、みんな吐いちゃったくらいなんです。

ママさんは、いつあんなひどい目にあったのかしら、胴体だけ、お部屋にのこっていたんだってね。あたいたち、下にいて、ぜんぜん知らなかった。

そりゃあ、ああいう場所だから、たえず酔っぱらいのケンカする声や、ながしの演歌師のギターの音や、支那ソバ屋のチャルメラや、しょうばいしてる女のひとたちの呼び声がきこえてて、ちっとやそっとのヒメイなんか耳にもとまらないでしょうけどね。だいいちホールじゃラジオが、ジャズをガンガンわめきたてていたし、——それにしても、あんな恐ろしい目にあうママさんのさけび声ひとつきいたおぼえがないなんて、ふんとにどうかしているわ。

もっとも、ママさんがお店にきてから、あのむごたらしい見世物になるまで、あたい遊びふたつほどとって、奥のあたいのお部屋にいってましたけど。……そのあいだのことは、朱実さんかユリちゃんにでもきいて下さいな。

ママさんのお店にきたときは、知ってます。あれは、七時すぎでしたわ。そうですね、ママさんはそんなにきげんはわるくもなく、へんでもなかった。いつもとおなじ、きれいな顔でニコニコ笑ってました。ええ、ママさんは、吉原にもお店を三軒、S駅ちかくにもキャバレー持ってるし、ここにも「恋ぐるま」のほかに、「ふるさと」ってお店があるんですよ。ママさんは、毎日、本郷の家を出て、吉原からじゅんじゅんにお店をシサツしてまわるのがおしごとなんです。「恋ぐるま」にくるのは、いつもその時刻でした。

このお店がいっちあとで出来たせいか、ママさんは「恋ぐるま」がいちばん気にいってるとかで、よく、ここでお客さんと会うことにきめていたらしいわ。いえ、お客さんといったって、あたいたちのお客さんとはいみがちがいます。組合のひとたちや、周旋人のひとや、それから……いっていいかしら、いっていい？　あの警察の旦那なんかと。どんなお話があるのかあたいなんか知らない。警察のほうじゃ、わかってるでしょ？　あら、そんな眼でにらんじゃあ、いや。

あれだけ顔のひろいママさんですもの、あたいたちの知らないひとだって、うんとあるわ。だから、その晩も、あんなにたくさんママさんに会いにきたひとがあっても、あたいたち、ちっともふしぎに思わなかったの。でも、いまからかんがえると、やっぱり妙なお客ばっかりき

たものだと思うわ。

　妙なお客っていえば、あたいの亭主もきたんです。いえ、あたいんとこへ。——え、もとはタクシーの運転手してたんだけど、自動車強盗にレンガであたまをたたかれてから、すこうしおかしくなってるの。あたいネ、住込みじゃあなくて、通いなんですけどね、お店へ出かけるとき、「いってらっしゃい。おはやくネ」なんて手をふるんだから、いやンなっちゃう。それがどうしたンだか、ベロベロに酔っぱらってお店にきたじゃあありませんか。お金くれというから、おばさんに借りて、やったんです。すると、まあ、あきれた、そのお金であたいと遊んでゆくっていうんですよ。

「ばかにしないでよ」

「ばかにしてないよ。おめえのほうが、おれをばかあつかいにするじゃあねえか」

「ばかだからサ。ふんとにばかなこといってるわ。笑われるわよ」

「ばか野郎、フーフの仲じゃあねえか。だれがきいたって笑わねえ。警視総監にでもきいてみろ」

「ばかね、夫婦が、こんなところで——」

「ここは遊廓だろ？　ゼニ払ってあそぶのが、なにがばかだ。ありがたいと思って、サービスよくしろい」

「あゝ、なんてばかかしら、あんたと遊んだって、あたいちっとももうかりゃしないじゃないの」

「だから、この金をやろうってんだよ。ばか野郎」

「ばか、そのお金はあたいのお金じゃないか」

「おめえの金はおれの金だろ。その金を、ほかの女郎にやるよりおめえにやったほうが、おれもソンしねえよ、おめえもトク、おれもトク、この計算がわからねえか。この大ばか野郎」

　もともとあたまのおかしいのが、酔っぱらっちゃってるものだから、妙にまともなリクツをいうのよ。あたい、なにがなんだかわかんなくなって、だんだんあっちのいうことがふんとみたいな気がしてきたんです。でも、やっぱりへんだわね。……

「だってお店にしかられるわ」

「しかるわけやねえよ。店のもうかるなあおンなじだ。四分六に玉を割りゃいいンだろ」

「そりゃそうだけど……ママさんがさっきからきてるのよ」

「きてたら、どうした。アイサツしようか」

「よしてよ、ママさん、いつもあんたのことで、心配してくれてるんだから」

「おれのことで？　ありがてえなあ。——なんて？」

「あんたと別れろってさ」

「へ」

「あれじゃ、あたいがいくらかせいだって、それこそ猫に小判だ。もともとなまけ者が、そのうえおかしくなってんだから、ここらで見きりをつけなくちゃ一生を棒にふるよ。まゆみちゃんだって、まだ若いんだし——っていってくれるの」

「なるほど。いいことをいってくれるなあ。……なに？　とんでもねえことをいう女じゃねえか、この野郎」

　そのとき、鮎ちゃんたちが急にさわぎ出したのでふりむくと、パパさんがお店にやってきたのでした。え、パパさんは、このごろめったにくることなんかなかったからなんです。お店のほうは、ママさんにまかせっきりなの。

なんですって？　パパさんはふだん麻雀(マージャン)や花札(はな)でバクチばっかりやってるからだろうって？まあ、やっぱり警察だ。そんなこと、もう知ってるの？　でも、めったにやってこないけど、あたいたちにはとってもいいパパさんだわ。ママさんの親切は、ゆきとどきすぎてこわいくらいだけど、パパさんはどっかのんきでねえ。

　そののんきなパパさんが、いまかんがえると、だいぶきげんがわるかった。

「あら、パパさん、パパさん、どういう風のふきまわし？」

と、さわいでおじぎする鮎ちゃんたちを、ぎろっとにらんで、

「いるか」

と親指を出しました。ママさんのことなんです。小指を出さないで親指出すところが可笑しいわネ。ママさんになにか用があって、追っかけてきたんでしょう。それが、ちょうど七時半。

「いるわ、二階――ヒトミちゃんの部屋」

「ひとりか」

「ひとりよ。どうして？」

「だれか男の客はきてねえか」

「きてないわ。どうして？」

　妙な顔をして、返事もしないでお店に入ってゆくパパさんを、ぽかんと見送っていたうちのひとは、それでもそれがふつうのお客さんじゃないことを感づいたとみえて、

「だれだい、あのちんちくりんの狸野郎は」

「パパさんよ」

「パパさん？　あゝ、いつもおめえがいってた、あの花札(はな)ばかりひいてるってえいい御身分の大将か。そんなら、おれ、ちょいとアイサツを――」

「いいってば！　でも、パパさん、なにしにきたんだろ？」

「おれにゃわかるがな」

「あんたに？」

「ママさんと、いっちょう遊びにきたのさ。どうだ、おめえも見ならえ。いいか、あがるぜ。――」

「だめ、だめったら、あんた、よして、この、無銭飲食――あれえ！　紋ちゃん、はやくきてえ！」

　あたいは、とうとうお店の若い衆紋ちゃんを呼んじゃいました。

　同じく女給ユリ子の証言。

——紋ちゃんは、すごいくらいいい男なんだけど、用心棒兼用ほどあって、腕っぷしもそりゃつよいわ。その紋ちゃんが、まゆみちゃんのハズをつまみ出してからまもなく、パパさんは二階からおりてきて、お店を出てゆきました。

そうね、パパさんがママさんのところにいたのは十分くらいじゃなかったかしら。なんだかたいへんあわてて、あたいたちが声をかけても、ふりかえりもしなかったようでした。

つぎにママさんを訪ねてきたのは、新聞記者だったわ。ええ、なんといったっけ。名刺見せられたけど忘れちゃった。——でも、そのひと、この夏、グデングデンに酔っぱらってこのちかくで大あばれしたひとだから、顔は知ってたの。お店お店のガラスを石でわって歩いてるから、地廻りのひとが二三人文句をいおうとしたら、「こらおれはA新聞の記者だゾ。新聞を相手にする気か」なんて大イバリなの。新聞記者はおまわりよりこわいから、地廻りのひとたち、首をちぢめてにげちゃった。——そうそう、たしかにA新聞でしたわ、本人は酔っぱらってて、そんなこともうおぼえちゃいないでしょう。昨晩はまたもっともらしい顔して、名刺だして、

「車戸猪之吉（いのきち）さんはいる？」

といったから、訪ねる相手は、ママさんじゃなくって、パパさんだったらしい。

「パパさんはいま出てったけど、ママさんならいる」

っていうと、ともかく上ってママさんに会ったようです。けど、十分ほどしたら、すぐおりてきて、犬みたいにかけ出してゆきました。

ママさんの殺されたあのお部屋は、ヒトミちゃんのお部屋なんです。けど、ヒトミちゃんはからだが弱くって、しょっちゅう寮やママさんのお家のほうへいってるもんだから、あいてることがめずらしくないの。

ママさんは、ふだん帳場でそろばんを入れたり、伝票をしらべたり、お客さんと会ったりしていましたけど、帳場におばさんもいるし、それからすぐまえの廊下をたえず遊びのお客さんがとおるでしょ？　だから、ときどき具合のわるいお客さんだと、そうだわね、月に一回か二回はあったかしら、そのときだけ、あのヒトミちゃんのお部屋をつかったんです。

奥のほうには、二階にお部屋はいくつかあるけど、ホールをはさんで、往来むきのお部屋はあれひとつだけ。ネオンやら、なにやら、お店のまえのほうは飾るものが多いので、窓もネオンのうしろにひとつあるだけなの。あとは三方壁で、ただホールへおりるほそい階段がついてるだけで、夏はあついし、ネオンはチラチラするし、あんまりいいお部屋じゃありません。

あのお店は、赤い風車があるから、「恋ぐるま」って名づけたんじゃなく、はじめから、車戸という名まえから「恋ぐるま」とつけて、あとで風車をくっつけたとか、最初ちがう名だったのが、風車をつけたから「恋ぐるま」って変えたとか、そんなお話きいたけど、どっちだったか、忘れちまったわ。とにかく最初あの家をたてたときには風車はなかったので、窓の外を大きな羽根がスレスレにまわるなんて、不細工なことになっちゃったらしいんです。

だから、ママさんがつかうときは、ちょいとネオン消して、ということがよくあったんです。ネオンのスイッチは、ホールへおりる階段の下についてるの。

いいえ、お客さんなんて、ネオンを目あてにくるひとなんか、まあいないでしょうね。下に立ってる女ばかり、眼をサラみたいにして見てあるいている。……だけど、あの晩ほどながいあいだネオンを消しっぱなしなんてことはなかったし、かんがえてみると、やっぱりへんでした。

ネオンがきえたのは、三番目のお客さんがきて、まもなくです。このお客さんは、鳥打帽に革(かわ)ジャンパー、白いマスクをかけているので、あたいたちは「白マスクさん」って呼んでました。

そりゃ風邪(かぜ)がはやってるので、マスクつけたひとも多いんですけど、このお客さんは、秋のころもいつもマスクしてくるので、そう呼んでいたんです。秋ごろから、四回か五回やってきて、ママさんに逢ってたようだけど、なんという名まえで、どういうひとなのか、ぜんぜん知らないわ。——そうそう、「白マスクさん」っていうのはネ、いつもこのひとがくるとまもなく、黒眼鏡に黒いマスクをつけた男がやはりママさんとこへくるので、あたいたちはその「黒マスクさん」とわけてそういってたんです。

そうだ、その白マスクさんがくると、なぜかママさんはいつもネオンを消すんです。その晩もそのとおりで、ただ次にきたのが「黒マスクさん」じゃなくって、ひどく立派なふとった紳士だったのがちがってました。

みんな、入口に出ていて、ホールのボックスに坐ってたのは、そのときあたいだけだったんだけど、あたいちょいと考えごとしてたもんだから、いつママさんがネオンのスイッチ消しに

階段をおりてきたのか知らなかった。ただスイッチ消す音に顔をあげたら、階段を上へもどっていくママさんの着物の裾だけちらっとみえたんです。それは八時ちょっとまわったころだったと思います。

あたいの考えごと？ それはねえ、そのまえにショートで遊んでったお客さんがねえ、なんでも画家(えかき)さんらしかったけど、そのひとが、ほそい指でモジャモジャあたまをかきあげながら、

「あなたは、こんなとこでは、珍らしい顔してるな。ニヒルっていうか、哀愁の極致っていうか、ひかれるな」

なんていうんです。学校は？ っていうから、

「へ、へ、これでもジョシ大中退よ」

とデタラメいってやったら、

「そうだろう。そうみえるもの。インテリの匂いがするもの。かなしいねえ。かなしみが凍りついたような眼だねえ。絵になるねえ」

と、イヤにかんしんするんです。

あたい、可笑(おか)しかったよ。だってあたい、学校ったら中学だけだし、こんなショウバイに入ってから、かえってふとって、十六貫七百匁になったもの。あたい、オヤコドンなんてたべたの、ここへきてはじめてだからね。あたいたち、たいてい身の上ばなしを三つか四つこさえといて、お客さんに合わせてしゃべるんだけど、ジョシ大中退なんていったのははじめてだ。うちは秋田の水呑百姓で十一人兄妹なの。いえ、これはホントのホントよ。

だから、思わずふき出しちゃって、それにそのひと、イヤにかんしんするばかりで、いつまでたってもうごかないからサ、こっちははやくつぎのお客さんつかまえなくっちゃならないし、おしまいにはレスリングみたいにつき出しちゃったけど、さあ、あとになってみると、そのお客さんのいった、「ニヒルっていうか、哀愁の極致っていうか……インテリの匂いがするもの」なんてことばがあたまに浮かんできて、よくわかンないけど、なんだか、甘い、ソフトクリームたべたようなきもちになるんです。あたい、そんな、高尚なはなし、だあい好きサ。

そこへぬっと、その紳士が入ってきたもんだから、おどろいちゃった。よくみると、デップリふとって、口髭をはやして、お金の匂いがふあーっとしてるじゃありませんか。あたい思わず、

「まあ、お見かぎりねえ、重役さん」

といって抱きついちゃった。けど、ほんというと、いままでみたこともないお客さんなの。抱きついたら、お金より、なんだかトイレットみたいな匂いがしましたっけ。

すると、そのひと、年ガイもなく、真っ赤な顔になって、

「ちがう、ちがう、車戸旗江さんはおられるかな」

とこわい顔でいうんです。あゝ、ママさんのお客さんか、とあたいガッカリしちまった。でもお二階にはまだ白いマスクさんがいるはずだし、と思って、

「ママさん、お客さんよ、ええと――」

と、名を知らないものだから、そのひとの顔をふりかえったとき、上から、かるく、

「どうぞ」

という返事でした。まえからお約束でもあったのかしらん。

さあ、そのお客さんは十五分くらいいたかしら。御用がすんだとみえて、階段をおりるとき、下の三段めくらいから足をふみはずして大きな音をたててころげおちました。びっくりして奥から出てきた若い衆の紋ちゃん、大笑い。けど、そのひとは怒りもしないで、酔っぱらいみたいな足どりで、お店を出てゆきました。いえ、ほんとにすこし酔ってたかも知れない、酔ってたとすると、あの階段、ほそくて暗いから、馴れないひとはあぶないわね。

なんですって？　その男が、ママさんを殺した人じゃないかって？

いいえ、ママさんはそのあとたしかに生きてましたよ。というのはね、そのあともうひとりお客さんがきたとき――これはあたいも知ってるひと、久世ってヒロポン狩りのお役人さんで、なんべんもママさんとこへきたことがあります。久世さんがきたのは――そうね。紋ちゃんはいつも九時まえに、もう一軒の「ふるさと」って店へまわることになってて、その紋ちゃんといれちがいに入ってきたんだから、八時五十分ごろだったかしら。

ええ、ママさんは、あそこの女たちがヒロポンつかうのに大反対で、そのために久世さんとよく相談してました。そのお役人さんがママさんに会ったのだから、まさかそのときは死んじゃいなかったでしょ？

いいえ、げんに十分ばかりしてそのお役人さんがかえるとき、あたい、白マスクさんまだいるのかしら、と思って、

「上にお客さんいる?」
ときいたら、久世さんは妙な顔をして、
「いや、マダムはひとりだよ」
とこたえました。あら、いつかえったのかしら、と思いながら、大声で、
「ママさん、ネオンまだ消してていいんですか?」
と上に声をかけたら、ママさんがこたえたんです。
「そうね、もうちょっと――十時になったらつけていいわ」
それが、ちょうどラジオが九時の時報を知らせたとき。……

同じく女給鮎子の証言。

ヘイ! マイ・ディア・ポリス。ミイ、かなしいのよう。こんなにかなしくっちゃ、お酒でものまずにいられるものですかってんだ。アイ・アム・ソーリー、酔っぱらってて、ゴーメンナサイ。

シュア、シュア、ママさん殺されたの、かなしいわ、ミイ、あそこへくるまで、チトセやタチカワにいたんだけどサ、あんなグッド・ママさんみたことないわ。そのママさんが。……ああ、昨晩は悪い晩だったよ。ミイはそのまえから、死にたいほどだったんだよ。ミイのハートがやぶれたんだよ。ミイのラヴが消えちまったんだよ。……

ううん、そのミスター・ホワイト・マスクがいついっちまったのか、ミイも知らない。まさかあとであんなことが起っていようとは、オシャカサマでも御存知ないもの、だれも見張ってたわけじゃなし。……だいたいあのお店はよくはやるネ。こういうショウバイじゃ、モテる女は八頭身とはかぎらない。ゼンゼン、あのほう一点ばり。そこは、あのママさんの指導……カリキュラムは、いたれりつくせり……タチカワ育ちのミイでさえ、ウーンとうなるようなこと教えてくれたからネ。オールナイトの客をとるまで、あのお店の女は平均五人の客をあそばせるもの、ホワイト・マスクのことなど、だれも知るもんですか。

けど、ミスター・ブラック・マスクがきたときは知ってる。うん、黒い眼鏡に黒マスクをつけて、キザなヤローだ。……オブ・コース、なんてひとかアイドンノー。ミイは一ト月ほどまえからあのお店にきたんだけど、ほかのひとにきくと、秋ごろからなんどかママさんのとこへきた男なんだって。……けど、ミイがきてから、いちどもそのホワイトもブラックもきたことない。きのうの晩にはじめてみた。――だから、そのどっちにも関心ないのは、そのせいなのよ。

……でもね、おかしなことに、ミイ、その男、どっかでみたことあるような気がするんだよ。顔はわかんないけど、まるでボディ・ビルやったような肩をして、まだうんと若いネ。え、グレイのギャバジンをそりゃうまく着こなして、ちょいとすてきなスタイルネ。けど、通訳のなかにもいなかったし、お店にくる客のなかにも記憶はないし、だれか映画スターとコンがらかってるのかもしれない。

そのミスター・ブラック・マスクがきたときはねえ――え、黒マスクっていえって？　ほ、ほう、お巡りさん、ブラックってイングリッシュわかんない？　それじゃイエロー……わかんないわねえ、GIはね、ミイたちのこと、「黄色い便器」ってぬかすのよ。あたいつくづくキャンプいやンなっちゃって、日本人とこへもどってきたの。ま、日本の男は、ケチで、ヤキモチやきで、かげベンケイで、ヘタクソヤローで、こっちだっていいことばかりはないけどねえ、あのママさん気にいったし、それにあそこへきて……ミイ、はじめてラヴしたのよう。

　まだ夜間大学出たばかりの安サラリーマンだけどね、そのひと、むかし、ミイが小学校へいってたころ机ならべた幼友達なの。

　きのうの晩、そのひとがきてくれたの。ふだんはマネがないから、いままで泊ってくれたこといちどもないんだけど、その晩はサラリーもらったからって、泊ってやるっていうのよ。……それが……うまくいかなかったの。ミイは、もう死にたいようなきもちになって、そのひとにかえってもらったのよ。

　……え、黒マスクの男？　うん、その黒マスクは、ミイがそのひとを送って、ホールに出ていったとき、いれちがいに入ってきたわ。それは九時十分ごろだった。

　ねえ、お巡りさん、きいてちょうだいな。ミイがそれほどラヴしたひとと、なぜかなしい別れをしなくちゃならなかったか。……ミイはほんとにバッド・ガールだ！

　そのまえにあげた客がわるかった。あぶらぎった、狒々みたいな五十男でねえ、「おまえは毛が濃そうだから、ネライをつけてきた」なんてぬかしやがってさ、しつこいったらありゃしない。ミイはGIでキタエられているつもりなんだけど、あの爺いにはヘトヘトになったわ。なんど「アイ・カム・ナウ」とさけびそうになったかわかンない。ふつうの女なら、きっと参っちゃったと思うわ。ミイだから、ひっしになって気をそらしたんだ。だって、ほんきになっちゃったら、ミイたち、とってもからだがつづかないもの。

　さあ、そのあとだ、その狒々おやじを送り出したとこへ、ミイのラヴァさんがきたじゃないの、しかも、泊ってってくれるっていうじゃないの。ミイ、どんなによろこんだか。……

　ミイは、今夜こそ、今夜こそほんきになろうと思ったのよ。ショウバイぬきで、相手しようと思ったのよ。……ところが……だめだった！　ミイがだめだったのよ！　ショウバイのテクニックとしておぼえたことが、ミイのからだを、女のぬけがらにしちまっていたのよ！

　ミイは、はじめてそのことに気づいたの。ミイはあおくなっちまった。胸のなかが、灰になっちまった。ぽかんとしてると、そのひと、心配そうにミイをみて、どうしたんだってきくの。ミイは急にじぶんのからだをズタズタにきりきざみたいような気もちになったわ。そして、ミイをこんなにした男たちが――そのひとまでも、呪い殺したくなったわ！

「かえってちょうだい、あんた」

　ミイは思わず泣いちまった。

「ミイは今夜からだの調子がわるいの。泊られてもこまるの」

　そのひとは、あっけにとられて、オロオロしてなにかいうの。ミイはそれもきこえないほどまっくらな未来を見つめていたの。そのうち、たまンなくなって、とうとうきちがいみたいな

声をあげちゃった。

「かえってったら帰って！　ミイはユウなんかだいッきらい。ダメダメ、もうなにもかもダメ、あんた、おねがいだから、もうミイのとこへこないで！」

——悪い夜だったよ。昨晩、「恋ぐるま」の屋根の上には、ほそい三日月といっしょに、きっと悪魔がへバリついて、口を耳まで裂いて、ヘラヘラ笑っていたんだよ。……でも、まさか、あのママさんが殺されるなんて！　ミイはあとでママさんにうちあけて、いっしょに泣いてもらおうと思ってたのに。——

あんなことになろうとはゆめにも考えないから、ミイはそのひとを送り出したあと、ふぬけみたいになって、お店にボンヤリ立っていたの。それでも、そのときやってきたひとの姿をみたときは、やっぱりオドロキだったわ。

「パパ、きている？」

坊っちゃんじゃないの、ママさんのひとつぶだねの坊っちゃんじゃないの。いいえ、それまで、ママさんがみせてくれた写真でみただけなの。まだ高校三年なんだって。成績はいちばんなんだって。ママさんがよだれをたらしてじまんするだけあって、育ちがいいから、そりゃあ上品な、ナメまわしたいようなハンサム・ボーイ。

「まあ……あんた、坊っちゃんでしょ。ちょいとちょいと、まゆみさん」

「パパ、いるかってきいてるんだ」

と、坊ちゃんはなにか小わきに風呂敷づつみをかかえて、怒ったような顔で立ってるんです。

「パパさんは……もう二時間もまえにかえってよ。ママさんならいるわよ。——ママさん、ママさん！」

すると坊っちゃんはきちがいみたいな眼になって、

「ママさんなんていうな！」

ミイ、たまげちゃった。でも、その怒った顔の可愛らしいったら、ありゃしない。

「まあ、こわい。でも、まだお客さん、いるんじゃないかしら？……坊っちゃん、ちょいと話してらっしゃいよ」

するとまゆみさんが、よけいなことを、

「黒マスクさんなら、たったいまかえったわよ」

それが、九時半——ううん、四十分になってたかな。

坊っちゃんは上にあがってゆきました。ミイは表に出ました。いやな晩、そんな晩にかぎってまあヤケに客がついて、あたいも、まゆみさんも、それから十分たつかたたないうちに、すぐ奥へ入らなくちゃならないはめになったの。廊下のおくで、ふとホールの方であわただしい音がしたもんだからふりかえったら、坊っちゃんが鉄砲玉みたいにかけ出してゆく姿がみえたようなのよ。——

そのとき店のまえにはだあれも立ってなかったから、女のひとでその坊っちゃんの姿をみたものはいないけど、ちょうどそのあと「ふるさと」からかえってきた紋ちゃんが、フラフラとお店を出てきた坊っちゃんをみたというから、やはりそのとき坊っちゃんがかえったことはま

ちがいないわ。

いえ、紋ちゃんも坊っちゃんとは知らなかったの。だれもいないお店から高校生みたいな影がフラフラ出てったので、空巣（あきす）――っていうのもおかしいけど、なんだかおかしいと思って、すぐあとを追っかけてみたんだけど、靄（もや）がふかくって、どこの路地に入っちゃったのかわかんなくなって、ひきかえしてきたんだって。

そのじぶん、ママさんは、もう殺されていたんじゃないかって？　わかんない。そうなら、その人殺しは、まさか坊っちゃんじゃないもの、あのブラック・マスクにちがいないわ。でも、そのときは、そんなこと知りっこないもの、ミイたち、客をあそばせて、すぐまた外に立ってるところへ、歓喜先生がやってきたの。で、やっと、ママさんが十時にネオンつけてくれっていってたのを思い出して、ちょうどそこへもどってきた紋ちゃんにいって、ネオンをつけさせ、そしてはじめてあの恐ろしい出来事を発見したというわけなの。

ママさんが死んだ。ママさんが死んだ！　あゝ、悪い晩だったよ。屋根のうえの悪魔が、蝙蝠（こうもり）みたいな翼（はね）を窓からさしいれて、ママさんをひき裂いてまっくらな風車にひっかけやがったにちがいないよ。……思い出しても、身の毛がよだつよ。お巡りさん、お酒ちょうだいな！

第三章　アリンス国女王

S警察署・「恋ぐるま殺人事件」捜査本部。

捜査官たちが話している。

「結局、当夜、被害者車戸旗江を訪れた人間は七人だね」

「七時。まず被害者がきた」

「七時半。第一の訪問者、夫の車戸猪之吉。これは十分間ほどいて、なにやらあわてててたち去った」

「次――七時五十分ごろ、新聞記者」

「それはわかった。あれは、A新聞の社会部記者で、里見って男だよ。まだザッと話をきいたばかりだが、なんでも売春等処罰法案の防止にだいぶ業者が議会方面に金をばらまいて、その音頭とりが車戸らしいとのことで、そのニュースをとりに追っかけまわしてたというんだ。もうちょっとおそくくれば、殺人事件のスクープがとれたのにと地団駄ふんでいたよ。これはたしかに旗江に会って、生きているのをたしかめている」

「これも旗江のところにいたのは十分ばかり」

「つづいて第三番めが問題の白マスク。鳥打帽、革ジャンパーの男。こいつの正体がわからない」

「八時すぎにマダムがネオンを消した」

「それから、八時半にきた第四の訪問者が、ふとって口髯（くちひげ）をはやした重役風の紳士。これも正体がわからないが、十五分ほどいて、階段をふみはずすほど異様な気配をみせてたち去った」

「次、八時五十分ごろ、第五番めの役人」

「そついは、こっちの仲間だ。名前がわかった。麻薬取締官の久世専右（せんすけ）氏だ。……このころまでは、車戸旗江はたしかに生きていた。十分ばかりいて、久世取締官がかえるとき――九時――女たちも旗江の声をきいている」

「第六番めが、いちばん問題の黒マスク。やってきたのが九時十分。こいつは三十分ばかりいて、九時四十分ごろに去った」

「最後が、被害者の息子の車戸三樹（みき）。これまた十分くらいで、ただならぬ気配でたち去った。十時前後だ。――いちおうきいたところでは、血みどろの胴体ばかりの屍骸（しがい）をみて、動顚（どうてん）してにげ出したというのだが、なぜ現場でひとこえの叫びも発しなかったのか。――」

「――まだあるぜ、八人めの男が」

「十時十分。歓喜先生」

凄壮な笑顔で呼びかけられても、テーブルに頰杖をついたっきり、八番めの男、荊木歓喜は、

沈湎（ちんめん）ともの思いに沈んだまま、顔もあげない。

「歓喜先生、ちょっとおうかがいしますが、人間を……首、手足バラバラに切りはなす仕事が、十分や二十分でできるものでしょうか？」

「マダムは、そのまえに、すでに毒殺されていたといいましたな？」

「そう、解剖（かいぼう）所見によれば、青酸性毒物を一服盛られたらしい」

「それで、死亡時刻は？」

「それは目下詳細調査しておりますが、なにしろ、あれだけバラバラに切断されて、出血もおびただしいし、いまのところ、八時を前後にそれぞれ一時間以内――とかなんとかいっておりますが、法医学教室のほうでも自信はないらしい。その推定にしたがえば、七時から九時までのあいだということになりますが。……」

「――すると八時半にきた肥っちょの紳士は、何におどろいたのか？　またそのあとにきた久世氏はなぜ平然としておったのか？」

荊木歓喜は、うなだれたまま、ほとんどききとれないような小さな声で、

「それで……そのマダムの屍体は……首はべつとして、ほかの胴や手足は、たしかにマダムの屍体でしたかな？」

「――えっ？」

刑事はめんくらったように歓喜の顔をまじまじとみていたが、急に笑い出して、

「そりゃ、あんまり探偵小説的な疑いだ」

「いや、わしは小説など読んだこともないが」
「それはまちがいない。先生、ちゃんと、寸法にあいます。それは、亭主の車戸猪之吉も、息子の三樹も保証しておりますから」
「暴行――もしくは、性交の形跡は？」
「ありません。被害者は月経中でありました」
「ははあ」
　歓喜はあいまいな表情になって、またうつむいてしまう。しばらくして吐いた言葉は、こんどはまた恐ろしく平凡なものだった。
「結局のところ――当夜マダムを訪れた七人の客のうち、まだ素性のわからんものは、三番めの白マスク、四番めの重役風の紳士、六番めの黒マスクの三人ですな。この三人のうち、どいつかがくさい。……」
「それは全力をあげて捜査中です。……が、先生どうも妙なことがある。さっきおききした、人間をバラバラにすることが、十分や二十分で可能かどうかということですが」
「さあ、病理解剖の先生ならしらず、素人には一時間以内じゃむずかしかろう」
「四番めの紳士、これはそのあとにきた久世氏が、生きているマダムに会ったというのだから、直接下手人とは思われない。のみならず滞在時間はわずか十五分前後です。また三番めの白マスク、こいつがいつ去ったかということはハッキリしないが、久世氏はあの部屋にマダム以外だれもみなかったと証言しておりますから、それ以前に去ったものとみられます。八時過ぎか

ら八時五十分までの五十分間のあいだに――いや、これは可能も不可能もない、要するに、そのあとで久世氏がマダムに会っているんだから。取締官の言葉をうたがうとしても、ほかの女たちも、九時に、十時になったらネオンをつけてもいい、というマダムの声をきいているんだから」
「なるほど。……」
「そこで問題の黒マスクはというと、これはさっきいった法医学の死亡推定時間の外にはみ出す。法医学をうたがうとしても、黒マスクは九時十分ごろにきて九時四十分ごろに立ち去っている。滞在時間はややながいが、それでも三十分前後です」
「なるほど。……」
「それじゃ息子はどうかというと、これまた十分間か二十分間しかあの現場にいないのです。……バラバラ解体作業だけならしらず、あれを一つ一つ紐でくくって、窓の外から風車にくくりつける仕事までは、どうもね。……」
「――さっき、白マスクの去ったときがわからんとあったでしょう。いうまでもなく、だれも看視していたわけではなかった。ほかの犯人が侵入したというような形跡は？」
「ありません。だいいち、九時以降にそんな犯人のわりこむ時間的なすきがない」
「――空間的なすきは？」
「空間的？　人間は空間のみならず時間的な存在ですからな。たとえ問題を空間のみに制限してみても、往来むきの窓とホールへおりる細い階段、そこから女たちの眼がなくなったのは、

十時前後、三樹が去ったときの一瞬ばかり、それさえも鮎子はチラとみているし、紋太という若い衆が追っかけている。――」
「押入か、なにかは？」
「押入はあります。三尺幅の二階の押入がね。ところが、下の段には電蓄やトランクやらがギッチリつまっている。上の段には蒲団が入ってて、しかも天井がひくいから、人間のかくれる余地はまったくない」
「――蒲団は入れたままでしたか？」
「入ったままです。いままでにわかっている四人の訪問者、猪之吉、里見、久世、三樹、いずれも部屋に蒲団など出してなかったといっています。……最後にもうひとつふしぎなことは」
「なんですな？」
「隅にぬぎすててあったマダムの着物、これに血がついていないのは、まるはだかにしてから切断したせいでしょうが、たたみにも蒲団にも、あれだけの大虐殺をやったのに、ほとんど血がついていないこと。……いや、その血のゆくえはわかっておるのです。その血はきれいにあつめられて、隅の火鉢にながしこまれ、なかの灰は、火鉢の容積だけの血泥と化していた。……」
さすがの荊木歓喜が、ぶるっと肩をふるわせる。刑事の顔も冥府の人のように土気いろだ。
「吐気のするほど用意周到な殺人です。ために、切断された首、手足もほとんど血はながれつくし、風車にくくりつける作業中、軒下に立っている女たちが血しおのしたたる音らしい音も

きかなかった。
「――久世氏や息子がうそをついているのじゃありますまいな？……」
「じぶんのおふくろをあれほどむごたらしい殺し方をした人間をかばうためにですか？……いや、それは実はこっちも充分うたがっておるのです。では、なんのためにうそをつくか？　ふたりがうそをついておるとすれば、ふたりのうそにどんな共通の目的があるのか？……ところが、いままで調べたかぎりでは、どうやら久世氏と三樹とはまったく見ず知らずの関係らしい。ふたりが口をあわせてうそをついておるとは思われんのです。……」
「なんとも、奇っ怪千万」
と、荊木歓喜がすこぶる古風なせりふを――匙をなげたような長嘆息とともに吐いた。
「まことに奇っ怪千万な事件です。とにかくこんなばかなことがあるはずがない。これは断じて追及せんけりゃなりますまい。これから、もういちど、本格的にやりますがね」
荊木歓喜は、また腰をしずめて、片頬の傷をなで、しばらくしてポツリとつぶやいた。
「わしにとっては、それらにおとらん不思議なことがある」
「それは？」
「女郎たちの証言をよくききなすったろう。みんな、実に哀れなものです。自分の哀れさをよく自覚しとらんほどに、それぞれ悲惨をきわめとる。実は、さっききいておって、わしは涙ぐんだ。売春の是非はともかく、いや、本音を吐くと、その黙認者たるわしが、ちょいとマダムがにくらしくなったくらいです。……そのマダムを……女郎たちの証言のなかで、ただ共通し

とる一点は、彼女らがいかにマダムを愛し、信じ、尊敬しとるかということです。わしはよう知っとるが、彼女らのこの心根はうそじゃない」

「――まったく、女郎屋のおかみにしては、めずらしい女だったようですな」

「そのマダムが……なぜ殺されたか。いや、あのようなむごたらしいともあさましいとも、人間の頭では想像もつかんほどおぞましい晒し者にされねばならなかったのか。……それこそ、最大の奇っ怪事とは思われんか？」

「それは、犯人をつかまえりゃ、わかるでしょう」

「いや、それを知らんけりゃ、この犯人はつかまるまいて」

荊木歓喜の深沈たる眼は、なにか暗い淵でものぞくような表情になった。

「先ずさぐるべき謎は、マダムという人間にある。マダムの人間性という渦のなかにある。……」

「恋ぐるま」女給朱実の証言。

――ママさんて、どんなひとだったか、いえっていうの？

ママさんって、どんなひとか、それはまゆみちゃんやユリちゃんや鮎ちゃんからきいたでしょ？　おんなじよ、いくらきいたって。ここの女で、あのママの悪口なんかいうひとはひとりだっていやしないんだから。

あんな殺され方をした以上、ママさんはだれかにひどい恨みを受けているにちがいない、恨まれるようなことをしてるにちがいないって思われるの、むりないけど、あのママさんにかぎって、そんなこと、ゼッタイ！　犯人はキチガイにきまってるわ。よおくいっとくけど、お巡りさん、手分けして、東京の精神病院をさがした方がかしこいにきまってるわよ。……

あたいたちのママさんだからエンリョしてると思ったら、おおまちがい。なんなら、よそのお店にきいてみるがいいわ。やりてのひとにかぎって、じぶんの店の女にヒロポンはうたせる、メンスだろうがトリッペルだろうが店に出す、もんくをいうと、やれ手クセがわるいの足クセがわるいのといって、はだかでお店を追ン出すなんてのが、そりゃあ多いんだから。……

うちのママさんはちがう。お客よりも店の女の子をだいじにするくらい。おこるのは、あたいたちがヒロポンなんかうったときで、まるではんたいよ。え、麻薬Gメンの久世さんのことをきいた？　そう、それなら、久世さんからきけば、あたい、ウソをついてないことよくわかるでしょ？

四五日まえの晩もそうよ。酔っぱらいのよたもんが三人ほどきてねえ、あがるとか、あがらないとかいってるうちに、妙ないんねんを吹っかけてきたのよ。あそぶのはあそぶが、三人ともいっしょに、女はひとりでいいから、一部屋にとおせっていうの。

「三人ともこの女が気に入ったんだから、しょうがねえじゃねえか」

「それじゃ、じゅんばんにしてよ」

とあたいはいった。いったのはあたいだけど、三人につかまってるのは、お店でいちばん若

くっておとなしくって、からだの弱いヒトミちゃんなの。ほんとのところをいえば、じゅんばんでもこまるわネ。ところが、あいつら、それでもだめだっていうのよ。

「じゅんばんってえと、三人ぶん玉をとるんだろ？」

「あッたりまえだわよ」

「三人ぶんの金はねえ」

「それじゃ、ひとりにしてよ」

「そういうわけにはゆかねえ。この三人は一心同体だからな」

「かってにしやがれ」

「そうよ、てめえなんかひッこんでろ、このオカチメンコ」

あたい、こまッちゃった。相手があたいならいいけど、ヒトミちゃんでしょ？ ヒトミちゃんは手をにぎられて、ベソかいてるし、ほうっとくわけにもゆかないじゃないの。まのわるいことに、紋ちゃん、どっかへいっちゃっていないし。――

「おい、おれがゼニを出して、おめえを買ったってことは、ショートだろうが泊りだろうが、とにかくおめえのからだを買ったってことだろ？」

「そうよ」

と、ヒトミちゃん、ふるえてるの。

「じゃ、おれが買って、友だちにわけてやるさ。おれはドータイ」

「おれはあたま」

「おれは手足をもらう」

「みんな骨つきだ」

そして、ゲラゲラ笑いながら、じぶんたちの思いつきが気にいって、だんだんほんきな眼つきになってきたじゃないか。ふんとにケダモノだよ。男って畜生は、まったく。――あ！ お巡りさん、お巡りさん、あいつらかもしれないわ。ママさんをバラバラにしたのは！

ええっと、名は知らないけど、しょッちゅう酒のんでうろついてる連中だから、だれかにきくとすぐわかると思うわ。ひとりは物差ではかってやりたいほどながい馬づら、ひとりは半鐘ドロボーみたいなノッポ。ひとりは化猫みたいな声だして笑ってばかりいる男。

どうしたかって？ それはね、こんなことがあったからなの。

「えい、買った買った。うるせえや、おれは女をトロロ汁にしたり土瓶蒸しにしたりケチャップにしたりする料理法を、実地に友だちにおしえてやるんだ。あがるぞ！」

そんなことをいって、とりすがるあたいたちをかきのけ、ヒトミちゃんをひきずって、その三人があるきかけたとき、うしろから、

「待ちな」

そうよぶ声がしたので、ふりかえると――ママさんなんです。ママさんが、ちょうどまわってきたところなんです。

「おい、あんちゃん、わたしじゃ、いやや？」

三人のごろつきは、ドキッとしたようだった。あんまりママさんがきれいだったからだろう

と思うわ。黒地にすそまわりだけ辛子いろでみだれ格子のしめをクッキリ織り出した縫取お召、それに鶯色のデシンの茶羽織、足袋の白さが眼にしみるよう。——ふところ手をして、ママさんは、こっちをみて笑っているの。

「な、なんだ、てめえは。てめえも女郎か」

「女郎のおやぶん」

ママさんは笑いながら、シャナリシャナリとちかづいてくると、タバコをくわえ、カチリと銀のライターを鳴らした。タバコに火をつけるのかとおもうと、いきなりその火を馬づらのなンがいあごにくっつけたじゃあないの。

「馬肉は、うまく焼けないねえ」

馬づらはわっとさけんで、とびあがったわ。三人ともとびのいて、血相をかえたとき、

「男のクズ！」

「なに？」

「弱い女をいたぶる雑炊野郎、どこの組のもんだい？」

「——へ、松葉組のもんで」

可笑しいったらありゃしない。三人ともドギモをぬかれて、丸太ン棒みたいになってるの。ママさんの眼はひかってた。怒って、涙さえ浮かべて、キラキラ、それは黒水晶みたいだったよ。

「モグリ！　いつ田舎の泥田のなかから這い出してきやがった。肥タゴくさいのが、女の料理法なんて、きいてあきれら。どれほどの腕か、拝見してやるから、わたしを料理してみなよ。ただし庖丁に注文があるよ、松葉の大将のところへいって、庖丁にヤキを入れてもらってきやがれ。まないたの上にのってる女は、車戸のマダムだと断ってねえ」

貴婦人みたいな顔をして、胸もすくような——といいたいけれど、あたいたちでさえ、歯がカチカチ鳴るほどすごいタンカだから、馬に化猫に半鐘ドロボーなんか、とてもじゃない。ぐるっと女にとりまかれて、大の男三人、日でりのドジョーみたいに口をパクパクさせてばかりいるザマといったら、あたいなんか、もういつ死んだって、この世に生まれてきたカイがあったと思ったねえ。

ほうほうのていでにげ出す三人を見送って、

「あっはゝはゝ、あっはっはっ」

とたか笑いするマダムの顔は、まるで夕焼けにはえる牡丹のよう。——と、そこへフラフラ若い衆の紋ちゃんがかえってくると、

「とんま！　なんのためにまいにち、オマンマをいただいてやがる？」

火花のちるような平手打ちひとつ。

……それほどすごいママサンが、あたいたちには、まるで女神のようにやさしかったわ。それが手だ、女を飼いならしてはたらかせるずるい手だ、なんていうお客さんもあったけどね。こいつはいい年をして、いつでも夜なかの二時すぎにやってきて値ぎるケチンボの爺いだった。あたい、シャクにさわって、フリとおしてやったわ。

あたいはよそから鞍替えしてきたんだけどね。はじめてこんなショウバイに入る女の子があるでしょ？　すると、ママさんはコンコンと、一時間以上も説教するわ。

「この商売は、これはこれで世のなかのためにはなるんだけれど、かといって、けっしてすすんで入れっていえる商売じゃないんだよ。お巡りとおんなじで、けっして品のいい稼業じゃない。――」

　あら、お巡りさん、へんな顔しないでよ。ママさんがそういうんだから。

「なぜかっていうと、どんなにながくはたらいたって、まあ十年しかやれやしない。そのあと、世間に出てから、ながい一生、ずっと肩身のせまいおもいをしなきゃならないんだよ。お金なら、すこしくらいあげるから、なんかほかの商売さがさない？」

　あたい、いつかとなりのお部屋できいてて泣いちゃった。その女の子も泣いてたよ。でも、やっぱりお店に入ったね。入らなきゃ食ってゆけないんだから。どうせ地獄とかくごしていてさえ、入ろうとしてやってきたんだから。

　だれか、お客さんと仲よくなって、ケッコンしてお店をやめるときもそうよ。

「よかった、よかった。ほんとうによかったねえ。でもねえ、結婚は、あんたがいまかんがえているほどよいことずくめのものじゃない。つらいこともたんとある。とくにあんたなんか、こういうひけめがあるんだからね、いっそうかなしいこともときにはあるよ。だけど、しんぼうしなくっちゃいけない。ここにいたときみたいに、ダラシないくらしはぜッたいしちゃだめよ。そして、二度と、死んでもここにはかえらないってかくごをしておいで。またかえってき

たら、しょうちしないから！」

　みんな、まるでじぶんのうちからお嫁にでもいくように泣いて出る。……だけどねえ、その十人のうち、九人までは、きっとかえってゆくわよ。あたいなんか、前科二犯サ。おもい出しても、じぶんがいじましくなるわ。だいたいねえ、日本の女って、女郎してたってショタイじみてるものさ。みんながかんがえるほどのアバズレはそんなにいやしない。

　それどころか、ママさんがいったように、こっちは泥水のなかからはい出してきた女だとおもって、たいていのことには歯をくいしばってがまんするわ。

　男ってちくしょうは、そこへつけこむんだ！　はじめはうまいことといって、じぶんのつごうがわるくなると、こっちのいちばんいたいヒリヒリするところへ、イタチのさいごッ屁をふッかけてきやがるんだ！

　けっきょく、野良犬みたいに、またお店に舞いもどってゆく。すると。――

「苦労したらしい顔だねえ。ええ、おいでよ」

と、ママさんはひとこともしからず置いてくれるの。

　ふだんだってそうよ。

「あんたたち、からだが資本だからね」

　といって、ちょっとでもからだの調子がわるいと、すぐ寮へいってやすませてくれます。え、寮はH町にあるわ。うちの寮がいちばん設備がいいし、組合にお金出してくれるのもママさんがいちばん。

ヒトミちゃんなんか、からだが弱いから、なんでもないときだって、ママさんはときどき強制的に寮にやったり――本宅の方へ女中代りという名目でつれてったり。ママさんは、本宅と廓とはきりはなして暮してるんだけど、ヒトミちゃんだけは、同郷というせいもあって、ひどく可愛がって、この二三日も、いまいったよたもんにおどされて熱を出したもんだから、ずっと本郷の本宅のほうへいってますわ。からだがあんまりじょうぶじゃないし、ヒトミちゃんが若い衆の紋ちゃんに惚れてること知ってるものだから、ママさんは、お店をやめさせて、紋ちゃんといっしょに飲み屋かなんか出させようとしたこともあるけれど、ダメなの。紋公、しょッてやがって、ヒトミちゃんが不足らしいんだ。ぜいたくいってるわ、あんな可愛い娘なのに。――もっとも、紋公、女郎屋の風呂焚きにはもったいないほど色男にはちがいない。……

あら、あたい、何をしゃべってたんだっけ？　ああ、そうだ。ママさんが、どんなに店の女の子たちのことを思ってくれるか、それをいおうとしていたんだ。そうなのよ、店の女と若い衆がいっしょになるなんてことは御法度なの。そりゃそうよね、商売物に手を出されちゃ、シメシがつかないもん。ママさんはそんなことにはひといちばいきびしいほうなんだけど、それをなお眼をつぶってやろうってとこが、あのひとの情愛なんだ。

ママさんの、そんなふとッ腹、気ッぷをショウメイするおもしろいお話があるのよ。……それしゃべると、パパさんにしかられるかな？　でも、女たちはだれでも知ってる話だわ。そして、大笑いなの。

だれでも知ってるけれど、ほんとかうそか、だれも知らない。……なにしろ、坊っちゃんが生まれてまもないころのこと、もう十七八年もまえの話だから。……ひょっとすると、つくり話かもしれない。だけど、いかにもママさんらしい、そしてパパさんらしい話なのよ。まるで落語みたいな笑い話。

いったいにパパさんはやきもちやきだ。……ってうわさです。そりゃそうだろう、じぶんはあんなまめだぬきみたいな顔して、ママさんはあんな美人だもの。――とはいうものの、あのパパさんは、いまならやきもちやくケンリがある。浮気しないからね。

ふんとは、あのパパさん、女が大好きよ。あたいたち、ちょっと甘えても、ヨダレのたれそうな顔するもん。女郎屋の亭主で女にダラシがなくっちゃ、トメドがないようなもんだけど、そこはそれ、そういうことは、女と若い衆のあいだ以上に御法度なんだ。とにかく、どこのお店でもそんな話めったにきいたことがないわね。浮気はお店以外でする。

でも――べつにホーリツできめてあるわけじゃなし、好きになりゃ、しかたがないわね。で、パパさん、やったんです。十何年かまえに。……それが、いまパパさんの浮気封じのクスリになったというから、世のなかはおもしろいじゃない？

そのころママさんは、坊っちゃんをうんだあとだった。そのあいだに、パパさん、お店の或る女とへんなことになっちゃったのね。パパさん、その女に客をとらせることをやめさせて、じぶん専用にしていたらしい。ところが、その女にはまえから男がいてね、女はパパさんにないしょでその男をあそばしていたら、病気うつされちゃったのよ。……そのころは、いまみたいにいい薬はないし、オイソレとなおるもんじゃない。そこで女は、そのあいだじぶんとなか

のいいおともだちに代役をたのんだのですって。

むろん病気うつされたなんてこといえやしない。だから、その代役のこともパパさんにわからないようにやったというんだから、いったいどうしたのかしら。二三回はそれでぶじとおったというんだから、パパさんのうっかりかげんにもあきれるわネ。ふんとにノンキなトーサンだわ。……

すると、或る日、代役つとめてた女が、刑務所にいってた亭主が出てきたって急なハガキがきたもんだから、いそいでお店を出たんだわ。それをその女が知らなかった。気がついたのは、あくる日のことなの。

ところが、パパさんがやってきて、「きのうは」とかなんとか妙なことというのね。女はびッくり仰天よ。その顔いろみて、パパさんもおかしな顔になる。さあ、それから、ふたりのあいだでトンチンカンな問答があって、それじゃ、「その女」はだれだろう？　と、ばかみたいな顔でみまわしたら……ママさんが、むこうで、ひとりでニコニコ笑っていたんですって、サ！

ほゝ、ほゝほう。

それっきり、ママさんはそのことについて、パパさんにも相手の女にも、なあんにもいわない。

だけど、パパさんは、ママさんにくびねッこをギュッとおさえつけられて、それいらい、あたまがあがらなくなっちまった。——というおはなし。

なんだか、マユツバみたいなお話でしょ？　ほんとにデンセツかもしれないわ。でも、うちのママさんって、そういうひとなんだ。そういうみごとなひとなのよ。——

第四章　青楼の賢夫人

S警察署・捜査本部。
捜査官たちが話している。
「これでは、まったく婦人慈善事業家じゃあないか」
「紫綬褒章だか、黄綬褒章だか、表彰してやりたいくらいのもんだ」
「それで、決してソンはしておらん。ソンするどころか、はじめは吉原に一軒店をもっておっただけなのが、やがて三軒になり、つぎにこのS町にも二軒出し、駅のちかくには大きなキャバレーまでつくったのだからね」
「そう、たいていの業者は店と自宅はいっしょだからな、本宅があり、別荘、車まで持っているというのはザラにゃない。そのキャバレーというのも、女郎屋の予備軍のカモフラージュじゃないのかね」
「女神か、シタタカものか」
「いよいよ妙なきもちになってきた。とにかく、あの凄じい殺され方と思いくらべて、これほ

ど評判のいい——よすぎるところが、クサイ。なんだか眉に唾をつけたくなるじゃないか」
　荊木歓喜がいった。
「ところで、その朱実の証言のなかの、馬と化猫と半鐘ドロボーは何者かわかりましたかな」
「はゝはゝ、そうきいただけでわかりましたよ。あれは松葉組のもんで、篠田、下島、伊賀ってやくざです。これはしらべたところ……いや、しらべるまでもない、犯人じゃありません」
「わしもそう思うが、ついでじゃから」
「あいつらは、あの晩、恐喝罪のうたがいで、ここの留置場にぶちこまれていましたよ」
「なるほど」
と、うなずいて、歓喜先生は、ポケットから、ごそごそと大きな薬瓶をとり出した。
「風邪ぎみでな。ちょっと、うがいを」
と、薬瓶の水薬をあおって、のどをガラガラ鳴らしていたが、吐き出さないで、のんでしまった。刑事連はニヤニヤしている。
「まことに、どうも、恐るべき事件だ。わたしは、背なかがゾグゾクしてならん。……殺し方も殺し方じゃが、おっしゃるように、マダムの評判のいいことが」
　焼酎はのみほしたが、歓喜先生はめずらしく蒼い顔をしていた。
「もういちど、くりかえすが、女郎たちの証言はうそをついているんじゃありませんぞ。あいつらにとって、恋ぐるまは天国であったにちがいない。それは同時に、あいつらのそれまでの暮しが地獄であったということになるが、……それなら、どこの女郎屋も女郎にとって天国だ

というわけになる。これはやはり、マダムがとくべつよくできた女だったというよりほかはない。エライ。実に、世の実業家どもにマダムの……血びたしの灰でもなめさせてやりたい。……」

たとえがグロテスクなので、刑事たちは苦笑した。

「先生、そう感服してばかりいちゃあしかたがありません。なんたって、彼女は殺されたのですからな。しかも、あの念入りの、むごたらしい殺され方は、とうていフリの犯人のやったことではない。……」

「また、その夜に七人もの客がきて、いつマダムが殺されたかわからない、なんて摩訶ふしぎな結果がでてる。このあいだになんかカラクリがある。恐るべき智慧がある。とうていキチガイの仕業じゃない。……」

「してみると、やはりマダムになんらかの原因があるにきまっている。マダムにはなにかの秘密がある！」

荊木歓喜がうなずいていった。

「それじゃ、その七人の客――いや、そのうち氏素性のわかっている者の証言をあらためてきかせてもらいますか」

「恋ぐるま」の持主車戸猪之吉は、四十四五の、どちらかといえば、背のひくい、ずんぐりむっくりした感じの男だった。朱実が、まめだぬきと表現したが、それほどの醜男ではないが、

そういわれてみれば、そんな風にもみえる顔をしている。手の甲に女みたいにくぼみのできるほど栄養はいいが、皮膚が蒼いのは、あまり日光にあたらないからだろう。しかし、印象としては、陽気で、善人そうで、ユーモラスで、悪い感じではなかった。

顔のいろがわるかったのは、おびえていたせいもあったにちがいない。かっぷくがいいのに、どこかフワフワ風船みたいにかるい感じがした。銀ぶちめがねのおくで、眼は不安げにキョトキョトしていた。

「このたびは、どうもたいへんお手数をかけます」

と、彼はへんにひらべったい声でいって、ペコペコおじぎをした。刑事は苦笑した。

「妙なあいさつだね。車戸さん、まるであんたが悪いことしたようじゃないか」

車戸猪之吉はとびあがった。ほんとうにギョッとしたようでもあるし、どこか大げさな誇張的なところもみえた。

「ヘゝヘゝヘゝ、旦那、御冗談を。――」

笑い声はあげたが、眼は恐ろしげに、ぐるっとまわりを見まわして、ふと隅っこの椅子に影のように腰かけている歓喜先生をみると、

「あ、これは先生。――」

はじめて、ほっとしたようなためいきをもらした。顔みしりなのである。

「いや、どうもお上に呼びつけられていますと、あやまるのがもう習い性となっておりまして。――」

彼は落語家みたいにひたいをたたきかけたが、いくつかのこわい眼がじっとみているのに気がつくと、急速にかなしそうな表情になった。

「あたしゃ、もうダメです。あれに死なれて……あたしも、もう死んだ方がマシでございます。亭主とはいうものの、ここ十年くらい、ほとんど商売のほうはあれにまかせッきりでございましたからなあ。またあれにやらしたほうがうまくいったことも事実で、もともと田舎(いなか)の芸者屋の娘じゃあありますが、嫁にきたときは、すこしばかじゃないかと思うほどのんきものでしたから、あれほど商売にいい腕をもつ女になろうとは、ゆめにも思いませんでしたよ。おかげで、いつのまにやら、あたしゃ床の間の置物か隠居みたい、ただ小唄をならったり、盆栽(ぼんさい)をいじったり、……」

「ばくちをしたり」

と、刑事のひとり。

「あっ、そいつをいわれちゃあ、もう合わせる顔がありません。……トニモカクニモ、えらい女でございました。鼻の下がなげえようですが、まったくあたしなんかにゃもッてえねえ女房でござんした。恐ろしくあたまがまわってキレる一方、みょうにこう……りこうなんだかばかなんだかわからない、のんきな、とぼけたところがありましてね。いえ、たくらみがあって、とぼけてんじゃあありません。そんな女なら、いくらあたしだって、いままでモチませんさ。いや、あたしはともかく、死んだおふくろが——なかなかうるせえ、カン性のおふくろが、あれほど可愛がるはずはねえんです。えれえ女房ってやつは、えてして亭主にゃくそッ面白くねえもんだが、あいつはえれえばかりじゃなく、ほんとに可愛い、おもしれえ女でござんした。……」

「あんた、マダムにあたまのあがらんことがある——むかし、女のことで、首根っこをおさえられたことがあるそうじゃないか」

「えっ？」

彼はとびあがって、眼をパチパチさせた。そしてまた「へゝへゝへゝ」と笑ったが、これはくせらしい。

「あゝ、あのことですか。あんまりふるい話なので——イヤじゃありませんか、あんな話。……だ、だれがそんなことといってましたかな。あれは、へゝへゝ、あんな話はたしかにありました。しかしあたしが品行方正なのは、まさか、あんなことからじゃありませんさ。そりゃ、やっぱり女房がいいからで。……その、へゝ、殿さまをからぼりにする美しさ、ってえ川柳(せんりゅう)がありますな、あの女房じゃ、とてもほかに浮気しようなんてえ余力はのこりませんでしたよ。三十ごろからちっとも年をくわない、色ッぽくて、みずみずしくって、そのうえ、あいつは、その……スキでしたからなあ。——まったくいい女房で、あたしみたいな男に、どうしてあんないい女房がきたのか、親同士がきめた縁組ですが、とにかくあたしゃ、よほど前世でいいことしたにちがいない。……」

「大将、ヨダレがたれる」

憮然とした顔で、歓喜先生がいった。

「車戸さん、それほどりっぱなマダムが、あんな酸鼻な殺されかたをした。おかしいじゃないか、なんか思いあたることがあるだろう、あんたには」

と、刑事の声が、突然するどいものにかわった。問いが急速に核心に入ったことを知って、車戸猪之吉の全身が硬直し、顔の筋肉がピクピクひきつった。

「たとえば、あんまりやり手すぎて、同業者のうらみをかうとか――」

「いえ、いえ、そ、そんなことはありません。その方のつきあいに、あの女がぬかりがあるもんですか。……ただ、ただ……」

「ただ？」

猪之吉の表情が、ねじれるように憎悪のかげを縒り出した。

「旦那、あたしゃ思いあたることがある。いや、思いあたるどころじゃない。なぜあの晩あたしが店にいったかってえと、あのすこしまえ、本郷の家に電話をかけてきたやつがあるんでさ。女房が恋ぐるまで――七時半ごろ間男ひきずりこんで乳くりあってるから、いってみろって――」

「なに？　電話が」

刑事たちはいっせいにからだをのり出した。

「それは、だれ？」

「わかりませんや、だれだか」

「若い声？　年よりの声？」

「それが、あとでかんげえても、サッパリわからねえ。若いんだか、年よりなんだか、男だか、女だか――まるで風呂ンなかからものをいってるような声で、とにかくあたしにゃききおぼえのねえ声だが、電話にゃはじめヒトミってえ女中が出たから、その方へもきいてみて下さいな。――それであたしゃ、ようし、コンチクショウってわけで、車をとばしてかけつけたわけで。……」

「そ、それで、どうだった、マダムは？」

「女房は、あの部屋で、なんのこたあねえ、女たちの伝票を区分けして算盤をはじいていましたよ。そして、あたしに何しにきたっていうから、電話のことといったら、急に笑い出して、なにねぼけてんのさ、ばかばかしい。だいいちわたしがいま月のものだってことは、あんた知ってるじゃあないの。――」

「ちょっと待った、車戸さん、あんた、いま電話をきくなり、コンチクショウってとび出したといったね？　すると、なにか、あんたにはその電話で思いあたることがあったのかね？」

「へえ」

車戸猪之吉の眼鏡がくらくひかった。

「電話は、いまあたしゃなんといったかわすれましたが、女房が伴とあいびきしてるぞっていったんでさ」

「伴？　それが間男の名？」

「へえ、目黒の医者の名ですがね。こいつが――」

そのとき、隅の方でしずかにひとのうごく気配がした。荊木歓喜である。歓喜先生は、顔を宙にあげて、金魚のように口をパクパクさせていた。だれもみてはいなかったが、彼は、「……伴……ばん……ばん……」と、小さくつぶやいていたのである。なにかの記憶を空中からかきさぐり、吸いこむように。——

猪之吉は、唇をひきつらせながらしゃべった。

「ええっと、名はなんといったっけ、伴泰策、とかいう男でさ。女房の幼なじみだそうで。……幼なじみどころじゃない。なんでも、女房が女学生だったじぶん、もうひとりのともだちと、そいつをとりッこしたんだそうです。へ、女房は、女房は山形県のNってえ田舎町の芸者屋の娘でしてね。それで結局、まけちゃって、もうひとりの女にとられちまった。ヤケになってあたしンとこへ嫁にきてやったんだ。……と笑ってあたしにしゃべったことがある。が、じっさいのところ、なあんてえこともねえ、ニキビ面のころによくある、モヤモヤッとした夢みてえな色恋沙汰らしくってね、それに、それっきり二十何年か会ったことがねえんだから、あたしもまったく気にゃしてなかったんでさ。ところが、去年の春だか、そいつにヒョイとめぐりあった。……けど、旦那、こんなことしゃべったって、しようがありませんぜ」

「なぜ？」

と、荊木歓喜がいった。

「大将、つぎをききたいね」

「だって、この話はべつに女房殺した奴と関係がねえもの。……それじゃ、しゃべりますか。

女房が伴に逢ったってえのは、そのもとは久世って麻薬Gメンにあるんでしてね。久世さんがヒロポンつかう店はねえかと調べにくる、女房と話してるうち、偶然、目黒にモヒ中で医者の免状とりあげられた男がいる、なんて話が出たそうで、それが伴泰策って野郎なことがわかったらしい。これはオナツカシイってわけで、それからつきあいはじめたんでさ。もっともむこうにゃ女房があるし——そのむかし競争したってえともだちですね——あたしゃべつになんとも思ってなかったが、そのうちむこうの細君が気がちがって精神病院に入っちゃったってんです。……」

「代々木の、曾谷病院だろう？」

と、荊木歓喜がうなずく。みんな、びっくりしたように、歓喜先生を見つめた。

「へ？　先生、知ってらっしゃるんで？　こいつあおどろいた。あたしゃそこまで知りませんよ」

「それから？」

「さ、それから女房の、伴夫婦に同情すること。そっちの娘なんぞうちへつれてきやがって。……もっとも、ひどく情のふけえのは女房の気性でござんすからね。あたしもべつに気にもとめやしなかった。ところが、さて、そんな電話をきいたとなるとまた話はべつだ。むこうの細君は精神病院に入ってる、伴とうちの女房は、むかし、その、なにかあった——ありかけたという仲でござんしょう。そういや、それらしい気もあったとカッとして——」

「そりゃおかしいじゃないか、車戸さん。さっきはひどくマダムをのろけとったが、恐ろしく

またかんたんに信用をうしなったもんだね」

「あ……それは、旦那、うちの女房をよく知らねえからそんなことおっしゃるんで。……あいつあ、あたしにとって、その、十三割くれえある女です。その三割ンとこが、どうにも手にあまる。ヒトに親切すぎるんですよ！　それに……なにしろ、スキですからねえ！」

「なにをいってるのか、ちっともわからないね」

「わかるよ、わしには。マダムという女は……ま、国にたとえれば、アメリカみたいなものだと、車戸さんはいいたいんじゃろう」

と、歓喜先生が、とっぴなたとえをもち出した。

「アメリカという国は、……ずうたいが大きくって、大金持で、はで好きで、気ッぷがいい。それにいままで、よその国を侵略したという歴史がほとんどない。自由と民主主義の女神のような顔をしとる。……ところが、その一方で、どことなくぬけたところがあって、またまかりまちがうと、よしんば善意にしろ何をし出かすかわからんようなおッかないところがある。――と、三等国や四等国の人民をビクつかせるところがあるじゃないか。いや、車戸さんを三等国なみの亭主だというわけじゃないが」

歓喜は笑った。

「それより、車戸さん、さっきの件という医者の話は、もうおわったのかね」

車戸猪之吉は、なにかもの思いにしずんでいるようにボンヤリした表情をあげて、気のない返事をした。

「いえ、おわったわけじゃあありませんが……といって、その医者のことは、あんまり存じませんですよ。女房はよく知っているんだが、こっちからクドクドきくのはヤキモチやいてるようで、亭主のコケンにかかわるみてえな気がしたんで。……だいいち、先生、なんにしたって、その医者は女房殺した奴と関係ありませんや。ざんねんながら。……」

「どうして？」

「あたしゃ、昨晩、恋ぐるまをとび出してから、駅のうらの浮舟って小料理屋で酒をのんでた。こりゃしらべて下さりゃわかります。本郷の家にかえったのは夜中すぎ。――それまで女房の殺されたのを知らなかったわけでさ。なぜすぐかえらなかったかってえと、かえりたくねえわけがあったんで、というのは家を出るすこしまえ、A新聞から、これから記者がいってききたいことがあるが在宅かってえ電話があったんです。いるって返事はしたけど、できることなら会いたかなかった。……」

「そりゃむろん事件のまえだが――新聞記者が、なんの話？」

「知りませんや。それっきり会ってねえんだから。……きっと、例の売春禁止法案とかいう件についてじゃあねえんですかね。あたしゃてっきりそうとにらんだ。こいつあ旦那、大きな声じゃあいえねえが闇米買うなっていうのと、おなじようなムリな法律ですぜ。どだい、……」

「売春禁止法案の話はあとまわし。それで？」

「へ、だから、そのあとで、女房が間男してるってえ電話がかかってきたのがもっけのしあわせってえとなんだかへんだが、とにかく記者に会わなくていい口実が出来たわけでさ。しかし、

あたしのゆくさきが恋ぐるまだってえことは女中のヒトミは知っているんだし、そいつを口止めするのもうっかりわすれてとび出したんだから、すぐにあとを追っかけてくるにちがいない。で、女房と会ったあと、夜なかすぎまで浮舟にいて酒をのんでかえった。するとはじめてあの騒動のことが……」

「おい、それより、その医者が事件に無関係だって理由は？」

「へえ、女中がいうことには、あたしの出たすぐあと、記者もきたが、べつに伴って医者がきて、ながいあいだ待ってたというんですよ。もっとも会いにきたのはあたしがめあてじゃあねえ、女房らしいんですがね」

「はてな、なんの用だろう？」

「知りませんな。なんでも女房に薬をもらいにきたとかなんとかいってたそうだが、あたしが会ったわけじゃないからよくわからねえ。……待ってるところへ、恋ぐるまから、女房が殺されたってえ電話がかかってきて、ヒトミがさわぎ出す。気がついてみたら、いつのまにかこっそといなくなってたそうですが、とにかくその電話の時刻までにゃうちにいたことはまちがいねえんだから、あいつが女房殺した奴じゃねえってことはたしかなんでさ。……ざんねんながら」

と猪之吉はまた「ざんねんながら」をくりかえして、ほんとにガッカリしたようななげやりの調子でつづけた。

「そいつが女房殺した奴なら、すぐひッくくって死刑にでもしてもらや、こっちの胸も癒える

んだが」

彼は、じっとじぶんを見つめている刑事たちの眼をみると、急に昂奮した。

「旦那。……あたしゃ、さっきから女房のことばかりかんがえているんだ。可哀そうで、可哀そうで、あんないい女を……思えば思うほど、殺したやつがにくらしい。八ツ裂きにしてもあきたりねえとはこのことだ。いま、死刑にしてもらや胸が癒えるといったが、ありゃうそです。倅とも話しあったんだが、あたしたちのきもちとしては、こっちの手でふンづかまえて、こっちの手でバラバラにしてやりてえ。そのためには、もしそいつが警察にでもつかまりそうなら、あたしゃかばって逃がしてやって、あとでユックリ切りきざんでやりてえね。……」

ひといきに、油紙に火がついたようにしゃべってから、はじめてすこししゃべりすぎたと、はっとしたらしい。急にキョトキョトとまわりを見まわして、

「いえ、いえ、そいつあほんの思いつきで、まさかそんなことはやりませんがね」

と、大あわてにあわてた。

それから、急にだまりこんだ。刑事たちも顔を見あわせたきり、ちょっとしんとしている。すると、そのみじかい沈黙にすら座がもてないらしく、車戸猪之吉はいそがしくたもとをさぐって、ハンケチをとり出し、しきりに眼にあてた。

突然、しずかに荊木歓喜がいった。

「大将、うれしそうだね」

「えっ？」

猪之吉はとびあがった。とび出すような眼で、

「あ、あたしが、うれしそう？　先生、いくら歓喜先生だって、そりゃあんまりだ。女房を殺されて、あたしのどこがうれしそうなんです？」

「いや、ただ、さっきからこう拝見してて、なんとなく」

ニヤリとする歓喜先生を、恐怖の眼でにらんでいた車戸猪之吉の顔が真っ赤になり、くしゃくしゃっとひきゆがんだ。

「先生、あ、あ、あたしゃこういう人間だ！」

ヘラヘラしたひらべったい彼の声が、はじめてしぼり出すようなうめきに変った。

「トンマじみて、騒々しいのはあたしのもちまえなんだ。……それに、なげえあいだのこんな商売で、お上の旦那のまえに出ると、どうしたって顔に愛嬌笑いが出てくるんでさ。どんなにかなしくたってどんなに腹がたったって。……そのうえ、あたしゃこうみえて、ひどく気の弱い人間だから、こいつおれがうたがわれているなと思うと、たとえ無実だって、じぶんがほんとに悪いことをしたような顔になる。それに気がつくと、そんな顔をしちゃたいへんだと思うから、いっそう騒々しくなっちまうんだ。あゝ、おれという因果な人間は」

「もういい、もういい」

歓喜先生は、降参して手をふった。

「わかってる、わかってる。いまのは悪い冗談じゃった。あやまる、あやまります。……さもあらん」

それから、車戸猪之吉は悄然として、あの夜マダムをたずねてきた、ふとッちょの紳士、黒マスク、白マスクの男については、まったく思いあたらないとのべた。

車戸が刑事のひとりにつれ出されてから、歓喜先生はしばらく考えこんでいて、もういちど、

「さもあらん」

と、つぶやいた。

「先生、なにがさもあらんです？」

「いろいろのことが」

「と、いうと？」

「たとえばさ、車戸が、たとえ無実でも、ひとからうたがわれると悪いことをしたような顔になる、といったことですな。ヘラヘラ調の大将、はからずも苦しまぎれに、人間の或る性情について真理を吐露しおった。たしかに、そんなことが、そんな人間がありますよ。あんたがたにはよほどよく気をつけてもらわんけりゃならんことだて。人間、嘘をついているのか、ついていないのか、そこのところを見わけるのはなかなかむずかしい。嘘発見器でもむずかしいと思うて。いまいったような現象が起って、嘘をつかんでも、嘘ついてるなと思われたと考えただけで急に血圧があがるということは、充分あり得るんじゃから」

「それはよく心得ていますよ。それじゃ先生は、車戸のしゃべったこと、みなほんとだとお考えですか？」

「そりゃ保証はできん。やはり、一応も二応も、その新聞記者、医者、女中、浮舟という店な

どしらべてみる必要はありましょうな。……それから、ふたつめに感服したのは、車戸がいった、下手人がわかったら、警察の手でつかまえてもらうより、じぶんでつかまえて復讐したいという執念です。なるほど、ほんとに愛しとる人間が殺されたら、そういう心理も、さもあらん。……」

「すると、車戸は、それほどマダムを愛しておったというわけですな」

「左様。そういう心理は、その立場にたたされた人間でなくちゃあ——とくにあれのようにヘラヘラ調の男には思いつけない考えじゃと思う。……ところでな、三つめのさもあらんは、これはこっちの眼力で……」

「え？　こっちの？」

「やっぱり、あいつは、ちょっとうれしがっとるよ。それほどぞッこん惚れとるマダムの死んだことを」

「わかりませんな。なぜ？」

「身分不相応な家宝がこわれて、その束縛からはなれた人間の安堵に似ている、といえようか。……マダムが、えらい女でありすぎたのです。あいつは籠のふたがとれた鳥みたいに、外は闇か風かわからんが、とにかくホッとして羽根をバタバタさせておる。そのところを——じぶんでも、ひょっとしたら気がつかない心の奥底をわしにつッつかれて、とびあがりおった。ふむ」

「女房を殺されて、あいつがよろこんでる？　それは、先生——」

「はゝ、なに、そう意気ごまんでもよろし。あんたがただって、ときどきあんたがたの奥さんが、ちょっとひとまず死んでくれたら、なんてふっと考えなさることはおありにならんか？　たとえ、どんなにいい女房であっても、じゃな。いや、これはまた失礼」

一笑したが、荊木歓喜は、また、ふかい闇をのぞくような眼つきになっていた。

「人間のこころはおもしろい。歓楽きわまって哀傷の生ずることもあれば、かなしみの極致に、ホンノリしたうれしさが同居していることもある」

「先生、しかし、そういうチョイとしたいたずら心から、まさか女房を殺す奴はいないでしょう」

「まあ、ありますまい。が、このごろ、全然動機がなくって人を殺す奴も出てきたそうじゃから、ゼロにくらべれば、その動機は大ありというべきじゃて。まして、女房がひとかたならぬ目方のある女だと、そのチョイとした心が、それに比例して、チョイとではすまされなくなるかもしれん。……たとえ、善のかたまり、美の化身、幸福のみなもとであっても、それがあまりに大きいと、ちかくにいる人間はときにうっとうしくなってくることがある。ふむ、この心理は人間の世界で最も面白くって恐ろしいもののひとつかもしれんて。……」

歓喜先生の哲学は、どこまでも無際限にころがっていってトメドがない。ようやく、はっとじぶんで気がついて、

「況んや、車戸猪之吉、ないしあのマダムに、なんか暗い秘密があればです」

第五章　記者とGメン

「さて、次のふたりの証人をしらべるのは、ちょいとウルサイね」
と、刑事のひとりが苦笑しながらこぼしたのもむりはない。

ちかごろ、或る心理学者が、「現代の帝王」はだれか、という調査をしたことがあった。いちばん強いものはいかなる職業か、人々のこころに漠然と浮かんでいるその印象を統計してみたのである。その結果によると、もっとも強いのは、政治家でも富豪でもなく、新聞記者と司法官だということであった。この漠然たる印象の内容を分析すれば、時代の花形とか、他人への支配力の強さ、あるいは確実さとかいろいろあるだろうが、要するに、ほかの職業にくらべて、弱味のない、うしろぐらさのない、正義の使徒としての信頼感が、現代の民衆のうたがいぶかいこころにも、つよく刻印されているからであろう。

実際にわれわれは、ちょっと辛辣(しんらつ)な気分で、欲のふかそうな、好色漢らしい人物を空想し、一方で、大臣、議員、役人、実業家、医者、流行作家などという職業をあたまに浮かべると、その顔がオーヴァーラップしてくることはかんたんである。しかし、そういう人物と、新聞記

者或は検事とむすびつけることはむずかしい。そこには、きっと清潔で、俊敏で、颯爽(さっそう)たる影像がうかび出てくる。

そのとおり、A新聞の社会部記者里見十郎は、たしかに俊敏で、颯爽としていた。ただ風采(ふうさい)だけは、若々しい眼をのぞいては清潔とはいえなかった。洋服もネクタイもよれよれの安物で、櫛(くし)などいれたことのないような髪が、明るい、のんきそうな顔にたれさがっていた。

「やあ」

それが、最初のあいさつである。

「まだ、白マスク、黒マスク、それから、口ひげをはやしたふとっちょの紳士の正体はわかりませんか？」

さっき、刑事がこぼしたのは、これだ。べつに記者が、現代の帝王とも正義の使徒とも思ってはいないが、どっちがとり調べるのかわからなくなることだけはまちがいない。それでなくてさえ里見は、殺される直前の車戸旗江に会いながら、まさかその直後あのような大事件がおころうとは、それこそ神ならぬ身の知るよしもなく、まんまと大特種(スクープ)をのがして切歯扼腕(せっしやくわん)しているのだから、捜査本部によばれたチャンスをかえってじぶんのために利用しようと、その鼻は猟犬のようにピクピクしている。

「わからん」

そらとぼけたのではなく、係官の顔はにがにがしい。

「そのうち、その紳士は、女郎の記憶でモンタージュの写真をつくるつもりだ」

里見記者は、事件の直後、まっさきにじぶんから警察へかけこんできて、そのとき一応きいたので、いまさらべつに問うこともなかったが、要するに、彼が昨晩、車戸猪之吉を追っかけていたのは、猪之吉の想像したとおり、売春等処罰法案をめぐって、彼と保守党の某代議士とのあいだに醜関係がむすばれたような事実が浮かんできたので、それをたしかめるためであったが、その後の情報によると、その法案をふせぐ業者の音頭をとっていたのは、猪之吉よりもマダムだったらしいというのだった。

「ふうむ、それじゃ、もしあの殺人がそれにからんだものだとすると、事件はいよいよ容易ならん大がかりなものになるぞ」

刑事たちの顔は、緊張に蒼ざめる。

「で、その某代議士って、だれだい？」

「そいつは、いま、ちょッと。……」

彼は頭をかきまわしたが、すぐ眼をあげて、

「いや、いいましょう。むろん、これは他社にはないしょですよ。それは保守党の立花代議士です。社であらってるんですが、こいつ昨晩の行動がハッキリせん。……」

「そ、その、立花代議士が、あのふとッちょの紳士じゃないのかね？」

「ぼくも、実はその疑いを持ってるんです。立花代議士は、たしかにふとってますし、口髯もはやしている。――」

「おっ、それじゃ、その代議士の写真を手に入れて、恋ぐるまの女にみせろ。ええっと、――

さっきのユリ子、ユリ子って女郎はまだいるか？」

あわただしい跫音をひびかせて刑事が部屋をとび出してゆく。

里見記者は身をのり出した。

「ね、かくのごとく、こっちの情報も入れますから、そっちもこちらに優先的にネタを下さいよ、ね」

当夜のマダムについては、――むろん、彼が会っていた十分間は、猪之吉の行方を知らせろという押問答についやされたので、結局、マダムにとぼけ通され、かんしゃくをおこしてとび出してしまったのだが、腹をたてつつも、マダムの機智縦横の応対におどろくべきものがあったという。

「ぬけぬけと――ほんとにこんな商売からはやく足をあらいたい、こんどの法案はそのいいチャンスだし、女や業者の再出発について、同業者と相談したいと、かねがね夫と話していたところだ、なんて――」

「例の倶楽部の名誉顧問くらいの資格は、充分あるね、里見さん」

と、荊木歓喜がいった。里見記者は、歓喜をみて、あたまをかく。これまた知り合いらしい。

刑事は妙な顔をして、

「例の倶楽部って？」

「嘘倶楽部」

「へえ」
「そういうユーモラスな会があって、この里見君は幹事なのです。二三度縁があって、わしも招かれたことがあるが、——その会のある日はな、その出席中、その会員は一語としてほんとうのことはしゃべってはならん、嘘ばかりついてしゃべり合わんけりゃならんという規約があるのです」
「なんて、ばかげた——」
「なに、この世ぜんたいが、ま、嘘倶楽部のようなものじゃて。あんた方も、つかまえた人間が嘘さえつかなんだら、これほどらくな商売はなかろうが。——いや、警察なんて無用のものになるかもしれん。犯罪者ほど絶体絶命の嘘はつかんでも、この世の人間は、年がら年じゅう、消極的な嘘をつかんけりゃならん羽目に追いこまれて、くらしとる。じゃから、せめてそんな会で、思うぞんぶん嘘を吐きつくしたら、きっとせいせいするだろうと。——」
「しかし、新聞記者が嘘倶楽部の会員だなんて——」
「新聞記者も人の子さ。とくに毎日毎晩、事件の真相、問題の真実を追っかけまわし、追っかけまわされとると、いっそうそんな倶楽部でおなかをかかえて笑いたくなろうよ、なあ里見さん。——しかし、いつかの会員、あれは倶楽部はじまって以来の英雄でしたな」
「はあ、記者としては、社創立以来の大悪党、わが倶楽部員としては、たしかに不世出の大偉人でした」
「いや、嘘倶楽部の会員に、里見さんと同業の新聞記者があったのです。こいつが、例の潜行

中の共産党幹部と秘密会見という大ヨタ記事をぶっぱなして、本人の馘（くび）はもちろん、支局長から部長、みんなにえらい責任をとらせおった。——」
刑事たちは、ひたいごしにうろんくさい眼を里見記者にそそいだ。
「きみ、さっき情報交換なんてウマイこといって、大丈夫かね？」
「はゝはゝ、倶楽部の規約のなかに、倶楽部の規約を外の一般社会に適用せるものは除名という一条がありますよ」
「その記者は、その規約も嘘だと思うとったらしい」
と、歓喜先生は破顔（はがん）した。
「ところで、里見君、それでいまヒョイと思い出したのだが、いつか倶楽部で、君がわたしにしゃべったっけねえ。君が新聞記者になった動機を。——君のお父さんが新聞のデマ記事で社会的に葬（ほうむ）られたので、君は恐ろしく苦労をした。だから、君は新聞記者になり、いちど大がかりでねんいりなデマ記事をかいて、新聞の信用をうしなわせ、父の復讐をやるためにこの道をえらんだと。……こりゃなかなか奇抜な立志伝じゃが、ありゃほんとかね？」
「先生、そりゃ嘘倶楽部でしゃべったことでですよ」
と、里見はあわてて手をふった。
「倶楽部でしゃべったことを、先生ともあろうおかたが、ほんきにされちゃあこまります」
「やっぱり、そうか。いや、なかなか痛快な着想じゃ、ほんとにそういう志をたてて記者になる奴が、ひとりくらいありゃせんかと、わしゃこのごろつくづく思うものじゃから」

「へえ、どうしてです？」

「まったくのところ、新聞はそれほど信用すべきものじゃあないからな。事実半分、嘘半分」

「そりゃ、ひでえや、先生、赤新聞ならしらず――」

「そういう新聞をつくる気はなくとも、事実そうなるんじゃ。しょせん、人間のやることだ」

「しかし――」

「いや、まあ、ききなさい。たとえば、或るところに、漆黒の髪フサフサと、眼すずしく鼻たかく、口もとキリリとしまった偉丈夫があるとする。だれのことじゃと思う」

「わかりませんよ。……僕のことかな」

「わしのことじゃよ」

「へえ、先生が」

「いまいったことは、ひとつもうそではないぞ。ただ、ほかに、傷あとがあり、ちんばで、オンボロだといわんだけさ。嘘でない嘘とはかくのとおり。たとえこれほど意識的じゃあなくっても、新聞だってこういうまちがいはふせげんわな。なあ？」

「そういえば、そうですが……」

「それを日本人は、まるまる信じとるよ。戦争にまけて、日本人はなにもかも信用せんようになったがな。天皇さまから、大臣、役人、先生、お金、道徳、主義、愛情――老人は若い者を、若い者は老人を――テンデ信用しとらんわ。ふむ、何ものをも信用しない、いや、おもしろい世のなかになったものじゃ。これは考えようによっては、なかなかええことじゃて。――とこ

ろでな、そのなかで、新聞だけは信じとる。戦争中、あれだけ新聞にだまされて、まだ性懲りもなく信じとるのがふしぎじゃし、おかしいし、ほかのものへの不信用とくらべて、つりあいがとれんから、危険でもある。――」

例によって、千鳥足の歓喜先生の哲学は、いったいどこへとんでゆくのやら、見当もつきかねる。刑事連はむろん、里見記者もけむったい顔で腕時計をのぞきこみ、

「ところで、ちょっと僕は用があるんですが――これでいいですね。じゃ、例のネタの件、ギヴ・アンド・テイクにねがいますぜ」

颯爽と出てゆく記者を、刑事たちは、あいまい至極な顔つきで見おくっている。

「嘘倶楽部所属の新聞記者か。――」

「こりゃ、先生、あれからもらう情報は、眉に唾をつけてきかなくっちゃなりますまいな」

「まさか」

と歓喜は笑った。

「そこまで疑う必要はありますまいが」

「いや、さっきユリ子の証言のなかに、いつかグデングデンに酔っぱらって廓のなかをあばれまわり、A新聞の記者だといばっておったというのは、あの記者でしょう」

「うむ、あれは少々まずいな。……」

「わたしたちには、どうもあれが一流の記者とはみえんですが」

「いや、酔っぱらっての行状を云々されると甚だこまる。人間、酔っぱらうと本音を吐く、と

よくいいますがな。それは下戸のいやみで、必ずしもそうではない。酔っぱらいというものは、だれしもあんなものです。……」

と、歓喜先生、すこぶるあわてて酒のみの弁護にこれつとめたが、

「いや、待てよ。……本音を吐くか吐かんかはべつとして、そいつの人間の品性、これは出てくるかもしれんな」

と、首をひねった。

「……実は、わたしも、あれの嘘倶楽部での述懐に、なにやら耳にひッかかることがある。ねんのため、里見君の経歴を――あれの親父が、ほんとに新聞のために葬られた人間か、いちおうしらべておいてもいいかもしれんですな」

厚生省麻薬取締官、久世専右(せんすけ)氏。

やせて、小柄な男だったが、顔は、とりしらべる刑事のだれよりもするどい、きびしい顔をしていた。うすいユダヤ鼻のかげで、眼が、鋼(はがね)のようにくらくひかっている。あきらかに職業の変貌させた人相だった。きくところによると、麻薬Gメンのなかでも指おりの辣腕(らつわん)家、励精家だということである。

久世氏も、事件の報ぜられたけさはやく、じぶんからいちど出頭してきたが、やはり二応も三応もきかなくてはならぬ。どうも、所轄は厚生省と警察とちがうけれど、むろんふだんは密接な協力関係にあるのだから、刑事が内々にこぼすわけだが、しかし久世氏は、いままでの車

戸や里見とちがって、時間的に重大な登場人物にちがいなかった。

というのは、久世氏が恋ぐるまをおとずれるまえに、まだ正体不明の白マスクと、ふとっちょの紳士がマダムをたずねてきているからである。

そのことを記者とおなじように、まず彼から口にした。

「どうです、その白いマスクの男と、口髯の紳士はまだわかりませんか？」

わからない、と刑事がおなじようににがい顔でこたえると、久世氏は唇をかんで、暗い眼をいっそう暗くしずませていたが、

「どうも、S町で最大の協力者をうしないました」

と、沈痛にためいきをついた。

「あのマダムのおかげで、だいぶこの遊廓からヒロポンやヘロインが駆逐されていたのですがねえ。……」

「なるほど、そういえば、めっきりすくなくなりましたな」

と、荊木歓喜。

「三四年まえまでは、白粉(おしろい)をおとすと土人形みたいな顔をして、腕じゅう注射のあとだらけ、どころじゃない、注射タコがこぶみたいにポコポコしとる奴をようみたもんじゃが」

「なに、やる奴はまだ指と指とのあいだなどにやっていますよ」

久世氏はぶきみな笑いをもらした。

「なかなか絶滅はできない。……浅草とこのS町だけでも、こっちの知ってるかぎりでも千五

百人の麻薬密売者がいます。これは看視しているにしても、まだキャンプから鞍替えしてくる女が、新しいルートをひいてくる。それをまた、マダムのように協力してくれるひとは例外で、ともすれば、やはりおつとめの時間だけはかせぎにかせぐように、内々薬をすすめる楼主が多いのでこまったものです。ヒロポンならまだしもだが、こいつがすすむとヘロインになる。……」

「いったい、どこから、そんな麻薬が日本に入ってくるものですかな」

「やはり大陸方面からの密輸ですね。わたしのみるところでは、その代り年間百億の金が大陸へ出ていると思う。なにしろ、ヘロイン一グラムが――ヤミで、五年まえまで三千五百円、二年ほどたったら二万円、いまじゃ五万円ちかくになっているのですから。それだけ取締りがきびしくなったわけですが、それでも日本じゅうに、麻薬中毒者は三十万あるとみております。ヒロポンにいたっては、成人四百人にひとり。……」

「ほう、わしゃまた淫売婦とか与太者ばかりじゃと思っておったが……」

荊木歓喜はくびをかしげて、

「いま、そのＳ町にもずいぶん麻薬密売者がおるようなお話であったが、れいのボスの松葉組、あれなんかどうです？」

「いや、あれは大丈夫です。下ッぱの方はしらず、松葉組の大将は関係ありません」

と、久世氏はかるくくびをふって、話をつづける。

「なげかわしいことに日本の麻薬患者の一割は、そういう連中より、患者を治療するはずの医

者、看護婦、薬剤師などでありまして、……」

「久世さん、伴（ばん）という医者を御存知か？」

「伴？」

「目黒の医者で――」

「あっ、あれですか。いや、知るというほどではありませんが、いちど、モルヒネ不法所持のうたがいで、家宅捜査にいったことがあります。医者、というより、モヒ中で、麻薬統制違反で免状をとりあげられた元医者でしたが、それが、どうかしましたか」

「あの晩ですな、その伴という男が、マダムに薬をもらう約束で、マダムの自宅にいったというんですが、その薬というのは、麻薬じゃなかったでしょうか？」

「あゝ、マダムとその医者は――なんでも幼ななじみだとかいうことでしたね。そうそう、わたしの雑談から、交際が復活したとかいってましたっけ。しかし、そんなことはないと思いますがね。その医者もその後なおしたらしく、わたしの捜査したときも――もう一昨年の秋になりますが――べつに麻薬は発見されませんでしたし、だいいちマダムがそんなことをするとは思えませんですね。……」

「しかし、マダムがあなたのお仕事の協力者であったとすると、ま、女郎たちの麻薬の入手先なども知っとるはずだ。マダムも麻薬を持っとらんとはいえん」

「そりゃそうです。……実はあの晩、それについてマダムに情報をききにきたくらいですから」

「と、おっしゃると？」
「この廓にいた女でですね、立川からきたパンパンで……いまはまた千歳にいっちまった奴があるんですが、こいつが相当大規模な麻薬業者と接触があったらしい、ということがちかごろわかったわけです。で、その女についてききにきたわけで……もっともマダムはよく知らなかったので、雑談をしてわかれたわけですが。――」
「そのときは、部屋のまえのネオンはきえていましたね？」
「こうっと、そう、きえてましたな」
「ほかに、部屋にはだれもいませんでした？」
「みませんでしたな」
「どこか――ものかげか何かにかくれてるような」
「ものかげっていったって、なにしろ三畳の部屋で、火鉢と姫鏡台のほかにゃなんにもないんですから」
「夜具か何か？」
「夜具は出ていませんでしたよ」
「枕は？」
「むろん、枕も」
ばかにされているように思ったらしく、露骨に不快な顔になった久世氏をへいきでみて、このとき荊木歓喜が、なぜかにやっとした。久世取締官はまばたきをした。が、すぐにもとの義

眼のようなつめたく強い眼になって、おしかえすように、
「なにか、御不審でも？」
「いや」
といったきり、歓喜はだまっている。あっけにとられていた刑事のひとりが、やっと、
「さて、久世さんの会われたときに、マダムに異常のなかったことがたしかだとすると――」
「わたしのあとに、だれかまだ訪ねていったのがあるそうですね？」
「そう、黒マスクの男」
突然、荊木歓喜が、憮然としてつぶやくように、
「その男をつかまえて、もしマダムはそのとき殺されていた、などいいはると、こいつめんどうじゃね」
「君！」
久世氏は真っ蒼になった。怒りに、眼が別人のような凄じいひかりをはなった。
「ばかなことをいうのはよしたまえ。厚生省の役人だが、これでもわたしは犯罪者をつかまえることを職務としている人間ですぞ。侮辱するのもいいかげんにしないか」
「ほ、わしゃ、なにもあんたが人殺しなどといったおぼえはないが」
おだやかな声と顔だった。
久世氏の眼が、急にふたたび暗い沈鬱なものに変った。なにかじっとかんがえこんでいたが、急にその顔をあげて、刑事たちを見まわした。

「ひとつ、妙なおねがいがあるんですがね」

微妙な笑いがその眼に浮かんでいた。

「この事件の犯人が、さっそくにつかまれば問題外ですが、万一へんにこじれて手間どるようでしたら、——いっそわたしを犯人にしてくれますまいか？」

「えっ？　あなたを、犯人？」

「いや、そうハッキリ決定して、公表するわけにゃゆかんでしょうし、またこっちもこまりますけれど、そこのところをあいまいに、新聞記者などには、いかにもわたしがくさいように匂わせてもらうと、非常に好都合なんですが」

「それは、また、どういうわけです？」

「実は、さっきちょっと申しあげた大麻薬業者なんですが、その正体をわたしは知っている。いえ、日本人じゃありません。ところが、蛇のみちは蛇でむこうさんもわたしを知っておるのです。それでですな、これからわたし、そいつに接触するつもりなんですが、わたしがそういううしろ暗い立場にあると、むこうがわたしに気をゆるす可能性があると思うんです。英雄、英雄を知る、といっちゃあおかしいが、犯罪者は犯罪者のみに、じぶんの犯罪を曝露するでしょう。ははゝはゝ、虎穴に入らずんば虎児を得ず、というやつです」

「——それで、あなたは、なぜマダムを殺したんです？」

ドキリとするような問いを歓喜からなげられて、久世氏はまたまばたきした。

「え、わたしを犯人にした場合ですね？　それは、痴情とも、或はマダムとわたしが結託して

麻薬でもうけていたのが仲間われしたとでも、なんとでも想定していただいてよろしい。……これは、わたしのほうの仕事の都合だが、しかしあなた方のほうも、私を犯人にしたてると、ほんとの犯人——おそらく黒マスクの男——が、安心して不用意にうごき出す、そんな利点がありゃしませんか？　どうでしょう、この思いつきは」

しゃべっているうちに、彼はその思いつきにみずから感服したらしく、ひどく熱心になっていた。

「先日から、なんかひと工夫はないかと考えていたのですが、——犯罪者に告白させるために犯罪者となる、もしくは警察とうちあわせて犯罪の容疑者となる。ふむ、これはなかなか捨てがたい着想だ」

刑事たちはなにもいわなかった。やっとひとりが、あきれたように、

「犯人を泳がせる、という手は、やらんこともないですがね、しかし、そういうことは——」

「できませんか？」

「できる、できんはべつとしても……久世さん、なるほどあなたは仕事の鬼ですな」

「はゝはゝ、それは、ケナされたのか、それともほめられたのですか？」

「ふ。……虎穴に入らずんば、虎児を得ず、なるほど」

と、歓喜がつぶやいて、じっと久世取締官の顔をみた。

「おもしろい。おっしゃるとおりにしてあげてもいいじゃありませんか？」

「ね。おもしろいでしょう。——わたし、行方がわからないことがありましても、厚生省薬務

局麻薬課のほうへとい合わせていただければ、ただちに出頭いたしますから、いま申しあげたようなこと、あとでひとつやってみるか、と御採用になりましたら、どうぞ御連絡ねがいます」

久世取締官が去ったのち、荊木歓喜はひとりニコニコ笑っていた。

「ぬらりくらりと、鰻（うなぎ）めが——虎穴に入ってきおった」

「なんのことです、先生？　あのひとが、あやしいとでも？」

「そういうわけじゃないが、いまの応答の結果を考えてみなさい。かりに、かりにあの人がバラバラ犯人だとすれば、じゃね。皮をきらせて骨をきる、柳生（やぎゅう）流、——みずからこっちの死角に入って、あんたがたの心に、これは犯人じゃない、という心証を生みやしなかったか？」

「そうでもありますまい。……しかし、どうもおどろきましたな。嘘倶楽部会員の新聞記者に、犯罪者志願の麻薬Gメン。——まったく、なにを信用していいかわからない」

「べつにおどろくことはない。人さまざま、人間というものは、いざとなれば、どいつもこいつもひとすじ縄ではゆかんものじゃて。いや、つくづくと、あんたがたのお仕事も、たいへんなものですなあ。……」

第六章　母よ不知火（しらぬい）

いうまでもないことであるが、これは事件が起ったその翌日一日間のことである。

ひとりひとりの証言のたびに、刑事が八方に事実のうらづけにとぶ。たとえば、車戸猪之吉が当夜いったという「浮舟」にその事実をたしかめるとか、目黒の元医者伴泰策氏に出頭をもとめるとか、むろん当夜「恋ぐるま」に登楼した客のうち、名のわかっている馴染客の調査にかけまわるとか。——

荊木歓喜は、もとより捜査官ではない。ただ生前辱知（じょくち）のなかであり、且（かつ）大いに敬愛していた恋ぐるまのマダムの非業（ひごう）の死を、ひとごとではないと思い、——また、それで警察のなかをウロウロしても、だれも文句をいわない不可思議な顔と信頼を利用しているだけだが、実は少々くたびれた。飯どきになると、刑事たちはカツ丼とかカレーライスなどのテンヤものをとる。歓喜先生は酒が要る。れいの薬瓶のなかは、もうからっぽだ。

ぶらりと警察署を出た。うすら日の下の平和な冬の町よ。蜜柑（みかん）の籠（かご）やデパートのきらびやかな包み紙を小わきにかかえ、あたたかな外套や美しいコートに身をつつんでゆきかう幸福そう

な行人のむれよ。

「これで、久世取締官によれば、ヒロポン患者が四百人に一人、精神異常でない奴は、十人にたった六人とかいったっけ。……噴火山上の乱舞か。あぶない、あぶない」

つぶやいて、石段をおりかかると、

「先生」

と呼んだものがある。ふりかえって、

「おお、ヒトミさんか」

なにげなく返事をして、三分ほどたって、急に眼を大きくした。ふたりの娘が、寒そうに、不安そうに立っていた。

ひとりは、遊廓のヒトミという女だった。朝から、まゆみ、ユリ子、鮎子、朱実と、捜査本部によびつけられた女は多いし、またそれを心配して署のまえをのぞきにくる朋輩(ほうばい)たちの姿もチラホラみえたので、はじめなんの気もつかなかったが、ヒトミという娘、これは、当夜「恋ぐるま」にはいなくって、本郷の車戸家にいた女である。——しかし、歓喜先生が眼をまるくしたのは、むろんそれがどうというわけでなく、いっしょに立っている娘が、あの惨劇の直前、彼とともに「恋ぐるま」を訪れたあのふしぎな女子高校生だったからだ。

「お。……これは？」

とっさに、この少女とヒトミとのむすびつきが腑(ふ)におちかねて、まじまじと見つめている。

「まあ、おじさま、警察の方？」

と、少女も眼をいっぱいに見ひらいた。ヒトミがくびをふって、

「いいえ、そうじゃない。そうじゃないけれど、警察にはとても顔のきく先生よ。……そうだ、お嬢さん、この先生にたのんだらいいわ。……」

と、いいかけて、これまた、

「あら！　ふたり、知ってるの？」

と、トンキョウな声をあげてしまった。

「お嬢さん。伴(ばん)さんでしたな」

伴圭子(けいこ)、名をおもい出した。おもい出したのみならず、歓喜先生は、この少女になにかききたいことがある。ききたいことがあるような気がするのだが、さてそれが何やらじぶんでもわからない。ちらっと、頭を、「そうだ、この娘さんの父親の伴泰策が、もう署へ出頭しているはずだ」という考えがかすめたが、彼のききたいのは、そんなことではなかった。

「お父さんのことでいらっしゃったか？」

と、歓喜は頭をかたむけて、

「まだ、お調べがすんどらんようだ。もうちょっとおそくなるかもしれんが。……」

「いいえ、父のことじゃあないんです」

と圭子は意外にもくびをふった。ヒトミが口を出した。

「先生、お嬢さんの心配してるのは、お父さんじゃないんだよ。そのひとなら、きのうの晩、本郷のうちでずッとママさんを待ってたもの。そりゃあたいが、あたいばかりじゃない、婆や

さんも知ってるもの。……お嬢さんが心配してるのは、坊っちゃんのこと」

「坊っちゃん？　……とは、車戸三樹のことかい」

車戸三樹は、朝からここに呼ばれている。いちど訊問をうけたが、本格的な取調べはこれからはじまることになっていた。――そういわれてみれば、この圭子という少女は、車戸の家にしょっちゅうあそびにゆくといってたっけ。……

「そうなんです。おひるまえ、お嬢さんのお父さんが警察にひっぱってゆかれちゃったんです。で、お嬢さんがビックリして、本郷のほうへとんできた。……」

と、ヒトミは息をきらしながらいう。それは、伴氏が、昨晩は車戸家にいたんだから、そのあかしさえたてばすぐにかえってくるから、と娘にいいのこしたのを、それでも圭子は心配してたしかめにいったものらしかった。――

「なにしろ、父はこのごろ、どこへゆくのか朝からフラフラ出かけたり、夜おそくお酒をのんでかえってきたり、何をしてるのかあたしにもわからないんですから。……すると――」

――ところへ、ちょうどA新聞の記者が取材に車戸家にやってきて、いろいろ事件の見込みをしゃべったなかに、息子の三樹の行動がどうもおかしい、というようなことをしゃべったという。

「記者、そりゃ里見という奴じゃないか？」

「ええっと――そう、里見、里見。そりゃ気ぜわしいひと」

「それじゃ、あいつ、ここへきてしゃべるまえに本郷へいったのか、それともあとでいったのか。――なるほどいそがしい男だ」

あんまり動作のはやいほうではない歓喜先生、いまさらながら、新聞記者というものの敏速さにおどろかざるを得ない。（ネタの件、ギヴ・アンド・テイクにねがいますぜ。――）と彼はいった。すでにそのことばどおり、里見が全力をあげて活動していることはあきらかだった。

「ね、先生、坊っちゃんのことが、どうおかしいの？」

「おかしいのは、みんなおかしい。世のなかの奴、ぜんぶおかしいが。……とにかくな、マダムがあれほど念入りに料理された。魚ならしらず……人間ですぞ。牛肉屋でも、牛切り庖丁で骨のない牛肉をきるのに、一斤きるあいだに二三度はとぐ。人の肉だって、脂肪層はあついし、たとえ女にしろ、骨は骨だし、とくにあのマダムなんかひといちばい血は粘ッこそうだし。……」

「……よして！　先生」

ふたりの娘は、真っ蒼な顔になって、口をおさえてしまった。

「そんなこと、あの坊っちゃんが」

「おかしな時勢で、親殺しもめずらしくはないが」

「先生の、ちくしょう」

と、ヒトミはさけんだ。眼に涙がイッパイにたまっていた。この娘は、マダムがひどく可愛がっていたそうだが、なるほどちっとも女郎らしくない、ういういしく、感情の清潔なところ

があった。

「いや、ごめんごめん、まさか坊っちゃんが、おふくろを殺ったとは思えんがな。しかし、坊っちゃんはあの夜の訪問者のうち、最後の訪問者で――」

「それがどうしたの？　そのまえに、ママさんは殺されていたのよ」

「うむ、それはそうだろうと思うが、それにしても、それを発見した坊っちゃんが、なにもいわないで店をとび出してしまったというのはおかしい」

「そりゃ先生、母親の屍骸をみりゃだれだっておッたまげるわよ。それに坊っちゃんはお店がだいきらいだった。というより、あそこへいったのは昨晩がはじめて、あのお店は坊っちゃんにとって、見も知らない路ばたとおんなじだったのよ。――先生は、坊っちゃんが、なにか嘘ついてるのじゃないかと思ってるの？」

「三樹さんは、嘘なんかつかないわ、ぜッたい」

突然、圭子が決然とした調子でいった。なんのくもりもない、水晶のようにつよく澄みきった眼で、真正面から歓喜を見つめて、

「あのひとは、イエスさまにちかって、嘘はつきません」

歓喜先生は、ひどく狼狽した。これほど確信的な眼には、終戦以来お目にかかったことがない。

「ほ、あの子は、クリスチャンですか？」

「え、そうなんです。あたしも――あたしのお母さまがそうですから」

歓喜の頭を、ふっと、あの夜、聖書をもって恋ぐるまにいそいでいたこの少女の姿がよぎった。

「お母さまが、三樹さんに洗礼させたんです」

「お母さま？　あんたのお母さんは、その……曾谷病院に……」

「病院に入ったのは、一ト月まえですもの」

ヒトミが、そばから、

「先生、だいいち、坊っちゃんがなんのために嘘つくんです？」

「さあ、それが不審なんじゃて」

「坊っちゃんが、犯人を知ってて、それをかばうためっていうんですか？」

「さて」

「そんなばかなことがあるもんですか。ママさんは坊っちゃんのことといったらむちゅうだったし、坊っちゃんだって、ママさんを――夜の不知火みたいにあがめていたわ」

荊木歓喜は、妙な顔をして、ヒトミを見おろしていた。突然、女郎らしくないひどく詩的なことばがとび出してきたのでめんくらったのである。

「ここに坊っちゃんがそうかいてる」

と、ヒトミはまじめな顔でいって、それまで持っていたビニールの風呂敷から、一冊の本をとり出した。

「そりゃ、いったい何じゃね？」

「三樹さんの高校の文芸部の仲間で出してる雑誌。新聞記者がへんなことというもんだから、あたしたち、どんなに三樹さんがおばさまを愛してたか、そのしょうこを見せようと思って——このねえやさんと相談して、三樹さんのお部屋から、これもち出してきたんです。あたし、まえにみたことがあったから」

と、圭子もねっしんにいった。

ガリ版の本の表紙には、「青春混沌」とある。「青春混沌」を、まだ青くきよらかな桃の実と、ほのかにあからみ、熟しはじめた桃の実と——女子高校生と、若い遊女におしつけられた荊木歓喜先生は——ぶるっと、むく犬みたいに身ぶるいをした。

「ううっ、寒い」

なんだか、ハニカンだような笑顔になって、

「ともかく、そ、そこの食堂に入ろうじゃないか。こう空ッ風にふかれて立ち話していてもはじまらん。食堂にはストーヴもあるじゃろうから」

大通りのむこうがわに、中華ソバ屋があった。刑事たちが丼物をとる店で、中華ソバばかりではなく、なんでも屋である。むろん焼酎もある。いかにも、かんしんなことに、ストーヴもある。

「おやじ、チュウを三つ。うん、ストレートでよろし」

歓喜先生はストーヴのそばのあぶらじみた椅子にどっかと坐って、ドタ靴をぬいで、穴からおや指ののぞいた靴下の足をつき出した。

「レディたちは、ワンタンでもくうか」

ふたりの娘はだまってくびをよこにふる。靴下が、へんな匂いをたて出した。それにも気がつかないふうで、娘たちは、謄写版で刷った雑誌をめくる歓喜先生の手もとを、じっとながめている。

「母を恋す。……車戸三樹」

歓喜は題をよんで、眼をパチクリさせた。

ぼくは母を恋する。母を愛しないひとはない。ぼくは母を恋するのだ。

恋には性のにおいがある。母に性の匂いをかんじるといえば、ひとはぼくを怒るだろう。しかし、ほんとうは、母がまだ若ければ、少年はきっと母にボンヤリした性をかんじているものなのだ。……が、ぼくほど母にはっきりとそんな匂いをかんじている人間はまれだろう。

そういうと——ひとは、こんどはきっとぼくを嘲笑するにちがいない。ぼくは、ひとが母の職業を嘲笑していることを知っている、あんなしごとをしている母親だもの、息子がそんなことをかんじるのも当然だろうと。——

ちがう。ぼくが母を恋するのは、母があまりにも美しいからだ！　ぼくはひとびとのまえに昂然と面をあげていいたい。これほど美しい母が、この世にまたとあるか、と。

母は四十にちかい。しかし、まるで太陽の下の大きな向日葵のようだ。海原をわたる純白の豪華船のようだ。いや、太陽そのもの、海原そのものだ。ぼくは子供でありながら、母のまえ

で眼がくらみ、またはそのふかみにひき入れられそうなきもちになる。

ぼくはいまでも想い出すことができる。まだ小学校へ入るまえ――湯桶に舟をうかべていたから、もっとまえのことだろう――乳いろの湯気のなかに、なぜか記憶は、無数のシャボンだまを浮かべている。そのシャボンだまは、紅の、紫の、青の、黄の、まるで虹のような色彩をながしつつ、くるくる、まわり、ひかり、ただよっているのだ。その乳いろの霧と、五彩の珠をおしひらいて母があらわれた。――そのときの母の美しさを、ぼくはいまでもおぼえているのだ。驟雨のあと、モクモクとかがやきながら浮かび出た春の雲みたいな真っ白な乳房、腹、腰、ふともも――美しいというより、息もつまるような偉大さ、神秘さ、壮麗さが、まだぼくの脳膜にねばりついてのこっているといったら、ひとはぼくを性的異常児と笑うだろうか。

そうだ、ぼくは異常児かもしれない。――この五月、こんな夢さえみたのだから。

それは、ぼくがねむっていると、母がやってきて、やわらかく抱きあげ、接吻してくれた夢だった。ぼくは夢のなかで、神秘な昂奮とふかい恐怖に全身をうねらせて母をつきのけた。すると母は、身をひるがえして、階段をかけおりていった。ぼくがそれを追いかけて下におりると、石だたみのうえに、白いチョークで、「三樹ちゃん、わたしはわるい母です。旗江尼」とかいてあった。尼になったのか！　と思ったら、ぼくは涙があふれてきて、きちがいのように路をはしり出した。

水のせせらぎがきこえる。暗い麦畑のむこうに、白い月の環が浮かんでいる。いつのまにかうしろに父がきていて「死んだ！　死んだ！」とさけびながら、そうしていっしょに泣きながら、ふたりは母をもとめて、たそがれの野路を、どこまでもかけていった。……

――眼がさめた。ぼくはふかい息をついた。微風が、夕明りの窓の外から、ライラックの花の匂いをふきこんでいた。ぼくは、しびれた頭のすみっこで、じぶんのからだがぬれているのをかんじた。

いまでも、ぼくはためいきをついて思う。ぼくは背徳者だろうか、と。

ちがう。母はあまりにも女らしいのだ。へんなたとえだが、母は女の精そのものだからだ！それが五歳の幼児であれ、血をわけた息子であれ、いやしくも男であるかぎり、その「男」を酔っぱらわせるのだ。

ぼくは、幼いときお伽噺に出てくる美しい魔女をよむたびに、いつも母のことをかんがえた。ほんとうに、母は魔法使いのようだ。母にできないことはなにもない、とさえぼくは思うことがある。欲しいものはなんでもあたえてくれる。欲しいといえば、ヨットでもヘリコプターでも買ってくれるかもしれない。会いたいと思えば、どんな女優だって、歌手だって、なんかのチャンスをつくって呼んでくれる。――ひとは、これをぼくがじまんしているというか！そうだ、ぼくはたしかに母をじまんしているのだ！

母はぼくを溺愛している。世のひとは、溺愛とは無責任な愛だというけれど、ぼくはほんとの愛はきっと溺愛だと思っている。そのとき薄情にしておいて、あとになってから、いや、あれは本人の身のためを思う大愛だったなどいうのは、かならずまやかしものだ。ぼくの父なんかそうだ。――そして、ほんとの責任感は、その溺愛に対してこそおこるのだ。ぼくは、母の

愛に、文字どおり溺れつつ誓う。世のひとはなんとでもいえ、ぼくはこの母を溺愛しよう！と。

けれど——その母に、ぼくはどうしてもわからないことがある。いや、ふしぎな女だ、とは息子のぼくでさえなんどかきいた言葉だし、だいいち、父がしょっちゅう口にするけれど、ぼくにとっては、陽光のみなぎりわたった大空みたいに、なんの翳(かげ)りもないはずの母に、ただ一点わからないことがあるのだ。一点、というより、その天空海濶(てんくうかいかつ)そのものが神秘的だといえるだろうか。母はよく笑う。母はよく涙する。母はあけっぱなしだ。愛すべきぬけさくだ。

或る日、洗濯場から出てきた母は、牡丹(ぼたん)のようにあからんだ顔をして、ぼくの顔を見つめた。うるんだ眼のおくに笑いがあった。

「ママ、なに？」

「三樹ちゃん」

「なんだってば、へんな顔して」

「あんた——大人になったわね」

突然、ぼくはまっかになった。母はいたずらっぽい眼でいう。

「三樹ちゃん、あのね、もしなんだったら……神経衰弱にでもなりそうだったら、女の子とつき合わせてやろうか」

「…………」

ヒトミなんかどうお？」

「ばか！」

ぼくはどなった。恥ずかしいからばかりじゃない。ぼくは怒ったのだ。ヒトミというのは、母がひどく可愛がってる女中だが——ほんとうは、母のやっている店の女なのだ。じっさい母は、ときどきへいきで、ケロリとしてそんなばかなことをいう。

「ばかでもないさ。おまえでも、男だからね。男ってものは、可笑しいもので、女の子とつき合わないと、神経衰弱ならまだいいけど、それこそばかみたいに、ただボーッとしてたり、きちがいになったりするものだからね。……」

歓喜はふっと眼をあげて、ふたりの娘をみた。ふたりの娘はきまじめな顔で、じっと歓喜先生を見つめている。いったいこの娘たちは、この文章を読んで、何をかんがえているのか？……が、ヒトミの眼にはただ無智の、圭子の眼にはただ無邪気のひかりしかみえないようだった。

そのときぼくは、はじめて母を非難した。ひとが母を非難しているあのことを非難した。母のやっている商売をやめろ、といったのだ。……ぼくを嘲笑するひとよ、ぼくはけっして母の職業に無関心だったわけではない。へいきだったわけではない。そのことは、ものごころついて以来、母のやっている店、その一画(かく)に、いちどとしてぼくが足をふみ入れたことがないのをみてもわかるだろう。（ぼくの家は、ぼくが生まれてまもなく、その一画からいまのところへ

移ったのだそうだ）むろん母はすすめはしなかったが、べつに禁じもしなかったのだ。ぼくは、その問題については、幾夜、幾十夜ねむらずにかんがえつづけたことだろう。

売春禁止法の問題が新聞でやかましかった夏の一日、ぼくは別荘でひるねをしていて、恐ろしい夢さえみたこともある。――

まひるだった。往来を、群衆のはしってゆく騒音がきこえた。窓からみると、蒼い空にまっしろな煙がうずまきながれてゆくのがみえる。「火事だあ」「火事だあ」という叫喚が遠くからきこえた。もえているのは、まるで鱗のようなさざなみをたてているひろい河のむこうの、へんな家だった。日本風でも外国風でもない、蜃気楼みたいな建物が、めらめらと炎をあげていた。

「放火だあ」「放火だあ」そんなかんだかい声といっしょに、その建物の下にひとびとが蟻みたいにむらがり、そのまんなかに赤い支那服がくるくるともまれていた。ぼくは家をとび出した。

かけつけてみると、もう煙はけろりときえて、その建物のまえに、十人あまりの群衆があつまっているので、何ごとかあったのだな、とかんがえられるだけである。そのひとりに、「火事はもうすんだのですか？」ときくと、「ええ、その女が火をつけたのです」とこたえて、あごで地面をさした。広場をのぞいてみて、ぼくはぎょっとした。そこに大の字に横たわっている支那服の女は、母ではないか？

色のまっしろな、眼の大きい、母そっくりの顔をした豊麗なその女は、両手くびを胸のまえ

で、褐色の棕梠縄でくくられていた。「ママ！……ママ！……」ぼくが必死によんでも、その母に似た女は、ぼくも、まわりの群衆も、まったく見知らないというように無表情だった。

そのとき、鋼鉄の靴でもはいているような音をたてて、うしろから、黒い警官服をきた背のたかい老人が出てきた。腰に革鞘の日本刀を吊っている。――その顔は、誰かだった。ゆめのなかではたしかに記憶があったけれど、さめたいまでは、どうしても想い出せない。――そのひややかな顔をみて、ぼくはぞっとして、「やめて下さい！　やめて下さい！　そんなことは！」と両うでをもみねじった。

「やめる必要はない」と老警官はつめたくこたえて、母に似たひとの美しい支那服に手をかけた。みるみる白くふとったはだかのからだが、蛇のようにくねりながら、地面のうえにころがされた。

「ああ、たまらない、ママ！　はやくあやまって下さい！」半狂乱になって、ぼくは全身で母の顔のうえに身をなげかけた。日がくらくなった。息がしずかに胸にかかって、うすぐらいひかりのなかに、もりあがったふたつの乳房が、廃屋の塵にうずもれてかがやく宝石のようだった。母の吐く息が急にあつくなったので、ぼくは足もとのほうをみた。

警官は、母の足もとに片ひざをついて、日本刀をとりなおし、かかとにあてがい、ちょうど松茸の柄でもそぐように、ふくらはぎの方向へ、ユックリとひき切ってくるのだった。まあ、なんという足の白さだったろう、ゆたかなあぶらがひかって、まるで象牙のようになめらかだ。それがときどき、ピクリ、ピクリとけいれんとどうじに、

じぶんの足からも、いなずまのようにおくられてくる激痛をかんじた。その皮膚のきられるいたみを、その肉のきられるいたみを、その腱のきられるいたみを、その骨のきられるいたみを！

老警官は、まるで木こりのようにユックリと刃をひいている。ああ、いまに断截面が——まっかな血のりでベトベトした松茸の柄がそこになげすてられるだろう。……ぼくは苦痛に身をもみねじりながら、ケダモノみたいな眼でまわりの群衆をにらみつけ、

「みなゆけ！　あっちへゆけ！……はやくあっちへいってくれ！」

と、悲鳴のように叫んだ。……

「これは」

チュウのコップをおいて、歓喜先生はおもわず頬づえをつく。この少年の凄艶な夢はなにを意味するのか？

「フロイドは」

と、いいかけて、ぽかんと宙をみた。しばらくして、コップをぐっとひとくちあおって、

「なんとでも理窟をつけるが」

——眼がさめた。外はしずかに暗い夏の午後の雨だった。

この夢は、何を意味するのか、ぼくにもわからない。美しい母の身のまわりを、モヤモヤと

とりまいている恐ろしいものへの不安が、そんな夢をみさせたのだろうか。そのモヤモヤした恐ろしいものとはなにか、それもハッキリぼくにはいえないのだ。社会的道徳の眼、行ったことがないからいっそう想像で呪いにみちたものとなる女奴隷たちの眼。——（ただひとり知っているヒトミという女の眼は、しかし、そういう名がつけられたわけがわかるほどきれいな眼なのだが）——それらの幻影だろうか。

いや、それらの幻影は、夢でなくっても、まひるのぼくをうなすのだ。だから、そのとき母を非難したときのぼくの眼は、じぶんでも、ほとんど祈るような眼だったと思う。

そのとき、母は怒ったか？　それとも泣いたか、笑ったか？——いや、母は平然としていた。その平然さは、むりにそれをよそおっているのではなく、文字どおりの平静さだった。というより、ふだんじぶんが信じている思想を、なんのわだかまりもなくスラスラと吐く——妙なたとえだがあの修道尼のように——むしろ厳粛にさえみえる美しい顔でこうこたえたのだ。

「五尺の身体を売って、一切衆生の煩悩を安んず。……いつどこでおぼえたことばかしら？」

「え？」

「ママのお経よ。……でもね、三樹ちゃん、これはママの身勝手な、つごうのいいお経じゃあないわ。……むずかしい理窟はママにはいえないよ。だけどママはね、ぜッたいわるいことしてるとは思わない。船は石炭や羅針盤だけじゃうごきゃしないんだよ。船乗りは、港みなとに女がいなくっちゃ、きちがいになるか半病人になっちまう。世のなかには、地べたの船乗りみたいな男がたんといるのさ。ママの商売は、そういうひとたちのためのたのしい港なのさ。そ

して女たちは、あんなはたらき場所がなくっちゃ、飢え死するか泥棒するか、――そんな運命に生まれついた女たちを、口さき筆さきだけでなくママのようにめんどうみてやる人が世のなかにあるものかね？　それを禁じようとする人間のほうが、マヤカシ野郎か、それとも人間じゃない人間さ。ママは政府なんかこわかない。お説教好きのおいぼれ学者や、お節介な鼻めがねの女史なんかへいちゃらだ。なにきめたって、いちどはそのむりがとおったって、人間の道理はきっとまたもとにもどるさ。神さまにちかって――いえ、そんなマヤカシ野郎たちが、あんまりてがるに神さまをふりまわすから、ママは、人間にちかっていおう。ママは、人間教の信者さ。ママは、人間教にちかって、神聖なしごとしてると思ってる！」

　母は、妙にあたまがいいと思われるときもあるけれど、論理的な能力はまったくゼロだ。……そのとき、母のいった理窟は、いまでもぼくをなっとくさせない。

　なっとくはできないが、ぼくは母を信じた。信じさせるのは論理じゃない。詩だ。母はおなじことをくりかえした。まるで詩のリフレインを口ずさんでいるように――その母の顔に苦しみや焦燥のかげは毛ほどもみえず、ただうたっているひとのような法悦感があった。それはたしかに母の宗教だった。

　このとき以来、ぼくはこの母を批判しない決心をしたのである。母の信仰を、たとえそれがどんな魔教であろうと、それをみとめてやることにしたのである。幾億の人に幾億の母あれどわが母にまさる母あらめやも！　ぼくはこのただひとりの母に殉じよう。世のひとびとよ、この母に石を投げうて。ぼくは、この不知火のように美しく不可思議なる母、善意の女神を、死

を以てかばうだろう。……

「熱い」

　荊木歓喜は、あわてて足をストーブからひっこめた。靴下の妙な匂いがきえて、いつしか焦げくさい匂いをはなっていたのである。

　パラパラと巻末をめくり、

「ふむ、去年の秋につくった本か」

　すッぱいような顔をあげて、

「いまの中学生は、いや高校生は、みんなこんなことかくのかな」

　圭子はくびをかしげて、ひとすじはずれた返事をした。

「まだあるの、その青春混沌って雑誌、五冊か六冊。あわててきたからその一冊だけひきぬいてきたけれど、ほかにもおばさまのことかいたのあるわ。ほかのほうがよかったかしら？……でも、どれもそんな……おばさまを愛し、かばってる、涙のでるような文章よ」

「ね、先生、こんな坊っちゃんがママさん殺すなんて、ごじょうだんでしょ？　その本、はやく警察の旦那にみせてたすけてあげてちょうだいよ。坊っちゃんたら、気がやさしくって、神経質だから……あとで熱だすわ」

「いや。……この本は、警察にゃみせんほうがよかろう」

「どうして？」

「それか。……あんたたちには、この文章が、マダムに対する愛情の詩(うた)とだけみえるか。……」

なかば、ひとりごとのようなつぶやきだった。

「わしには……虚勢、いなおり、恐れ……悲鳴ともみえるが。……」

「え、どうして、先生、どうして？」

「あんたたち――といっても、ヒトミにきくのも妙だが、マダムの商売、どう思う？」

「どう思うって。……あたい、こまるわ」

「お嬢さんは？」

「あたし……あたしはこわい」

「こわい？」

「あたしね、はじめおばさまの御商売がよくわからなかったの。お母さまにきいても、恥ずかしい商売だ、そんなことをきくもんじゃないっていってしかられただけですもの。……だけど、おばさまをみて、なんてすばらしい方だろうと思ったわ。そしてふしぎだった、そんな恥ずかしい商売なすってて、どうしてあんなチャーミングなかたになれたのだろう……って。でも、こんどのことで、死ぬほどこわくなっちゃった」

「あゝ、こわいとはその意味ですか。そりゃあ……結構なことでありました。ところで、ふたりとも、そのマダムを殺した奴、だれだろうと思います？」

「そんなこと、わかるもんですか！」

と、ヒトミがさけんだ。

「坊っちゃんのゆくまえに、へんな男たちがウヨウヨいったというじゃないの。警察には、そいつらがまだわかんないの？」

「わからん。そうだ、鮎子が妙なことをいっておった。黒マスクの男、どっかでみたことがあるような気がするが、思い出せないと。……ほかの女にもきいてみたが、なにしろあのうす暗い照明で、黒眼鏡に黒マスクだ、まったくわからないという。ヒトミさんは知らんかね？」

「ところがね、先生、あたいそんな黒マスクなんてみたことがないんだよ、いちどだって。……あたい、よくお店をやすむから、その留守にきた男なんじゃないかしら？」

「ほう、おまえさんは知らないのか。それは残念。……」

「黒マスクばかりじゃない。黒マスクのくるまえにきっとやってきたという白マスクもみたことがないわ。ただ、なんかのついでに、ちらっとそんな話きいただけ。……とにかく、坊っちゃんがママさん殺したんじゃないってことだけはたしかだわ！」

「なぜ？」

「だって、そんなばかなこと……あたい、信じられない」

「坊っちゃんは信じるのじゃね？」

「信じます！」

ふたりの娘は、両腕をねじり合わせ、どうじにさけんだ。四つの眼に、透明な炎がもえたようにみえた。

「なるほど。しかし相手は警察じゃ、あんたたちが信じるだけでは、うんとはいうまいよ。……そもそも坊っちゃんは、なぜ昨晩マダムをたずねたのかな？」

「え、それは昨晩——九時すぎだったかしら？　だれか坊っちゃんに電話かけてきたからだと思うわ」

「なに、電話？……はてな、親父のほうも電話でよび出されたといっとったが」

「え、どっちもはじめあたいが出たから知ってます。三樹君はいるか、いるならちょっと電話に——と、しゃがれた声でいいました。坊っちゃんがへんな顔して電話にでると、それからすぐに家をとび出していっちまったの。だから、あたい、どんな用だったのか知らないんだけどね！」

「ヒトミさん、その電話の声は、親父にかけてきた声とおなじものだったろうね？」

ヒトミは首をふった。

「それがねえ、先生、どっちもあたいの知らない声だ。……とくに、まえにパパさんにかけてきた声は、風呂のなかでものをいってるような、そりゃあ気味のわるいへんな声。だけど、坊っちゃんにきたのは、これはたしかに男の声で、どうもちがう相手みたいに思うのよ。……」

「ふうむ。ちがう相手か。そりゃ……いっそうこまったのう」

「なんだか、咳してたようだわ。でも、あたい、よくわからない。なにしろ、電話の声だから」

「ヒトミさん。わしゃ、……さっぱりわけがわからんのじゃが、なかんずくわからんのは、あ

の殺しの動機なんじゃ。あのむごたらしさからして、怨恨、うらみとしか考えられんが、あのよう出来たマダムに、だれがどんなうらみを抱いておったのか。……あんたは廓でも本宅でも、マダムにとくべつに可愛がられて、ま、女太閤のお小姓役じゃったのだが……なんか、マダムに秘密——いや、マダムをにくんでいる奴、殺しそうな奴は知らんとのことじゃが、それじゃ、マダムがとくに愛しとった人間、またはマダムをとくに愛しとった人間は知らんだろうか？」

ヒトミはまた首をかしげた。荊木歓喜はその顔をみつつ、むろん例によって、「あたい、知らないわ」という返事しか期待していなかった。

「むろん、車戸の大将とか、坊っちゃんをのぞいて、じゃね」

ところが、このとき、歓喜は、ヒトミの顔に、突然、思いがけぬふしぎな動揺がはしったのをみたのである。それは歓喜の裏返しの問いに虚をつかれたというより、彼女じしんが、そのときはじめて心のなかからぬっとつき出された或るものをじっと見つめて、衝撃的な恐怖にうたれたといったふうだった。

「ど、ど、どうした、ヒトミさん？」

思わず、はっと眼をみひらいて身をのり出す歓喜を、この可憐な遊女は、一瞬に——まるでいやな客に抱かれるときのように、ひどくつめたい、こわばった、職業的な表情にかわって、ふるえる声でいった。

「あたい……そんなひと、だあれも知らないわ。……」

荊木歓喜は、ぶらりと警察の取調室に入っていった。
「君の態度はなんだ」
どんとテーブルをたたく音がきこえた。係官たちは、くいいるような眼で証人をにらみつけていた。
証人は、少年である。高校生の制服をきた車戸三樹だった。――しかし彼は、虐殺された母の子である。犠牲者と同様に犠牲者のはずだった。深甚なる同情にあたいしこそすれ、この緊迫した雰囲気は妙である。
――しかし、少年の姿勢も、この場合想像され得るものとはたしかにかわっていた。彼は、刑事たちの苛烈な眼を、みえない鉄甲で身を鎧ってはねかえすように直立している。ぜんぜん母親似とわかる、少女みたいにほっそりと蒼い肌をした美少年だった。眼は刑事たちの頭上をこえて、窓の外の夕空をみていた。西空の雲のきれめが、魚のはらわたみたいに赤くひかって、少年の眼に、なにやら狂人めいた妖しい火を点じていた。
「それじゃ、どういえばいいんです？」
と、彼は小さく、ひとりごとのようにいった。
歓喜は傍の刑事にそっときいた。
「いったい、なんというとるんです？」
「あの晩、知らない男から電話をかけられた。母が、父と大喧嘩をはじめて殺されてしまった。はやくかけつけろって電話だったそうで。……」

「うむ、猪之吉にね。……」
「そのすこしまえに、父親が血相かえてとび出したのを知ってるし、それであわてて恋ぐるまにかけつけると、例の大惨劇。……腰がぬけて、半分気絶したようになって、しばらくそこに坐っとったというんです。それからやっとわれにかえって、その父親をさがしもとめてとび出したというので、だまっていたのは、動顛したのと、さわぎになるまえになんとか父をつかまえて事情をただしたいと思ったからだという」
「いちおう、納得がゆくようじゃあないですか」
「そうでしょうか。ちっと解しかねるふしもあるが。あとで、父と自分のあいだに、何人かの訪問者のあることは知ったが、そのだれも思いあたらない。久世氏のことなども知らないという。……それはまあそれとしてですね、どうもこの子の態度がわるい。妙に反抗的でね。こっちの問いに、むやみやたらに黙秘権云々をもち出す。だれもこの子が犯人だなどいってやしないんだから、なんのために黙秘権が必要なんです？　こっちは母の仇をうってやろうとしているのじゃないか。だから、つい。……」
「はゝは、そりゃ考えてやる必要がある、母親を殺された子供の心情をね。……すっかり逆上しているところへ、ガミガミと取調べをうけたので、こんちくしょう、とすねてしまったのかもしれん」
歓喜はしずかにあゆみよって、少年の肩に手をおいた。
「おまえさん」

三樹は、ビクンとその肩をつきあげてふりむいた。
「わしは、お母さんをよう知っとった。亡くなられたからお世辞をいうわけじゃないが、あれは実に世にもめずらしい、よう出来た御婦人じゃった。……まして、あんたは、あのひとのひとり息子だ。子供にとって、母親は、よく出来るもよく出来んも、この世でたったひとりのお母さまです。あかん坊にかえって、泣いたって誰もちっとも笑わんぞ」
三樹は泣かなかった。胸と肩が、はげしく起伏しただけだった。
「表で、おともだちの圭子さんが心配して待っておられる……」
彼のながいまつげから、涙があふれはじめた。それをあわててかきけすように、まるでマラリヤ患者みたいにふるえる指で、三樹は頰をぬぐって歓喜先生を見あげた。
「いいえ、母は、母であるよりまえに、人間です。人間でなければなりません。……」
「むろん、そうじゃ。同様に、あんたも、はだかの、すなおな人間にもどってよろしい」
「人間が、人間を売買する職業に甘んじていいでしょうか？」
「なに？　おまえさんは、なにをいいだすのだ？」
「母は……母は……あの恐ろしい罰をうけてもしかたのないことをやっていました！　その母の子のぼくも、この恐ろしい罰をうけてもしかたがないんです。ママといっしょに！　ママといっしょに！　ママ、ママ、ママ。……」
「泣け、泣け、泣くがいい。……しかし、三樹君。……ちょっと待て、あんたのうけてもしかたのない恐ろしい罰とはなんだ？」

三樹はちらっとひかる眼で歓喜をみた。
「ママの死んだこと！」
あとは、少年の慟哭（どうこく）と、刑事たちの沈黙だけであった。いかにも人の子にとって、それにまさる罰があろうか？
慟哭と沈黙のなかに、歓喜先生は、しかし気ぬけのしたように椅子に腰をおろしながらつぶやいた。
「それだけか？」

第七章　そこからはじまる

元医師、伴泰策氏。

四十になるやならずの年というのに、彼の髪はすでに霜をおいていた。やせて、顔いろもわるく、左の眼じりに大きなしみがあり、あごにぼやぼやとぶしょう髯がはえているのも、いかにも病身らしい。病身というより、そのひかりのない、うすい瞳のいろをみていると、生命力のまったくない廃人のようだった。そして彼は、警察官にかこまれて、犯罪者そのもののようにふるえていた。

「わたしは、いまはもうモルヒネはやめております」

と、突然しゃっくりのようにいった。

「さすがのわたしも、もう懲り懲りしました。モヒこそわたしの生涯を葬った悪魔でしたが……それは自業自得で、わたしはもうじぶんの人生はあきらめていますけれど、しかし、娘の人生はこれからはじまるのです。娘を、親らしくめんどうみてやれないまでも、せめて苦しめたくはないと……モヒはやめました。どうぞそれは信じて下さい。……」

「いや、伴さん、あなたにおいでねがったのは、そういうことではなく、昨夜殺された車戸旗江のことについてですがね、車戸のマダムとよくお知り合いらしいが。……」

伴氏は、びくっと肩をふるわせた。

「はあ、知り合いといえば知り合いですが、むかしはしらず、最近はわたしよりむしろ妻のほうの知り合いでございまして。……」

「しかし、あなたは昨夜本郷の車戸家へおゆきになったそうじゃありませんか」

「はあ、実はちょっと所用があって訪ねたんですが……待っているうち、はからずも兇変を知りまして、めんくらってかえったような次第で……」

「失礼ですが、所用とおっしゃると？」

刑事のうたがい、またのぞんでいることは、伴氏が昨夜「恋ぐるま」をおとずれた七人の客のうちのひとりだということだった。つまり、それはまだ正体のわからないあの黒マスクか白マスクではないかということである。もうひとり、ふとっちょの紳士がいるが、この伴氏は、みるとおりの痩身だから、あきらかに別人だ。——しかし、車戸家にいって調べたかぎりでは、いまそこの女中、婆やの証言にてらして、残念ながら、伴氏がその時刻車戸家にいたことは、いまのところまちがいないらしく思われる。とはいえ、この人物もたしかになにやら胡乱くさかった。

そして、そのとおり、伴氏は言葉をにごした。

「いや、それは、あのひとと一夜懐旧談をやろうと思って訪ねたのです。と申しますのは、あ

のひととわたしは、同郷の幼なじみでございまして、……」

刑事たちが、顔見合わせて、にやりと笑った。それはその言葉をてんで信用していない、うすきみのわるい冷笑だった。

「ははあ、懐旧談ね」

そして、つぎになにかひと太刀あびせようとし、その気配に伴氏の顔が寒風にふかれたようにささくれ立ったとき、荊木歓喜がしずかにうなずいていった。

「伴さん、その懐旧談というやつを、わたしどもにきかせて下さらんか？……実は、わたしどもは、あのマダムという人について、なんでも知りたいのです。……ちょっと承ったところでは、どうやらあなたとあのマダムに、むかし色っぽいなにやらがあったようじゃが。……」

伴氏はほっとしたようだった。にやりと笑った。

「色っぽい？……へ、へ、へ、なあに一篇の少女恋愛小説みたいなものですが」

――もう二十何年かまえのことになります。

そのころ、わたしは山形県M郡N町の中学生でありました。ただし、わたしはN町の生まれではありません。そこから七里も山の奥に入った百姓の……いや、わたしの父はもともと村長までやった人間でしたが、その父も母もわたしの幼いころに亡くなって、わたしは百姓をやっている伯父の家に食客として育てられたものです。その伯父は、まあその村ではいわゆる旦那衆と呼ばれているひとりではありましたけれど、なんといっても山のなかの村のことですし、

それになにしろ子供が十人ちかくあることではあり、家のなかは正直なところ貧乏百姓同然で、とうていわたしを上級学校へやってくれるなどということは思いもよりません。

そのわたしが、ともかく町の中学へゆけたのは、第一にわたしの成績がたいへんよかったこと、なんでも村の小学校創立以来のものだったそうで――いえ、どうぞ笑わないで下さい。――第二には、それを惜しんでいろいろ奔走してくれた校長先生のおかげです。この校長は、たまたまN町の中学の校長の弟でありました。そこで、わたしは中学の校長の家の食客となり、また学資は小学校の校長にたすけてもらって、やっと中学へあがることができたようなわけです。

そしてわたしは、中学でも、やはり創立以来の秀才ということでありました。ほんとにどうぞ笑わないで下さい。……いまからおもうと、わたしの最も幸福な時代は、この鉛筆一本ノート一冊買うにもかんがえこんだ貧しい中学生のころにあったのです。町のひとびとは、神童として微笑の顔をむけ……そして女学生たちは、讃嘆の眼をわたしにそそぎました。

といっても、なにしろむかしのことで、とくに口うるさい田舎町のことですから、ただそれだけの話ですが、そのなかで、ひとり、わたしがめんくらうほど積極的にちかづいてきた女学生がありました。それが車戸のマダム……旗江なのです。

旗江は、町の芸者屋の娘でした。そして、はなやかな美貌ととっぴな行状で、町で評判の娘でした。

むろんそのころは、いまのような男女共学ではありません。……その旗江が、どうしてわた

しにちかづくきっかけをもったかというと、彼女の親友が、わたしの食客をしている中学校長の娘で、すなわちわたしの妻真弓（まゆみ）だったからであります。

旗江は、そのころから田舎の女学生らしくない。まるで水で洗われたあざやかな大輪のダリアのような美少女でした。そのくせ、成績がたいへんにわるい。……成績がわるいのを先生に叱られたら、いきなりとびついて、その先生に接吻して口を封じてしまったという。これはうわさですから、ほんとかうそかしりませんが、とにかくそんなうわさのたつくらい、天衣無縫の少女でした。おまけに芸者屋の娘です。

これにくらべて、校長の家は、おさだまりの謹厳さで、そのうえ夫人は熱烈なクリスチャンです。そして真弓もやはりクリスチャンで、これはクラスきっての優等生でありました。そのふたりが、どうしてなかよくなったのか？

それは、どちらも仲間にとって、或る意味で女王的な存在だったからだと思います。いってみれば、真弓は女学生たちにとって一種霊的な聖女であり、旗江は俗界的のクイーンであったのです。あだ名をつける名手、流行の伝導者。――成績がわるいといったって、旗江のあたまは決してわるくはない。ただ勉強しないだけで……というより、じぶんの好きなことだけやって、あとは、恬然（てんぜん）としているたちのせいだし、一方の真弓は、これまた修道尼のように清潔な美貌のもちぬしです。ふたりがおたがいを充分みとめ合ったのは、当然といわなくてはなりません。

しかも、それが決して成熟した女同士のように、おくそこに屈折した嫉妬とか虚栄心とかを

ひそめたものではなく……いや、そういう微妙な点はわたしなどにはよくわからないのですが……とにかく、わたしのみたところでは、ふたりは、なんといっても純真な女学生らしく、若々しい愛情と讃美の念をおたがいにいだきあっていたようです。そしてその友情は、ながい音信不通の歳月ののち、最近ふたたびめぐりあったいまでも、かたちこそかわれ、やはり復活継続していたと思います。

……むろん、ふたりの交際は、真弓の父母のあまり歓迎しないことでした。それを超えて、旗江がこちらの家庭に遠慮なく入りこんできたのは、真弓に対する両親の信頼――というより、真弓の友情の純粋さに傷をつけることがためらわれたのと、それから、つきあってみれば、旗江のそこぬけの善良さには、どんなひとも好意をかんじずにはいられないものだったからでしょう。実際、あの気むずかしい校長が、まぶしいくらいの楽天的な彼女の顔をみると、つい笑顔でむかえるようになったのでした。

善良さ――といっていいか、どうか。彼女のいたずらは、そうとうなものでありました。たとえば、そのころ女学校に東京から赴任してきた英語の女教師がありました。これがなかなかおしゃれで、美人を鼻にかけているというのです。この先生の誕生日に、旗江がクラスの音頭をとって洋服の生地をおくりました。さて、それを最近流行の型にしたてて、その先生が或る日町いちばんの洋装店にいってみたら、そこのショウ・ウィンドウのなかで、電気じかけの猿が、それとおんなじ洋服をきて、歯をみがいていたというのですね。……

それからまたたとえば、いまでも忘れられない話で、こんな事件があります。……どうもこ

このところ、すっかり頭がよわっておりまして、まとまりのある思い出が浮かんできません。旗江がどんな娘であったか、もっと面白い話がいくつかあったと思いますが、うまく思い出せないので、話がつまらない枝路に入るようですが、どうぞゆるして下さい。わたしのとりとめのない話を、そちらでうまく按配して、なにかの参考にして下さい。……さて、その事件というやつですが、或る日の夕方、わたしは町の珈琲店のまえをとおりかかりました。すると、その二階の窓から、小さな声で、「泰策さん、泰策さん」とよぶものがあるのです。みあげると、それが旗江で、はやく、はやく、と手でさしまねきます。

わたしがあがってゆくと、彼女は窓ぎわのテーブルに坐っていて、ニコニコ笑いました。テーブルのうえには、キャラメルがのっていました。

「いま、おもしろいものをみせてあげるから」

「なんだい？」

「あなた、女学校の作法の稲田先生って知ってる？」

「あゝ、知ってる。ちょっと、おッかない先生だろ？」

「おッかないどころじゃないわよ。女閻魔よ」

それは、女学校の寄宿舎の舎監もかねているオールド・ミスで、真弓の母とおなじように熱烈なクリスチャンで、ときどき校長の家へ訪ねてきました。顔はなるほど閻魔さまのようでしたが、真弓の尊敬ぶりはたいへんなものでありました。

「きょう、学校でカンニングしてしかられちゃった。試験の監督にきてたのよ。お説教、タップリ、三時間。あたしは詐欺者として、死んでから盗人なんかといっしょに、マアレボルゼって地獄におちて、鬼にスープ鍋にほうりこまれるんだってサ」

そして、窓から往来をみて、「あ、きた！」とさけびました。女学校のある方角から、鞄をぶらさげてやってくるのは、うわさのぬしの稲田先生です。

「稲田先生、いつもかえるとき、ここにきて、たいていこの窓ぎわで珈琲のんでゆくの。あなた、ここへ坐ってて、あたしが合図したらすぐあたしのところへきてちょうだい」

「ど、どうするんだ？」

「あたし、あの衝立のむこうの席にいるから」

彼女はとびたちました。あとに、花瓶と灰皿のかげに、キャラメルがのこっています。まだ封もきってない新しい箱でした。

「あ、これは？」

「いいの、そのままにしといて！」

数分後、旗江が衝立のかげから顔を出して合図しました。わたしがそのテーブルをはなれるとどうじに、階段からひょッこり女閻魔さまの顔があらわれました。そして、あんのじょう、その窓ぎわの席にあるいてくるのです。

先生は珈琲を注文して窓の外をながめようとし、ふと花瓶のかげのキャラメルに視線がとまりました。が、さすがに知らない顔をして、はこばれた珈琲をすすりはじめました。

わたしたちは、衝立のかげから、じっとそれを見ていました。突然、先生があたりをみまわ

しました。が、ちかくの客はだれも先生のほうをみていませんし、また遠いわたしたちのほうは、先生が気がつきません。――と、先生は、珈琲をのみながら、片手をのばして、指で、チョイ、チョイ、とその箱をつッつき出したのです。いうまでもなく、なかみの重みをしらべているのです。みているわたしたちのほうが、息もつまるようでした。

先生は珈琲をのみおわると、鞄（かばん）からなにか書類を出して、五分間くらいそれをみていました。が、急にその書類をしまうと、さっと椅子からたちあがり、階段のほうへあるいてゆきました。――そして、あとに、キャラメルの箱の影もなかったのです。

「おきのどくに、先生もあたしとおなじ、鬼のスープにおなりになるわ」

と、旗江は美しく上気した顔で、ニンマリと笑いました。

「おどろいたね」

「先生、かえったら、もっとおどろくわ」

「どうして？」

「あのキャラメルは、封をきらないように輪のままそっとぬきとって、またはめたものなの。なかみは紙につつんだ砂よ」

わたしはあきれてしまいました。――旗江のいたずらとは、かくのごとく人をくったものでありました。

その旗江が、貧しいわたしに興味をもったのは、おそらくわたしが開校以来の秀才だという評判によるものでありましょう。それが彼女の性格にてらして、どれだけまじめなものであっ

たかは疑問でありますが。……わたしはしかし、このいたずらものの美少女をまぶしいくらいにかんじつつ、またその無鉄砲さと淫奔（いんぽん）さが、おそろしくもありました。淫奔さ。……などいうと大袈裟（おおげさ）ですが、実際彼女は、わたしに女学生にあるまじきだいたんな誘惑をこころみたことがあるのです。

たしか、卒業のまえのさいごの年の早春でありました。北国に住むものにとって、春のきたほどうれしいものはありません。わたしたち三人は、ちかくの山へハイキングを計画しました。三人とはわたしと旗江と真弓です。

もっとも、そのころは中学生と女学生がいっしょにハイキングするなどということは、学校はむろん、町の人々に知られてもたいへんなことになる時代でありましたから、ハイキングといってもひと苦労が要るのです。それは旗江のおもいつきでしたが、まず町の自転車屋から貸自転車をかりて、真弓と旗江が出かけます。わたしはべつの貸自転車屋から出発して、町をずっとはなれたところでいっしょになるのです。

町はずれをながれる河の堤防には、野火がもえておりました。あかるい日ざしのなかに火の色は美しくチロチロうごき、南風が焦げくさい枯草の匂いを、自転車を駆（か）る三人のひたいに吹きつけます。……三人は、町から三里も五里もはなれた山のなかへ入ってゆきました。

ふもとの森かげに自転車をかくして、山路をのぼる。――笑いながら、唄をうたいながら。

……どうもあのときの三人の少年少女が、このわたしであり、妻であり、死んだマダムだとは、まことに世はゆめまぼろしのごとくであります。……わたしはいま、娘の圭子の姿をみると、

ときに涙がにじみでてしかたのないことがあるのです。いいえ、不甲斐ない父をもって可哀そうなどという個人的な感情ばかりではありません。もっと痛切な、えぐり出されるような、惨澹たる人生の哀感にうたれるからなのです。……それでも、あのときは、たしかに空は碧かった。遠い山脈に残雪がひかっていた。べんとうをたべたころ、雨がパラパラと松林をわたって、すぐ霽れた雲のあいだから黄金いろの日光がおちて、あたりの熊笹が美しくきらめきました。……

真弓と旗江は、性格ははんたいなのに、よく意見が一致するのがふしぎでした。そのときもふたりは、こんなことを熱心にいうのです。

「あたしは、花を愛するひと、おしみなく涙のながせるひと、乞食をみたらお金をやらずにはいられないひとが好きだ。……」

「それじゃ、ぼくはきみたちに好かれる資格がない」

わたしは、ふたりのセンチメンタリズムを笑いました。ほんとのところ、わたしは花なんかに興味はないし、涙などながしたくはないし、乞食をみたってそれほどきのどくにも考えなかったからです。

「可哀そうなひと」

と、旗江は笑いました。

「あたしは、そんな可哀そうなひとを愛し、涙をながしてやり、お嫁にいってやらずにはいられない人間なのよ」

この娘は、こんなやりとりなら間髪をいれぬ才女となります。わたしは狼狽しました。すると旗江は、いたずらっぽい眼でチラチラ真弓をながめつつ、

「でも、あたしが泰策さんのお嫁さんになると、真弓さんが泣くわね」

「ばかなことをいうな」

わたしは思わずむきになってしまいました。

「なぜ真弓さんが泣くんだ?……ぼくみたいな貧乏人の子を、だいいち校長先生が承知するもんか」

「既成事実つくっちゃえばいいのよ」

と、旗江は大胆不敵なことをいうのです。ところがそのころまだわたしは、たいへんおくてのほうで、その意味さえわかりません。旗江はニヤニヤ笑って、

「キスしなさいよ、ここで」

と、平然としていってのけました。

「あたし、お仲人役になって、ここでみてたげるから」

真弓がまっかになって、突然たちあがり、水筒をさげて、バタバタと山の下にかけおりてゆきました。泉をくみにいったのです。……あとには傍若無人な旗江のあかるい笑い声があがりました。

「やっぱり、あのひと、泰策さんにほれてるわ」

そして、ケロリとして、スカートのどこからか、魔術のようにチェリーをとり出して火をつ

けました。

「のまない？」

「いや」

「聖女さまにみつかったら、たいへん、いまのうちよ」

そして、タバコをくわえたまま、わたしの足もとにあおむけにねころんで、白い船のような雲をみつめながら、

「泰策さん、相手は聖女さまなのよ。あんたが積極的に出なきゃしようがないじゃあないの」

「なにをいってるんだ」

「あんた、キスしたことないでしょ？」

彼女はクスクス笑いました。わたしは笑うどころではありません。だんだん蒼くなって、息もつまるようなのです。

「あたしが教えてあげようか。……」

腰をおろしたわたしの足のすぐまえに、旗江の顔がありました。そして、むろん紅もつけないのに、まるで露にうるおった薔薇の花のような唇が、やわらかな曲線をえがいて、ニンマリ笑っているのです。それからそのむこうに、制服の胸もはちきれそうに息づいているふたつの隆起が。……

「してよ、ここ。……きもちがよくってよ」

まんなかがかすかにくぼんだその唇をみつめ、眼がクラクラとくらみそうになりながら、わ

たしのくびの骨は、恐怖のために硬直したっきりでした。はんたいに、心は酔っぱらいました。——その一瞬、草のうえにたてていた旗江のかたひじが、しずかにたおれたのです。白いゆびが、はさんでいたタバコを、音もなくねじ消しました。空にかすかにけむりがただよっています。

「あなたの未来のハズを盗むところだったわよ」

と、旗江はけだるい笑顔でつぶやきました。気がつくと、草のむこうに、いつのまにか、水筒をぶらさげた真弓がじっとたっているのです。

すると、真弓はほのかに笑ってくびをふりました。

「泰策さんは、あなたには盗まれないわ」

盗まれない？　あなたには盗まれない？　それはどういう意味だろう？　わたしはドギマギしてしまいました。旗江は半身をおこしました。

「なぜ？」

「だって、泰策さんは、あなたといっしょになっても、けっしてえらくなれないもの」

「なぜ？」

真弓は、天使のような無邪気さと自信と微笑にみちた顔でこたえたのです。

「だって、旗江さんは、勉強がきらい。——ひとにも勉強をさせませんもの」

「まけたあ！」

旗江はひっくりかえって、あけっぱなしの大口で笑い出しました。それから、くるっと牝鹿

のようにはねおきると、

「真弓さん、お花摘みにゆきましょう！」

とよびかけて、ふたりでどんどんかけ出してゆきました。……

あとに、茫然と、わたしだけがとりのこされました。わたしはすっかり惑乱していました。さっきからの思いがけない出来事の連続に、あれよあれよと胆をうばわれたばかりでなく、いまわたしの生涯に重大な或る決定がおこなわれたことを、わたしはおぼろげに感得(かんとく)したのです。――それは、運命の神が、旗江をわたしからひきはなし、真弓をわたしにむすびつけたということでした。

運命の神？――いや、旗江をわたしからひきはなしたのは、わたし自身だったかもしれません。なぜなら、さっきの旗江のだいたんな誘惑にわたしがのらなかったのは、わたしの少年らしい恐れとまどいのせいばかりではなく、わたしの甚だ少年らしくない打算のこころが、漠然と危険を予告したからでもありました。これは危険な娘である。……

むろん、わたしはまだ中学生で、そのうえおくての人間でありましたから、はっきり結婚のことなどかんがえていたわけではありません。それにしても、女性の代表的なふたつのタイプとして、漠然たる男の眼で、旗江と真弓をながめていたことはたしかです。漠然と――しかも実利的な秀才らしく。

わたしは、医者になる気でいました。べつに医学にたいして興味も憧憬ももっているわけではなく、ただ医者のくらしに比較的な安全性をみとめただけのはなしです。おそらくそれは、

幼いころからの貧乏のせいと思いますが、それにしても、ともかくこれくらい現実的な秀才であるわたしがひそかにかんがえたことは、旗江という娘はおもしろい、これくらいゆかいな娘はまたとあるまい、しかし妻としては手のつけられない落第生で、きっと夫の仕事をめちゃめちゃにかきみだしてしまうにちがいない。それにくらべると真弓は、旗江ほど面白味はないにしても、まじめで、質実で、意志的で、かしこくって、かならず模範的な良妻賢母となるだろう、ということでした。

その真弓が、わたしをえらんだのです。いつのまにか、ひそかに、しっかりとわたしを夫としてきめていたのです。あの清純な、おとなしい娘から、そのときはじめて決然とした宣言をきいて、わたしはおどろくと同時に、運命だ、堅実で正調(ノルマール)で幸福な運命の神が、真弓の口をとおしてわたしに命じたのだ、と感動にうちふるえました。……

――とつおいつ、こんなことをかんがえこんでいるわたしの眼に、むこうの草にみえつかくれつ、花を摘んでいるふたりの娘がうつります。いとも自然に、重大な運命劇を演じてのけたふたりの少女は、もうそれをわすれはてたようすで、あかるく唄っているのです。

「……幼なじみの　あの山　この川
ああ　だれか故郷をおもわざる。……」

夕ちかい太陽はあかあかと照っていました。なんという樹か、黄色い枝葉を鳴りそよがせている雑木林の姿が、ぬれるような空の碧(みどり)にういて、しずかに明るく美しく、どこかでほがらかに鶯が鳴きました。

ああ、あれがほんとうにわたしの人生にあったことでしょうか。やっぱりあれは、ずっとのちに阿片のみせてくれた幻影のひとつではなかったでしょうか？

蒼じろい伴氏の頬は、いつしか葡萄酒に酔ったようになっていた。唄をうたうものは、たとえ挽歌にせよ、ひとつの自己陶酔におちいることはふせげないものらしい。

はじめオドオドと卑屈にさえみえたこの廃人的な人物が、いま、きみわるいほどウットリと、まだこの少女小説をめんめんと語りつづけようとするのを、係官のひとりが、手をあげて制した。

「ちょっと。……」

顔に、くっきりと、たいくつの色が浮かび出ていた。

「いや、なかなかおもしろい。それでは、なるほどマダムのところへ、懐旧談をやりにゆかれる資格はある」

と、荊木歓喜はそれをさえぎって、しかし、少々閉口したらしく、

「その用心ぶかい秀才のあなたがどうして麻薬中毒者になり、聖女の奥さんが精神病におなりになったのか？」

――それは、妻が聖女でありすぎたからです。

と、突然いってもおわかりにならないでしょうが、或はくわしく申しあげてもわたしたちの

おちいった奇怪な苦悶は御理解ねがえないかもしれません。

運命の神が命じたとおり、わたしは或る医学専門学校に入り、真弓と結婚し、卒業後五年にして博士となり、山形県のT市で開業し、圭子という可愛いこどももできました。まことに満帆に順風をはらんだすべり出しで、この世のすべてがわたしたちを祝福しているようにみえたものです。

もっとも、そこにいたるまでの生活は、たいへんな苦闘の連続でありました。というのは、むろんわたしに医学校へゆく金のあるわけもありませんから、そのなかばは県からあたえられる奨学金にたより、あとは――実は、わたしが医専に入ってまもなく、真弓の父である中学校長が脳溢血で亡くなりまして、あとは真弓が小学校の教員をして学資をつくってくれたのです。わたしも奮闘したが、妻の努力こそ容易ならぬものでありました。真弓が旗江に、「泰策さんはあなたといっしょになっても、けっしてえらくなれない」――すなわち、「あたしなら、きっとえらくしてみせる」と宣言したのは、決して乙女の夢ではなかったのです。

その旗江は、女学校をでると、しゃあしゃあとして、東京は吉原の某妓楼へお嫁にいってしまいました。嫁ぎさきの親と、芸者屋をしている実家の親とが、むかしからの知り合いだったそうで、おそらく東京と山形――女郎の需要先と供給元の関係ではなかったかと思いますが、それをきいたとき、わたしたちは唖然としながらも、真弓は旗江をあわれんで涙ぐみ、わたしは、はたせるかな、と可笑しくなりました。なるほど蟹は、甲羅に似た穴に入るものだ！

それっきり、旗江には、左様、去年の春まで逢ったこともありませんでした。去年の春まで

――その二十何年かのあいだに、わたしの運命は、思いがけない破綻をきたしてしまったのです。

なにもかもうまくゆき、医業繁昌のうちにわたしは壮年をむかえ――そのときに、突然、いわゆる「真昼の悪魔」というやつがわたしをおそったのでした。突然――突然ではありません、わたしはいつとなく、しだいにボンヤリした苦痛にしずみはじめていたのです。苦痛とは……、妻が、あまりにも、いい女房でありすぎたこと！

どなたも、わたしに同情なさいますまい。妻は決して皮肉屋に笑われるような良妻賢母型の女ではありませんでした。わたしの趣味道楽に――もっともわたしにはこれといった趣味も道楽もありませんでしたけれども、たとえあったとしても――それに束縛をくわえるようなばかな女、また、夫を成功させたじぶんの努力を恩にきせるような無神経な女ではなかったのです。ほんとうによくゆきとどき、疑いというものを知らないのではないかと思われるほどきよらかで――ああ、そのかしこさと清潔さ、要するにその完全さがわたしを苦しがらせたと申しましたら。……

かんがえてみれば、あの早春の山の上の、みじかい、淡いひとつの劇は、これをひきのばし、色彩をつければ、ひとかどの恋愛小説ともなるものでした。清純な娘が、妖精のような女の誘惑をはねのけて、みごとに恋人をつかんだのです。たいていの恋愛小説は、そこで、めでたし、めでたしの大団円になるのです。……しかし、人生は、ほんとうの人生は、そこからはじまるのです！

いつであったか、女の雑誌でこんな小説を読んだことがあります。なんでも、或るまちがいから、夫が妻をうたがい、なやみ、そのために妻が恐ろしく苦しむ。その葛藤が、小説のほとんどぜんぶで、最後にめでたく誤解がとけて、夫は妻のこころの美しさを知り、ふたりは涙とともに抱擁する。――といったようなお話でした。その小説はそこで終っていました。しかし……わたしの知りたいのは、そのあとにくる、夫の、吐け口のない空漠とした心理なのです。

わたしたちのあいだには、そんな劇的事件は起りませんでした。妻のこころの美しさは、はじめからわかっていました。中年になって、わたしの胸ににじみ出してきた恐ろしいたいくつ感は、灰いろの夜霧のように、いつともしれず、またそれゆえにふせぎようもないものであったのです。……劇的事件が起ったのは、そのあとのことでした。――しかし、それはあらゆる夫婦のあいだのいざこざのありふれた形態にすぎないでしょう。劇的事件がおこるのは、不幸の原因ではなく、結果でありましょう。――わたしはモルヒネを愛するようになり、またひとりの女を愛するようになったのです。

ふん、それは苦学力行して成功し、金がたまりはじめた中年男の、ありふれたケースじゃないか、といわれるかもしれません。そうかもしれない。実際わたしは苦学力行し、しかもその努力はただ貧乏からのがれたいというのぞみ以上にたいした目的はなく、これという風雅な道楽や趣味ももたず、なんの高邁な人生観もなかった人間のおちいるべき陥し穴におちたにすぎないかもしれません。……わたしのこころをしめつけてきたあの空漠たるたいくつ感は、もうすこし複雑で高尚なものではないかというぬぼれもありますけれど、とにかく結果はおさだ

まりの――おさだまり以上の、こっけいで悲惨なものでしたから、あえてもっともらしい弁解をする資格はありません。猿のなやみだって、猿が上手に告白できれば、深刻きわまるものにちがいないのです。……

破局は急速におとずれました。わたしの愛しはじめた女は、患家さきの、事故で死んだ鉄道職員の未亡人でしたが、これがたいへんな淫乱で、下劣な女でありました。はじめはその淫乱と下劣さをこそ愛したのでしたけれど、そのトメドのない欲望には、さすがのわたしも降参しました。いくら金をやっても、まんぞくするということがない。そのうえわたしの乱行のため、いつ患者がきても留守のことが多い。医業はしだいにさびれ、金はますます要り、わたしはとうとうなんどか健康保険の点数をごまかして、なんどかそれがばれて、はては健保指定医をとりけされました。

むかしとちがいまして、いま保険をとりあつかえぬ医者は、たちまち商売あがったりになります。金がいっそう不自由になったのは当然のことで、そこでついにその女とつかみあいの大ゲンカ、手ぎれの金を百万円よこせ、ばかをいうな、という騒動から、その女はとうとうわたしがモルヒネ中毒患者であることを当局に密告してしまいました。御存知のように、麻薬のとりあつかいは、医者といえども、終戦後きわめて厳重で、仕入れた麻薬と使用した患者の帳尻は、いつも正確にあわせておかなくてはなりません。それがいままでもひとかたならぬ苦労であったのが、とうていあわせきれない情況にたちいたっての密告だからひとたまりもない、わたしは、とうとう医師の開業免状もとりあげられてしまったのです。もうT市にもいられま

せん。といって、かえるべき故郷の家もありません。まったく無目的に東京へにげ出してきたのは、一昨年の暮であります。

これほどの転落は、じぶんのことながら、医者としてめずらしい。営々たる十幾年かの奮闘を、ほんの二三年のあいだに、いっきょに崩壊させてしまったのであります。くずれたのは、生活ばかりではない、家庭ばかりではない。いちばんひどい腐敗物となったのは、わたしのからだでありました。いや、わたしという人間でありました。それはモルヒネのおかげです。それでもまだわたしは、この麻薬の魔力からのがれられなかったのです。

モヒ。……はじめは、わたしの持病、肋間神経痛の疼痛をのぞくために使用したのでしたが、それが慣習となったのは、なんといってもその麻薬がすぐそばにある医者という職業がかえってたたったのであります。……あゝ、モルヒネ、モルヒネ。……あれは人間を生きながら昇天させる気球のようなものです。心臓、血液、内分泌器官……全身によみがえる爽快な生気、しかもうすあかりの世界をなかば醒めなかば眠っているような恍惚境。……いや、これはたいへんだ。とんでもないことだ。……そうです。わたしは、そのモルヒネをやめたのですから!

それをやめさせたのは、あの車戸のマダムの忠告と、妻の発狂が転機でありました。マダムとの交際が復活したのは、去年の春、山形県のほうからの連絡でとりしらべにやってきた麻薬取締官のなんとかいう役人からきいたといって、わざわざ目黒までたずねてきてくれたときからでした。

もっとも、彼女のうわさは、田舎でときどききいてはおりました。それは旗江のもとから定

期的に派遣される人買いの男が、近郷の村々をあるきまわっていたからであります。おもしろいことに、彼女の評判は、その村々でけっしてわるくはなかった。菜っぱまじりの青い飯をくっている子だくさんの水呑百姓の家から、娘たちをよんでくれるばかりではない。若い男たちも――仕事のない冬など、遊廓の掃除男や風呂焚(た)きや用心棒にやとってくれたからであります。わるい評判どころか、村によっては、彼女を女神のようにありがたがっているところさえあったということです。

実際、彼女は、わたしどもにとっても女神でありました。彼女は妻と抱きあって、泣きました。そしてわたしを悪魔だとののしりました。

その涙、その怒り、それはむかしの旗江の直情径行をちっとも失わないものでした。彼女は、その善意と、天衣無縫(むほう)と、若さをさえそっくり保っていたのです。

それにひきかえ、真弓のなんというみじめな変りようだったでしょう。いうまでもなく、最大の犠牲者は真弓でありました。彼女はこれっぽちの悪いこともしない。あの未亡人とのさわぎのときも、むろん冷静ではなかったが、みぐるしくとりみだしたふるまいをみせたことはない。むこうの要求する手切金をつくろうと、黙々と親戚のあいだを奔走し、けんめいに努力したのは、わたしよりも妻でありました。ただ、わたしのモヒをやめさせるためにはおとなしくはしていなかった。それは当然であります。当然ですが、それをやめさせられてはたまらない。この世になにが苦しいといって、麻薬中毒の禁断症状ほど苦しいものはない。それをあらそって、なぐり、けり、髪の毛をつかんでひきずりまわす。……地獄です、それはもう、おはなし

するだけで、いまでも身の毛がよだつような惨状で、そこは御想像にまかせます。

まったく、マダムに逢ったとき、妻がいったとおりでした。

「もし、イエスさまを信じていなかったら、あたしは、気がちがっていたでしょう」

そういった妻が、やがてほんとうに気がちがってしまった。妻を発狂させた原因は、いうまでもなくそれまでのわたしの折檻、虐待……長年の妻の苦悩のはてによるものでありましょう。

ただ、ふしぎなのは、わたしがマダムのきびしい忠告で、ようやく麻薬からのがれようと努力しはじめ、また生活のほうもいろいろとめんどうをみてもらって、家庭にかすかに曙光がきざしだしたころになって、気がへんになったことでありますが……しかし、これはふしぎなことでもないかもしれない。あらゆる病気が、そうしたものですから。

それは、二ヵ月ばかりまえのことでありました。突然、妻は壁にあたまをぶっつけて、自殺をこころみました。……そのまえに、どんな衝撃的な事件もありません。神にちかって――いや、これは娘の圭子にきいていただいてもわかることですが、わたしとのあいだに、べつになんの悶着もなかったのです。ただそのすこしまえから、鬱々(うつうつ)と部屋にとじこもってなにやらしずんでおりましたが、それはいままでだってしばしばあったことだし、わたしもそれほどふしんにも思わなかった。妻はときどき偏頭痛をうったえることもあったのです。

それが、自殺をこころみた。原因がわからないのと、その方法が壁にあたまをぶっつけるなど、ただごとでないのと、それ以来のようすがへんなので、まもなく東大の精神科につれていって診断を乞いました。その結果、妻は強度の躁鬱病(そううつびょう)――そのうちの重症メランコリーにか

かっていることがわかったのです。
そして、一ト月まえ、マダムのお世話で、妻を代々木の曾谷精神病院に入院させたのですが。

……

あゝ、世にこれほどあわれな妻がありましょうか。その罪は、わたし以外に帰すべきものはまったくありません。このショックで、ついにわたしからモルヒネの悪魔は完全におちました。犠牲は大きかったが、悪魔はついに去ったのです。二三日まえに見舞にいったようすでは、妻の恢復も遠くはないということで、いまはただ一日もはやくあれが退院してくれ、わたしの甦生ぶりをみせてやりたい念願でいっぱいであります。
ただ、もうひとりの大恩人、車戸のマダムが、あんな死をとげてしまった。原因はしらず、またその犯人へのにくしみ、故人への哀惜はさておいて、むくいるべき恩人についにむくいずして終ったことが、いまはなにより残念で、いよいよじぶんの罪ふかきを感ずるのみであります。……

「いやいや、お話だけなら、あなたはそうわるくはないて」
と、荊木歓喜が、しずかに笑った。
「どうも、夫の横暴をうったえる妻の告白より、妻の圧力をうったえる夫の告白のほうが、はるかに迫真力があるところが可笑しい」
しみじみとした眼で、伴氏をながめながら、

「ともかく、奥さんもマダムも、神さまのようによいひとで。……しかもその奥さんは気がちがい、マダムはむざんな最期をとげる。ふむ、善人ばかりでも、けっこう大悲劇のおこるところが人間の世界というものか」
「いや、善人ばかりかどうか、まだわからない」
と、係官のひとりが、やっとわれにかえったようにくびをふった。
「だいいち、えたいのしれんたいくつ感とやらでモヒ中になり、貞節な細君を苦しめ、気をちがわせた夫が善人なら、この世に悪人というものはおらんことになる」
「左様、この世に悪人というものはおらんのです。わしの所見によれば、そもそも……」
刑事は、歓喜先生の哲学をききながして、伴氏をねめまわし、
「あなた、マダムとの再会後、いやにきれいごとにお話しであったが、そう慈善美談、甦生美談ですみましたかね？」
「そ、それはどういう意味ですか？」
伴氏の顔に、不安のゆらめきが浮かびあがった。
「ほんとうに、奥さんの発狂に思いあたることがなかったか？……はっきりいえば、それほどむかしつやだねのあったマダムと再会されて、あなたとマダムのあいだに、やけぼッくいに火がついた、というようなことはなかったか？」
「あゝ、その意味ですか？」
伴氏は笑った。

「やけぼッくい、などおっしゃいましたが、べつにむかしだって火のもえたようなことはなにもなかったのです。旗江がわたしを誘惑したといっても、あれは彼女の天性のコケティッシュな気まぐれでしょう。そうは申しあげませんでしたか？　まして邂逅(かいこう)後のマダムが、わたしなど歯牙(しが)にもかけましょうか。真弓を苦しめた悪党として、にくみこそすれ——」

「さて、ね」

「だいいち、再会後のつきあいでも、妻のほうが、わたしの何十倍もしたしくしマダムと逢っているのです。それは娘にもきいていただいてよろしい。いやいや、それでも御信用にならんなら、曾谷病院にいって、妻にたずねてみて下さい。そんな質問にもたえられないほど、あれの頭が荒廃しているとは思えませんから」

そして伴氏は、このとき、なんともいえない笑いをかた頰にゆがめた。

「それにね、これは検査してもらってよろしいが、実は、わたし数年前から、あのほうの不能者となっているのです。モルヒネの罰で。……」

ことばよりも、その鬼気に係官たちはうちのめされた。ふとおちた沈黙のなかで、ようやく荊木歓喜がぽかんといい出した。

「その曾谷精神病院ですが、奥さんを入院させなすったのは、マダムの世話だ、とおっしゃったが。……」

「はあ。なんでもそこの看護人の鴉田(からすだ)とかいうひとがマダムの知りあいだったらしいのです。それに、入院費その他ことごとくマダムの好意に甘えたようなしだいでありまして。……実は、

その点でも、これからどうすればいいのか、まったく途方にくれております」

「なるほど。マダムが殺されて、心情のうえにおいても、物質面においても、あなたの痛恨はさこそと御同情にたえんが……それにしては、さっきからのあなたの御様子が、すこし御冷淡のようじゃが」

「え？」

伴氏はあっけにとられたように歓喜をみて、急に苦笑した。

「さっきのばかなおしゃべりがたたったのでしょうか。……しかし、あなたは懐旧談をかたれといわれた」

「いや、そんなことではない」

「それじゃ、ここで、泣きわめけ、とでもおっしゃるのですか？」

「はゝ、それより、昨夜のことだ。あなたは、マダムが殺されたという第一報を車戸家でお知りになって、なぜコソコソとおにげになった？」

「にげたわけではありません。……とんでもない、わたしは、きもを宙にとばして、恋ぐるまにかけつけていったのです。が、そのときはもうあの界隈にえくりかえるようなさわぎで、ちかよるどころではなかったのです」

「なるほど、ところで、さっき、マダムをたずねたのは、その懐旧談とやらをかたり合うためということでしたが、あなたがマダムのところへ薬をもらいにゆかれた、という情報がこっちに入っているんじゃが。……」

伴氏は、ぎょっとしたようだった。しばらくの沈黙ののち、やっとこたえた。

「ははあ、車戸家の女中からおききになりましたね。それはうっかりしていた。……実は、その薬というのは、お金のことです。さっき申しあげたように、わたしどもはマダムから生活費までもらっていたのです。まさか女中にそうともいえんから、とっさに薬といったかもしれません。なにしろ、もと医者でしたから。……」

「医者は薬をひとにやりつけているものです。もらうものに、とっさに薬とは、かえって出てはこまいと思うが」

歓喜がゆるゆるとあるき出して、伴氏の片腕をつかみ、あっというまに、その袖をぐいとおしあげた。

「ほんとうですか？」

伴氏ははじかれたようにとびのき、たちすくみ、歓喜はうす笑いした。

「その注射瘢痕（はんこん）はなんです？　ヴィタミン？　ホルモン？」

「――ヘロインです。……」

伴氏の声は、きしり出るようだった。がっくりうなだれようとして、必死に顔をふりあげて、

「きいて下さい。……しかし、わたしはだんだん減らしてきたのですよ。麻薬患者がいちじに薬をやめたら、その禁断症状がどんなに恐ろしいものか御承知でしょう。えら物（ぶつ）のマダムは、それをよく知っていてくれました。死ぬことだってあるのです。彼女はいっぽうでわたしをたしなめながら、いっぽうでヘロインを、だんだん減らしつつ妻にわたしてくれたのです。

……」

「はてな、マダムが、どうしてそんなヘロインをもっていたのだろう？」

「それは、あゝいう商売ですから、どこからか手に入れたのでしょう。わたしはルートまでは知りません。……ただ、妻が入院して以来、その補給がぷっつりきれてしまいました。これを機会（しお）に、ざんげだと思って完全にやめろというのです。もうひといきのところでした。しかしこの一ト月、わたしは苦しみました。万策をつくして、闇のなかを這いまわり、少量のヘロインを手に入れてすごしました。……そこへ昨夜、電話をくれたものがあるのです。おとなりの呼出しですが、車戸のマダムが薬をとりにこいといっているから、はやくゆけ。……」

「な、なに、電話？」

みな、電流にうたれたようだった。ここにもまた奇怪な電話の聴手（ききて）があったのである。

「それは、何時ごろ？」

「ええっと――あれは――七時ごろ、でしたか。……」

「だれ？」

「だれだかわかりません。まるで、風呂のなかからものをいってるようなきみのわるい声で――」

「な、な、なぜ、そのことを、いままでかくしていたんだ？」

「薬のことにふれられるのがこわかったのです。……」

伴氏の顔は、このとき、まったく一変していた。額（ひたい）にあぶら汗がにじみ、おくびのようなも

のをもらし、下あごをブルブルふるわせながら、両腕を蛇みたいにさしのばしていた。眼が、ぞっとするような奇怪な媚びのひかりをはなって、ひどくまのびのした口調で、

「ねえ、一本、一本だけ、ヘロインを下さい。ここにはきっと押収物があるでしょう。……おねがいです。それを一本でいいから、わたしに下さい。土下座します。マダムを殺した奴がつかまらなくって、警察の顔がたたなければ、わたしを犯人にして下すってもけっこう。……死刑になってもかまいません。……ただ、ヘロインを。……もうひといきです。……ただ、ヘロインを一本だけ。……」

第八章　都に雨のふる夜は

——ながながと、おやかましゅう。——

以上が、この物語の、まあ前篇というわけに相なるが、それはとりもなおさず、この殺人事件をうけとめたときの警察の陣型であり、どうじに、犯人のなげた妖(あや)かしの網(あみ)のすがただった。網はやぶらなければならぬ。警察は突進した。刑事は八方にとんだ。——そして、停止した。

惨劇の夜の訪問者は七人もあり、手がかりに不足はないようだった。一見、網のやぶれめがいくつかあるようにみえた。しかし、なかった。

ねんのため、車戸猪之吉の当夜の行動をしらべてみても、彼の陳述にまちがいはないようである。あれ以来、彼は、ひるまはおぼつかなげにじぶんの店々を監督してまわり、夕ぐれになると痴呆のように泣き、夜はうれしそうに花札(はな)をひいている。とうてい、愛する妻の復讐などこころみそうにない。

A新聞の記者里見十郎は、案の定、父が新聞誤報のため社会的にほうむられたなど嘘っぱちで、彼の父親は田舎で千年一日のごとく百姓をやっているが、ただ彼の細君の実家である牛肉

屋が、終戦直後の飢饉時代に、犬の肉を売ったことを報じられて、店がひだりまえになったことは事実らしい。現在その細君が結核療養所に入っていて、彼はひどくまいっているが、それはむろんこの事件となんのかかわりもないことであろう。

麻薬取締官久世専右氏は、依然として麻薬取締りに精励している。ただし、れいの奇抜な犯人志願の件は、警察のほうでもなんともいわないから、べつに虎穴に入って大密売者退治にのり出す気配もないようだ。

被害者の息子の車戸三樹は、警察からもどされた夜から発熱して、ヒトミの看護のもとに床についている。——一日、熱のさがった夕方、ふるいノートや雑誌を庭で燃していたらしいが、これは歓喜先生が、ははあ、ヒトミが白状したな、と思っただけで、警察のほうにはわからない。

それから、べつに、伴泰策氏は——いや、これはともかくアリバイがある。あの夜七時ごろ、目黒の自宅の隣家で呼出しの電話をうけとったことはまちがいない。まちがいないが、はたしてその内容が、彼のいうようなものであったかどうかは保証のかぎりにあらずである。どうも胡乱くさい影のぬぐいきれない人物だった。

伴氏にかぎらず、影は、ほかのだれにも、多少ともあった。もっとも、それは世のいかなる人間にもあることである。人は、ひとりの生涯の友にすら、いくたびその面貌のうえに、善意の天使や狡獪の悪魔が交錯するのをみてとまどうことであろう。疑心のあるところ、どこにも暗鬼は生じる。——しかし、彼らのどの点を追及しても、あれ以上の事実はつつき出せてこな

かった。もちろん怪しいのは、彼らよりも、正体不明のほかの三人だ。しかし彼らのなかで、その三人のだれかを知っているものはないか？　たとえば、猪之吉と三樹と伴氏に電話をかけたものに、思いあたる共通の人物はないか？　このうたがいは当然で、必死にその糸をさぐっていっても、糸はすぐにぷっつりきれた。麻薬中毒者の伴氏に、モヒの餌を以て誘惑してすら、彼は、「思いあたらない」と頭をかきむしって否定したのである。

さて、その正体不明の三人——白マスクと、ふとっちょの紳士と、黒マスクとであるが、このうちふとっちょの紳士についてだけ、その後、ひとすじの照明が追いかけて、そして、突然、奇妙な闇にとざされてしまった。

それは、保守党の代議士で売春禁止法案をめぐって、車戸のマダムとなにやらからまりがあったのではないかと里見記者がいったあの立花兵蔵氏の写真を、「恋ぐるま」の女郎ユリ子にみせたところ、はたせるかな、そのふとっちょの紳士に似ているらしいといわれて、さてこそと警察のほうでいろめきたち、立花代議士の当夜の行動をあらいかけて——突然、その追及の手をとめてしまったのである。

なぜか？　内部のことで、刑事たちのなかでもその理由を知らないものもあった。ただ、捜査当局の幹部の見解としては、

「八時五十分ごろマダムに会った麻薬取締官久世氏の証言、また、九時にマダムの声をきいたという女給たちの証言にてらして、マダムの殺害の最大容疑者は、それ以後におとずれた黒マスクの男とみられる。したがって、当局としては、全力をあげてその男を追及している」

ということで、それ以前におとずれた白マスクとふとっちょの紳士は、いちおう黙殺する方針をとったらしく、そしてそれは、もっともしごくな方針のようであった。

しかし、その黒マスクの男の正体は、ついにわからなかった。女郎たちの客でなく、ふだんから数多いマダムの客のひとりであったため、たいして関心をもたれていなかったし、それよりあの男が、その暗い照明のなかでなお黒眼鏡、黒マスクをかけて用心していたのだから、その顔など知れっこないのである。それにしてもふしぎなことは、「恋ぐるま」の女郎たち、そのちかくの妓楼の女たちで、この黒マスクの男をみたものはともかく幾人かあるが、それ以外の店では、全遊廓ひとりとして、それらしい男の姿をみたものがないということだった。

日はすぎ、新しい年をむかえたが、黒マスクの男は、闇から浮かびあがってはこなかった。どうじに、捜査当局の眼も、空漠とした闇に釘づけになってしまった。結局、しらべればしらべるほど、ただ車戸のマダムが、なにかしら妖しい霧の尾をひきつつ、或る意味で嘆賞すべき偉大な女性であったという印象ばかりが、いよいよその光芒（こうぼう）を大きくしてゆくだけだった。

……

釘づけにならなかった人物がある。歓喜先生が、ガックリ、ガックリ、肩をゆらしてあるいている。

事件から十日ばかりのちの或る夕、荊木歓喜は、代々木の曾谷精神病院の石の門を入っていった。可笑しいことに、ガラにもなく、薔薇（ばら）とカーネーションの花たばをかかえて、それから、

ひとりの少女をつれて。——マスクをしているが、伴圭子だった。

この十日のあいだ、荊木歓喜はなにをしていたか。うちあけると、なにもしていない。

実は、あれからまもなく、歓喜先生は、ぶらりと本郷の車戸家をおとずれた。なにをきくというわけでもない。ただ、母を殺された少年三樹をこころから見舞ってやっただけである。そのときに歓喜先生は、あれ以来、三樹と仲のいい伴圭子が、その後いちども車戸家にやってこないということを知った。そういえば、この少女も、精神病の母とモヒ中の父をもつ、三樹におとらぬ可哀そうな娘である。——その足で、目黒の伴家をたずねてみると、はたして彼女も病気でねていた。あの日、一日じゅう警察のまえで寒風にふかれつづけたせいで、すっかり風邪（かぜ）をひいてしまったのである。無頼の父は、どこをうろついているのか、貧しい小さな家に病気の娘をひとりぼっちに置きざりにして、その姿もみえなかった。それで、歓喜先生が、ずっと看護してやっていて、ようやく風邪がなおったので、そのあいだ彼女のいちばん気がかりにしていた母を、その日やっと見舞いに出かけたのに、つきそってやってきたわけである。

雨になるのだろうか、なまあたたかな曇天の下に、曾谷精神病院は陰鬱なシルエットを浮かびあがらせていた。建物の右手のほうに、小さな麦畑があって、一二寸のびた青い麦のなかにうごいている七つ八つの影がみえる。作業療法にしたがっている患者らしい。

玄関を入って、受付で面会を申しこんでいる圭子のうしろから、急に思いついたように歓喜がいった。

「ちょっと、できれば院長先生にもお目にかかりたいので。……その伴真弓さんの病状につい

てうけたまわりたいのです」

もうふつうの受付時間のおわった時刻だった。それに一般の病院にくらべて、比較的医者や看護婦の数もすくなく、また患者や面会人の出入もまれな精神病院の、しんかんとした廊下をいくつかまがると、院長の部屋があった。そのとなりの応接間で待っていると、まもなく曾谷博士が、病症日誌らしい書類をもって出てきた。

「伴真弓さんについておたずねになりたいそうですが」

「これは、恐れ入ります」

と、歓喜はおじぎをした。曾谷博士は、精神病院の院長らしく、ふとって快活清明な顔をしていた。歓喜は、このお嬢さんと最近知りあいになったものだとことわりながら、しげしげと博士をみて、

「先生、相かわらずおふとりですが、それでもいつかお目にかかったときより、すこしおやせでございますな」

博士は、けげんな顔をした。歓喜は、じぶんも町医者で、或る必要から、五六年まえ、学会で博士の偏執病(パラノイア)についての講演を拝聴にいったことがあるとのべた。歓喜先生にはめずらしくていちょうなものごしである。学界でも、その人柄と学識の点で、だれでもが敬意を表している博士だった。

「ほほう、あなたも、お医者さんですか。それなら、話が、らくだ。……いや、やせたのはこの半月ばかり風邪をひいて、食慾がないからでしょう」

と、博士は苦笑して、咳をした。

「それは、どうも。……このごろ風邪がはやっておるようですな。——そのころは、おひげを生やしていらっしゃいましたが」

「実は、ことし還暦でしてね。若がえるために、この正月に剃ったのです」

そんな雑談のあとで、院長は、病症日誌をめくって、真弓の病状を説明しはじめた。

真弓の病気は、東大精神科で診断されたとおり、躁鬱病(そううつびょう)であって、入院当時はそうとう重症のメランコリーであったが、その後急速に寛解した。もっともこの精神病は、一生にいちどあって全治することもあれば、不定期の間隔をおいてくりかえすこともあり、結局不治のこともあるので、安心はしていなかったが、はたして十日ばかりまえの夜発作をおこして、また壁にあたまをぶっつけ、自殺をはかったので、鎮静剤を注射し、保護室にいれたが、その後経過はよくふたたび寛解におもむきつつあるようである。……

「まだ多少の幻覚があり、判断力もにぶいところがありますが、まあ当分は心配なさらなくってよろしいようです」

「べつに、身体が衰弱しているというようなことはございませんか」

「そのほうは異常ありません。いちど糖尿のつよいことがあったので調べましたが、これは一過性のもので、躁鬱病患者で抑鬱状態のひどいときにあらわれる特有の糖尿であったらしい」

「ははあ、抑鬱状態のひどいとき、糖尿がね。……それはおもしろい現象ですな。どういうわけでございましょうな。どうも、精神科のほうは、すっかり門外漢になりはてまして」

「まだはっきりわからないのですが、神経系統の変化が内分泌作用に影響をきたし、内分泌作用の変化が糖質の新陳代謝に影響をきたすものとみえます、糖尿ばかりではなく、アセトン、インジカン、アルブモーゼなど出す患者もありますし、またこういう新陳代謝の異常は、躁鬱病にかぎらず、脳震盪とか、脳出血とか、脳脊髄膜炎とか、癲癇などにみられるものです」
「すると、躁鬱病は、やはり脳に病的変化のあるものでございましょうか？」
「いや、それがまだよくわからない。だいたいが本態のハッキリしない病気で、いまのところ脳に剖検的な病変は全然ないものとみられているのですが。……それが、ひとによっては、躁病のみのものもあり、伴夫人のように鬱病のみのものもあり、またそれが交互にくる混合状態のものもあって、なぜそうなのかもよくわからないのです。……したがって、治療法も、まあ、入浴療法とか定式阿片療法とか、新しいところでは冬眠療法とか、いろいろこころみはしますけれども、結局、極力刺戟をすくなくして、安静にたもたせるということがいちばんで、はずかしいことに、病院の存在価値はまずそこにあるといっていいくらいなものです」
「原因はなんでしょう？」
「うちでハッキリ遺伝関係のわかっているのは二、三％ですが、だいたいみなそういう素質をもっているのでしょうね。女のほうに多いのです。これが発病する誘因となるのは、脳外傷とか熱病とかありますけれども、やはり感情的ショックや精神的苦悩が大部分ですね」
「……この患者など、その代表的なものでしょうな」
歓喜先生は暗然として、そばにションボリと立っている娘をみる。この対話はほとんど独逸

語の術語をつらねたものであったので、圭子の大きく見はった眼は、いっそう不安そうだった。
曾谷院長は少女に気がついて、
「それじゃ、そろそろ御案内いたしましょうか」
と、咳をしながらたちあがった。
「いや、院長先生御自身では恐縮です。どなたか、医員か看護人の方でも。……」
「なに、お気づかいにはおよびません。それに、当直の安西君は、いましがた往診に出かけたようですから」
「ははあ、やはり往診などもありますか」
「えゝ、ちかくにひとり癲癇もちのひとがありましてね、ふだんは会社などにいっているのですが、夕方とか夜、ときどき発作をおこすんです。……」
話しながら、院長にみちびかれて、ふたりは廊下に出た。渡り廊下をわたって、べつの病棟にはいる。
「反対の側に、男の患者の病棟があります」
厚い樫の扉の外に、ひとりの白衣の男が、看護婦になにかを命じていた。白衣をきているが、医者らしい知性はない、あきらかに看護人とわかる、みすぼらしい、が、頑固と朴訥さが羅漢みたいな黒い顔ににじみ出ている初老の男だった。
「これが看護長の鴉田君。この病院をわたしがはじめてから二十何年間、ずっとこの仕事をしているひとで、まあ、この病院のバック・ボーン、わたしなどよりずっと正気のひとです」

と、諧謔（かいぎゃく）まじりで院長に紹介されても、笑顔ひとつみせず、あいさつする調子も、なるほど精神病患者相手に人生をすごしてきた男らしく、いかにも沈鬱でぶっきらぼうだった。

鴉田看護人の手で扉があけられると、彼らは奇妙な別世界に入った。

このしずかな病院のなかに、こんな騒音にみちた一画があろうとは、想像もつかないにちがいない。ながい、一間（けん）はばの廊下に、わああんと叫喚がこだましていた。廊下にそう、ひろい、あかちゃけたたたみじきの部屋にも、おっとせいのように、百人ちかい女たちが群れていた。唄っている少女、しゃべっている中年の女、お念仏をとなえている老婆。——また、おどっている女もいる。なぐられて笑っている女もある。

「アラ！　シバラク！」

突然、歓喜先生の右手にとびついてぶらさがったものがある。見おろすと、赤いネッカチーフを髪にまいた娘だ。

「よくひとに待ちぼうけをくわせたわネ、ひどいひと！」

こんどは左手にすがりついて、いとしそうにその腕をなでさするものがある。ふりかえると、リボンをつけた人妻風の女だ。

歓喜先生の唇が、かすかにうごいた。実は、思わず苦笑して、「なに、わしはここにはじめてきたのじゃないか。お女郎さんみたいなことをいわれる喃（のう）」といいかけたのである。が、そんなわるい冗談をいうべく、なんとあわれに、可憐な女たちであろう。格子をはめた窓硝子をとおす夕ぐれのひかりに、彼女らの半面の、天使のごときあかるさよ。そしてまた暗い半面に

ふるえる苦悩のかげよ。

そして、部屋ぜんたいには、むんむんする女の体臭にまじって、家畜小屋の匂いがしていた。

「こら、いかん、いかん！　これは、先生だぞ」

と、鴉田看護人がしかった。もう七八人も、ぶどうの房みたいに歓喜先生にたかっていた女たちは、あわてて手をはなして、あとずさりして、いっせいにおじぎをした。さすがに、「先生」だけはわかるらしい。

「いや、いや、おしかりなさるな。……しかし、これじゃ、毎日、看護人のかたはたいへんなことでしょ。……」

「なに、女の病棟は、医員をのぞけば——それから、まあ、この鴉田看護長をのぞいては、看護婦ばかりにあつかわせますから」

歓喜先生は、よこの壁をみた。そこには爪でかいたいろいろな文字や絵が、おぼろにうかんでいる。

「オロカナルワレハ、オロカナルコトノミヲカンガウ」

などかいてある。

「精神病」

と、かいてある文字もみえる。

大きなユーモラスな男根の図とならんで、牧水の、「幾山河こえさりゆかばさびしさのはてなむ国ぞきょうも旅ゆく」という歌がかいてあった。

「それは、どちらもあの患者がかいたのです。女子大を出たとかで、ひどくものをかくことが好きらしゅうございまして」

と、鴉田看護人がしぶい表情をしていった。

歓喜先生は、そこの柱のかげに、なるほど上品な顔だちをして、犬のようにひとなつかしげにこちらをみている若い女をみてはなしかけた。

「あなた、名はなんとおっしゃる？」

「クイーン・エリザベス」

「年は？」

「セヴン・ミニッツ」

と、彼女はきれいな発音でこたえた。

「セヴン・ミニッツ？　ははあ、年は七分間か。これは、なかなかインテリだ。……じゃあ、きょうはなん日？」

「きょうはね、きょうは……シーズン」

院長は、もうぶらぶらとさきへいって、おじぎする女たちに、「お夕飯はたべたか」とかなんとかやさしくきいていた。鴉田看護人がはしっていって、腰から大きな鍵をとり出して、扉をひらいた。女たちが、いっせいに、かなしそうにいった。

「——サヨウナラ。……」

扉のそとにでると、また鍵をかける。一瞬に騒音はきえた。「ちょっと、ついでですから、

保護室もごらんになりますか」と院長がいって、よこにそれた。歓喜が医者だと名のったからであろう。そして彼らは、またひとつの別世界に入った。

そこは、廊下ぞいに、いくつかの暗い密室がならんでいた。鴉田看護人が、じゅんじゅんに黒ずんだ扉をひらいてみせる。歓喜先生はうなずきながら、また二度ばかり、ふと口ばしりかけた。そのひとつは、

「ははあ、これは監獄の独房そっくりですな」

ということばだった。実際、それは、一坪ばかりの、ただ一方の壁にたかく、鉄格子をはめた小さな窓があるばかりで、あとは壁と扉だけの、穴蔵のような部屋だった。なかにはむろん花一輪もない。ただ、その底に模糊としてうごめいているものがある、蒲団をかむっていた患者が、むくむくとおきあがってきて、蒼白い顔をみせるのである。

「さむくはないかね」

と、院長がやさしくきいても、へんじはあいまいにくぐもって、なかには身うごきひとつしない患者もあった。

「これで、ときに発作をおこして、兇暴性を発揮することがありますのでね。ああいうふうに雑居させておくと危険なのは、まあここに」

と、院長がいう。扉をあけるやいなや、いきなり猛烈にしゃべり出した女もあった。

「ねえ、十五ページ本をよんだのよ、きょう……十五夜はいつだったかしら？　お月さま、ほんとにキレイだわね、こん月はネ、冬なのよ、雪がふってね、花よ、このリボン、あらマ、紙

だわ。……」

といって、赤い紙のリボンをむすびつけたざんばら髪のあたまを、ごつん、ごつん、とはげしく壁にたたきつけながら、

「鴉田さん、似顔かいてあげましょうか。あなたの顔、強姦魔に似ているわよ。オヤ、院長先生も知ってるよ、先生、ここにホルモンのトン服つくりましたよ、あげましょうか？」

ふところから紙づつみをとり出し、あけてみる。雑誌のきれはしらしい。鴉田看護長は頬をゆがめていた。院長もにが笑いしてつぶやく。

「この患者は、ふだんから色情的な被害妄想がつよくってね。……どうも、いっぱんに女性は、精神異常をきたすと色情的になりますね。やはり正気のときいちばん抑圧のつよいものが出る」

「そらごらんなさい。瓶から出る、ヘチマコロン……おや、あんたあたしのおねえさまでしょ？　え、あらマ、いもうと、じゃ、あたしいばれるわけだわね。……」

そして、ゆびさされて、あとずさりする圭子をもう見もしないで、また、ごつん、ごつん、と壁に、にぶい、凄惨な音をたてながら、ケラケラと笑っている。このおしゃべりが、ほとんど一秒のきれめもなく、ながれるようなはや口だった。

「シリメツレツのようで、ひとすじなにかとおっているじゃありませんか。十五ページから十五夜——月——季節——雪——花——リボン——紙——似顔をかくと、それからなんといいましたっけ？　とにかく、とっぴなようで、大脳の連想作用のじゅんをふんでおる。……」

と、歓喜先生は感服して、鴉田看護人をかえりみた。

「わたしたちといえども、こんな経験はけっしてないどころか、ふだんのかんがえのとき、よくある現象ですぞ。きいておると、こっちのあたままでツイつりこまれて、妙な世界へひっぱってゆかれそうじゃ。つくづくと、あなたが正気でいらっしゃるのは、偉とするに足ります。……」

「そりゃ、まあ、狂人といっても、ここまでがきちがいで、ここまでが正気だという明確な線などないんですから。……実際、その区別がつかないでまだ発見されない狂人が、何百人も何千人も世間を横行しているにちがいありません、政界にしろ、芸術界にしろ、学界にしろ……」

と、院長が笑いかけて、急に凝固した顔つきで、鴉田看護人をみつめた。

「あゝいかん、はゝはゝ、これはうっかりすると、このわたしも、チェホフの六号室を地でゆきそうです。あれは、精神病院の院長が、普通人より狂人のおしゃべりのほうに共鳴をかんじてきて、はては部下の番人に保護室のなかへおいこまれる話でしたな。……」

鴉田看護長は、ニコリともせず、へんに傲然とした眼で院長をみていた。まったくこの男なら、そんな場合、機械のごとく厳格に院長でも警視総監でも檻へとじこめてしまいそうなかんじがある。

荊木歓喜は、もうひとつ口ばしりかけたことがあった。それは、

「すると、この保護室に、いつか伴夫人をたたきこんだわけですな？」

ということばである。しかし、これもさっきのことば同様、あやうくのみこんだ。それはそばにその娘の圭子がいることに気がついたからである。

しかし、院長のほうからそのことにふれてきた。

「伴夫人は、実はこのさきの特別室にいれてあるのです。同居者がひとり。これは或る官吏さんの奥さんですがね。御主人の第二号にからむいざこざで精神異常をきたしたひとですが、……ふだんはどちらもあばれるようなことはないんですが、ときどき発作的に自殺をこころみることがある。そのさわぎを一方がみると昂奮するおそれがあるので、そのときだけ、臨時にここに入ってもらいます」

その特別室は、そこから扉をへだてた階段をのぼった二階にあった。やはり窓に格子はあるが、やや清潔な十畳あまりの部屋だった。

いかにも、そこには、ふたりの中年の女性がいた。墨絵のように、典雅にひっそりとして、ちょっとみると、どっちも狂人とは思えない。ひとりはまんなかに坐って、ひざのうえにちらばった赤や白の布きれをみつめている。もうひとりは窓のそばに坐って、じっと外のひかりをながめて唄っていた。蒼茫(そうぼう)たる外の世界は、いつしかけぶるような霧雨だった。

「……幼なじみのあの夢この夢
ああ、だれか故郷をおもわざる。……」

かなしい、しみいるようなふるえ声だった。

「お母さま！」

と、圭子がさけんで、みるみる涙を頰におとした。そのさけびをきかなくっても、その娘によく似た端麗なよこ顔から、うたっている女が伴夫人だとはすぐにわかった。彼女は無心にうたっていた。いくどみても、娘がそうさけび、涙をおとさずにはいられないいたましい姿だった。そして、いくどそうさけばれ、涙をおとされても、彼女は、むなしくひろがった瞳で、たそがれの冬の雨をながめているばかりだった。

荊木歓喜が、そろそろとちかよった。

「奥さん。お嬢さんが、わかりませんか？」

圭子は泣きながら、窓をあけて、もってきた花束を格子にむすびつけている。その姿をみても、彼女の視線はほとんどうごかなかった。ただ、

「えゝ」

と、ひどくおとなしく、こたえた。

「……ここが、どこかわかりますか？」

「えゝ。……やっぱり田舎のほうなんですって。……」

「いつからここへきているのですかな？」

「あの、え……」

と、小くびをかしげて、

「この三月」

とこたえた。まったくでたらめである。それから、突然笑い出し、急にまたまじめな顔にな

って、
「圭子……圭子……」
と、つぶやいた。やはり娘がきていることはわかっていたのか。それとも、全然あらぬ方向をみているところから判断して、間歇的にそうよびつづけているのか？
「お母さま！　お母さま！」
圭子ははしりよった。
「お母さま、なあに？」
「車戸のおばさまに、聖書わたした？」
圭子は、はっとしたように、歓喜をふりあおいだ。
圭子は、あの事件の夜以来、まだいちどもこの母のもとへきたことがない。それは風邪をひいたせいもあるが、それより母に、あの惨劇を告ぐべきか、だまっているべきかにまよったせいもあった。しかし、その点は歓喜先生が解決してくれた。
「その打撃で、気が狂われるという御心配はもうないんじゃから、ありのままおっしゃって、かまわんでしょう」
歓喜にうなずかれて、圭子はいった。
「お母さま！　おばさまは、お亡くなりになったの。……」
その夜のことを思い出して、彼女は泣いた。
「おきのどくに、おばさまは、だれかに……殺されておしまいになったのよ。……」

「そう……だから、聖書をあげようと思ったのに。……」
はじめて荊木歓喜は戦慄した。それをきいても、おどろくことはあるまいとは思っていた。が、平然としているのはともかく、そのこたえのまともなかんじが、われしらず歓喜をぞっとさせたのだ。しかし、この場合、そのこたえのまともなことがすでにまともでないことのしるしであった。
「かんしんに、なにか信仰にからんだことだと、すじがとおるのですな」
と、院長が、暗然とした調子でつぶやいた。歓喜先生はひたいをおさえていい出した。
「どうも、医者が妙なことをいうようですが、わたしは病人というものに、それほど同情の念のわかんことが多いですな。病人のきのどくなことはいうまでもないが、病気という奴は、だれかのいったように、まずじぶんの罪悪に原因することが大半です。この罪悪のなかには、不節制とか不注意とかもふくんではおりますが、とにかく、大酒のんで胃潰瘍になろうが、機械にはさまれて片輪になろうが、細菌にとりつかれようが犬にかまれようが、まず自業自得で、だれをうらみようもない。……ところが、狂人だけはちがう。遺伝的素質はべつとして、発狂に点火するのは、かならず他人です。人間です。人間どうしの魂の相剋から苦しんで、苦しんで、苦しみぬいたはての始末です。……」
歓喜先生のくせを知らないから、院長は妙な顔をしている。看護人は窓ぎわへよって、つまらなそうに外をみていた。
「それじゃ、圭子……あの聖書を……四谷の聖ミカエル教会へ持ってって……神父さまに受取

もらってきてちょうだい」

ふるえる声で、狂女はいっていた。

「いいかえ？……いいかえ？……いいかえ？」

「加害者は、人間だ。しかもその加害者は、殺人以上のことをやりながら、平然としてこの浮世にくらしとる。にくまざらんと欲するも、あににくまざるべけんや。……」

歓喜先生は、ちょっと昂奮した。いうまでもなく、真弓夫人を発狂させたのは、あの伴泰策である。いままで歓喜は、彼にもちょっと同情をしていたが、このあわれにもいたましい狂女をみては、思わず沈痛な怒りをおぼえないわけにはゆかなかった。

――しかし、その伴をえらんだのは、ほかのだれでもない。真弓じしんではないか。彼女は伴泰策をえらんだ。どうじに人生をえらんだのだ。しかもその人生はかくのごとく惨憺たるものに帰した。彼女がまちがったのではない。あの娘時代の恋、あの人妻時代の努力、だれが彼女をまちがったといえよう？　人生のほうがまちがったのだ。彼女が発狂したのもむりではない。……

そのとき、窓のそばにたっていた看護人が、つとうごいた。

「なに？　だれ？」

と、中庭をみおろして、話している。看護婦が相手らしい。すぐこちらをふりむいて、

「院長先生、新聞記者が面会にきているそうでがす。院長先生に……」

「なに、新聞記者？」

曾谷博士は、びっくりするほど大声でききかえした。

「はて、なんの用だろう？」

「わたし、カラスのあかちゃんができたの。……可愛い可愛いあかちゃんが。……あれは、プリンス御誕生のニュースをとりにきたのです。……」

と、狂女ははじめてあどけない微笑をふりあげて、美しい声でうたいはじめた。

「からすの　あかちゃん　なぜなくの
コーケコッコの　おばさんに
……　……　……」

「――しずかにしなされ！」

と、看護長が吐き出すようにいって、つかつかと、いま入ってきたのとは反対の側の扉のところへあるいていった。

「新聞記者。ともかく、それじゃ会ってきますから、ごゆっくり、どうぞ」

と、曾谷博士は、はげしく咳をしながら、その扉のほうへいって、外にきえた。すると、ふたりの狂女は、そのまねをして咳をした。咳をしたはずみに、真弓夫人はなにやらすこし吐いた。頭痛とか吐気とか耳鳴りとかは、この病気の症状としてよくみられることだった。

「まあ、お母さま。……」

圭子が、ハンケチでその口をぬぐってやると、夫人はおごそかに、

「お小水」

といった。

扉のところにたっている看護人をちらっとみた歓喜先生は、そのとき、ふとわれにかえったように、ポケットから大きな薬瓶をとり出して、

「お嬢さん、まことに相すまんが、この瓶をよく洗って、お母さまのお小水をとって下さらんか？」

といった。

「え、どうしてですの？」

「そうですな、糖尿のようすを、ちょっと拝見したいので。……」

このあいだ、もうひとりの狂人は、ひとことも発しないで、はじめの姿勢のまま、じっと美しい木像のように、ひざのうえの布きれをみつめていた。

——そも、この冷たい、くらい格子のなかに、この典雅なふたりの女性は、毎日、毎夜、なにを語りあっているのであろうか？　いや、おそらくふたりは、なにひとつ語りあうことはないであろう。ただ沈黙し、空笑（そらわらい）をもらし、ひとりごとをつぶやくのみで、夜も昼も、うつろな瞳で、さびしいひかりをみつめているにちがいない。……

歓喜先生と圭子が、看護人につれられて、もとの玄関にもどってきたのは、それから二十分ばかりのちだった。

すると、そこにまだ院長がたっていた。新聞記者らしい姿はどこにもみえない。

院長は、ボンヤリふりかえったが、顔いろはしずみ、眼はまだ放心状態だった。看護長は不安そうに、

「新聞記者が、なにか……」

「いや、なんでもない」

曾谷博士は、やっとわれにかえったように、しゃがれ声でいった。

「わたしのことではなく、兄のことだ」

「兄？」

と、けげんそうな表情を歓喜がむける。

「代議士をやっている兄のことです。……」

といいかけて、博士はくびをふり、突然からからと笑い出した。

「——ばかなやつだ！」

歓喜は、あっけにとられた。その笑い声とそのことばに、温厚快活な曾谷博士にはおよそ似合わしからぬ、凄絶味すらある嘲笑がかんじられたからだった。ばかな奴とは、だれのことなのか。その兄のことか、記者のことか。——しかし、それはもう歓喜先生のといただすべきことではない。

はげしく咳きこみながら笑っている曾谷博士に、歓喜はていちょうに礼をいって玄関を出た。

霧雨はもう外套を這う程度である。

「お嬢さん、マフラーをかぶられたほうがよいのじゃありませんか。……」

「いいえ、だいじょうぶ」
「風邪が、ぶりかえすといけませんぞ。……おや？」
　歓喜はたちどまった。うすぐらい霧雨のなかに、チロチロと赤い火がみえる。左手の畑の傍に倉庫のようなものがあって、その軒下で火をたいているのである。そこで、ききおぼえのある声がした。
「そうです、そうです。先月——つまり、旧臘の二十七日の夜ですね」
　歓喜先生がちかづいてみると、そこには十人あまりの男が、木屑をもやして、その火をとりかこんでいるのだった。ふたりほど白衣をきており、ひとりはオーバーの背をみせているが、あとは模糊として影のような姿である。さっきまでは作業療法にしたがっていた恢復期の狂人たちにちがいない。
「おい、里見さん」
　と、歓喜先生がよんだ。オーバーのうしろ姿がくるっとふりむいて、
「やあ。……これは歓喜先生」
　Ａ新聞記者里見十郎である。さすがにまごついた顔で、しげしげと歓喜を見あげ見おろして、
「これはまた妙なとこで。……」
「いや、ちょっと知りあいのこのお嬢さんのお母さんが、ここへ入院していなさるもんじゃから」
「へえ」

　と、里見は圭子をみたが、べつになんの興味もないらしい。彼はいちど車戸家で偶然圭子に逢っているはずだが、マダムと伴家の関係は知らないから、印象もうすく、恐ろしい多忙のなかにわすれてしまっているようだ。——なにかひどく安心したような表情が浮かびあがって、
「ところで、れいの恋ぐるまの事件は、その後どうです？」
「さあ、いかが相なったかな。あれからわしは警察のほうへはゆかんから。……あんたのほうこそ、なかなか御活躍らしいが、どうですね、ギヴ・アンド・テイクの件は」
「先生、とぼけちゃいけません。先生は、ひとがわるいよ、まったく！」
「ほ、わしが？　わしが、ひとがわるいといわれたのは生まれてはじめてじゃが」
「先生でしょう？　ぼくのオヤジのことなど調べさせたのは？　いったい、そんなことを調べてなんになるんだ、バカバカしい。警察のほうも、血まよってるな、あきれかえって、もう情報なんかやらんことにしましたよ」
「はゝはゝ、あの件か。あれは、ごめん、ごめん。……しかし、こまったね、あんたを怒らしてしまったのは」
　と、ニヤニヤしながら、歓喜先生は、ポケットかられいの薬瓶をとり出して、栓をぬいた。
　圭子がおどろいて、
「先生、それは、あの——」
「おっ、そうか、そうか。こいつはえらいことをするところじゃった」
　と歓喜はあわてた。瓶のなかは焼酎ではないのである。そそくさとまたポケットへおしこん

だが、ひどく手もちぶさたな顔で、
「ところで、里見さんは、ここに何用です？」
「だめですよ、先生」
「はゝはゝ、ほんとうに怒っておるのかな。それじゃ、わしがあんたの用をあててみようか」
里見の顔に、狼狽のいろがあらわれた。
「なに、いま院長先生にきいたのだよ。院長の兄さんの代議士のことじゃろう？」
記者はまたほっとしたようだった。
「その代議士は、もしかすると、立花代議士のことじゃないか？」
「そうみやぶられちゃあ、しかたがねえ」
と、里見は大げさにあたまをかいた。
「どうも先生は、こうみえてゆだんができないひとだからな。じゃあ、先生にだけ情報をひとつあげましょう。どうせ、そのうち警察にもわかることだから。――先生は、いったい警察が、どうして立花代議士の線をあらうのを中止したか御存知ですか？」
「そりゃ、嫌疑がはれたからじゃろう」
「そういってしまえば、それまでですがね。しかし、あの夜立花がどこにいたか、どうもハッキリしない。にもかかわらず当局が追及をやめたのはなぜか。いや、やめさせたのはどの筋かと、こっちでしらべてみると、どうやらそれは保守党の原田総務会長らしい。奴(やっこ)さん、原田総務会長とどっかの待合で一パイやっていたんです。なぜそれが公表できないか、というと、保

守党は御存知のようにものすごい派閥の暗闘の世界だ。そして立花はいま原田派の反対派に籍をおいているのですが、キツネとタヌキ、ないみつにコソコソやっていたらしいのですね。だから、そのことがいま明らかになると、彼らにとってえらいことになる。そこで原田のほうから警視総監へ三拝九拝したらしい。それをきいた警視総監もけしからん。……」
「なるほど、しかし警視総監がそれを了承したのは、立花代議士が原田総務会長さんのところにいたことがハッキリ判明したからでしょう。保守党内の派閥のことまでは、総監のあずかり知るところではない。……要するに、それで立花氏のアリバイが証明されたとすると、あんたは、院長になんのために会いにこられたのか？」
「で、立花のことをいろいろしらべているうち、彼のふたつちがいの弟で、幼いころ曾谷家に養子にいった曾谷博士のことがわかったのです。……だから、ねんのため、立花代議士の人柄や経済状態について……」
「うそをつきなさい」
「へ？」
「いや、それもあろうが、あんた、その曾谷博士自身をしらべにやってきなすったんじゃろう」
里見はまたぎょっとした表情になる。
「あの夜のふとっちょの紳士は、立花代議士でないとすれば、弟の曾谷博士ではないか？――とね」

歓喜は伏眼になって、つぶやくように、

「実は、わしもそんなことを思いついておった」

「え、先生も？」

「あんたのように、立花代議士の弟さんかどうかは知らなんだが、もっとかんたんに、わしは立花さんの写真をみて、ヒョイと博士の顔があたまにうかんできたものさ。もっとも、曾谷博士をみたのは、もうずいぶんまえのことさ。で、きょうここへきたのは、内々、それをたしかめてみるつもりもあってのこと。――」

「そ、それで、どうでした？」

「わからんね。わしが、そのふとっちょの紳士をみたわけじゃなし。――あの女郎のユリ子に面通しでもしてもらわんけりゃ」

「博士にはひげがありませんね」

「ひげは、ことし還暦で、この正月を期して剃ったんだそうだが。――だいたい、世間にゃ多い顔だ。それだけの理由で曾谷博士をうたがうのも失礼できのどくじゃが、それにしても、ふたりの眼が、べつべつの方向からおなじ人へ符合したのは、こりゃあ奇妙」

「先月二十七日の夜、兄さんと逢われたようなことはありませんかと、博士をひっかけてみたんですがね」

「ふむ」

「外出などしたことはないという返事でした」

「それにダメ押しをするために、いまそのお医者さんにきいていたんだろ？」

ふたりの白衣の男は、ぽかんと口をあけて、この問答をきいていた。ひとりはどうやら患者を監督している看護人だが、ひとりは往診鞄をぶらさげているところからみて、まだ少年みたいに若いが、たしかに医者だ。彼は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をあげて、

「なんですか、いま往診からかえってくると、いきなり、先月二十七日夜、院長が外へ出なかったかときかれるのですがね。……かんがえてみると、あの夜は、ぼくの知るかぎりでは、院長先生は外出などなさいませんでしたね」

「あなたの知るかぎり？」

「え、あの晩は、ちょうどぼくは当直でしたが、往診によばれて出かけていったのです、なに、いまいってきた患者とおなじで、ちかくの癲癇もちなんですがね。あの晩大発作をおこして、わたしだけじゃあ手が足りなくって、病院のほうは看護長にたのんで、当直看護婦もいっしょにつれてゆくさわぎでしたが、ともかく出かけるとき、院長はいられましたよ」

「それは、何時ごろでした？」

「出かけたのが七時半ごろで――途中なんども電話で看護長にまだかまだかとよばれたのですが、かえってきたのは結局十一時まえでしたか。――べつに院長先生がお出かけになったともみえませんでしたね」

「しかし、それじゃあそのあいだのことはわかりませんじゃないですか？」

「いや、そのあいだのことは、わしが知っとります」

と、うしろから声がして、苦虫をかみつぶしたような顔で、鴉田看護長があらわれた。

「先月の二十七日、あの晩は、いまお見舞の婦人患者が自殺さわぎをおこし、わたしももてあまして、往診へゆかれたその安西先生に連絡したのでがすが、結局院長先生のお手をわずらわして、ずっとその処置にかかっていたのでがすから」

頑固で、朴訥で、石のかたまりみたいにビクともしない看護長の顔だった。

「うそだと思うなら、ほかの患者にもきいてみなされ」

万事休す。——と、だまりこんだふたりを、看護長は広くひかる眼でギロリとにらんで、

「しかし、あんたがたは妙なお方だ。いったい、なんのためにそんなことをきかれるのでがす？」

歓喜先生は、閉口した。小さな声で、もぞもぞと、

「いや、ただ院長が、女郎屋におゆきになるようなかたか、どうかという……院長先生の御人格に関した問題で。……」

あながち、冗談でもなかったが、たとえそうとしても、冗談の全然きかないふたりの相手であった。

「人格？」

と、安西医師は、善良そのもののような若い顔をあげて、

「院長先生の御人格？……なにをばかなことをいってるんです。そりゃもう、あれくらい福徳円満なかたはない。性格的に清らかなひとはあるが、同時に、性格的に幸福なというひとはあまりない。ぼくの知っているひとに、たったふたりある。それは天皇ヒロヒトと院長です。ぼくの理想的人格ですね。……」

うたうようにいう。どうも精神病院につとめていると、医者までちょっと変っている。安西医師は、愛情にみちた眼を、おとなしく焚火(たきび)をみつめている狂人たちになげながらつづけるのだった。

「ぼくは、精神科医になって、ほんとによかったと思う。精神病患者は、或る意味でみな仙人みたいなものですからね。このひとたちとつきあってくらしていると、我利々々の現世に出てゆくのが恐ろしくなりますよ。二三年つとめたぼくでさえそうなんだから、ましてあれほど心のやさしい先生が、還暦のおとしになるまで彼らのめんどうをみておいでになっては、浄化されてほとんど聖人みたいにおなりになったのも当然と思う。こりゃ誇張じゃありませんよ。院長は、まあ現代の聖者ですよ。……」

すると、傍にうずくまっていた狂人のひとりが、重々しくうなずいていった。

「そうですよ。ここは神代ですよ。……」

みんな笑うものもなかった。だれかがうたい出した。讃美歌とも催馬楽(さいばら)ともつかない、奇妙で、おごそかな歌を。——歌声は、澄んだトレモロとなって、精神病院を朦朧(もうろう)とうすぐらくつつむ霧雨の夕空へ、縷(いと)のようにたちのぼっていった。……

第九章　遠く呼ぶのは誰の声

——事件後、十五日。警察は、なお闇のまえに釘づけになっているようにみえた。……釘づけにならなかった人間が、歓喜先生のほかにまだひとりある。前章でもわかるように、それは、若き新聞記者、里見十郎である。

——その日、ひるちかく、里見がはれぼッたい眼で社に出てくると、机のうえに三四通の手紙がきていた。椅子にふンぞりかえり、靴を机にほうりあげて、そのひとつめをとりあげる。ヒョイと差出人の名をみると、封もきらないで、むぞうさになげ出した。高原療養所にいっている妻からの手紙である。みないでも、このごろ火のつくようにきている金の無心だとわかる。毎日、彼のアパートから廻送されてくるのだが、してみるとこの男は、このごろ、毎夜、どこに泊っているのかわかったものではない。

ふたつめの手紙は、れいの嘘倶楽部からのひさびさの招待状だった。

「嘘倶楽部第八百十七回集会御招請状」

と、ある。もっとも八百一回がすなわち第一回めであった。

「（嘘町八百番地発）……嘘倶楽部第八百十七回集会が発令されました。会員紳士淑女におかせられましては、万障おくりあわせのうえ御参集のほどをねがいあげます。とくに今回は、閻魔の舌をぬくほどの大偽善大偽悪の知友をおさそいの上。

今回は、新年宴会をかねて中国料理を賞美いたしますが、趣向は恒例のとおり、もっとも卓抜なる嘘を御絶唱になりましたむきは、会費免除の特典をあたえます。

一月十四日（土）渋谷道玄坂万華楼にて。

会費千円（会員外千五百円）

嘘倶楽部第三代会長　ホラ男爵」

里見はニヤニヤしながら、三通めの手紙をとりあげて、ふっと視線をとめてしまった。差出人の名は、「車戸旗江の亡霊と結婚した男」とある。

はっとしたように足をひっこめて、封をきる。

「前略、貴下ヲ、カノ恋グルマ殺人事件ニツイテ御追及中ノ敏腕ナルA新聞記者、アワセテ社会正義ノ純潔ナル使徒デアルコトヲ存ジアゲテ一筆イタシマス。小生ハ、カノ事件ノオドロクベキ真相ニツイテヨク承知シテイルモノデアリマス。トクニ、アノ事件ト代々木ナル曾谷精神病院長曾谷博士トイカナル関係ガアルカヲ。——

ソコニハ、実ニ恐ルベク唾棄スベキ現代支配階級ノ陰謀ガ伏在シテイルノデアリマスガ、イカンナガラ、小生ハタダイマ或ルノッピキナラヌ事情カラ、白日ノ下ニ出現イタシタクナイノデアリマス。タダ、カノ殺人事件ノ夜、曾谷博士ノ姿ヲタシカニ現場チカクデ目撃シ、且ソノ

証拠ヲニギッテオルモノデアルコトヲ誓イマス。

ソノ件ニツキ、トクニ、貴下ヲ、ニュース・ソースヲ絶対秘密ニシテクレル信頼スベキ記者トミコンデオ願イイタシタイノハ、小生ト曾谷博士トノ交渉ニツイテ、貴下ニ御斡旋ヲ御依頼シタイノデスガ、御承知イタダケマショウカ。

御承引下サラバ、九日、十日両日、午後二時、渋谷T劇場地下喫茶室ニオイデ下サイ。ソノ隅ノ席ニ黒イ鳥打帽ニ白イマスクヲシテ坐ッテイル男ガ小生デアリマス。委細ハソノ節。

ナオコノコトニツキ、万一警察乃至御社幹部ニ御連絡ナサルヨウナコトガアレバ、貴下ノ御功績ハモトヨリ、カノ殺人事件ノ真相モ永遠ニ空ニ帰スルデアロウコトヲ、ココニ確言イタシマス。

車戸旗江ノ亡霊ト結婚シタ男」

――そも、これはいったい、なんであろう？

里見はこの奇怪な文面から茫然と顔をあげて、埃と騒音にかすむ編集局の大時計をみた。正午三分前。

そのとき、となりで電話をとりあげた同僚が、

「はいはい、こちらA新聞社会部。――だれ？　わからんな、なに、里見？」

と、彼に受話器をわたしながら、へんな顔をした。

「おかしな声を出す奴だよ」

里見は、なおボンヤリとしてなにげなく受話器を耳にあてたが、突然愕然とした表情になり、

そのひたいがみるみる異様な緊張のいろをうかべていった。

――その声は、はじめてきく声だった。しかし、知らない声ではなかった。あの恋ぐるま殺人事件の当夜、被害者の夫車戸猪之吉にかけてきたという、まるで風呂のなかからつぶやいているような、ぶきみなあの声にちがいなかった。――その声は、こういったのである。

「……あんた……里見記者……いいことおしえてあげる……黒マスクの男はだれか……恋ぐるまの……ヒトミという女が知っている。……」

「おいっ、きみはだれだ、き、きみは――？」

声は、ぶつぶつと泡をふくようにかすかにきえ、電話はそれっきりきれてしまった。

「――ヒトミ？　ヒトミという女？」

里見十郎は、白痴みたいにそのままぼう立ちになっていた。同僚が、あやしむようにのぞきこんで、

「なんだ、どうしたんだ？」

「いや」

と、里見は、われにかえったように首をふって、にやっとして、

「犬もあるけば、棒にあたる、か！」

と、つぶやくと、ソフトをひっつかんで、それこそ猟犬のように、騒然たる編集局をとび出していった。

まっ白い冬の午後の太陽が、S町遊廓をてらしていた。まひるの遊廓は、化粧のはげひからびた老女の顔のようにあさましい。そしてまたそのような虚(むな)しい鬼気をたたえている。

——いや、その日のS町の遊廓には、なぜか、あさましさや鬼気よりも、むしろ不可思議な、幻想的な美がかんじられた。そのわけをよくかんがえてみると、この毒々しい異形(いぎょう)の町に、たったいま、どこかの路地を黒い猫が一匹よこぎっていったほかは、ほとんど人影ひとつみえないからであろうと思われる。人の影はおろか、迷路のような無数の通りに、紙きれ一枚、汚物一塊もおちてはいない。——たかく上空からヘリコプターでもみれば、この一画のまわりは、人と車の織りなす大都会の壮観なのだから、そのなかの、この真空みたいにからあんとした町は、かえって童話めいて美しくみえたかもしれない。

午後三時。この時刻には、さすがに客はほとんど皆無でも、着飾った女たちがポツポツ店さきに追い出されて、扉のかげにたちはじめるのがふつうなのに、きょうの雰囲気(ふんいき)は、ちょっとおかしい。まるで県視学をむかえる女学校のようだ。

もっとも、その家々の怪奇的な壁一枚ひっぺがしてみれば、話はべつだ。なかで、何がおこなわれているか、しれたものではない。

そのとおり、「恋ぐるま」の二階の一室では、世にも妖しい光景が展開されていた。二階といっても、れいの恐ろしい惨劇の部屋ではなく、おくのほうの洋室だが、ダブル・ベッドひとつおけば、ほとんどいっぱいのその部屋で、冬というのに、半裸の女と男が、ドタンバタンと——しかも、ものうそうにとっくみあっているのだ。

「ねえ、じっとしててよ、ねえったら……」

といったのが、女で、

「かんべんしてくれ、もう、かんべんしてくれ。……」

と、うめいたのが男だ。

笑顔の女が、ここの女郎の鮎子で、恐怖と哀願のあえぎをはあはあもらしているのが——これは意外、あの荒廃の人、伴泰策氏ではないか。鮎子の飼っている白猫がベッドの隅に坐って、この光景を可笑しげにみていた。鮎子がまたとびついて、伴氏をおさえつけ、そのやせた顔のうえにベタリと大きなお尻をのっけて、両足で伴氏の両腕をふんづけてしまった。ぐりぐりとこねまわされるお尻の下で、伴氏の切なげなうめき声がきこえた。

「きみ……もしわしがお役にたったら……たしかにあとで、ヘロインをくれるね。……」

「ザッツライ」——そのとおり——

そして鮎子は、そのまま、まっしろな上半身をかさねて、伴氏の下半身を、しずかになめはじめた。そのあいだ、たえずたくみにからだをくねらせながら、どんな男でもたまらなくなるような甘美な吐息をあえがせて、

「アイ・フィーリン・グー」——あたい、いいきもち——

という。妖しいほどの白光(びゃっこう)のなかに、一種滑稽な戯画のかんじがあったこの光景が、さすがに凄惨なまでの雰囲気をかもし出した。……

数分後、すっくと鮎子がたちあがった。パーマの髪をぱっとはねて、

「――もう、よしたっと！」

怒りをこめた嘲笑をなげつけると、そそくさと身づくろいして、あとに背を波うたせている伴氏の姿をふりかえりもせず、さっさと部屋を出ていった。

階段をおり、けっとばすような足どりで中廊下をあるいて、ホールへ出てくると、いくつかの影がわだかまっているうすぐらい隅のボックスのほうにむかって、

「あの、おじいちゃん、やっぱりダメだわよ。――」

と、いった。

そのとき、おもてむきの扉がぱっとひらいて、つかつかとひとりの男が入ってきた。ソフトのかげで、眼をパチパチさせながら、

「ここに、ヒトミってひといる？」

「ヒトミちゃんなら、そこ」

里見記者である。鮎子は上り口に仁王立ちになったまま、

と、あごをしゃくった。隅から、ヒトミがけげんそうに立ってきた。

「あんた……あら、いつかの記者さん」

「あゝ、君か。おや、君もやっぱりここのひと？　本郷の家の女中さんじゃあなかったの？」

「なにサ。御用は？」

「きみ。……黒マスクの男、だれか、知ってるだろう？　あのマダムの殺された晩、ここにきた客のひとり。――」

ヒトミは、ぎょっとしたようだった。眼がキョロキョロうごいた。

「知らないわ」

と、いった。

「うそをつけ。いま新聞社に、きみが黒マスクを知ってると電話をかけてきた奴があったんだ」

「ほほう、それは奇ッ怪しごく」

隅のボックスから、のぶとい声がした。あかるい外光のなかから突然入ってきて、まだ眼が暗調応状態になれていなかった里見は、その声にひどくびっくりしたようだ。

「歓喜先生！」

荊木歓喜先生が坐っていた。まえのテーブルに、例によって、大きな薬瓶がひとつのっかっている。もうひとり、こちらをむいているジャンパーの男は、ここの若い衆紋ちゃんらしい。いままで、客のつまみのこした煎餅(せんべい)を罐(かん)にいれたやつをポリポリくっていたのが、その手をきつねつきのようにあげたまま、ポカンと口をあけている。

「里見さん。……電話とねえ。……ひょっとすると、それはまた、あの風呂のなかから出てくるような声じゃなかったか？」

そう歓喜先生にいわれて、里見はしかたなく、

「そうなんです。ぼくははじめてきいたのだが、あの声らしい。ちょうどひるごろ、ただ――ヒトミという女が、黒マスクを知っている――とだけいって、プツンときれちまったんですが

ね」

ヒトミは真っ蒼になって、両手を髪につっこんで、

「こわい！　あたい、そんなこと知るもんですか！」

えぐるように絶叫した。それから、急に、つぶやくように、

「あたい、あの晩、ずっと本郷のおうちにいたんですもの。それ、歓喜先生も知ってるわねえ。……あの晩だけじゃなく、その黒マスクのひと、あたいがあっちへいってる留守にばかりきたんですもの、知るわけないじゃあないの、それ、みんなにきいてちょうだい。……」

彼女は、恐ろしそうにホールの上のあの部屋をみた。さすがにあの部屋はあれっきりだれもつかっていない。彼女の可愛い口がひきゆがんで、

「だいいち、あの御親切なママさん殺した……かもしれないやつを、あたいがなんのためにだまっていると思って？」

だれもいないその二階の部屋から、眼にみえない妖かしの風がふきおちて、くらいホールをはいまわっているようだ。あの事件以来、知ってか知らずにか、なおこのホールにひっぱりこまれて人肉の取引をやっている夜ごとの浮かれ男どもは気がつくまいが、こうしてひるまみると、女王をうしなったこの店には、正直なもので、はやなんとなく落莫とした衰残のいろが感じられるようだった。

「そうか。……しかし、あの声は？　あれはいったいだれだろう？」

と、記者は肩をおとした。実は、ヒトミの否定を全幅的に信じたわけでもなかろうが、歓喜

先生がそばにいるとわかっては、ひとまず追及をやめて後退したようである。

が、歓喜先生は、それには気づかず、蒼い顔をして記者をみあげて、

「それより、そいつは、なんのために、そんなことをいったのかな？」

歓喜先生は、はじめて恐怖のうめきを発した。

「なにやら……恐ろしい悪意、悪念がかんじられる。……悪念はマダムの死で成仏したものと思っとったが……まだ、そいつがのこっているとみえる。……こりゃ、また、なにかが……だれかが……」

ふっと、どすぐろい霧みたいなものがホールに凝って、だれもがだまりこんだ。やっと口をきいたのは、里見記者である。

「先生、きょう、ここはすこしへんですね。遊廓ぜんたいが、いやにしーんとして……」

「なに、今夜、婦人議員団のおれきれきが御視察になるそうで、一同粛然とお待ち申しあげているのさ」

と、歓喜先生は破顔して、腰をうかし、

「どりゃ、ヒトミさん、そろそろ出かけようか？」

「おや、先生、どこへ？」

と、里見記者。

「曾谷精神病院。なに、先日見舞いにいった御入院中の御婦人から、お嬢さんにたのまれごとがありましてね」

と、いいかけて、ふとヒトミをみて、
「ところで、ちょっときくが、あの御婦人はどうしてあの曾谷病院に入ったのだっけね？」
「え、あの奥さま。——あれは、うちのママさんがあそこの看護人と知り合いだったからとききましたけど」
「どうしてまたマダムが、精神病院の看護人なんかと知り合いなんだ？」
ヒトミは笑った。
「先生、ここにはどんな男のひとだってくるわよ」
「あゝ、そうか、なるほど」
「あれはね、たしかまゆみさんがあげて、廻しをとって、いつまでもゆかなかったもんだから、あのひと怒り出しちゃったんです。そのときママさんがあやまってやって、そんなことから知り合ったんじゃないかしら」
「ふん」
と、歓喜はうなずいて、また話をもどして、
「ところが、お嬢さん、どうも風邪がぬけんものじゃから、わしが代って用足しをしてきたついでに、ここによったのさ」
と、いったが、そのついでに、目黒の伴家から泰策氏という廃物をひろってきて、ここの鮎子というキャンプくずれの姐御に、へんな依頼とともに彼を託したことまでは、歓喜先生はいわない。

——ところが、さてやってきた歓喜先生をみると、ヒトミがかけてきて、おねがいがあるという。数日まえからヒトミは、車戸のパパさんに狩り出されて廓にもどったが、「恋ぐるま」のあの部屋はさすがにいますぐつかえないので、いまはおなじ経営の、川っぷちにある「ふるさと」というもう一軒の店ではたらいていたのだった。たのみというのは、同郷の紋太が、お店の兇変におそれをなして、もう田舎にかえりたいといい出してきかないのだが、それをとめてくれというのだ。ヒトミが紋太にほれていることは歓喜も知っているから、いっしょになってひきとめているところへ里見がきたというわけである。
「ヒトミさん、ゆこうよ」
「さあ、あたい、やっぱり、よそうかしら」
「なぜ？　あのお嬢さんのお母さんじゃないか。おまえさん、知らん仲でもなかろう。いちどくらい見舞いにいってあげてもいいじゃないか」
「でも……」
「それに、あのひと、やっぱり娘ッ子をひとりつれてゆかないとさびしがるわい。だから、おまえさん、お嬢さんに代って……」
「ばかねえ、お嬢さんとあたい、月とすっぽん」
「さ、そこがきちがいのありがたさ。……」
「だって、精神病院、こわいんでしょ？」
「ここの女たちほどこわくはないって」

なぜか、歓喜先生はいやにしつこくヒトミを勧誘する。里見が、ふと思い出したようにいった。

「曾谷精神病院。……それじゃ、ぼくもいっしょにゆこうかな。……いや、ぼくの会いたいのは院長ですが」

と、いったが、里見もなぜか、あのへんな手紙のことはだまっている。先生はそんなことは知らないから、

「ほ。――あんた、妙に院長にこだわるね」

里見は狼狽した。

「いや、べつにこだわっているわけじゃないんですが、ちょっと……」

「里見さん、御注意までにいっておくが、万が一、あの晩院長がここへやってきたとしてもじゃね。ふとっちょの紳士がきたのは、八時半ごろ。ところで、そのあと久世Gメン氏がマダムに会っとるし、九時には女たちがマダムの声をきいとる。どうにもならんじゃないか」

里見がモジモジしているのを、歓喜先生はニヤニヤ見まわして、

「あんた、まだわしに怒っとるのかい？　なんか知ってて、かくしとることがあるらしいぞ。あはゝはゝ」

と、笑った。やっぱりおそるべき競争相手である。返事にこまって里見は話をそらした。

「ところで、先生、この十四日、道玄坂の万華楼で、れいの嘘倶楽部の会があるんですがね。いっしょに出かけませんか？」

「なにをいってやがる。あはゝはゝ、ごまかしちゃいけない。……そりゃ、あんたが、どなたとお会いになろうとわしの知ったことじゃあないが」

と大笑して、歓喜はまたヒトミをすすめ出した。

「さあ、ゆこうよ、ヒトミさん、それとも、いってるあいだに紋太が田舎へかえっちまうことが心配か？　まさか、夜逃げもすまいさ、なあ紋太君」

ヒトミはじっと紋太をみつめて、かなしそうな声でいった。

「ゆかないわね？　紋ちゃん。……あたい、ここにひとりぼッちになるとこわいんだよ。ママさんはもういないし……いてよ、ねえ、紋ちゃん。……」

紋太は、依然として、ポカンと口をあけたっきりだった。

歓喜先生は、とうとうヒトミをひっぱり出してしまった。よほどこの娘とのアベックに御執心とみえる。

ドヤドヤと「恋ぐるま」を出かかって、ふとたちどまってふりかえり、ボンヤリ気ぬけしたように立っていた鮎子に、なにやら薬らしい小箱をひとつ、ぽんとほうった。

「鮎公、ごくろう。……そいつを、あの役たたずにやってくれ。あのひとにも、ごくろうさん、と、よく礼をいってねえ」

「恋ぐるま」を去ってゆく三人の頭上に、白日のひかりのない赤い風車は、そらぞらしく四枚の羽根をひろげていた。……

曾谷精神病院の廊下を、里見とヒトミをつれて院長室のほうへあるいていった歓喜先生は、そこでめずらしい人間にあった。麻薬取締官久世専右（せんすけ）氏である。

「おンや？」

たちどまる歓喜をみて、

「おゝ」

と、久世氏も、はっとしたように顔いろをうごかした。が、歓喜先生にはあまりいい感情をもっていないらしく、すぐむっとしたかたい表情になるのに、歓喜先生のほうは全然へいきで、

「これは久世さん。変ったところで……どなたか、お知りあいのかたでも御入院？」

「いや、ちょっと……ここに入っておる麻薬中毒患者をしらべる役目でしてね」

それから、暗い笑顔とするどい眼をむけて、

「ところで、れいの事件、まだ犯人はわかりませんか？」

「わからない。警察のほうは五里霧中らしい。こりゃ、どうあってもあんたに、犯人になってもらわんけりゃおさまらんかもしれん」

と、歓喜先生は笑った。久世氏のれいの犯人志願のことをいったのである。久世氏は苦笑して、

「はゝ、御依頼があれば、いつなりと」

と、いった。そのまま会釈して、

「それじゃ、わたし、ちょっと院長に患者名簿をみせていただきますから。……」

と、ゆきかかる。里見記者は妙な顔をしてあとを見送り、

「はてな、あれは、例の麻薬Ｇメンじゃないですか？」

「左様」

里見はしばらくかんがえこんでいたが、すぐ歓喜に手をふって、

「じゃ、ぼくも、ともかく」

と、院長室のほうへ、なにやらひどく意気ごんだ足どりで去っていった。

歓喜先生はヒトミといっしょに、いつかの安西医師と鴉田看護人に病棟へ案内してもらったが、すこし心にかかることがあるらしい。例の特別室にとおされて、四谷の聖ミカエル教会の神父さまから、聖書と狐につままれたような顔とひきかえにもらってきた受取を、仔細らしいものごしで真弓夫人にわたしたあと、鼻をねじって思案していたが、

「ヒトミさんや、ちょっとここで待っててくれ」

といって、ノソノソ病室を出ていった。

ヒトミは涙ぐんで夫人をみている。扉のところには、鴉田看護長が厳然とたっている。ヒトミは、この男がときどき廓に遊びにきたことがあるのを知っているから、なにやら可笑しい気がする。が、彼女は笑うような余裕はなかった。この夫人には、いくどか本郷の車戸家で逢ったことがあるが、そのとき、なんて神々しいほど美しく、いたいたしいほど清らかな奥さま、と思っていたひとが、いま虚（うつ）ろな眼でぽかんとじぶんをみつめたっきりだまっているのをみると、いつかママさんがくやしそうに、「わるい旦那さまだねえ！」とつぶやいたあの件という

ヨボヨボの男が、ほんとにまざまざと悪魔のように思われ、それにつけてもあのお嬢さまが、胸もいたくなるほど可哀そうにかんがえられるのだった。

「奥さま。……おきのどくに……」

そう、小さくつぶやいたとき、看護婦が入ってきて、「あの、お電話ですけど」といった。

「――え、あたいに？」

「えゝ、恋ぐるまのヒトミさんとか。……」

ヒトミはまっかな顔になった。看護婦につれられて、小ばしりに、病棟から玄関のほうへ出ていった。

「あ、ここ？」

廊下のはしの電話口には、歓喜先生がとりついて、だれにかけているのか、なにやらしきりにうなずいていた。

「いいえ、あなたには、むこうのお電話」

廊下のはんたいのはしに、もうひとつの電話があった。まあ、こんなところへ、恋ぐるまのヒトミだなんて、いったいだれがかけてきたのだろう？

「もしもし、あたい、ヒトミ、だあれ？」

声はよくきこえなかった。遠くから、ぶつぶつと、気泡のようになにかつぶやいていたが、そのなかから、やがておし殺すような声がきこえた。

「ヒトミ。……あの歓喜とやらに……黒マスクはだれかをおしえたら、承知しねえぞ。……」

電光のように、彼女のあたまに浮かんできた顔があった。彼女は、知らずして、驚倒すべき名をさけんでいた。

「あんた……紋ちゃん？　まあ、やっぱりあの黒マスク、紋ちゃんだったのね！」

「――そうだ。おめえ、やはり知ってたんだな？」

「ううん、ずっとあとで気がついたの。だって、ママさん、あたいがいいっていうのに、むりにお店から寮へやったり、本宅へひっぱったり、その晩にかぎって、ママさんのところへ黒マスクの若い男があらわれるってきいたもの。もしかしたら……と、ふっと思っただけなんだ。それに、その日にかぎって、あんた、へんに浮き浮きしていたから。――」

ヒトミは突然気がついて、まわりをみまわした。あたりには、だれもいなかった。が、声がふるえた。

「あんた……やっぱりママさんとあいびきしたのね。ママさん、ひどいひと！」

「…………」

「そして、あんた、なぜママさんを殺したの？」

「…………」

「ケンカしたの？　ねえ、なぜだまっているのさ？　あたい、死んでもだれにもいわないから……」

「…………」

「田舎にかえっちゃあ、イヤ。あたいかえるおうちがないもの。ねえ、かえると、あたい、み

んなバラしちゃうよ！」

いつしか、電話はきられている。うなされたように受話器をダラリとさげたヒトミは、そのときふとむこうからノソノソあるいてくる歓喜先生の姿をみて、あわてて受話器をかけた。

「ヒトミさんや、だれからの電話？」

ヒトミは、唇をふるわせて、沈黙していた。歓喜は微笑した。

「紋太か」

「ちがう」

「そのとおり。いまのは、わしだ」

ヒトミは、ほとんどのけぞった。白痴みたいに茫然とたちすくんでいるのに、歓喜はひとりごとのように、

「わしは、もうすこしはやくそのことに気づくべきじゃった。いまおまえさんがいったように、おまえさんが恋ぐるまを留守にした夜、かならず黒マスクがたずねてくるということを。……おまえさんが、何かを知ってかくしておることは感じておった。しかし、さっきの新聞記者のことばをきくまでは、そのかくしている何かが黒マスクのことだとは、気がつかなかったんじゃ。わしは、さっき恋ぐるまで、はじめてふと気がついた。……しかし、なみたいていのことじゃあ、おまえさんは白状すまい。そこで、わざとしつこく、おまえさんをつれ出したのじゃ。紋公は、心配そうな顔をしておったっけな。その心配そうな顔をみて、おまえさんはそれとなくおどしておったっけな。……だから、いま、とっさに本音をはいたのじゃ。すまん。……ヒ

トミさんのような気だてのいい娘をひッかけて、はなはだ相すまん。……」

歓喜先生はおじぎをして、

「ところで、ものはついでだが、もうひとり白マスクは知らんかね？」

「知らない。それは、ほんとうに」

ヒトミの顔は、なお恐怖のために硬直していた。

「先生。……それじゃあ、あの、いつかのパパさんを呼んだのや、さっき記者に電話をかけたのは、先生？」

「いや、わしのは、いまだけ」

と、歓喜は笑って、そして暗然たる眼でヒトミをながめた。

「そうか。いつか、マダムがとくに愛しとった人間、またはマダムをとくに愛しとった人間は知らないかときいたとき、おまえさんの気づいたことはそれじゃったのか。……こわいな、ほれた娘ッ子のカンというものは」

感嘆した。

「大警視庁何千の刑事のカンがもてあました堤が、娘ッ子のカンという穴ひとつでくずれるとは」

ヒトミは泣いた。両手で顔を覆った。

「紋ちゃん、あたいをかんにんして……先生、紋ちゃんをゆるしてやって……」

「うむ、ま、これからいって事情をきこうじゃないか。まだ紋公かどうかはわからないんじゃ

から」
　そのとき、むこうから、久世氏と里見記者をおくり出してくる院長のすがたがみえた。泣いているヒトミをみて、里見がけげんそうにたずねてきた。
「おや、どうかしたんですか？」
「うむ。黒マスクの男がわかったよ」
　三人の男は、電撃されたようにたちすくんだ。ヒトミは失神しそうだった。歓喜先生、いわないでちょうだい、それをいわないでちょうだい！
　しかし、事態はそうはゆかなかった。ことはいかにも重大であるが、ヒトミは、それより、大人の男というものに——廓では知らない男の恐ろしさに圧倒されてしまった。
「なんですって？　黒マスクの男が、わかった？」
「左様、あれは、恋ぐるまの風呂たきおとこ、紋太という若い衆じゃったらしい。これからかえって、たしかめてみるつもりですが」
　院長が咳をして、蒼白な顔で微笑した。
「恋ぐるまの殺人。……新聞でみていただけですが、思いがけなくこのわたしがその登場人物のひとりに擬されていたことを知って、実ははなはだめんくらっていたところでした。先日、この記者のかたが、わたしに妙なことをきき、また安西君に妙なことをきかれたそうだ。なんのことかと不審にかんじていたら、きのうは警察のほうからも、わたしがその殺人当夜恋ぐるまにいったのじゃないか、としらべにきた。さいわいわたしは当夜ここにいたというアリバイ

をみとめていただいたので事なくすんだが、……それは、是非、わたしも実際に登場しなければ割がわるい」
　院長は、声をたてて笑った。
「それに、いまこの記者君に承わると、まだその嫌疑がはれておらんらしい。——是非とも、そのふとっちょの紳士をみたとかいう女に、わしを首実検してもらいたいといっておったところです」
「わたしも関係のない事件じゃない」
　と、久世が沈鬱な声でいった。
「わたしも、その黒マスクの男とやらをみせてもらいましょう」
　里見記者は、なにやら空気がもれた風船みたいに、悄然としているふうにみえた。歓喜は、ニコニコ笑ってその肩をたたいた。
「あんたは探偵じゃないんだから、あんまりガッカリしなさんな。特ダネさえせしめれば、本望とせんけりゃあならん。いろいろといいことを教えてもらって、ありがたいことでありました。だから、それ、約束どおり——ギヴ・アンド・テイク！」

第十章　墜ちた人

まさか、夜逃げもすまいさ、なあ紋太君。

歓喜先生にそういわれた紋太は、しかし、まさにその夜逃げをやらかそうとしていたのである。

紋太のねぐらは、「恋ぐるま」にはなく、もう一軒の「ふるさと」のほうにあった。この店は、川をうしろにたててあるので、往来からみると二階だてだが、川のほうからみると三階になっていた。三階のいちばん下は、部屋というより物置みたいになっていて、小さな窓には鉄格子がはまっている。ここには、ボロボロになった蒲団や、客がわすれたり借金のかたにおいていった衣類のうちで、売るにも売れなくなったものや、店をとび出した女郎の箪笥とか鏡台とかが、ごたごたつめこまれているのだが、どうじに、そのあいだのせまい空間が紋太のねどこだった。毎日、午後からあくる日のあけ方まで、彼はこの「ふるさと」と「恋ぐるま」のあいだをいそがしく往来して、風呂を焚いたり、食事の買い出しにいったり、掃除をしたり、用心棒になったり、女たちのたのむ夜なきそばや果物ややきいもやコンドームやその他の買物の

用を足してやったりする。だから、この冷たいねぐらにもぐりこむのは、いつも日のいろが白い泥のような午前中だけだったが。

その紋太が、勤務時間ちゅうでも最多忙な宵闇どきに、大きなトランクをぶらさげて、その物置からほそい階段をホールにあがってきた。入口には背をみせて、女たちが人形みたいにならんでいる。跫音をしのばせて、そっとホールのよこの戸口から路地へ出ようとしたとき、

「ほい、どこへゆくんだな、紋公」

と、声をかけられた。

ふりかえって、ぎょっとした。ホールに、歓喜先生とヒトミとあの新聞記者と、それからもうふたりの男がたっていた。

「いえ、その……ちょっと」

「ちょっと、夜逃げか」

歓喜先生は、ニヤニヤしている。

「車戸の大将にゃことわったか」

紋太が口をもごもごうごかしてなにか弁解しようとしたとき、おくの帳場から、けげんな顔で猪之吉があらわれた。ちょうど、この店へきていたところだったらしい。もういけない。

「おや？　これあ先生、なにか御用で？」

「いや、大将、不粋な用だが、――実はあの晩マダムをたずねたれいの黒マスクが、どうやらこの紋太君らしいと思われるふしがありましてね。そいつをたしかめに、ちょっと参上」

「へっ、あの黒マスクが？……この紋太！」

　車戸猪之吉はぼう立ちになったが、まだその意味が解しかねるといったふうな顔で、阿呆みたいに歓喜先生と紋太を交互にみくらべている。

　歓喜先生は、伏眼になって、

「黒マスクの男は、秋ごろから四五回恋ぐるまにきたとか……いまみてえに真冬ならしらず、秋ぐちにマスクはおかしいといえばおかしい。そのおかしい黒マスクを、恋ぐるまの女たちやそのちかくの女たちだけみているが、廓じゅうほかの店の女はみたことがないというのも、なるほど道理だ。黒マスクをみたのは、恋ぐるまとこのふるさとのあいだの店の女たちだけだろう。……」

　紋太の美しい顔が、恐怖にねじれた。

「先生、ちがう。……なんのことだかわからねえや。……」

「わからねえなら、そのトランクをあけてみろ。なにもかも、いっぺんにわかるさ」

　歓喜先生は笑った。

「おそらく、そのなかにグレイのギャバジンの洋服と黒眼鏡、黒マスクが入っておるじゃろう。そいつをきて、恋ぐるまに浮かれこんでみろ、女どもがたまげるぜ。鮎公なんぞ、どっかでみたことがあるような気がするとくびをひねっていたっけが、こいつあわからなかったのもむりはねえ。マダムへのりゅうとしたお客が、なんぞしらん、てめえらがふだん鼻でコキつかっている風呂たきの紋公とは」

「……ヒトミ、てめえ……しゃべったな？」

　紋太は、憎悪に白くなった眼でヒトミをにらんだ。

「どうも、こないだから、チクチク妙なことをいいやがると思っていたが、やっぱり知っていやがったか？　ど、どうして知った？」

　ヒトミは身もだえした。

「どうしてって……ただ、そう思っただけなの。……でも、やっぱりそうだったのね。……紋ちゃん、あたい、わるかった。か、かんにんしてよ。……」

「この野郎！」

　泡をふいてヒトミにとびかかろうとした紋太を、このときいきなりよこから車戸猪之吉がなぐりつけた。

「こ、この畜生！　よ、よくも、よくも……」

「旦那、かんべんしておくんなさい」

「にょ、女房をなぶり殺しにされて、かんべんもへちまもあるものか。こ、殺してやる、この鬼め！」

「旦那、おいら、マダムを殺さねえ。あいびきしただけだ。……」

「なにをいってやあがる。この畜生、八ツ裂きにしてやるぞ！」

　昼もきれ、血だらけになってうずくまっている紋太に、気のちがったけもののように猪之吉はとびかかって、ふみにじり、なぐりつけた。

「待て待て、大将」
　歓喜先生はかけよって、猪之吉をひきはなした。心臓肥大症のきみがあるから、はあはあいっている。
「待った待った、こんなところで、男ふたり、とっくみあってちゃ、こわいおばさんがたが眼をむくぜ。いまここへくるとちゅう、ちょっとみたのだが、女代議士の一行が、廓のはしからしずしずと八文字をふんで御閲兵ちゅうだ。……それに、いま、紋公、みょ、みょうなことを口ばしったぞ。——おい、まて、大将、折檻はあとまわし、ちょっとおくの帳場に入って、紋太の白状をきいてやろうじゃあないか？」
　帳場は、まんなかに長火鉢とちゃぶ台をおいた六畳の部屋だった。ちゃぶ台のうえには、いままで猪之吉がみていたらしい伝票とそろばんがあった。壁には、柱時計のよこに、「各人稼高表」の名札がかけならべてあり、また小さな仏壇もあって、そこに二つ三つの位牌と、そしてマダムの大きな写真がまつってあった。位牌は、ここで死んだ不幸な遊女のものらしく、おそらく生前のマダムのこころづくしであろう。そしてマダムの写真は、哀れな夫猪之吉の思いつきにちがいない。実は、その写真は、「恋ぐるま」にも、吉原の三軒の店にも、どこにもおなじものがかかげてあるのである。スターリンが死ぬとすぐ、マレンコフ、或はブルガーニンの写真ととりかえるようなわけにはまいらないとみえる。正面にはふたつの窓、右には赤いカーテンがひいてあるが、左の窓ガラスが、ネオンの遠明りのいろもなく暗いのは、窓のむこ

うは裏の川だからであった。やりての婆さんは、どこかへ用足しに出かけたらしい。
　美しい、なぞのような微笑をたたえているマダムの写真の下に、紋太はひれ伏し、たたみに涙と血をおとしながら告白しはじめた。
「——おいらがここにきてから、もう三年になります。村でなかのよかったヒトミの——ほんとうの名は、おせつ、ってんですが——両親が山で伐採ちゅう、大きな木の下におしつぶされて死んで、おせっちゃんがお女郎になって東京へくるので、それを追っかけてきたんです。ここのマダムのところへは、冬場、よく村の男たちも出稼ぎにくるから、べつに知らないしごとでもなかったんです。
　はじめは、なるべくはやくフンギリをつけて、村へかえる決心でいたし、どっちかといえば、マダムをうらめしいくらいに思ってきたんですが、そいつがだんだんかわってきました。……ここにきて、ズルズルにくさっちまうのは、女ばかりじゃあありません。男だっておんなじです。
　そりゃ、旦那のまえでなんですが、男としてあんまりりっぱなしごとだとは思っちゃいません。お茶ひきの女たちの背なかをながしたり、ヒステリーの八ツあたりのひきうけどころになったり、ときにゃ、へんなもののついた女郎のズロースまで洗わされる。まあ、男のカスのやるしごとでしょう。女の海のなかにいながら、水一滴のむわけにゃいかねえ。ときどき、客ののみのこしたビールなんかをぬすみのみするのがせきのやまだ。……もっとも、ほんとのことをいえば、おいらにちょッかいを出してくる女もいないじゃなかった。朝、客のかえったあと

で、そうじにゆくと、まだふとんのなかにねている女に、いきなりひきずりこまれて抱きつかれたこともあるし、キスくらいなら、三日にいっぺんくらいは、だれかとやっていた。おいらはこれでもお面のほうならちょっとうぬぼれがあるし、なんたって百姓よりはからだはらくだし、もう二度と村なんかにかえる気はなくなってました。

いえ、旦那。……そんないたずらをしたのは、はじめのうちだけなんです。おいらもズルズルにくさっちまったが、それ以上に、女たちの腐れがおっかなくなってきた。いつもじだらくにねそべって、うまいものくって、やれきのうの客はスケベーでなにをした、かにをした、などぬけぬけと——そりゃあエゲツねえことをしゃべって、はなしといえばただそれだけ。むろん、おいらは女たちをばかにしちゃいません。可哀そうに思っていたんです。が、そんな女たちをみて、こいつらはここにきてこうなったんじゃあねえ、どんな女もおんなじようにかわってくるところをみると、もともと女というものが、こういう地のもんだ、とかんがえてきました。可哀そうだが、おっかねえもんだ、と思いました。こいつあちょうど、ここの女たちが、男ってものはみんな恥しらずのドスケベーだとかんがえているのと、おんなじわけあいのものかもしれません。とにかく、おいらは、もうとても世帯なんかもてねえ男になっちまいました。相手がヒトミだろうがなんだろうが、もうごめんだと思いました。

それじゃあ、なにをめあてに生きてるかってえと——めあてなんかなくなったって、ズルズルベッタリこうしてここにいるよりほかはねえ男にはなっちまいましたけれど——それが、たったひとつあった。

マダムなんです。

旦那。……かんべんして下さい。おいらはマダムにほれちまいました。あのマダムだけはちがう。おいらは、女郎はもちろん、かたぎの女だってこんりんざい信用しねえが、あのマダムだけはとくべつ製だ。……そのことは、旦那だって歓喜先生だって、よく御存知でござんしょう。女のくされ水みてえななかにいるだけに、毎日、いきいきとしてやってくるマダムのすがたは、おいらにゃ、まるで人間ばなれしてみえるほど水ぎわだった女にみえた。……

かんがえてみりゃ、ほんとにおかしい恋だ。犬が奥様に恋をしたようなもんだ。むろんかた想いです。あのマダムは、女郎たちはほんとに可愛がったが、おいらたち傭人には、別人みてえにあしらいがシャッキリしていた。この掃除あなんだ、用が足りてねえのはいねむりしてたかなんて、おいらなんか、十日のあいだ、ひっぱたかれなかったことあいちどもねえくらいです。それでも、おいらは腹なんかたたなかった。こいつあ、おれ以外の、吉原にいる三ちゃんだって、プー公だっておんなじだったでしょう。マダムの人徳だ。……しかし、おいらは、それどころか、ひっぱたかれると涙がでるほどうれしくって、ゾクゾクして、そのたのしみで毎日くるくるはたらいてたようなもんでした。……

それじゃあ、マダムは、おいらの想いなんか、ぜんぜん気どらなかったかというと——ながいあいだのことだから、そのうちかんづいてきたらしい。もっとも、そういうかんは、あのマダム、すごいくらいいいんです。いつか、だれもいないとき、なんかのはずみで、ニヤニヤしながら、おいらの耳に口をくっつけて、「紋公、ばかなことをかんがえてると、パパに殺され

るよ。――」といった。おいらは、「へ？」といったっきり、二の句もつげなかったが、その晩は、この下の物置のつめたいふとんのなかで、なんだか涙がでて涙がでて、まるで湯気にうだったようなきもちになったもんです。

　ながいあいだ、それっきりでした。あいかわらずマダムは知らあん顔してるし、けいきよくひっぱたくし――それが、この秋ごろから、ときどき、ちらっとおいらのほうをみる眼つきがかわってきたような――妙にあわれぶかい眼でおいらをみていることが、ちょいちょいあったんです。

　おいらだけのかんちがいかな、と思っていたら、たしかに去年の秋のはじめでした。マダムがおいらにそっといった。

「紋公、つくづくとおまえが可哀そうになったよ。いちど、おまえを成仏させてやろうかねえ？」

「へ？」

「どうも、あたしゃ、ねざめがわるいよ。男のボンノウをはらしてやるのが、あたしの信心なんだからねえ」

「へ？」

「ただ、ヒトミだけにゃわるい気がするけれど――なるほど、こうしてみりゃ、ヒトミがあつくなるのもむりはない。きれいな顔してらあ。ほ、ほ、ほ、ほう」

　マダムは、おいらの頰っぺたをつっついて笑いました。

　それがはじまりなんです。ところが、あいびきする場所が、マダムらしくひとをくったところでした。もっともマダムの顔は、どんな一流のホテルだって、温泉マークの連込宿だって、その方面にゃ東京じゅう売れてるし、ふたりが箱根や熱海にゆくとばれそうだし、だいいちマダムにそれほどの気はない、とにかくいいかげんな場所じゃあ、なんのはずみでマダムを知ってるものとぶつからないでもない。そこで、いちばん手軽に――マダムが「恋ぐるま」にくる夜をつかって、マダムが合図してくれると、おいらが「ふるさと」にかけもどって、あの背広をきこみ、黒眼鏡に黒マスクをつけて、マダムのお客のような顔をして「恋ぐるま」にのりこむ。――という、まるで探偵小説みてえな思いつきを、マダムがかんがえだしたのでした。

「恋ぐるま」でつかう部屋は、ちょいちょい、ヒトミがいないときつかうあのホールの上の部屋。そのときにむりにもヒトミを留守にさせたのは、ヒトミがいるとかんづかれるという心配のほかに、ふたりともあいつにちょっと気がさしたからなんです。むろん背広はマダムが買ってくれました。

　しかも、マダムがいうんです。

「どうも、おまえが風呂たきの紋公だと思うと、なんだか可笑しくなって、きぶんがでないねえ」

「おいらも、マダムだと思うと、なんだかおそれ多くって――」

　それはほんとうでした。そんな相談をしているときでさえ、すれっからしのおいらが、ガタガタふるえるようなんです。

「それじゃ、まっくらにしてあいびきしようじゃないの。あたしはおまえを、ただりっぱなからだをした若い男だと思うことにするよ。おまえはあたしを、ただ——女だと思っておいで。なに、人間というものは、なにもみえないまっくらななかで色事をするときは、ふしぎになんとでも思えるもんだよ」

こんな奇妙なあいびきが、秋から四五回ありました。

おいらはいつも無我むちゅうでした。ひかりが入らないように、外のネオンをけして——まっくらななかで、マダムもおいらもよく知っている女郎たちのあたまのうえであいびきをする。——それだけでもゾクゾクするようなきわどい芸当なのに、そのうえ、マダムは、ここの廓じゅうの女のだれもがタバになってもかなわねえような、そりゃあなんともいいようのねえ、スベスベした、蛇みてえにミリョクのあるからだをしていました。おいらは、たまらなくって、事はいつもはやくすんだ。——あのマダムのようすからみると、とても旦那ひとりじゃあおさまらねえのもむりはねえ、とおいらは思いました。いまからかんがえると、おいらのゆく前後に、やはり白いマスクをつけた男が出入りしているって、女たちがしゃべっているのを小耳にはさんだことがありますが、してみると、マダムのまおとこした相手はおいらばかりじゃなくって、案外そいつもそうじゃなかったかとかんぐりたくなります。——が、なんにしても、それをやきもちやくほどおいらはぜいたくいえた義理じゃあありません。いつもたった二十分か三十分のせかついたあいびきじゃあったが、おいらは死ぬほどあのうれしさがわすれられそうにありません。

そして、そのあくる日に、マダムがきたとき、なにくわぬ顔をしてて、ちらっとみせる、いたずらっぽい笑い顔の、ふるいつきたいほど色ッぽかったこと。……

——あっ、旦那、かんべんしておくんなさい。旦那にゃわるい。わるいと思って、ザンゲのつもりでおいらはなにもかもぶちまけてるんだ。しかし、おいらはマダムを殺したりなんかしません。あの晩のことは、まったくなにがなんだかわからねえ。

あの晩。……おいらは、やってきたマダムに、「今晩、九時すぎたら——いいよ」とささやかれたから、ここんところ一ト月ばかりさっぱり沙汰がねえんで、おいら、イライラしていたところだったんで、こおどりして「恋ぐるま」をとび出しました。ちょうど、ふとっちょの紳士が階段をころげおちてきたときです。そして、「ふるさと」で、れいによって身じたくをして、いわれたとおり九時すぎに、なんの気もなく、いつものようにのりこんでいったわけなんです。

なんの気もなく……なんのこともありゃしませんでした。いつもとおんなじでした。おいらとマダムはまっくらななかであいびきをした。……それだけです。それが、あとで、そのすぐあとで、あんなむげえ屍骸（しげえ）になっているなんて！

おいらは殺さねえ。マダムを殺したやつをたたっ殺してやりてえくれえです。おいらじゃないとすると……おいらはてっきり坊っちゃんだと思ってた。おいらのあとできた奴が坊っちゃんでなかったら、おいらはドスもってなぐりこみをかけたかもしれねえんです。が、坊っちゃんだとすると、ひょっとしたら坊っちゃんがマダムとおいらの色事をかんづいて、かっとなっ

て殺(や)っつけちまったのかもしれねえ。そうすると、おいらのほうも、なぐりこみをかけるどころか、くわばら、くわばら。……

それが、どうやら坊っちゃんでもねえらしい。おいらにゃ、まったくわけがわからねえ、わからねえが……そうなると、坊っちゃんのまえにいったおいらのことがばれちまうと、もうどこへ出たって、おいらの逃げ口はねえと思いました。ところが、どうしたわけか、伏兵は意外なところにあって、ヒトミの奴が、黒マスクはおいらだとかんづいたらしい。とにかく田舎へにげちまおうとすると、あの野郎、チクリチクリと妙なことをいう。しかも、きょうです、どこのどいつか見当もつかねえが、黒マスクはヒトミが知ってると、新聞社に電話をかけたおせッかい野郎があるそうで、もうたまらねえ。たまらなくなって、たかとびしようとしたわけですが……先生、おいらはほんとうにマダムを殺さねえんだ！

あゝ、みんな、おいらを、あんな眼でみてら。おいらのいうことを、だれも信用してくれねえのか。ああ、みんなおいらを、あんな眼でみてら！

――マダムは墜ちた。アリンス国女王、青楼の賢夫人は墜ちた！

はいつくばった紋太を、五人の男とひとりの女は、おたがいに顔をみあわせ、それから、痴呆(ちほう)的な眼で壁の写真をみあげた。その写真の、なぞの微笑をうかべた華麗な顔が、一瞬に、ぞっとするほど淫蕩(いんとう)な印象にかわったようだった。

たちまち、車戸猪之吉がうなるようにいった。

「なにをいってやがる。この往生ぎわのわるい野郎め」

「ちょっと、待て。少々ききたいことがある」

と、歓喜先生がせきばらいして、しゃがれ声でいった。

「紋太、おまえが、このふるさとへもどって、またもとの紋公になり、なにくわぬ顔で恋ぐるまにかえっていったとき、たしかに坊っちゃんの姿をみたね？」

「へえ、あとを追っかけたってえのはうそですが、みることはたしかにみました。まるで酔っぱらいみてえに、フラフラ出てきた高校生のかげを。――」

「そうか。それから、もうひとつ。……ひどくきわどいことで、……きくのも、わしゃはずかしいが、……おまえ、あの晩、マダムがメンスじゃったことを知っておるか？」

「知りません。へっ、そうだったんですか？」

「それ知らんで、あいびきするとはおかしいじゃないか」

「へえ。なにしろ、マダムは、まさか紋公のこどもまで生めないやね、と笑って……その、コンドームつかわせましたから、そのへんは、どうも。……」

「コンドームは……おまえ、じぶんでとらなかったのか」

「いいえ、マダムが手さぐりでとってくれました」

くくっとまた猪之吉が、異様にうめいた。闇をはうほの白くも濃艶(のうえん)なマダムのゆびを想像したにちがいない。

歓喜先生は、あいまいな顔つきで、

「ははあ、そうすると、男にゃわからんこともあり得るか。ほほう。……」
そのとき、里見が、「ちょっと。……」と、手をあげて制した。あごをしゃくるので、戸のあいだからホールのほうをみると、入口に整列した女郎たちのまえを、いましも菊花のバッジをつけた婦人代議士の一行がとおりかかって、おごそかな声で質問している。
「あなたがた、こういう商売してて、恥ずかしいとは思いませんか？」
「――おもいます。……」
蚊のなくような、シオラシイ声だ。
「女性の尊厳をみずから蹂躙するものとは思いませんか？」
「――よく、わかりません。……」
「いいですか、こういう反道徳的な職業に従事していると、きっと心までけがれはてた、救われない女になってしまいますよ。苦しくっても、歯をくいしばって、つよく正しく生きようと努力をつづけていれば、いつかかならず神さまがお酬いになるのです。……」
「――すみません。……」
「労働条件は不満ではありませんか？」
「――べつに。……」
「とりしらべているのじゃありません。正直におっしゃい。みなさんを叱ったのではありません。みなさんは、ほんとはちっともわるくはないのです。あなたがたをこういう破廉恥な肉体の奴隷においこんだ政治がわるいのです。……」

里見記者が苦笑した。
「政治はだれがしていると思ってるんだ？……しかし、こいつは記事になる。婦人議員売春街をゆく当夜――闇の女王の仮面墜つ！　とね」
「あのおかたたちは、くらしの金をめぐんでやりさえすれば、女たちは救われる、とかんがえておいでなのかな」
と、歓喜先生はうつむいて、ひとりごとをいう。
「――おそらくは、そうはゆくまい。あの女たちは、くらしの苦しさだけでここにきたのじゃない。愛に飢え、孤独をのがれようとしてここにきたのだ。……」
里見記者は時計をみながら、
「そして、恋ぐるま殺人事件の重大容疑者曝露さる、か！」
そして、代議士たちの一行が店さきを去るのを見すまして、猟犬のようにホールへとび出してゆき、すぐ階段を下の物置にかけおりていった。記事にするため、問題の容疑者潜伏の場所をみにいったのだろう。
荊木歓喜がつぶやいた。
「もし、紋公のいうことがほんとうだとすると……」
「そんな、ばかなことはない！」
と、久世取締官が、きり断つような声でさけんだ。
「その十分まえに、わたしがちゃんと生きているマダムに会ったことはたしかだが！」

「実に、信じられんほどふしぎなことですな。……紋公や、ときにおまえは、ふとっちょの紳士をみて笑ったといったが、その紳士は――」
と、いって、曾谷博士の顔をみた。紋公はふっと院長をみて、
「あっ、このひとです！」
とさけんだが、急にまじまじと見なおして、
「おや、ひげがない。……」
「ひげは、この元旦に剃ったのだがね。……よくみてもらいたい」
と、博士はニコヤカに微笑して、顔をつき出した。紋太はだんだん自信をうしなってきたようだった。
「似ているが……ちがうようにも思います。あの旦那は、ちらっとみただけですが、もうすこしふとっていたようでした。……」
曾谷博士が声をたてて、会心の笑いを笑おうとして、急にまた咳きこんだとき、入口のほうから里見がのぞいて、
「久世さん」
と呼んだ。久世Gメン氏は、けげんな顔でちかよっていって、戸の外でなにやらヒソヒソ話をしていたが、すぐきびしい表情でもどってきて、
「御主人。この下の物置とかに、まさか麻薬類がたくさん隠匿してあるようなことはありますまいね？」

と、かみつくようにいった。猪之吉は、ぽかんと口をあけて、
「へ？　そ、そんなことは、けっして……」
「いや、それでも、いまこの記者君が、この下からこんなものを見つけ出してきたといっておりますぞ」
掌のうえにのっているのは、新しい「モルヒネ」の注射液の小箱だった。猪之吉が口をぱくぱくさせているのをしりめに、久世取締官は、恐ろしいいきおいで部屋をかけ出し、ホールから下へおりていった。
里見記者は部屋へ入ってきて、あらためてマダムの写真をみながら、
「先生。――マダムに対する観念が、いささか――見ようによっては、根本からくつがえりましたね。女神どころじゃあない。……ちょっとお面のいいことだけで、風呂たきおとこをつまみぐいする。……女郎屋のマダム相応の行状ですな。しかし、そうとうな淫婦だったことはたしかだ。……」
「先生！」
突然、紋太が顔をふりあげた。眼が異様に血ばしって、うめくようにさけび出した。
「先生。……いまいったのは、みんなうそです。……」
「うそ？　マダムとのあいびきもうそだというのか？　なら、その洋服やマスクはどうした？」
「いえ……そいつはほんとですが……あとがうそで……マダムはもう殺されていました！　お

いらがいったとき、マダムはもうバラバラになっていたんです。……」
「それじゃ、おまえは、そのとき、なぜだまってたんだ？」
「そ、それは、……」
紋太はすぐシドロモドロになった。しかし、それにはだまるわけがある。黒マスクの男がじぶんだとは、紋太のあえて公表したくないことだからである。しかし、それにしても。……
「――おい、紋公、もしかするとおまえは、マダムを殺した奴を知っているのじゃないか？」
紋太はイヤイヤをした。あたまをかきむしってもだえた。しかし、いつまでたっても、ことばはひとことも口から出てこなかった。
「先生」
と、里見がすすみ出た。
「五分ほど、この男をぼくに貸してくれませんか？」
「どうなさる？」
「ちょっと、或ることをききたいんですが、ここじゃまずいので」
ジロリと猪之吉をみて、
「大将、二階にどっかあいた部屋がないかね？」
「そりゃ、今夜はあの代議士がくるってんで、商売のほうはジシュクしてるつもりなんで、女たちゃみんな店さきに出てるし、どこもガラガラみてえなもんですが。……」
「このまうえが、あたいの部屋だけど……」

と、ヒトミがかなしそうに紋太をみながらいった。
「そう、それはよかった。それじゃ、そこを借りよう」
「記者さん、あたいもいっちゃわるい？」
「いかん！　きみはいかん。紋太君、ちょっと。――」
紋太は、まるであやつり人形みたいに、フラフラと記者にひっぱられて、上にのぼっていった。
院長がまたしわぶきをしていい出した。
「いまの男の告白した恋。……少々、マゾヒズム的傾向がありますな。どういうわけでしょうか、戦後の若者は、中年女に可愛がられたいという欲望がつよいようで。――」
表のほうで、いっせいにさけぶ声がした。
「バ、カ、ヤ、ローッ」
そして、どっと女郎たちの笑う声があがった。いうまでもなく、遠くの町角にきえた婦人代議士たちを嘲笑したのである。
院長は苦笑した。
「女のほうが、このごろは男性的で。――」
「いや、あれは代議士にあくたいをついたようで、実は、知らずしてじぶんたちを自嘲しているのです。……」
と、歓喜先生が弁解してやっているときである。ほんの四五分まえに上へあがっていったは

ずの里見が、ただならぬようすで階段をかけおりてきた。入口の女たちにむかって、口ばやになにかきいている。女たちがくびをふると、またこちらにかけもどってきて、

「先生、いま、へんな奴のかげみませんでしたか？」

「みないね。どんな奴？」

「いや、ぼくもみないんですが、実はいまこの上の部屋で紋太に或ることをきいてると、ドアの外で、だれかが――笑ったような、ためいきをついたような気がしたんです」

「な、なにい？」

「ドアをひらいてとび出したが、廊下にゃだれもいない。はてな、ぼくのききちがいかな？……」

そのとき、しゃべっていた里見が、

「あっ」

とさけんだ。川のほうで、なにか大きな水音がきこえたようだった。窓のほうをむいていた彼の眼が、かっと大きくひらかれている。どうじに、柱時計が鳴り出した。七時だ。

「ど、どうした？」

「いま、そこの窓を、さっとなにかが上から下へ――」

みんな、はっとしたようにふりむいた。窓は暗々と冷たかった。が、歓喜先生は愕然とちんばの足をはねあげている。

「しまった！」

彼らはいっせいにどっとホールへはしり出した。ちょうど、階下の物置におりていた久世氏がホールへあがってきたが、これもつりこまれて、二階へかけあがる一同のあとを追ってきた。

はたせるかな、ヒトミの部屋から、紋太はきえていた。ただ川にむいた右左の窓が、大きくひらいているばかりだった。そして、ほかのどの部屋々々にも、紋太の姿はみえなかったのだ。

ひらいた窓から水面を、久世氏はキョトンとした顔でのぞきこんで、

「なにか、落ちましたね。物置の鉄格子の外を、なにか落ちていったようなので、あわててかけあがってきたのですが。――」

という。彼は、紋太と記者がここに上ってきたことを知らないはずだからである。

歓喜先生は、ひくく嘆息した。

「……ふ、犯人自滅、ときたか。……」

「すると――あの記者君のきいたという妙な声は、ありゃ記者君の錯覚だったのでしょうか？」

と、曾谷博士が不透明な顔でいった。

――それは、ほんとに錯覚だったのであろうか？　それとも？――その日のわずか三四時間まえに、歓喜先生が、うすぐらい「恋ぐるま」のホールで、恐怖の眼をあげてうめいた「なにやら……悪意、悪念がかんじられる。……まだそいつがのこっているとみえる。……こりゃ、また、なにかが……だれかが……」というあの予感が的中して、そのえたいのしれぬ悪念の精

が、ひそかにふきかけていったきみのわるい吐息ではなかったであろうか？

　紋太は死んだ。

　記者のきいたというあいまいな声は、もし錯覚でなかったとすれば、まさに影の吐息としか思われなかった。なぜなら、もし紋太がだれかにつきおとされたとしても、そのだれかは、その同時間に「ふるさと」の二階のどこにもいなかったことが、すぐにあきらかになったからである。階段はあれひとつだし、入口には夕刻から婦人議員をむかえる女たちが堵列（とれつ）していたし、歓喜先生をはじめとして、院長、猪之吉、里見、ヒトミは階下の帳場に、久世取締官はさらにその下の物置にいたことはハッキリしているし、ほかの客はひとりもあがっていなかったのだ。

　――とにかく、紋太は死んだ。三十分後、裏の川のなかから、彼の屍骸がひきあげられたのである。川といっても、幅三間ばかりの泥どぶのような川だったが、山国そだちの彼は泳ぎをしらなかったとみえて、屍体はほかに外傷もみえず、明瞭に溺死の所見をしめしていた。水面にすぐつづく一階の――つまりあの物置の外壁には、彼の転落したときの水しぶきが、鉄格子のはまった右の窓のあたりまで、凄まじい泥のあとをはねあげているのがあとでわかった。

　――その夜の廓は、ひるまのへんてこな寂寞（せきばく）を、なお持続していた。ただ陰暗たる空に、ほそい金の利鎌（とがま）のような月が寒風にふきとがれていた。

　岸にあげられた紋太の、美しい氷滴にちりばめられた、が、泥まみれの死顔を見おろして、歓喜先生は、ふと、半月まえの、「――悪い夜だったよ、屋根のうえの悪魔が、蝙蝠（こうもり）みたいな翼（はね）を窓からさしいれて――口を耳まで裂いて、ヘラヘラ笑っていたんだよ。……」という女郎

鮎子のことばを耳によみがえらせていた。

「里見君」

　と、歓喜先生は、悄然として小さくきいた。

「さっき、君がこの紋公にきこうとしたことって、いったいなんだったんだ。わしがきいてわるいことかえ？」

「いえ、べつにたいしたことじゃあないんですが。……」

　と里見は、モジャモジャあたまをかきながらこたえた。

「マダムとの密通を、ほかのだれかかんづいているものはなかったか？　ヒトミと車戸の主人のまえで名まえをいえないような、そのだれかはいなかったか？――ということだったんですが」

「ふむ。ほかのだれかがねえ。……久世さん」

「なんです」

「ところで、あの物置から、ほかに麻薬の隠匿物がでましたか」

「いや、いままでのところ、ほかに見あたらないようですが」

　歓喜先生の声は、ひどく元気がなかった。このような質問もなげやりで、ただ所在なさに唇をそよがせているとしかみえなかった。彼はなにやらふかいかんがえにしずんでいるようだった。

　突然、歓喜先生は三日月をあおいで、身ぶるいするようなさけびをあげた。

「あいつが！……もしや、あの男が！」
みずから愕然としたうめきだった。
「そんなことが……そんなことがあり得ようか？」
と、おどろいて里見記者がふりむいた。
「先生、先生、どうかしたんですか、なにかわかったんですか？」
歓喜先生は、だまって、こおるような冬の夜風のなかに大きくくしゃみをした。しばらくたって、月光に蒼然たる笑顔を里見にむけてささやいた。
「思いあたったことがある。思いあたった人間がある。左様、そいつを名指してごらんにいれる。……名指して白状させてごらんにいれられるかもしれん。……そうだ。里見君、れいの嘘倶楽部の集会が、たしかこの十四日にあるといいましたな？　その席にわしは出よう。わしがそいつも呼んでみよう。そいつはえらい嘘つきじゃから、充分その会にでる資格はある。……里見君、出てみたまえ。そして、よろしかったらきみからはなして、この恋ぐるまの殺人にはからずもかかりあいになられた曾谷博士、久世さん、車戸の大将にも出席してもらいなさい。
……」

第十一章　人間万事嘘ばっかり

「恋ぐるま殺人事件は、劇的な終末をつげた」
と、A新聞第三面は大きく報道した。ほかの新聞の顔色をうしなうまでの詳細な説明ののちに、
「第六番めの黒マスクが紋太であることが判明した以上、犯行が九時十分から同四十分までのあいだに演じられたことはあきらかで、犯人はきわめて強壮なる体力の所有者であるから、その三十分間にあのように大がかりな屍体切断を行うことも不可能ではないとみられているが、なにゆえにそのような残虐行為をしたかは、追いつめられ、進退きわまった犯人の自殺によってなお不明であるが、不倫の恋、また相手の被害者がまれにみる淫奔なる女性であるところからみて、痴情のはての発作的兇行とみられている」
と、報じていた。里見記者の筆にちがいない。おなじ紙面に、曾谷博士は、紋太に白面の変質者という診断を下していた。
……それでも、それから三四日のち、荊木歓喜は、ちんばをひきひき、雪の道玄坂をあるい

ている。――一月十四日は、朝から雪だった。チラチラとまう粉雪のなかに、飾りたてた道玄坂の舗々（みせみせ）は、童話のように艶麗だった。

童話の町のなかでひらかれる奇抜な嘘倶楽部のつどいに、いま歓喜先生は、左右にふたりの男をつれていそぎつつあるのである。その嘘倶楽部に、事件の関係者、曾谷院長、久世取締官、車戸猪之吉、里見記者をよび、またただれやら「思いあたった」らしいふたりの人間を同伴してゆくところをみると、ひょっとすると、事件はまだ終らないのかもしれない。すくなくとも、A新聞が報ずるようなかたちのものではないのかもしれない。

余談になるが、むかしから探偵小説というものには、いろいろと約束ごとがあって、たとえば、「犯人は相当重要な最初からの登場人物でなければならない」とか、「探偵小説には余談が入ってはいけない」など、なかなかウルサイのであるが、歓喜先生は幸か不幸か、探偵小説などよまないのだから、べつにそんな規格にはまらない事件にも、熊みたいにノソノソ登場してくる。しかし、規則にはないが、古来名探偵というものは、たいてい最後に大ぜいのひとをあつめて、そのなかから、「犯人はあなたです」とみえをきることが大好きなようだから、歓喜先生もそのひそみにならって、あまり会合に出るチャンスなどもたない先生なので、たまたま手ぢかにながれよった嘘倶楽部の集会でも利用しようとかんがえたのかしらん。――しかし、歓喜先生が名探偵であるかいなかはべつとして、このひとにそんなはでな芝居げはありそうにないけれど、それよりも、その集会に、はたして恋ぐるま殺人事件の真犯人が出席してくるのだろう

か？　いやいや、げんに先生がつれているふたりの男が、そうだろうか？

――ひとりは、小柄で、やせて、眼が詐欺師みたいにキョトキョトして、肺病やみのように貧相な男だった。もうひとりは、まるまっちく、まるで質屋の御隠居（ごいんきょ）みたいにふくぶくしく、幸福にふくれかえったような顔の男だった。

万華楼の階上には、もう嘘倶楽部の会員たちがあつまって挨拶したり、談笑したりしていた。暖炉のまわりのいくつかの朱塗の円テーブルには、すでにビールがならびはじめて、コップからあふれる泡が、雪にくもる窓ガラスをながれおちる水滴と、そのゆたかに美しいひかりをきそっていた。

「やあ、先生」

と、里見があるいてきた。うしろに、まるで狐か狸の宴会にでもひき出されたような顔つきで、曾谷博士と久世氏と車戸猪之吉がしたがっていた。みんなジロジロと、歓喜先生のつれてきたふたりの男をみつめている。

里見がささやくように、

「先生、これは？」

ときくと、歓喜先生も里見の耳に口をよせて、

「左様さ、この肺病やみのようなのが、マダム殺しの犯人。……」

「えっ？……じゃあ、こっちは？」

「こっちの、ヤケにうれしそうなのが、紋公殺しの犯人。……」

「え？……そ、そんな……先生、紋公は自殺したんじゃないですか！」

すると、歓喜先生は、依然としてもったいぶったヒソヒソ声で、

「ここは、嘘倶楽部。嘘倶楽部」

里見は、あきれかえってしまった。こうひとをくった先生があいてでは、手のほどこしようがない。やがて、苦笑とともに、

「どっちも、ぼくのはじめてお目にかかる顔だ。これが犯人なら、ぜんぜんおもしろくありませんね」

といった。里見はなかなかの探偵小説ファンだった。

「嘘倶楽部」というのは、はじめは、ただ笑いを目的とした罪のないものだった。できるかぎり破天荒な嘘を案出した会員に、拍手とごほうびをあたえて面白がるだけのことだった。無邪気な嘘といっても、とにかくはじめから嘘とわかっている嘘だし、また会員がみなそうとうなインテリばかりだから、

「十三角関係という探偵小説は、稀代の傑作で、もう十三万部も売れたベスト・セラーだそうだ」

そんなばかげた嘘はいわない。まあ、例をあげると、

「或るひとが、喫茶店に入ってミルクを一杯もらってから、急にかんがえなおして、ジュースにとりかえてもらった。それをのんで知らん顔で出てゆこうとするから、おどろいて売子がよびとめると、ジュースのかわりにミルクをかえしたじゃあないか。それじゃそのミルク代を

……というと、おれはミルクはのまないよ。といって澄ました顔で出ていってしまった。……」

とか、もっといい例は、百鬼園先生の随筆にある。

「三人が宿屋にとまったら、宿賃が三十円だったので、ひとり十円ずつ出した。ところが帳場のほうで五円まけてくれたのだが、女中がかえしにくるとちゅう二円ごまかして、三円だけもってきた。それを三人で一円ずつわけたので、結局九円ずつの宿賃を出したことになるから、したがって三人の合計は二十七円。女中のくすねたのが二円で合計二十九円。さて、さいしょの三十円のうち一円どこかへ消滅してしまった。してみると、一円はなかったのも同然、ゼロにひとしいということになる」

といったたぐいの嘘で、さらに論理的なものになると、

「将棋にＡ級Ｂ級Ｃ級とあって、Ａ級の対局料は文字どおり段ちがいにたかい。そこでＢ級Ｃ級が抗議を出していうには、そもそもＡ級の棋士がＡ級面をしておるのは、われわれＢＣ級あればこそだ。ＢＣ級なくして、断じてＡ級はあり得ない。だから、われわれにもおなじ待遇をしろ。……」

これはもう嘘といっていいかどうか疑問だが、やっぱり嘘の論理にはちがいない。こういう問題を出して、三分間なり五分間以内に、その論理の嘘を明快にほぐし去り、論破するという遊戯などをやるのである。

それからまた、いつか歓喜先生が出席したときのように、その会場にあらわれた時間から去

るときまで、演説だろうが座談だろうが、ひとこともほんとのことをいってはいけないという遊びをやることもあったし、また、だれかにいろいろ質問されて、その返答を、決して相手につりこまれることなく、ことごとく嘘を以てしなければならない、などという遊びをやることもあった。

　やがて開会のことばがあって、運ばれはじめた中国料理のまえに、すでにひとりの会員がたって、例のごとくへんてこなへりくつをのべ出していた。

「これは、無学文盲の土方から大金持に成功された或るかたの、愛児への御訓戒でございますが、人間はほんとうのことを百いっても、ひとはまあ五十くらいしか信用してくれない。また、百うそをついても、五十くらい信用してくれる。おなじことなら、うそをつけ！　これぞ、お金をもうける秘訣である。……」

　なるほどなるほど、などといって感心してはいけない。二三分して手があがり、またひとりが立って論破しはじめた。

「いや、それはちがいます。百ほんとうのことをいっても、はんぶんしかひとが信じないとは、その百のことがそれぞれぜんぶ異っている場合でしょう。また百うそをついても、はんぶんはひとが信じるとは、その百はおなじことをくりかえせば、という意味でしょう。……」

「そういう矛盾をかんじないところが、すなわち金持になる秘訣さ！」

と、だれかが嘆声を発し、会場にどっと笑いがあがった。

　歓喜先生はいちばん大きな声で笑って、右どなりの久世取締官の耳に口をよせ、「なかなか

うまいじゃないですか」と、ささやいた。

　久世氏はつまらなそうに、

「そうですか。……わたしには、どうも」

「いや、それはあなたの嘘ほど上手じゃないが」

　久世氏は妙な顔をふりむけたが、歓喜先生は真顔のままささやき声で、

「あなたも、そうとうなものじゃ。是非、きょうを機会にこの会にお入ンなさい。わたしは感服しとるのじゃから。……」

「なにをおっしゃる？　いつ、わたしが？――」

「いつ、左様、あなたが恋ぐるまをたずねて、あの部屋でマダムとあわれたとき、夜具は出ていなかったといわれた。……」

「夜具？――それがどうしたのです？　たしかに夜具など、出ていませんでしたよ」

「それはほんとうだ。あなたはたしかにほんとうのことをいわれた。もしあのとき、あなたが、夜具が出ていたと嘘をつかれたら、あの事件に関して、わしはあなたに失礼な疑いなどもちはせなんだのです。……」

「え、それはどういう意味です？　わたしにはちっともわからない」

「そのまえに、あなたは、マダムのほかにだれの姿もみなかったといわれた。もし夜具が出ていたとおっしゃったなら、そのことばが信じられたのです。なぜかというと、あの部屋に、だれかがかくれるとすれば、三尺幅（はば）二段の押入ひとつしかない。ところが、下の段には電蓄やら

トランクやらがギッチリつまっていて、それをうごかした形跡もなかった。ただ、上段の夜具を出せば、人間ひとりはかくれられる。だから、ほかにだれの姿もみえない。つまり、そいつが押入の上段にかくれていたとすれば、あなたは、部屋に出ていた夜具をきっとみられたはずなのだ。……」

久世氏の顔から血の気(け)がひいて、唇は膠着(こうちゃく)してしまった。歓喜先生はけろりとして、黒いあひるの卵をぱくついていた。七きれたべてから、彼は微笑した。

「実は、わしのいまいったことには、論理的な嘘がある」

「嘘だらけだ」

「わかりますか？」

「ば――ばかばかしい」

「ばかばかしくはない。それは、もしそのときマダムのほかにだれかいたならという仮定のうえにたった理窟なので、そのだれかがいなけりゃ、あなたの夜具も人もみなかったという証言はとおるのです。……ところが、こうして待っていても、あなたはそのことにお気づきにならん。ただ、ばかばかしい、とだけおっしゃる。――」

依然として、ささやくような声だ。

「それは、やっぱりあなたが、夜具か人かをごらんになっているから、いまとっさに、わしの論理の嘘が看破できなかったのだ。夜具か、人か、あなたは、ごらんになったもののうち、どちらをかくしておられるのか？　夜具をみたことなどかくすことは無意味です。あなたは或る

人間をみて、それをかくしていらっしゃる。――」

久世氏はもはやただ、炒鶏(チャアチイ)をくっている歓喜先生をかっと凝視しているだけだった。

「それから、もうひとつあなたは、あなたにも似合わしからぬ不注意な嘘をつかれた」

「……なにを？　な、なにを？」

「そのことが、その目撃した人間をかくす――かくさねばならん理由になったものと思われるが、あのとき、あなたは――S町の暗黒街のボス松葉組の大将が、麻薬密売に関係がない、とおっしゃった。しかも、ごくかるく、平然と、断定的に。――」

「そ、それが？」

「はゝ、ところが、恥ずかしいことに、わしは松葉組の大将から、いつも麻薬をもらって、患者に使用しとるのですよ。警察(さつ)は知っておるかおらんかしらんが、あれは東京でも有数の大密売業者のひとりです。もっとも、恐ろしく巧妙にやっておる、じゃが、それを……麻薬Gメンきっての手腕家、浅草とS町だけでも千五百人の密売者があることを御承知で、それらを看視していると高言されるあなたが……知らないなどとはいわせない、なぜ、それをかくされる？」

「………」

「大麻薬業者をつかまえるために、囮(おとり)の殺人犯人を志願なさるほどお仕事熱心なあなたが。――はゝ、あれこそは、その殺人事件そのものへの目くらがし、虎穴に入ってつかまえたい虎児とは、大麻薬業者じゃなくって、なんぞしらん警察の心証で、虎穴に入るとは、囮(おとり)犯人

の行動ではなく、あの志願のことばそのものにあったのだ。――不敵なことでありましたな」

「以上のふたつ、これはまあたいしたことじゃない。偽証汚職、まあ罰金ですむことかもしれん。ところが、もうひとつ、決して罰金ではすまんことがある。それは紋公の死です」

「……………」

「……紋公？……あれは二階にあがった。わたしは物置にいた。なんの関係が……」

「左様、ふたりの位置はそのとおり。――しかし、紋公は、物置の窓からおちた」

「物置から？　鉄格子がはまっているのに。――」

「物置からおちたとわしはいってはおらん。わしは、鉄格子のはまった窓から紋公がおちたといっておるのです」

どっと会場にまた笑いがわいた。いくら嘘倶楽部でも、歓喜先生は、すこぶる没論理なことをいう。しかも、平然として、

「――おわかりか？」

おどろいたことに、久世取締官は、ガックリと首を折った。

そのとき、その久世氏の肩を、しずかに右どなりからたたいたものがある。歓喜先生がつれてきた、あの詐欺師みたいに貧相な男である。ふところから小さな帳面のようなものをみせると、久世氏をうながして、ふたり、そっと別室のほうへ去っていった。

歓喜先生の左どなりに坐っていた里見記者には、なぜ久世氏がその男といっしょにつれだって去ったのかわからなかった。いや、談笑のなかに、歓喜先生と久世氏が、なにをボソボソしゃべっていたのか、よくきこえなかった。ただふしんそうにふたりを見おくって、

「先生、どうしたんです？」

歓喜先生は、こんどは豆腐の肉詰にとりついていた。

「ふむ。これはうまい。……久世さんはねえ、紋公殺しの犯人のひとりとしてつかまえられたのです」

「な、なんですって？」

里見は椅子からとびあがって、二三歩あとを追いかけたが、たちまちバネのようにはねもどって、

「先生、先生はいま、久世さんを紋公殺しの犯人のひとりといいましたね？　紋公は殺されたのですか？　そして犯人はまだほかにあるのですか？」

「まあ、お坐ンなさい、里見さん」

と、歓喜は笑顔で椅子をおしやった。

「え？」

「里見さん、ところでな、この世でいちばんみじかい嘘を御存知か？」

「このごろのひとは、みんなゆだんもすきもならんから、なみたいていのことじゃだまされん。嘘をつくのもらくじゃないわ。だからによって、ごらんのごとく、ああいろいろと長広舌をふるっておる。――」

むこうで、また会員のひとりがたって、おかしな議論を展開していた。

「――快楽が大きいと、あとの幻滅もふかい。これはみなさま御経験の真理であります。そして、この逆もまた真なることはおみとめでございましょう。おなかがすけばすくほど、あとでくうものがうまくなる。――この真理にてらして、さてわれわれの次代のひとびとが、建設と慈悲と汗と笑いと微風の時代に陶酔できるように、われわれのなすべきことはなにか？……実はいま、このおいしい中国料理をいただきつつ、中国の歴史をかんがえてみて思いついたことでありますが。……すなわち、われわれは、死力をつくして、破壊と残虐と血と涙と炎の時代を現出せしめるべきである。……実際にわれわれはそれをやったのでありますが、なおこのうえともいよいよ奮励努力すること。……これこそわれわれが子孫のためになすべき義務であります。……」

「先生、いちばんみじかい嘘ってなんです？」

「あっ」

「どうかしましたか？」

「いや、あっ、という嘘じゃ」

「な、なんのことだか、わからねえや。――」

「きみが、あっ、といったのじゃ」

「へえ、いつ？」

「ふるさとで、紋太が川へおちたとき。――」

あいかわらず、ささやくような歓喜先生の声である。

「きみが、紋太をつれて二階にあがり、妙な声がしたといっておりてきて、わしたちに話をしていた。当然、わしたちは入口のきみをながめ、きみひとり窓のほうをみておった。そして、あっ。――」

「あのときのことですか！　そりゃ、先生！　あのとき窓の上から下へ、紋太のおちてゆく姿をみたのですから――」

「それが、うそだ。きみにはみえんはずであった」

「ど、どうして？」

「紋太のおちた水けむりのあとは、物置の外の壁――右の窓の下にはねあがっておった。いうまでもなく、紋公はそのままうえの窓からつきおとされたのだ。物置の窓には鉄格子がはまっておる。そのうえの帳場にはわしたちがおる。したがって紋公は、きみがつれて上ったヒトミの部屋の窓からおとされたにきまっておる」

「そんなことははじめからわかっているじゃあありませんか」

「おちたのではないぞ。おとされたのだ」

「いや、あれは、紋公が、じぶんで――」

「ヒトミの部屋の窓から、物置の右の窓まで、一直線に線をひくと、幾何の法則にしたがって、そのあいだの帳場の右の窓をとおる。落下物じゃから、物理の法則にしたがって、ななめにはおちん、垂直だ。……ところがな。里見君、帳場の右の窓には赤いカーテンがひいてあった。

そのカーテンにさえぎられて、みえないはずの紋公の落下する姿が、どうして君にみえたのだ？」

「……うっ」

と、里見は面(おもて)をたたかれたようにうめいた。

「みえないはずのものをみたという。きみが紋公のおちるのを、その時間まで、あらかじめ知っておった証拠だ。……」

「そんな……ぼくは帳場に、紋太は二階にいるのに……」

「いや、きみが帳場に入ってきたときは、紋太はすでに物置の窓の外にいた。きみは紋公を二階につれてあがるやいなや、ヒトミの部屋の窓から、帳場の窓の外をとおして、物置の窓の外へ紋太をつりおろしていたにちがいない。紐はヒトミの帯かしごきでもつかったにちがいない。それを物置のなかから、鉄格子ごしに、あの久世さんがしッかりとつかまえていたにちがいない。君はその帯かしごきをたぐりあげてもとにもどし、いちもくさんに帳場にかけおりてきたにちがいない。——時計が鳴った！　七時だ！　きみが、あっとさけぶ。どうじに久世さんが、物置の窓の外から紋太のからだをはなす。——」

「先生。……だまってきいていれば……いくらなんでも、紋太がそうおとなしく——」

「紋太は麻薬をかがされていたのだ。だからこそ、ああかんたんに溺死させられてしまったのだ。麻薬を手にいれる機会はあった。きみは、ふるさとへくる直前に病院にいたじゃないか？」

「…………」

「それに、きみは必死であった。……ふるさとへくる。帳場の窓のカーテンと時計をみる。物置へおりる。鉄格子の窓をみる。久世さんを帳場の外へよびだしてうちあわせる。久世さんはじぶんのポケットから職掌柄(しょくしょうがら)もっていたモルヒネの箱をとり出して、車戸の大将をおどし、なんとかりくつをつけて物置へおりていってまちかまえる。きみは紋太を二階によびあげて、麻薬をかがせる。……」

「…………」

「これらのことを、あのふるさとへきてからの短時間に、諸条件をくみいれてとっさに考え出し——帳場のうえの部屋がたまたまヒトミの部屋だったから、いっそう好都合にいったが、たとえばどの女の部屋であっても、きみは、強引にそれをつかわざるを得なかったろう——そして、昏睡した紋太を、みンごと溺死させてしまった。そのあたまと実行力は、いそがしい商売柄とはいいながら、実におどろくべし。……」

歓喜先生は、にがッぽく笑った。

「おどろくべきではあるが、なんといっても熟考のはてのことでないから、少々むりなところがあったのはやむを得ん。たとえば、いまの窓の問題だ。それがきみのしかけの最大の眼目であるとどうじに、また、とりかえしのつかぬ欠点じゃった。むろん、帳場の左の窓をつりおろせば、きみにみえたということは嘘でなくなったにちがいない。が、いかんせん、そうすれば、そのつりおろし作業がわしたちにもみえる。あちらたてればこちらたたず、きみはみえない右

の窓のカーテンの外をつりおろすよりほかはなかったのだ。……」
「もっとも物置の久世さんが、紋公のからだを左の窓に移動させればよかったかもしれん。が、なにしろ鉄格子をへだててのことじゃから、そんな器用な重労働は久世さんにはできなんだ。――」
歓喜先生は、はじめてちょっと声をたてて笑った。
「なによりも、きみが、あっ、などいわんけりゃうまくいったのだよ。きみが帳場にいるときに紋公が二階からおちた、ということを強調するための御苦心にはちがいないが、里見さん、キリキリ舞いのはずみがすぎて、ちいっとやりすぎたね。あっという、そのひと声がこの世の終り。――雉子もなかずば撃たれまいに。……」
里見が、こんどはガックリと首を折った。
「その、あっ、があやしいとなると、きみがわざわざ紋公を二階につれてあがった理由もあやしい、と相なる。なんとかいってたっけが、とにかく、理由にならん理由でありましたなあ？」
「……ぼくが、どうして紋公を……」
地にしみいるような声だ。
「さあ、それじゃて、きみが紋公殺しの下手人であることをさとったとき、さすがのわしも心中驚倒した。おもわず、あいつが！　あいつが！　とさけび出さずにはいられなんだ。思いあ

がたったうそつきとは、おまえさんのことだったのだ。あきらかに、あの恋ぐるま殺人事件にとちゅうから偶然とび入りした男が、事件後最大の力演をあいつとめましょうとは！」
「……………」
「おまえさん、なにやら事件に深入りしすぎたね？　ぬきさしならん関係になって、是が非でも第六番目の訪問者黒マスクの紋公の口を封じ、あいつを犯人にしたてなくちゃあつごうがわるい羽目においこまれたね？……」
「……先生、いやしくも新聞記者が、まさか……」
「新聞記者がなんだ。職に貴賤はないぞ。職に貴賤はないが、人間に貴賤はあるぞ。品性のたかい奴とひくい奴はたしかにいるのだ。……とはいえ、おまえさんが、それほど新聞記者にウヌボレをもっておったら、あんな大それたことはしでかさなかったろうに。……おまえさん。なんでまきこまれた？……金か？」
里見十郎は、鞭うたれたようにビクンとした。
「はゝはゝ、どうも、おくびのでるほどありふれたことじゃが、そいつは人間の世界にゃ、やはり最大の魔物らしいて。――だいたい、男と男が、突然むすびつくとき、その接着剤となるのはかならず金だ。男と女が、突然むすびつくのは、恋の風、性慾の火花。女と女とが突然――いや、女と女とは突然にも永遠にもむすびつかんわい。……」
「――先生！……すべてのもとは、この投書でした！」
里見は、ついに血をはくようにつぶやいて、フラフラと例の一通の手紙をとり出した。それ

は、あの「車戸旗江の亡霊と結婚した男」という差出人からのものだった。
　歓喜先生はふしんそうにその文面をよんでいたが、やがて顔をあげて、
「九日十日の午後二時。――九日というと、紋太の殺された日だったな」
「えゝ、あの日、午後、恋ぐるまにヒトミをたずねてゆくまえに――」
「きみ、この手紙の指定どおり、道玄坂のT劇場の地下喫茶で、この男とあいなすったか？」
「はあ、それで、その男の要求で――」
「どんな男？」
「鳥打帽に白いマスクをつけて、よく顔はわかりませんでしたが、体格の大きい……とにかく、そいつのいうことには……」
「あはゝはゝはゝ」
　と、歓喜先生は笑った。
「こりゃおかしい。わしは知っとるが、あの地下喫茶は、この正月から修繕中で、したがって休業しとるわ」
「えっ」
　眼をむき出したまま二の句もつげない里見の顔をみて、歓喜先生は、急に真顔になって、声をひそめ、
「それ、嘘倶楽部、嘘倶楽部」
「……？」

「いま、わしのいったことは嘘じゃ。その地下喫茶店が休んどるかひらいとるか、わしゃしらんわ。じゃが……そのびッくり顔をみると、里見さん、この脅迫状の、長たらしい差出人は、きみじしんじゃね？」
　里見十郎は、翻弄されつくして、声も息もない。
「この期におよんで、なお嘘倶楽部幹事の神聖なる義務をつくそうとするこころがけは、はなはだ敬服のいたりです。以て会員の範とすべきかもしれん。……ただ、少々往生際がわるいな」
　里見の手くびに、そのときシャッとかすかに金属的な音がひびいた。だれにもみえなかったが、銀色の手錠だった。
「大特ダネ」
　彼の左どなりに坐っていた、まるまっちい、質屋の御隠居のような男が、ふくぶくしい笑顔でたちあがった。

　そのまるまっちい男と里見記者が、一見親友のようによりそって別室のほうへあるき去ってゆくのを、車戸猪之吉をへだてて坐っている曾谷博士はけげんそうに見おくって、ふと眼をもとにもどそうとして、はたと荊木歓喜の眼とあった。
　……外は、しずかに雪がふりつづいていた。硝子戸の内側は、平和であたたかな笑いの団欒だった。だれもしらない空に、ふたりの視線がじっとからみあったままはなれなかった。やが

て、蛇にみいられた蛙のように、博士の瞳孔がしだいにほそくなった。

突然、荊木歓喜がたちあがった。

「みなさん」

と、大声でいった。みんな、いっせいにふりむいた。歓喜は、その魁偉な顔がよくあれだけ愛嬌のある表情になれるものだとふしぎになるくらい、おそろしく愉快そうに、

「本日、ここにお客さまとして、わが精神病学界の泰斗曾谷博士がおいでになりました。曾谷博士を御紹介いたします」

博士は、一瞬キョトンとした顔つきをしたが、すぐ、やむを得ずたちあがって、さかんな拍手に会釈をかえした。

歓喜はニコヤカにふりむいて、

「博士は、また、学界でもだれしもが尊敬申しあげている高徳のかたで、お弟子のなかには、現代の聖者とさえ申しているひとさえあるくらいのおかたでございます。ところが、聖者というものは、お釈迦さまにしろ、キリストさまにしろ、なによりまずデリケートなおこころのもちぬしでいらっしゃるが、博士も、先日、——ながらく精神病者とつきあっていると、彼らのあわれさに同情し、共鳴し、うっかりすると、彼らの論理、彼らの世界にひっぱりこまれそうになると御述懐になったくらい、おこころのやさしいおかたでございます。そのせつ、このわたしが、この嘘倶楽部のことを申しあげましたら、それはおもしろい、是非いちど出席してみたいという御希望でございましたが、倶楽部でやるいろいろなあそびのうち、なかんずく、例

の、こちらの質問にことごとく嘘の答弁をするという遊戯に興味をもたれ、それは存外に強度な脳の力を要するあそびかもしれない。このごろちょっとクサクサすることがあって、ノイローゼのきみもあるから、ひとつ神経の訓練、逆療法としてそれをやってみたい、と、こうおっしゃったものでございます。……高名なる精神病学者のお頭(つむ)の力は、いかにつよいものであるか、これはみなさんもたいへん興味がおありになろうと存じますので、ちょっと、わたしがみなさんを代表して、失礼ながらおためしさせていただきたい。……では」

あんぐり口をあけていた曾谷博士は、急にはげしく咳きこみながら、

「きみ！　とんでもないことをいう。わたしはそんなばかなまねはやりたくない！」

「うまい！　さっそくおみごとな御応答で、あっぱれ、あっぱれ、あっぱれ」

みな、どっと笑いと拍手をもってこれにむくいた。それは、ついに博士を苦笑させるほどあかるいものだった。

「ところで、このあそびについて御注意申しあげますが、おこたえは、ただ、はい、いいえ、だけでは合格というわけにはゆかんのです。それじゃあんまり単純すぎて興がうすい。なんか文句をおっしゃって下さい。……それでは、やりますぞ。……先生は、この会に出ると、こういう羽目になりはせんかと恐れてはいらっしゃいませんでしたか？」

「恐ろしい？　なぜ？　恐ろしがるわけなどないじゃあないか？」

と、博士は思わずさけんだが、興味しんしんとしてじぶんをみつめている幾十かの眼に気がつくと、あわてて、

「いや。……実は恐ろしかった」

と、いいなおした。つまりそれは、恐ろしくはなかったという意味だ。――とうとう博士は、まンまとこの奇妙な裏返し問答にさそいいれられてしまったようだ。

「はゝはゝ、その御調子でねがいます。そこで、先生、先生はもしかすると、精神病なんじゃありませんか？」

「……そう、精神病です。……」

満場は笑いのうずだった。この可笑しさが、この遊戯のねらいなのだった。

「それじゃ、精神病の精神病院長に御質問。……けさ、新聞で拝見すると、あなたの兄君の立花代議士が、税金やすくしてくれと陳情にきた料理屋の女将連中をひきつれて、議院内をねりあるいとられたそうで、立花さんは――ワッセルマン反応が強陽性らしいといううわさがありますが、ほんとうでしょうか？」

「ばかな！　いや、ほんとうです。あれは、たしかに脳梅毒です。……」

「六十五歳にして、三人のお妾さんがあり、そのうち十八のお妾さんは、このごろおめでたの徴候があるとききましたが。……」

「そんなことはない！」

と、あまりのばかばかしさに博士はいろをなしかけたが、はっとわれにかえって、

「いや、おそらくそんなこともあるでしょう。……」

「おそらくそんなこともあるでしょうとは、たよりない。精神病院長は、産科のほうは御不案

内とみえる。……それじゃ、先生、ツォンデク・アシュハイム反応というやつを御存知ですか？」

「もちろん。――存じません。……」

会員のひとりが遠くからきいた。

「荊木先生、なんです。そのツォンデクなんとか反応って？　ワッセルマン反応ならまあわかりますが」

「まあわかるどころか、あなたも強陽性と出たことがあるんじゃないかね？」

と、だれかいったので、みんなまた笑った。

「あゝ、これは、当代の碩学を国家試験にかけるのが甚だゆかいで、ほかのみなさんにはえらいすまんことでありましたな。……これはね、妊娠というやつは、ごく初期に診断することはきわめてむずかしい。ただ、懐妊された御婦人の小便をとって、二十日鼠に注射し、こいつをあとで解剖してその卵巣をしらべてみると、まっかにふくれあがって凸凹になっとる。小便に出るホルモンの変化が作用したもので、これならもうごく初期に、確実にわかる。……いや、こういう質問はおもしろくない。べつのことをうかがいましょう。……」

歓喜は、うまそうにビールをひとくちのんで、

「先生、あなたのお弟子の安西先生、ありゃすこし浮世ばなれしとるが、ほんとにねっから好人物ですか？」

「安西君？　あれは……好人物じゃないですね」

「それじゃ看護人の鴉田のじいさんは、ひどく謹厳剛直にみえるが、ほんとにまじめな男ですか？」
　曾谷博士の顔に、ようやく不安のいろがあらわれた。案の定、歓喜の問いが、虚心な、無邪気なものでないことに思いあたったらしい。ちょっと、かんがえて、
「いや、ふまじめな男です」
「そうでしょう。あんな羅漢さまみたいな顔をしとって、あのとしで、ちょいちょい遊廓にあそびにいっとったようだから、ただものではない。そうとうな悪党でしょうな？」
「悪党？――いや、あれは善人です！」
と、博士は口ばしって、はっとした。歓喜は笑った。
「ふまじめな善人、ですか！　はゝはゝ、それなら安心だ。この世は、ふまじめな善人にみちておる。その反対に、まじめな悪党、となると、こいつは少々こわいが。――」
　博士は、危険をかんじてきた。相手につりこまれそうだった。唐突ではあったが、問答の継続を拒否することに決心して、ちらっとみた眼が、歓喜の眼とあった。……また、博士の瞳孔が、すうっと小さくなった。
　荊木歓喜は、平然として、錆びのある声でいい出した。
「みなさん、実はこの曾谷博士は、最近はなはだ御迷惑なことに、御存知のS町遊廓の恋ぐるま殺人事件に、惨劇当夜、被害者をたずねた訪問者のひとりとまちがわれ、そのすじのものにいたくもないおはらをさぐられるなど、たいへんな御災難をうけていらっしゃる。これはさい

わい、そのあらぬうたがいははれたようで、御同慶のいたりでございますが、ま、かりに、この問題につきまして、博士の御頭（つむ）の強度を診断させていただくことにいたしましょうか。……」
　――これだった！　荊木歓喜が、この嘘倶楽部のつどいを利用しようとしたそもそもの最大の目的は、このことにあったに相違ない。
　曾谷博士の頰が、さっと蒼ざめた。歓喜はその眼をみていた。……もはや、そのことについて問答を回避することはできなかった。博士の顔がみるみるひきしまり、その不安そうな眼に、はじめて、つよい、挑戦的なひかりがうかびあがった。
「それは、おもしろい御質問と思います。……どうぞ、おはじめなさい」
「先生、先生は、やっぱりあの夜、恋ぐるまにおいでになりましたね？」
「――えゝ、ゆきました。……」
「そう、やはり、ゆかれた。そしてあそこの女郎にだきつかれて、あかいお顔をなすった。だきついた女郎が、あとでトイレの匂いがしたなどといっておったが、あれはなるほど女郎屋の便所にそなえてある消毒薬リゾールの匂い――どうじに、医者の匂いであったわけだ。わたしなどは、アルコールの匂いだらけで、医者はおろか人間の匂いもせんが。……それから、恋ぐるまを出てから、或る少年に、電話をおかけになりましたね？」
「――えゝ、かけました。……」
「どうりで、その電話だけ声がちがっていて、咳をするのがきこえたわけじゃ。……そして、

先生は、その夜恋ぐるまにゆかれたことがあとでわかるのをおそれて、おひげをそられましたね？」

「――えゝ、そりました。……」

「以後、すこしやせられたのも、お風邪のせいもあろうが、極力人相をかえようとなさるはかないあがき、御苦心の食減らしであったかもしれん。……いや、これはおこたえにならんで、けっこう」

　これだけの対話で、博士の蒼ざめたひたいに、かすかにあぶら汗がひかってきた。会員たちは、ようやくこれがただの嘘問答ではないことに気がついたらしく、いつかしーんとだまりこんでしまっていた。ただ、暖炉のもえるひびきだけが会場をしめた。

「ところで、その恋ぐるまにゆかれたとき、マダムにおあいになりましたか？」

「――あいました。……」

「そのとき、マダムはまだ生きていましたね？」

「――ム。――いや、死んでいました。……」

「ははあ、それであなたはその屍骸をみておどろかれた。階段をふみはずされたのは、そのためでしたね？」

「――あれは……そのためです。……」

ながい文句をいう歓喜よりも、みじかく答える博士のほうが、その数倍も時間がかかった。その声は、脳髄のきしみからうめき出されるようだった。つりこまれてはいけない、つりこま

れてはいけない。……いや、もうつりこまれてしまったではないか？　さいしょ、恋ぐるまにいった、とこたえた。それはつまり、ゆかない、ということだから、それでおしとおして、あとは問答無用とすればよかったのだ。それを、いった、とこたえたばかりに、うっかりつぎの問いにひっかかってしまった。もうとりかえしがつかない。……あごが、ガクガク鳴り、からだじゅうが、風にふかれるようにゆれてきた。歓喜は、暗然たるうすら笑いをうかべている。

「うむ！　なかなかうまい！　被害者は死んでいた。そして、そのそばに、その下手人がいましたね？」

「――い――いました。……」

「その下手人は、先生の御存知の人間でしたね？」

「――しっている人間でした。……」

「その人間は、先生の或る弱点を知っていましたね？」

「――しっていました。……」

「そこにつけこんで、きゃつは先生を脅迫し、先生が現場を去られてから、被害者の息子に電話でよび出すことを命じたのですね？　それから、高校の制服をひとつもってくるように、と。――」

「そ、そうです。……」

　これが、遊戯だろうか。なるほど存外頭脳を酷使するあそびにはちがいない。しかし、博士の表情は、全身を大拷問（ごうもん）にでもかけられているような、惨澹たる苦悩と困憊（こんぱい）の翳（かげ）をねじれさせ

ていた。――しかも、歓喜の凝視ははなれない。

「さて、その先生の弱味というやつですが、……それは、先生の病院内で、或る患者が妊娠した、いや、精神病者だから、或る悪党に妊娠させられた――という大不祥事に関することではございませんか？　その悪党は――」

「……むっ」

　博士のうめいた唇が、驚愕にはじけた。眼が血ばしって、かっとみひらかれた。

「そんなことはない！」

　と、絶叫した。歓喜はおじぎして、つぶやくように、

「そんなことはない。――つまり、そんなことがあるのですね。いかにも、わたしが、その患者の尿をしらべたら、ツォンデク・アシュハイム反応が陽性に出たわけだ。……」

　曾谷博士は雷にうたれたようにたちすくんだ。いまは、おそれげもなく、じっと歓喜を見かえした眼が、異様につりあがっていた。歓喜はへいきで、まばたきもしない。

「ところで、そのマダムの屍骸ですが、マダムは、そのとき、もう血みどろで……」

「わしがその足を切った！　わしが……その右足を切った！」

　と、博士は、突然さけび出した。その温厚円満な顔から出るともおもわれぬ、おそろしい苦鳴であった。荊木歓喜は微笑した。

「――なかなか、お上手でいらっしゃる。さすがにお頭のお力がつよい。……」

　曾谷博士は、肩で息をして、

「わしが、その女の足を、ギッコ、ギッコと切って、大きな風車にかけたのだ！」

　そして、博士は、唇から鼻さきまでまっしろにして、どうと椅子の下へくずれおちてしまった。

第十二章　告白連鎖反応

Ａ新聞記者里見十郎の告白。

——それは、はじめ、ちょっとした出来ごころだったのです。

ぼくは、ここのところ、療養所にいっている妻からの療養費の無心に、すっかり困惑しておりました。ながい妻のるすのあいだに、酒の量はふえる、女あそびのほうもめちゃめちゃになる。……それでも、ぼくは、妻を愛していたのです。

そこに、あの恋ぐるま殺人事件がおこりました。この事件にぼくが接触したのは、御承知のように、ただ部長から例の立花代議士のスキャンダルの噂をつきとめるように命令されたという、偶然の記者活動以外のなにものでもありませんでした。当然、ぼくはこの線でうごきはじめ、あの四番めの訪問者、ふとっちょの紳士が、曾谷精神病院長らしいということをつきとめました。

ぼくは曾谷博士をたずね、兄の立花代議士のことに託して、博士の当夜の行動をさぐろうと

しました。しかし博士にはアリバイがありました。アリバイはありましたけれど、ぼくは博士へのうたがいを完全にぬぐい去る気にはなれなかったのです。

あの投書をかいたのは、それを博士にみせて、その反応をみようという苦肉の策だったのです。他人からの投書という形式をとったのは、まだ事件の真相について、ぼく自身ハッキリわかっていなかったので、そのあいまいさをまぎらわすためのものでした。……え、それにしても、あの文面と、じぶんで投函して新聞社にくるようにした細工のこまかいところからみると、すでに恐喝の下ごころがあったのだろうって？

それはなかったとはいえません。こころの一部ではあったかもしれません。しかし、それはまだ、それほどつきつめた意志ではなかったのです。

ぼくは、その投書を院長につきつけました。久世氏も同席しておりました。あの夜恋ぐるまをたずねた久世氏が同席していることによって、ぼくは院長へのうたがいにいよいよ確信を得ました。すると、院長はこういうのです。

「この投書のぬしには思いあたりがある。金でかたのつく男だ。きみ、この男にもういちどあって、金をわたしてやってはくれまいか？」

そして院長は、ぼくに五万円の金をわたしてくれたのです。

ぼくはそれをふらっとして受けとりました。この瞬間に、ぼくの立場は一転してしまったのです。最大の強者から、ぬきさしならぬ弱者の立場へ。——

その金は、その男へわたすという名目のものでしたけれど、実際はむろんぼくの手に入った

ことになるのです。五万円の札束と妻の顔がダブりました。あの下ごころが、忽然とあたまをもたげてきて、胸いっぱいあぐらをかいてしまったのです。……これは新聞記者として、もっともゆるすべからざる、唾棄すべき行為にちがいありません。しかし、ぼくは記者でありながら、なんということでしょう、それまで新聞社に全幅的な愛情をもっていなかったのです。なんとなくニガニガしい想い出が一点のシミとしてあったのです。それは、妻の実家が、新聞報道によって、ほとんど没落にちかい運命においこまれたということでありました。その一抹（まつ）の苦味（にがみ）、反感が、そういう記者として社をうらぎるような、無思慮な行為をとらせたのかもしれません。

それでも、ぼくは、まさか院長が、あの事件にあれほどふかい関係をもっていると知っていたなら、まさかそんなばかげた行為はやらなかったでしょう。ぼくは、マダムを殺したのは、どこまでも第六の黒マスクの男だと思っていました。院長はただ兄に代って、れいの売春禁止法案の問題についてマダムをたずねたのだという先入観念があったのです。ただ、その殺人事件のとばっちりをうけて、その夜の訪問のことがばれ、したがって兄のスキャンダルがばれることをおそれているのだろうとかんがえていたのです。

ところが、金をわたすと、院長はぼくから一札とりました。あからさまな恐喝ではない。いちおう金の仲介者という立場にあるだけ、ぼくは一札入れざるを得ませんでした。さて、それから博士は、あの夜のことをはなしてくれました。博士がいったとき、マダムはすでに殺されていたことを。――それをきいたとき、ぼくの驚愕はどんなであったでしょう。

しかし、院長はいいました。実際に、わたしも久世君も手を下してはいない。のみならず、疑惑は、いままできみがかんがえていたように、六番めの訪問者、黒マスクの男にむけられるようにしくんであるのだから、決して心配することはない。ただ不安なのは、その黒マスクの正体を、いまだに真犯人がおしえてくれないことだが、たとえわかったとしてもまずだいじょうぶだ。マダムは黒マスクの訪問直前まで生きていたとみられているからである。黒マスクの正体がわかったら、わかったときに、あらためて対策をかんがえてもおそくはなかろう。――と。

黒マスクの正体が紋太だとわかったのは、実にその直後のことでありました。それをつきとめたのは、ほかならぬ歓喜先生です。こころひそかに一目も二目（もく）もおいている歓喜先生です。ぼくの胸は大波のようにさわぎ出しました。

紋太はなにをしゃべることだろうか？　はたして安心できるだろうか？――この不安を、いっきょにたちきる手段は、その紋太を一刻もはやく沈黙させることであります。いわゆる闇から闇へほうむることであります。あのとき三人の見かわした眼には、一瞬に、おなじ恐怖と決意の火花がちりました。具体的なことは応急作戦としてやることにし、とりあえず武器として、ぼくたちは麻酔薬とハンケチを用意して、曾谷病院から遊廓へ急行しました。……

あとのことは、すべて歓喜先生の御指摘のとおりであります。――紋太を殺したあと、この嘘倶楽部で犯人を指摘するといわれて、むろんぼくはぎょっとしました。しかし、そういわれては、いっそう、どうしても出てこずにはいられなかったのです。

あゝ、ぼくはなんというばかものだったことでしょう。たった五万円で、本来無関係の――いや、追う立場にさえあったものを、一挙に、追われる身の殺人請負業者に逆転させてしまうとは。――

その五万円もらう瞬間まで、そのことがわからなかったのです。人間というものは、具体的な行為によらなければ、そのときのじぶんの心理まで明確に予知することができないものだということが、はじめてわかりました。約束の日に、約束の人が、お金をもってこない。その焦燥のあいだに、相手の全過去、全性格から人相、声まで呪わしくかんがえられていたものが、いざその金をもってきた瞬間、相手のすべてが神のように思われるあの心理とおなじことですね。……

ぼくがこんなことをいうのは――いや、ぼくがあんな大それた犯罪を、憑かれたようにやってのけたのは、しかし、その五万円の金があくまでもほしかったからではありません。それがバレて社をクビになるのが恐ろしかったからでもありません。……ぼくは、はじめてじぶんが、いかに新聞社を愛しているかがわかったからなのです。五万円もらった、その行為はもうとりけすことができません。事件が大っぴらになれば、いうまでもなく、子供だましの投書の小細工などすぐにばれてしまいます。そのときに傷つけられるのは、小さなぼく個人の問題などではなく、A新聞社の名誉なのです。そのことがはじめてわかって、ぼくは慄然と肌に粟を生じたのです！

結局、ぼくの犯行は、要するにA新聞社の名誉にもとづくものでした。A新聞社を――それから、妻を愛すればこそでした。このぼくのこころだけは、どうぞA新聞社のほうへよくつたえて下さい。……しかし、社のだれもが、或はぼくのこのこころなど、わかってくれないかもしれません。……ひょっとしたら、妻までも。……

麻薬取締官久世専右氏の告白。

――それは、はじめ、ほんの小さなことからでした。

どこかで読んだ知識ですが、日本の汽車がどうしてもそのスピードを或る程度以上あげられないのは、鉄道のはばがせまいからで、それは明治のはじめ或るイギリスの奸商が、印度かどこかで要らなくなった中古機関車を売りこんできて、それにあうように新橋から横浜までレールをしき、それにまたあうように機関車をつくり、とうとういまのような狭軌の鉄道が全国にはりめぐらされてしまって、いまさらどうすることもできないせいだということで、矢でも鉄砲でも、さいしょの狙いが一ミリ狂うと、的から十メートルもそれる。はじめ、ごく小さなことが、しまいにはたいへんなことになるということが、これでよくわかります。

――数年前、わたしはちょっと金の要ることがあって、たまたま知りあいの車戸のマダムに借りました。金額もすくないものでしたし、あのマダムの性格からして、それでわたしに恩を売ろうというほどのハッキリした目的はなかったものと、いまでもわたしは信じています。

ただ、そのため、のちにマダムが松葉組の親分とくんで、けっして小規模ではない麻薬の密

売に関係していることを知ったとき、それを知らないふりをしていなければならなかったのは、実に遺憾なことでありました。知らないふりをして、それでとおるあいだはよかったのです。しかし、そのうち、その麻薬の密売がもしあきらかになれば、わたしが知らないふりをしていたということも、どうしてもあきらかにならざるを得ないような事態が生じてきました。

しかし、マダムは、実にほがらかなものでありました。悪いことをしているという意識はまったくないのです。世のなかになにか目的や義務があって、麻薬中毒のためそれがさまたげられているような人間にはつかわせちゃいけない。しかし、すでに麻薬のために生きている、じぶんの全存在の意義をそこにみとめている人間には、世話してやるのがくどくだというのです。実際、わたしの経験からして、そんな人間が実に多いことを、わたしもみとめざるを得ませんでした。マダムはいうのでした。人間には、いろいろある。ひとがいちばん大切なこととしているもの、快楽としているもの、それをはたでとやかくいう権利はない、道徳も真理もいくつもあるのだ。すくなくとも、戦争することを人生の目的としている連中さえ大手をふってあるいていた時代があるのだから、じぶんひとり麻薬にふけることが、それほどわるいこととは思われない、と。——

その理窟よりも、その笑顔にわたしはつりこまれました。まったくあのマダムには、あらゆる人をじぶんの理窟に同化させてしまう、ふしぎに快活な魅力——というより、魔力がありました。わたしは、ついに、小さな麻薬密売のカスリをもらうようなことになってしまったのです。

さて、そのあとで、わたしはふるえあがりました。いままで、実に厳格に職務にはげんできただけあって、罪のおそろしさにせめたてられました。もういけない、これが発覚したら、おれは三年の懲役だ、と思いました。

そう思うと、その恐怖が、いつどこにいてもわたしの心中にとぐろをまき、予想の恐怖が、いまにも現実の問題となりそうで、いてもたってもいられないのです。三年か、三年懲役にゆくとなると、そのあいだの家族の生活はどうなる？——そしてわたしは、いまのうちに三年間の生活費だけはつくって、どこかへかくしておかなければならないと思いたちました。そこでわたしは、もうすこし大きな麻薬密売に関係してしまったのです。それをやると、こんどは、懲役十年の恐怖でした。そして十年間の生活費をつくらなければという焦燥が、また大きな罪を犯させました。わたしは完全にマダムの一味となってしまったのです。

それはまるで、のどがかわいて潮みずをのむような愚行だとおっしゃるでしょう。じぶんでもそれはよくわかります。……しかし、どうにもなりませんでした。水のなかにいる人間のからだのうごきは、岸に立ってみているひとには、ただコッケイなものとみえるでしょう。妻子をかかえて罪の泥沼におよぎ出した人間のきもちは、その当人でなければほんとうにはわかりますまい。さっき、さいしょの一歩がのちの千歩だといったのは、ここのところです。罪とは他人との関係の上になりたつものですから、その足跡はきえないのです。あともどりはできないのです。……

マダムが、じぶんの店の女たちに、きびしくヒロポンを禁じてカムフラージュしていたよう

に、わたしも死物狂いに職務に精励しました。ただ、マダムと松葉組のことだけ、わたしのあたまのなかに、まっくらな穴をポッカリとあけていたのでした。

――その秘密を知っている人間が、――あの夜、血みどろのマダムの屍骸のそばに坐っていようとは！……いいおくれましたが、あの夜、わたしも、電話で恋ぐるまに呼ばれたのでした。マダムが重大な相談があるから、まちがいなく八時五十分ごろ恋ぐるまにゆくようにという、風呂のなかから出てくるようなきみわるい電話でよびつけられたのでした。

あの部屋には、部屋いっぱいに、ビニールだかポリエチレンだかの布がしかれて、そのうえに、まっぱだかのマダムの屍体がよこたわっていました。右足はすでにねもとからきりとられて、その――白マスクに革ジャンパーをきた奴は、そばでその布のはしをあげて、たまった血をせッせと火鉢のなかへながしこんでいました。そしてわたしをみると、わたしの秘密を知っていることをいい、また、真犯人はわたしのつぎにくる黒マスクの男がそうみられるようにしてあるから、安心して――マダムの左足をきりとり、暗い風車にひっかけるように命じたのです。……

あとでくるという黒マスクの男の正体はむろん、わたしのまえにきたというふとっちょの紳士もだれか、そのときわたしは教えられませんでした。それはのちに、曾谷博士が、新聞で、わたしもその夜の訪問者であることを知って、わたしと善後策を相談するためによんでくれて、はじめて知ったのであります。

……この恐ろしい事件も、それだけならまだよかったのです。あゝ、一歩は千歩。このこと

から、わたしは、黒マスクの男を河中へおとすという――殺人の共犯者になってしまいました。あゝ、実にこの世は、はじめは一歩、のちには千歩！

曾谷精神病院長曾谷博士の告白。

――それは、まったく、わたしにとって、思いもかけぬ災難でありました。

菊池寛という小説家でしたか、その遺書に、「わたしの人生は多幸でありました」というような文句があったそうですが、こころざす分野こそことなれ、わたしも死ぬときには、こころからそうつぶやいて、満足して眼をつぶれるだろうということを、わたしはゆめうたがってはいませんでした。学問的にも、家庭的にも、精神的にも、わたしは生まれたときから、青年時代、壮年時代――そして、もしあのことさえおこらなければ、やがてくる誕生日には、たくさんの孫や弟子から、赤いちゃんちゃんこを贈られたにちがいない、ことし還暦の年まで、すべてめぐまれすぎるほどめぐまれた人生をおくってきたのです。わたしは、人格者などとよばれていました。それははじめ実にいやなことばだと思いましたが、それさえも、のちには、不幸と悪を知らない人間のことなら、実際わたしはそうかもしれないとかんがえて、やすらかに感謝してうけいれるほどの心境になっていたのです。

そのわたしが、実に予想もしていなかった兇悪な平手うちをくったのでした。

あれは、去年の十二月のはじめのことでした。わたしが特別室に回診にまわると、そこのふ

たりの婦人患者のようすが、どうにもへんなのです。ひとりは、あられもない恰好をして卑猥(ひわい)なことを口ばしって、ひどく昂奮していますし、もうひとりの伴夫人のほうは、部屋のすみッこにうずくまって、くびを胸までおりまげて、凍りついたように身うごきもしないのです。──そのうち、このふたりが恐れているのが、決してわたしではないことに気がつきました。わたしのうしろには、安西君がけげんな顔をかしげており、鴉田看護長と看護婦が、異様な表情でたちすくんでおりました。

「どうしたのかね？」

わたしはふしぎに思いましたが、そのときはべつにそれほど気にもかけませんでした。

ところが、その夜、その看護婦が院長室に入ってきて、実にたいへんなことを報告したのでした。──なんと、鴉田看護長が、伴夫人を凌辱するのを目撃したというのです。

わたしはおどろきました。むろん婦人患者が暴行されたという事実にもおどろきましたが、より以上に、それが鴉田看護人だったということにおどろかざるを得なかったのです。彼はわたしより十ばかり年下ですが、病院創立以来かげの功労者であり、その間、そんな大事はもちろん、どんな小事でも、曾てまちがいのない男であり、陰鬱で寡黙ながら、およそ謹直を鋳型でうち出したような人間だとみていたからでした。だからこそ、看護長として、医員以外は男子禁制の婦人病棟に、彼だけは出入を自由にしていたのです。

わたしは彼をよびつけて詰問しました。彼は猿のように顔をあかぐろくしてうつむきました。

「とにかくきみは、即刻病院はよしてもらわなくてはならない」

と、わたしはいいわたしました。

すると、彼はあたまをあげ、実に驚愕すべきことをいい出したのです。

「もしわたしをくびになさるなら、わたしは病院の外に出て、わたしのやったことを公表します。……過去二十何年間、無数の婦人患者をはずかしめてきたことを、新聞に出してもらいます」

あっけにとられているわたしに、彼は恐ろしくまじめな顔でいうのです。

「実は、わたしが……そんなわるいことをしたのは、あの患者ひとりです。しかし、わたしをくびになさるなら、世間にはそういいふらします。何十人となく強姦したといいます。わたしがそういえば、それほどたしかなことはありません」

わたしは戦慄しました。彼のことばが実行にうつされたときの結果をおそれるよりも、まず彼のことばそのもの、いや、彼のふてくされぶりに戦慄しました。

この男が！　二十何年間、わたしのもっとも忠実な僕(しもべ)として信じてきたこの男が！

いったい、彼はそのながいあいだ、ずっと羊の皮をきた狼(おおかみ)だったのでしょうか。人間が、それだけしんぼうづよく仮面をかぶりつづけていられるものでしょうか。いまとなっては、にくんでもあまりある奴ですけれども、わたしにはそうは思えないのです。羊が突然狼になったとしかかんがえられないのです。人間というものは、そう変るものではない、いや、発狂でもするのでなければ、そう変れるものではない、それがわたしの人間性に対する見解でありました。ところが、人間というものは、突然変るものだ、善人が一瞬に悪人に変るものだというこ

とを眼前にみて、わたしは人間性というものに、魂の底からふるえあがらずにはいられなかったのです。

――しかし、彼の脅迫のことばが、万一実行にうつされたときの結果も、予想するだにおそろしいことでありました。伴夫人は美しい、狂ってもなおどこかに気品をうしなわないひとだ、それを猿のような老看護長が凌辱した！　世にこれほど猟奇的な、センセーショナルな事件がありましょうか？　全新聞は、牙を鳴らしてこれにとびつくにちがいありません。全東京どころか、日本じゅうがこの話題でわきかえるにちがいありません。……わたしの手塩にかけてきた病院は、それで終りになるでしょう。わたしも終りになるでしょう。還暦ちかいわたしの余生はともあれ、わたしのひそかにほこりにみちていた全生涯は、その学問的業績もふくめて、ことごとく汚辱にまみれ去るのです。苦笑して受けていた人格者という冠。それがいまや恐ろしいかがやきと鉄桶の力をもってわたしの頭をしめつけてきました。

わたしは、伴夫人と同居していた患者をはなして保護室にうつし、官吏夫人とかえました。――この鴉田の悪業を目撃した患者を、荊木君を保護室に案内したときにみせたのは、荊木君をみそこなっていたための失敗でありましたが、患者の昂奮もいちおう鎮静に帰したものとみていたからでもありましたし、また、あの夜、わたしが伴夫人をこの鉄壁の保護室へいれる仕事にしたがっていたのだと、なんとなく、だれにともなく強調したい意識にかられていたせいかもしれません。

また、この秘密を知っている看護婦には、少なからぬ金をあたえ、沈黙をちかわせて国もと

にかえしました。

しかも、かんじんの鴉田看護長のみには、わたしは一指もくわえることができなかったのです。こんな奇怪なことがあってもいいものでしょうか。――のちに、里見という新聞記者は、わたしを脅迫することによって、強者から弱者へ転落しました。ところが、この鴉田は、おなじく悪をなすことによって、弱者から恐るべき強者へ変ってしまったのです。まったくふしぎな現象だと思わざるを得ません。

わたしはおびえておりました。表面はさりげなく微笑しつつ、実はうなされるような日々をおくっていました。どこからか秘密がもれるのではなかろうか？　いまに新聞記者が殺到してくるのではあるまいか？

そこへ、あの二十七日の夜、突然電話がかかってきたのです。風呂のなかから出てくるようなぶきみな声で、「あなたの病院に入院中の伴真弓夫人のことで重大な問題がおこった。すぐ、内密に、八時半ごろ、S町遊廓の恋ぐるまという店に、車戸旗江というひとをたずねていただきたい」――車戸旗江、それは伴夫人の入院についてその保証人となっている名まえでした。

きた！

わたしはそう思いました。そしてわたしは、とるものもとりあえず、倉皇として恋ぐるまにかけつけたのです！

すると――その部屋には、全裸の婦人が殺害され――そばに、思いもよらぬあいつが坐っていたのです！

それからのことは、先刻、荊木君に、不本意な真実をのべたとおりであります。

このことによって、わたしは、小さな隠蔽（いんぺい）から、恐ろしい大きな隠蔽へ、さらに死力をしぼらねばならない羽目におちいってしまいました。

はじめて新聞記者がおとずれてきたとき、わたしはとびあがりました。しかし、会ってみて、彼がまだ真相をしらず、兄のことにかこつけて、その線でわたしを嗅いでいるらしいのをかんじて、わたしは安心しました。売春禁止法案のすじでわたしをつっついているとみて、ばかな男だと思いました。あの記者は、あまり利口じゃありませんね。あとで妙な投書をみせましたが、すぐにわたしは、こいつがじぶんでかいたな、と看破し、彼をこちらの、文字どおり薬籠ちゅうのものとしてしまったのです。これがわたし自身、この手をけがした唯一の悪でありました。

わたしの外出は、あの夜、八時すぎから九時まえまでであります。それを、当夜たまたま当直の安西君と看護婦も往診していたのを利用して、苦心のアリバイをつくりあげました。あの悪党と相談して、発作をおこした伴夫人の始末に専念していたということにしたのです。このアリバイは、たとえすこし苦しいものであろうと、外部のものにはとうてい見やぶることの不可能なアリバイだとわたしは信じていました。

それを、荊木君の、奇妙な、からめ手からの作戦で、——しかも、こちらの心肝にひびく一撃で、もろくもうちくずされてしまったのです。……

「代々木の曾谷精神病院へ。——」

荊木歓喜はそう運転手に命じると、腕をくんで、ふかぶかとくびをたれてしまった。両側に、S警察署の捜査主任と、車戸猪之吉が、なんとなくゆめでもみているような表情で坐っている。

雪はなお霏々（ひひ）とふりつづけていた。童話のような道玄坂の町は、いつしか白い薄暮のなかに、美しい灯をともしはじめていた。

歓喜先生は、いつまでもだまっていた。里見記者、久世取締官、曾谷博士三人の告白をきいていない車戸猪之吉にはむろんのこと、捜査主任にも、歓喜先生がなにを思案しているのかわからない。

「先生、なにをそうかんがえていらっしゃるのです？」

と、きいた。

「わしは、水ぐるまの音をきいておるのです」

と、歓喜はこたえた。

「恐ろしい、哀しい——不可思議な、人間の——心理の水ぐるまの音を」

それから、ふと、微笑していった。

「精神病院をさがせ、といった女郎がありましたっけなあ。……」

捜査主任は、不安そうな眼をむけて、

「先生は、いつから、事件の真相に気づいていらっしゃったのですか？」

「さあ、あれはいつごろからであったろう？……とにかく、うすうす感づいてきたことがあっ

たが、なにしろ、手持の札が弱かった。とくに、黒マスクの正体は意外でした。しかも、それがわかったとたんに殺されてしまった。車戸のマダムを殺した奴はにげるおそれはないとみていたが、こっちはウカウカしていると、のぼせあがって、なにをやり出すかわからない。しかも、曾谷院長のごとき、アリバイはほとんど鉄壁です。だから、やむを得ず、ちょいと荒療治をせざるを得なんだのです」

「いや、突然、紋太殺しの犯人をひきわたすから、刑事ふたりをよこしてくれとの御連絡でおどろきましたよ」

「はゝはゝ、里見と久世、いずれも往生際がわるうて、なんかあばれそうな人間じゃったから。……」

「どうも先生は、いままでの経験によると、事件の犯人をつきとめても、かってににがして知らん顔をしとられることがあるので、あぶなくってしようがない」

「いや、こんどはそんなことはしません。……曾谷病院のほうへは、もうお巡りをむけられたでしょうな？」

「はあ、いまごろ、もうその鴉田という看護長は逮捕しているでしょう」

「いや、あいつはつくづくと悪党じゃ。アリバイの件、うそだと思ったら、ほかの患者にもきけ、などヌケヌケといいおった。ちょいとひっかかりそうだが、ほかの患者といったって、みんなキチガイばかりじゃないか」

「……では、女房殺した奴は、その鴉田という看護人ですか？　あたしには、なにがなんだか、

サッパリわからない」

と、車戸猪之吉が狐につままれたような顔で口を出したとき、

「ちょっと。……」

と、歓喜先生がさけんだ。

曾谷精神病院の門をすべり入ろうとしていた車は、急ブレーキで、雪しぶきをはねあげながらとまった。

門のまえに、ふたりの高校生がウロウロしているのをみとめたからである。車戸三樹と伴圭子だった。

「よお、三樹君」

車からおりてちかづいてくる歓喜先生を、車戸三樹は眼に恐怖のいろをたたえて、たちすくんだまま見まもっていたが、急に身をひるがえしてにげようとした。

「待て待て」

歓喜先生はその腕をむずととらえて、ふりむいて病院のほうをみた。玄関のあたりに、二三人の警官の姿がみえた。

「ははあ、あれがいるので入れなかったか。……しかし、わしをみて、なぜにげる？」

と、歓喜はのぞきこんで、いきなり三樹のポケットに手をつきこみ、小さな瓶をつかみ出した。が、くるっと大きくなからだで圭子とのあいだをへだて、ささやくように、

「案の定だ。これをだれかにのませようとしたか？」

三樹は、蠟のような顔いろで、はげしくかぶりをふった。
「そんなら……きみが……きみにその必要はない」
三樹の眼に、涙がうかんだ。歓喜は、ひくく、ひくく、
「きみは、ただ、制服をひとつはこんだだけだ」
少年は愕然としたようだった。車をみて、玄関のほうから、ふたりばかり警官がはしってきた。歓喜は三樹の耳に口をつけて、ふかい声で、
「きみの受けた罰というのが、わかったぞ。……なにを風車にぶらさげた？」
「……くび……」
なんともいえない少年の声だった。歓喜は水をあびたような顔いろになりながら、その肩を大きく抱いて、揺籃のようにゆさぶりつつ、
「……お嬢さんには知らせちゃいけない。お嬢さんをかなしませちゃいけない。……あとで、おじさんと、ゆっくり話をしようよ。なあ？」
警官が直立して、挙手の敬礼をしていった。
「御命令のとおり、鴉田万蔵を逮捕しました」
「そう。御苦労さん。……きみ、この少年と少女を、ちょっと婦人病棟の入口のところに待たせてやってもらいたいが」
捜査主任も、車戸猪之吉も、すでに車からおりたっていた。猪之吉は相かわらず——息子の三樹をみてさえ、茫然たるようすである。

ほのじろい雪の路に、黒くぬれた足跡をつけてあるきながら、荊木歓喜は、突然また妙なことをいい出した。
「ずっとむかし、わしゃ二宮尊徳さんの夜話っちゅうものを読んだことがあったっけが、そのとき、こいつはたいへんな悪党じゃと思うたね」
捜査主任は、あっけにとられている。
「一言一句、ことごとく人の肺腑を刺す。坊主を痛罵し、おれが死ねば墓はいらない。あとで木を一本うえておけばいいなどといっておるが、これはどうもあの時代、なかなかえらいことばじゃて。その他もろもろ——あれほど辛辣で、ひとのわるい奴はない。ところが尊徳さんは、悪党どころか、一世の聖人として、いちじは日本じゅう銅像だらけであった。これはなぜか？……わしゃ思うに、尊徳さんは、あんまり悪党すぎて、人間性の繊弱にして劣悪なのを洞察しすぎて、かえって悪を敏感に警戒したからじゃろうと思う。……ただ、われわれふつうの悪党は、そうなると、ただ懐疑的、虚無的、厭世的になってしもうて、ただウスボンヤリと人の世を傍観しとるばかりじゃが、その点、尊徳さんはわりきって、なにか燃えとるものがある。天道と人道のことなるところ、自然と道徳のちがうところを、熱くなって力説する。そこが聖人とよばれるゆえんじゃろう。……」
「——先生、それがなにか？」
「なに、わしは、悪党論についてのべとるのです。いつか、わしゃ、人間に悪人というものはいないと弁じかけて、だれもきいてくれなんだが、わしは、真の悪党というものは、決して悪

いことはせんものだといいたかったのです。……すくなくとも、ただこの世のつめたい傍観者にすぎないだろう。……」

玄関から、ふたりの警官に両腕をとられて、鴉田看護長が出てきた。歓喜はそっぽをむいたまま、ひとりごとのようにいいつづける。

「わしは、たいていのいわゆる悪党は、ただまぬけだと思うとる。なんだか可笑しくって、むしろ憐憫（れんびん）の情にたえんのです。ただ……ただひとつ、おなじく大まぬけでも、決して可笑（おか）しくない悪行がある。あわれむ気にはなれん悪行がある」

鴉田看護人と荊木歓喜は、一尺の距離をおいて相対した。歓喜は顔をあげて、真正面から、じっと相手の眼に見いった。

「天人ともにゆるすべからざるもの——それは、幼児と狂人に対する犯罪だ」

鴉田の銅盤のようなにぶい顔に、はじめてぞっとするほどみにくい恐怖があらわれ、どうじに、木の実みたいな眼に、涙がにじみ出した。こがらしのような声でいった。

「……わたしは、一生、あのキチガイ女どもよりもっとうす汚い、恐ろしい女房にいじめぬかれてきました。……三年まえ、その女房が死んだときは、もうわたしは、女郎にさえもふられるほどの老いぼれになっちまっていました。……それでも、わたしには、一生のゆめがあったのでがす。……いちど……いちどだけでいいから、貴婦人みたいな女を……」

「おまえさんに、涙があるのを見たくはない！」

歓喜先生は、びっくりするほど大声をあげて、いきなり鴉田の頬をはりとばした。鴉田はつ

んのめって、雪のなかに、折釘みたいに身をまげてしまった。

歓喜先生は、傍にいるのも悪臭にたえないように、顔をそむけ、足をはやめて、つかつかと玄関から廊下へ入ってゆく。

「先生、あ、あれが……」

と、車戸猪之吉は、ようやく別棟の入口でおいついて、あとをふりかえりながらうめいた。

捜査主任は、蒼い顔で出迎えた安西医師から、鍵をうけとっていた。

歓喜先生が、首をたれてつぶやいた。

「主任さん、わしは曾て、マダムの人間を知らんけりゃ、この犯人はつかまるまいといいました。マダムの人柄は、あらゆる方面からひかりをあてられて、ようやくわかりました。そして、結局、実に愛すべき女性であった。殺されなければならんようなところはちっともないということがわかったのです。……わしは恐ろしい。……わしには……マダムを殺した動機が、よくわからんのです。……」

——扉はひらいた。

第十三章　罪と罰

——扉はしまった。

「——わしが、その下手人に気がついたのはいつごろからだとさっききかれたが、ほんとうに、さて、いつごろからであったろう？」

と、暗い廊下をあゆみながら、荊木歓喜がいい出した。

「——まず、わしのふしんに思ったことは、あの三番めの訪問者白マスクの男を、そのきた姿はみたものがあるのに、かえった姿をみたものはだれもないということじゃった。むろん、女郎どもはいれかわりたちかわり、客をひっぱりこんでは追ン出しとるんじゃから、それにまぎれて出ていったともかんがえられる。実際また、それよりあとできた久世取締官が、二階にはマダムひとりだと証言したものだから、だれもそれを信じて、白マスクはすでにかえったものとみとめたわけだ。……

——しかし、つぎにわしのこころにひっかかったことは、最後におとずれた三樹が、恋ぐるまをとび出すとき、鮎子は、あわただしい音がしたので、ふりかえってみたら、坊っちゃんが

鉄砲玉みたいにかけ出してゆく姿がみえたといい、紋太は、高校生らしい影がフラフラとおよぐように出てきた姿をみたといったことじゃった。おなじ入口での目撃ですぞ。鉄砲玉とおよぐのとはだいぶちがう。——ひょっとしたら、それはべつべつの人間ではなかろうか？　こう思ったのです。……

——すなわち、その白マスクの男は、さいごまでマダムの部屋にいたのではあるまいか？　そいつがやってきた八時から、三樹と前後して去った十時ごろまで、二時間にわたって、すでに殺害したマダムの屍骸とともにいたのではなかったか？……そうかんがえると、あの解剖（かいぼう）による死亡推定時間、八時をなかに前後一時間以内という判断にもはまりこむし、またあの念入りな虐殺に要する時間も満足させる。……

——しかし、そのかんがえには、飛躍がある。それでは九時ごろ、女郎ユリ子がきいた、「ネオンを十時になったらつけてもいい」というマダムの声はどう説明すればいいのか。また、あとできた久世氏、車戸三樹がうそをついているとみなければなりたたん想像でもある。久世氏はともかく、母を殺された三樹までが、なんのために犯人をかくすのか？　それは、ふつうの人間心理では、思いもおよばんことです。しかも、久世氏、三樹のようすをみると、そうとうの根拠がなくては、追及しても、とうてい歯がたたん按配にみえた。……

——ところが、そうとうな根拠をもつべく、こちらにはまだあまりに大きな穴があった。やはりそのあいだにやってきたふとっちょの紳士、黒マスクの男の正体がわからんことがそれです。わしは、なによりそれをつきとめることが先決問題じゃと思うた。そして、まず曾谷博士

という存在をさぐりあて、その病院に、マダムの親友伴夫人が入院しているという事実をこの眼でみました。

——そのとき、たまたま、わたしは、伴夫人が妊娠していることを感じとったのです。これは診断ではない。妊娠といっても、ほとんど一ヵ月かそこらであろう。それを感じとったのは、ただ産科専門の医者として、これでも二三十年の経験をもつわしのカンだというよりほかはない。もっとも、ただカンとばかりはいえないかもしれません。そのとき、偶然、伴夫人がすこし吐いた。わしはそれが、どうもつわりのような気がしたのです。つわりは、ふつう二ヵ月か三ヵ月でおこることが多いのだが、はやいひとでは一ヵ月くらいでおこることもあるのです。……突然、わしは、へんてこなことに気がついた。それは、夫人の夫伴泰策氏が、不能者であると告白したことです。もしそれがほんとうじゃとすると、伴夫人はだれのために妊娠させられたのか？……

——数日後にわしは、夫人の尿を検査してもらうことによって、その妊娠が事実であることをたしかめ、また伴氏が実際に性的不能者であることを、或る手段によってたしかめたのです。……

いっぽう、ほとんど当時に、わしはあの黒マスクの男が紋太であることを知ることができた。知ったとたんに彼は殺されてしまったけれど、その直前の告白によって、彼が当夜マダムとあいびきしていたことを知ることができました。……

紋太は、この秋ごろから、四五回、恋ぐるまの二階であいびきしてきたといった。それは実

に危険な、奇妙なあいびきであった。それをきいたときから、わしは妙な気がしておった。要するに、ほかの場所であいびきするとばれやすいというような理由で、紋太はそれをうたがってもおらんようすであったが、常識からいって、じぶんの店の二階であいびきするほどあぶないことはないはずです。いったいマダムは、なんのためにそんなきわどい芸当をかんがえ出したのだろう？……

そのときにわしは、稲妻のように、マダムのおどろくべきいたずら好きを思い出したのです。わたしたちは、女郎の散漫な陳述や、伴氏のセンチメンタルな懐旧談を、あだやおろそかにきいていてはいけなかったのだ。幼きは、あの田舎町でのキャラメルのすりかえから、のちには、この車戸の大将の色女の代役にまたすりかわって笑っていたというあの事件。……

——マダムは、要するに、完全な闇がほしかったのだ。ほかのホテルなどには、どんなはずみでさしてくるかもしれないひかり、またそのあいびきの前後に、どうしてもひかりのなかにみせないわけにはゆかない姿、それをさけたかったのだ。それが、じぶんの店の二階なら、安心してじぶんの自由になる。また紋太も場所が場所だから、少なからずヒヤヒヤして、その闇をふしんに思う余裕はない。……が、なぜマダムには完全な闇が必要だったのだろう？……

——すなわち、紋太があいびきしていた相手は、マダムではなかったのではないか。ちがう女だったのではないか。女郎たちが九時にきいたマダムの声というのは、その女の声ではなかったのか。うえにあがった客は男とばかり思っているから、女の声といえばマダムの声だとしてうたがわなかったのではないか。そしてわしは、秋ごろから、黒マスクの男のくるたびに、

そのまえにマダムをたずねてきたという白マスクのことを想起したのです。そうだ、白マスクの男は、実は女性ではなかったのか？……」

車戸猪之吉はたちどまった。口をアングリとあけた。しかし、歓喜先生は、しだいに歩みをはやめる。

「――紋太はそれを知らなかった。押入に、両足のないマダムの屍骸が、ビニールにつつまれて入っているとは知らなかった。のぼせあがっていたのと、そもそもさいしょから入れかわっているのだから、途中でかんづきようもない。だいいち、だれがこのように破天荒のいたずらに思いつこうか？……

――ただ、すべてを告白したあとで、わしにといつめられているうち、はっとじぶんでも異様な疑念があたまをかすめたようにみえたふしもある。突然、じぶんが行ったときマダムはもう死んでいた！　とさけび出したのは、まだ生きていたという証言がとりあげられそうもないので、苦しまぎれのでたらめか、それとも、わしのいまのべたような疑惑がふっとわいて、それをたしかめるため、ともかくあの場をいちじ糊塗してにげようとかんがえたのか、いまはそれを紋太にたしかめるすべもないが。……

――とにかく、マダムとその女とがいれかわっていたのは、決してあの夜ばかりのことではない。いくどか、それ以前からのことだ。おそらくその女と紋太のあいびきのあいだ、夜具を出してからになった押入にマダムはかくれていたのだ。――そうなると、その女は、むろんマダムのよく知っている女だ。しかも、マダムにそれほどの手数をかけさせてまで、顔をかくさ

なければならんような境遇の女だ。そのときにわしは、その白マスクが、あの夜の一ト月ばかりまえから、恋ぐるまにこなくなっていたということを思い出したのです。一ト月まえ、一ト月まえから行動の自由が制限されたともかんがえられる女で、……しかも、車戸三樹に、あのような悲惨なうそをつかせるほど支配力をもっている女はだれか？……」

歓喜たちは、もうひとつの扉のまえにたっていた。車戸猪之吉は、恐怖のうなり声をたててあごをガクガクさせ、ほとんどにげ出しそうな腰つきになった。

「――その女が妊娠したのは、もしやすると、紋太とのあいびきの結果ではなかったろうか？　そのうたがいは、紋太の証言できえました。避妊のてだては講じてあったという。あの期におよんで、紋太がそんな嘘をつく必要はない。――夫は、不能だ」

捜査主任が、扉をひらいた。

――部屋のなかに、墨絵のように、典雅にひっそりとして、ふたりの狂女が坐っていた。まんなかの官吏夫人は、ひざのうえにちらばった赤や白の布きれをみつめているし、伴夫人は、窓のそばに坐って、無心にじっと外にふる雪をながめていた。

「――では、その女を妊娠させたのはだれだろう？……曾谷博士か、安西医師か？……わしはなるべく、そこまで同業者の人品をうたがいたくなかった。それより、ふっとあたまにひらめいたのは、あの鴉田看護長でした。なぜかというと――いつか、新聞記者がこの病院におしかけてきたとき、狼狽する院長を叱咤鞭撻する――いや、揶揄するとみえたその女の唄が胸によみがえってきたからです。……からすのあかちゃん、なぜなくの。……」

伴夫人は、むなしくひろがった眼で、たそがれにふる粉雪をみつめつづけていた。

「すなわち、その女は、狂人ではない。正気ではなかったのか？……しかし、それでもわしにはわからない。正気とすれば殺人がむごたらしすぎる。狂人とすれば犯行が巧緻にすぎる。……」

伴夫人は、うつろな声で、かなしそうにつぶやいた。

「……圭子……圭子……」

荊木歓喜はおじぎしていった。

「お嬢さんは、外で待っておられます。いやまだ、なんにも御存知ありません。できたら、なにもお知らせしたくない。……奥さん、車戸旗江殺害容疑者として、あなたの逮捕状を持参されたS警察署捜査主任高木滋氏を御紹介申しあげます」

伴夫人はくびをたれた。ながいあいだ、そのまま、運命の像のようにうごかなかった。やがて、徐々に顔をあげた。美しい眼に、まさしく確信にみちた一点のひかりがともった。彼女は、微笑して、しずかにつぶやいた。

「――いつか、この日のくることは知っていました。……」

――もし、イエスさまを信じていなかったら、わたしは気がちがっていたでしょう。

わたしは、旗江さんにそういったことがあります。わたしは、それほどみじめな、恐ろしい生活をしてきました。……わたしには、あの夫がどうしてあんなひどいことになってしまった

のか、いっさいわかりません。ただ、人生とはまったくおくそこもしれないほど恐ろしいものだとしか思われません。……それでも、わたしは、歯をくいしばって忍耐してきました。まじめに、いっしょうけんめいに、イエスさまにおいのりをしてくらしてきました。いつかは夫ももとにもどるだろう。この地獄のような生活がきえるときがくるだろう。……そして、わたしは、たとえ一生涯夫があのとおりで、またこの地獄のような生活がつづいても、イエスさまを信じて、まじめに、いっしょうけんめいにくらして死んでいったかもしれません。もし、あの旗江さんにめぐりあいさえしなければ。……

――けれど、わたしは旗江さんにめぐりあいました。旗江さんは、むかしとおなじようにいいひとでした。親切でした。そうして、幸福でした。あのひとは、こころからわたしのために泣いてくれ、夫を再起させるために努力してくれ、できるかぎりの援助をしてくれました。……

そのあいだ、わたしたちはむかしにかえって、いろいろなおしゃべりをしました。あけっぴろげに、なんでもはなし合いました。その時間だけが、悪夢のようなわたしたちのくらしのただひとつのオアシスでした。……けれど、わたしはそのうち、だんだん憂鬱（ゆううつ）になり出したのです。はじめ、その憂鬱の原因がわからないほど漠然として、ただ、なんだかこの宇宙ぜんたいがきゅうっとねじれているようなふしぎな感覚が、わたしのあたまをしめつけてきたのです。……

――これは、なんだろう？……その正体に気がつくまでに、わたしは旗江さんとあってから、

ほとんど一年たちました。それは旗江さんとあったあと、なぜかわたしのこころに、にがい澱（おり）のようなものがたまっているのをかんじることからわかったのです。嫉妬ではありません。そのにがい澱とは、旗江さんにくらべて、どんなにわたしのこころがくらく、みにくくねじけているかという自覚でした。それはまた、あのひとが、どんなにあかるく、美しく、のびのびしたこころのもちぬしかということの証明でもありました。嫉妬ではありません。わたしはあのひとの生活的な幸福を、ねたましいなどいちどもかんがえたことはありません。それはむしろ、わたしはあさましく、きのどくにさえかんじていたのです。ただ、旗江さんのむかしにかわらない天真らんまんさこそは驚異でした。

　むかしにかわらない？——いいえ、あのひとは、むかしよりもっと成長していました。それは天性のものだったのでしょうか、それとも、わたしのしらないあいだに、あのひとをそう成長させるさまざまな出来事があったのでしょうか。あのひとは、ほんとうにみごとな、血も涙もあるすばらしい女になっていたのです。……

　さまざまな出来事。——けれど、あのひとをとりまいている環境、あのひとがやっているしごと、それはわたしのよく知っているはずのものです。あのひとは、わたしには、なんでもうちあけました。人身売買はいうまでもなく、売春禁止法案をふせぐため、代議士に運動していることも可笑しそうにしゃべりましたし、わたしの夫の麻薬中毒のはなしから、久世という麻薬取締官をなかまにして、麻薬の密売をやっていることも面白そうにしゃべりました。……

　しかも、あのひとは、まるで太陽のようにあかるく、親切な善意にみちあふれているので

す！……

　それは、おそろしいことでした。やっていることよりも、そんなことをやりつつ、なおいい人間であり得ることは、恐ろしい発見でした。悪をなしながら、それでも善良なひとであり得る、すぐれた女性になり得る。——その発見が、わたしのくらい魂とひきくらべて、わたしの信仰をねもとから衝撃したのです。……

　これはへんだ、なにかがまちがっている、こんなことがあっていいはずはない。——わたしは、だんだん、陰鬱にかんがえこむ日が多くなりました。……けれど、それでも、まさかわたしはそれだけのことで、あんな大それたことを思いたつはずはなかったのです。わたしの信じているキリスト教にも、最後の審判という思想がありますし、仏教にも地獄というものがあります。わたしはただ永遠の未来を信じていればよかったはずでした。……

　ところが、そのうち、わたしのふるえあがるようなことがおこりました。——わたしは、旗江さんのやっていることが、いけないことだ、わるいことだと、ことあるごとに娘の圭子と、あのひとの息子さんの三樹さんに、憑（つ）かれたようにおしえました。そして、三樹さんをわたしの信仰にみちびきいれることに成功したのに、かんじんの娘は、しだいにあの旗江さんにあこがれてきたのです。悪というものが、わからなくなってきたらしいのです。わたしに反抗して、いつか三樹さんのお嫁さんになって、旗江さんのあとをついで、あのひとそっくりの女になりたい、など口ばしるようになったのです。……

　わたしは頭をうちのめされたような気がしました。わたしはもだえました。わたしはなんの

ためにこの世に生まれてきたか、なんのためにこの世に生きてゆくのか、わからなくなりました。……そして、ようやく気がついたのです。最後の審判などというものはない、地獄などいうものはない。ないからこそ、ひとがこの世につくり出したのだということを。悪いことをするひとが、一生涯しあわせであり、いい人間であり、最後の勝利者であり得るし、どんなに清浄に、かしこく努力しつづけても、結局ふしあわせであり、ねじくれた人間であり、最後まで敗北者であり得ることを、いろいろとみて知っているからこそ、ひとが、死後に、そんなお伽噺をつくって、せめてものうさばらしをしているのだということを。……

そして、わたしは、とうとう、最後の審判を、現実に、じぶんの手で、この世につくり出そうとかんがえ出したのです！　そして、それをハッキリと娘にみせてやろうと思いたったのです！

悪をなすもの、ほろびるべし！……そのきっかけは、あの三樹さんの一言にありました。どうしてか、わたしをひどく愛してくれたあの子は、いつか、ママはかならず罰をうけなければいけない、と口ばしったことがあるのです。あの子は、狂信的なクリスチャンとなるとどうじに、ゆめにうなされるほど、おうちの職業、ママのしているしごとに思いなやんでおりました。……

陰鬱なかんがえごとのなかに、わたしのあたまに、ゆめかまぼろしのように、ひとつの計画がかたちづくられてゆきました。――わたしはそのあとで気がくるいましたけれど、ひょっとしたら、そのころからもう気がへんだったのかもしれません。わるいことをしながら、なお善

意にみちた人間であり得る――そのとおり、わたしは旗江さんを愛し、感謝しながらも、あのひとにひどいひどい罰をあたえようと計画していたのですから。……

そのころ、あのひとは、廓の若い衆の紋太さんが、ヒトミという女給さんに好かれながら、それにこたえようとしないのは、どうやらあたしにほれているせいらしい、などいう話を笑いながらしました。それからまた、わたしは、夫の麻薬中毒のため、夫婦生活はここ二三年ずっとしたことがない、などいう話をしました。このふたつの話から、あの恐ろしいたくらみがつくりあげられていったのは、わたしばかりの智慧ではなく、旗江さんの智慧でもありました。つまり、わたしがあのひとに化けて、まっくらななかで紋太さんとあいびきするという、とほうもないたくらみでした。わたしがそれにのったのは、べつに恐ろしい下ごころがあったからでした。あのひとがそれにわたしをのせたのは、もちまえのいたずら好きと、そして紋太さんの恋とわたしの寂しさを満たしてやろうという親切からでした。けれど、要するに、あの恐ろしい計画は、加害者と被害者の共同の制作であったことにまちがいはありません。……

わたしのさいしょの計画というのは、こうでした。それはわたしが旗江さんに化けて、何回か紋太さんとあいびきする。そして、そのあと、このことを――旗江さんと紋太さんがあいびきしているということを、御亭主かヒトミさんに知らせて、旗江さんを殺させるか、あるいは、ぜんぶ紋太さんに知らせて、怒らせて、旗江さんを殺させるか、という方法でした。……

わたしは、革ジャンパー、鳥打帽、白いマスクなどを手に入れ、恋ぐるまをおとずれて、去

年の秋から、紋太さんと四五回あいびきをしました。そして、闇のなかで、おそらく旗江さんならこうするだろうと思われるようにふるまいました。……

……けれど、こんなことがながつづきするわけはありません。なにより、わたしのこころがたえきれません。突然、わたしは悪夢からさめたようにわれにかえりました。わたしはなにをしてきたか、おゝ、わたしはなにをしようとしているのだろうか？　現実をみまわして、わたしは恐怖にうたれました。それは全身こなごなになってしまったような恐ろしさでした。そしてわたしは、なにもわからなくなったのです。わたしは気がちがってしまったのです。……あゝ、せめてあのまま、永遠に気がちがっていてくれたら！……

わたしがもういちどわれにかえったのは、この精神病院のこの部屋ででした。わたしは、或る感覚の刺戟で気がついたのです。――あの鴉田に身をけがされて、それで正気にもどったのです。……

数日のうちに、わたしはすべての事情を知ることができました。わたしこそは恐ろしい罰をうけたのです。この寒ざむとした精神病院で、あのけがらわしい、猿のような老人に、世にもあさましいすがたで凌辱をうけたのです。

そのうえ、月のものまでとまったことを知ったとき、わたしは死固したようになってしまいました。なぜ、このわたしがそれほどの大苦難をうけなくてはならないのか、なぜ、ここまでむごいはずかしめをうけなくてはならないのか。……突如としてわたしは、復讐の鬼女にかわりました。だれに？　それはもう、鴉田看護長などを超えた、やけただれるような怒りでした。

厳密にいえば、あの相手は旗江さんでなくともよかったのです。それは、人生に対する復讐、運命に対する復讐でした。……

ただ、その具体的な復讐の実現として、気がちがうまえにかんがえつづけていたあのことがえらばれたのでした。わたしは復讐の魔神のように、ふたたび計画の遂行にのり出しました。

……

計画はややかわりました。新らしいものがつけくわえられ、根本的な構図も毒々しい色に染めかえられました。わたしは、わたしをこういう運命におとしいれた責任の一端を負うべき曾谷院長をくみいれ、麻薬取締官でありながら、麻薬を密売して、わたしの経験したような不幸を世にまきちらしている久世さんをさそいいれ、またこの復讐をもっと象徴的にするために、旗江さんの息子さんもよぶことにしました。要するに、旗江さんは、もっともあさましい姿で十字架にかけられなければならないのです。そして、その死の意味として、あのひとが世にも淫蕩な妖婦であったということを、ひとびとに印象づけなければならないのです。……そのためにも、あの夜わたしは、旗江さんのまわりに、えたいのしれない男どもをウヨウヨ登場させなければならなかったのです。……

むろん、それは、わたしの白マスクの姿をごまかし、埋没させるためでもありました。この点をさらに完全にさせるためにも、白マスクが最後に去ったということがわからないように、わたしは、三樹さんに、高校生の制服をもってこさせるようにかんがえ出しました。わたしが殺したということがわかったら、娘への教育というひとつの大義名分がくずれます。すべての

ことが、ぜんぶムダになります。わたしという人間をかんづかせてはなりません。そのために、わたしは、わたしのもっとも呪うべきもの、呪わしい人間、夫の泰策と鴉田をあえて恋ぐるまへの登場人物から除外しました。ただ夫は、あいかわらず麻薬をもとめて、夜な夜なえたいのしれないところをうろついているでしょうから、いちばん完全なアリバイをつくるために、わざと本郷のうちへやりました。鴉田看護人には、まえとおなじ鳥打帽やジャンパーや白マスクを手に入れさせ、その夜わたしがぬけ出す手つだいをさせました。監視人が手つだうのですから、病院を出ることは、これほど世にもらくなことはなかったのです。……

わたしは、その日の午後、あらかじめ鴉田に電話で旗江さんに連絡させ、病気がほとんどよくなったので、ちょっと相談があるから、夜ひそかに恋ぐるまでおあいしたい。ついてはいつものように、九時すぎに紋太さんをよんでもらいたいといいました。旗江さんはたいへんおどろいたり、よろこんだり、笑ったりしたということです。……

あの夜、わたしが外出したのは、七時半から十時半まででした。……

それからわたしは、鴉田に命じて、それぞれ時間を指定して、車戸の御主人や、院長や、久世取締官や、夫に電話をかけさせ、みんなを将棋の駒のようにうごかしました。ただ三樹さんだけには――院長に電話をかけさせました。それはなるべく、事件を混乱させるためと、またあとで真相をばくろさせないように、いちばんあぶなそうな院長に、犯罪を手つだわせたいと思ったからです。……

わたしは、八時に恋ぐるまで旗江さんにあいました。そして、鴉田から手に入れた毒薬をあ

のひとにのませて殺しました。そのあと、はだかにした屍体を、院長や久世取締官にバラバラにさせたのは、わたしの力にあまるしごとだったからでもありますけれど、やはりあのひとたちに犯罪を手つだわせたかったからなのです。あの男たちを、ガンジガラメにしばりあげたかったからなのです。……

久世取締官をかえし、九時になったとき、わたしは下の女のひとに、「十時になったら、ネオンをつけてもいい」とへんじをしました。それから、両足のない旗江さんの屍骸を、それまで部屋にしいていた大きなビニールの布でつつんで、押入にいれ、かわりに夜具をとり出しました。そして、あのひとの着物をきて、闇のなかで紋太さんと、いつもとおなじようにあいびきしたのでした。……

……わたしは、あのひとを殺したことを、わるいことをしたとは思ってはおりません。わたしは、わるいことを罰しただけなのです。娘に聖書をもってゆかせたのは、その厳粛な罰のすがたをみせてやりたいからでした。……あとで、新聞記者に、また鴉田に電話をかけさせて、危険をもかえりみず、黒マスクの正体をほのめかしてやったのは、あのひとがどうしても罰をうけるに値する大淫婦であることを、ひとびとに――娘におもいしらせたかったからです。それは娘が、まだあのひとのことを、おきのどくに、とかなんとかいって、その罰の当然さを信じるのが足りなかったようにみえたからです。けっして、犯人の虚栄心でひとびとをからかったのではありません。……

……もっとも、男たちが白状しないかぎり、わたしが犯人だとはぜったいにわかるまいとは

思っていました。すべてが終ったのち、わたしは、また夜具とひきかえに出した旗江さんの胴たいだけを部屋にのこし、着てきたジャンパーや毒薬の瓶や庖丁類を血まみれのビニールにつつみ、三樹さんの服をきて、店さきにだれもいないのをみすましてとび出し、ふたたびここにもどって、狂女をよそおいました、しかもそのことは、院長も看護長も知っているのです。知っていながら、どうしようもないのです。ふたりは、わたしのおなかにいる胎児を、なんとかしてしまつしようともがきましたが、わたしははねつけました。この模糊としてまだかたちをなさない罪の胎児こそ、あのふたりを思いのままにうごかす魔法の杖なのですから。また胎児はすべて神のものであるとして堕胎をゆるさないのが、キリストのみおしえですから。――あゝ、この幾重もの壁と扉のなかに、暴力で身ごもらせられてうずくまっているきちがい女、およそこの世でいちばんみじめで弱いものが、いまや幾人もの強い男たちを鞭うち、かけずりまわらせているとは、だれが知ることができるでしょうか？……

……わたしは、あのひとを殺したことを、わるいことをしたとは思ってはおりません。……ただ、わるいことをしたと思っているのは、あの三樹さんを呼んだことです。……あゝ、あのママの屍骸をながめ、わたしをながめ、そしてとうとうくびをきったときの、あの子の眼！……それだけが、わたしの夜ごとのゆめをおびやかしました。……あの子がしんぼうしきれなくなるまえに、その眼が、わたしの正気のこころをひきちぎりそうでした。……それから、もうひとつ、わたしのしたもっとわるいことは、たとえ手段にすぎないとはいえ、わたしがあの紋太さんと姦通したことです。……手段にすぎないとはいえ？……いいえ、わたしは……そのあいびきを、ふかいこころのおくそこで、たのしんでいた瞬間さえあるのです。……

……いつか、この日がくるだろうとは、このふたつの悪への恐怖から知っておりました。……わたしはひとに罰をあたえました。……こんどは、わたしが罰せられなくてはなりません。……わたしは娘にだけは知らせたくはなかった。……けれど……悪をなすもの罰せらるべし、……ほろびるべし、……そのすがたは……ちょうど旗江さんの子の三樹さんがみて知らなければならなかったように……娘の圭子も知らなければならないかもしれません。……さあ、娘をここへよんで下さい。……そして、不貞を犯したこの母の……厳粛な罰をうける恐ろしいすがたを……みせてやって下さい。……

「さあ……娘を……ここへよんで下さい。……」

歓喜先生は、声もなかった。

「この母の……厳粛な罰をうける……恐ろしいすがたを……みせてやって下さい。……」

伴真弓夫人はもういちどいった。

これらのことばは、ひどくおちつきはらっていた。いや、告白のおしまいごろから、彼女の語韻（ごいん）は、ひどくまのびしてきこえていた。……彼女の白い唇のはしから、嘔吐の声とともに、ひとすじのよだれがしたたりおちた。

「よんで下さい。……よんで、わたしの狂った姿をみせてやって下さい。……はやく、娘をよんで下さい。……」

歓喜先生は、ぎょっとした。真弓夫人の全身に、異様な変化がおこるのをみたからである。彼女の右手と右足が、ピクピクと奇妙なけいれんをはじめた。その眼からひかりがうすれ、顔からすべて緊張というものがうせた。

「灯を。……」

と、歓喜先生がうめいた。

ふるえながら、安西医師が、天井からぶらさがっていたはだかの電燈をつりおろして、真弓夫人の眼のまえにおしつけた。ふつうなら瞳孔が縮小するはずなのに、彼女の瞳孔は散大した。……まさしく彼女は、ふたたび気が狂ったのである。発狂の宣言をして、この恐ろしい、いたましい女性は、そのとおりに発狂したのである。それはいくどか寛解し、またゆりかえす躁鬱病の波によるものにすぎない現象であろうか。いや、それこそ厳粛な神の罰とはいえないであろうか？

——おゝ、神よ、彼女をして永遠に狂わしめたまえ。……

歓喜先生は、蒼白い顔で、捜査主任をふりむいた。

「いやいや……このひとは……そもそもさいしょから狂人だったのです。……そうでなければ……そうでなければ……」

そして、車戸猪之吉に命じた。

「大将、すまんが、お嬢さんと三樹さんをよんできてくれませんか」

猪之吉は、ころがるように出ていった。

このあいだ、もうひとりの狂女は、依然として身うごきひとつせず、膝のうえの布きれをかなしげにみつめていた。伴夫人は、恐ろしそうに、窓のところまで犬みたいに這って、そこでくびをたれた。

三樹と圭子がかけこんできたとき、彼女は顔をあげた。しかし視線はそのほうへ、すこしもうごかなかった。ただ、ほそいふるえ声でうたいはじめた。

「花つむ野辺に……日はおちて……
みんなで……かたを……くみながら……」

かけよろうとした圭子が、そのときはたと足をとめた。たちすくんで、じっと眼をみはった。夫人は、ほのぼのとけぶるような美しい笑顔で、なにやら空をさぐるような手つきをくりかえしていた。

「まあ……おばさま！」

「なに？」

歓喜先生は、蒼然として顔をふりあげた。圭子は、母と、それからなにかをじっとみつめている。

「お嬢さん、な、な、な、なにがみえるのだ？」

「あっ、ママ！……ママ！……ママ！」

三樹が、絶叫した。両うでをまえにさし出し、全身をぼう立ちにした。

「三樹君、お嬢さん、なにかが、そこにいるのか？」

「おばさまがいます。……美しい鶯色のデシンの茶羽織をきて……」
そのとき、車戸猪之吉までが、ふっと眼を大きくひろげて、なにやらのどのおくでうめいた。なんともいえない鬼気にうたれてか、さすがの捜査主任も、ぐっと歓喜先生によりかかる。歓喜は総身に水をあびたような思いになりながら、
「ばかな！　こ……こんな話に……幽霊が出てくるって法があるけえ。……」
と、うめいた。
「それでも、そこにいらっしゃるのです。……花がみえます。花がみえます。……おばさまは、お母さまと、笑いながら……花をつんでいます。……」
うたうような圭子の声につづいて、三樹も、妖しい微笑を眼にみなぎらせて、つぶやいた。
「そうだ。花がみえる、白い花が……ママ！」
たちすくんだ歓喜先生の眼に、そのとき、白い花が点々と、ぼうっとおぼろに浮かんでみえたようだった。花が——幻の花が。……いや、雪だ。それが格子の外の世界をうずめて、霏々（ひひ）としてふりしきる粉雪でなくてなんだろう？
——そして、その雪のうえから、天はいま、しずかに夜の幕をおろそうとしていた。……

解説

長谷部史親（はせべふみちか）（文芸評論家）

ここ数年というもの、山田風太郎作品の静かなブームが続いている。しかもその担い手としては、往年の愛読者たちというよりはむしろ、十代後半から二十代の若い読者が目立つらしい。文芸作品はときとして書かれた時点の世相を反映し、また同時代の読者の支持をえることによって立脚点を見いだすが、その一方で世代を超えて読みつがれるものもある。そして周期的に新たな読者層を獲得してゆける作品が、名作と呼ばれるに値するのであろう。膨大な数量にのぼる山田風太郎作品を一群と捉えたとき、何となく宝の山のように見えてしまうのは、あながち個人的な身びいきのせいばかりではあるまい。

どちらかといえば山田風太郎作品は、時代小説の分野でよく知られていると思う。かつて昭和三十年代に一世を風靡したのも、〝風太郎忍法帖〟と総称される特異な時代小説シリーズであった。その後、一連の明治ものを経て、近年では室町時代に魔界を想定した作品群で人気を博しており、また忍法帖シリーズも復刊されている。だが昭和二十二年のデビュー作は現代もののミステリーであり、それからしばらくの間は主にそちらの方面を手がけていた。したがって、とりわけ初期においては現代ものの作品が少なくないわけで、本書『十三角関係』もそう

した一例に数えられる。

本書『十三角関係』は、講談社の《書下し長篇探偵小説全集》の一冊として昭和三十一年に刊行された。この叢書は、予告されたうちのいくつかが、原稿が仕上がらぬまま未刊に終わったものの、江戸川乱歩をはじめ著名作家のほとんどが参加しており、戦後推理小説史を考える上で見逃せないものである。現在では書下し長篇による推理小説叢書など珍しくもないが、これは当時ではきわめて斬新な試みであった。それまで雑誌掲載の短篇作品を中心に推移してきた観のある日本の推理小説が、やがて長篇主体に移行する際の礎石となったと見られなくもない。明瞭な因果関係はともあれ、本書では山田風太郎作品の中でもことさらに推理小説の定型が意識されているように思う。

物語の幕は、東京のS町の遊廓にある「恋ぐるま」という店を舞台に、凄惨な殺人事件が発生することによって切って落とされる。被害者は、その「恋ぐるま」の女主人の車戸旗江という人物で、死体がバラバラに切断された上に、店の看板ともいいうる風車の羽根に手足や頭部が括りつけられ、胴体のみが室内に残っていた。ただちに警察が捜査を開始し、死亡推定時刻を含む当日夜の時間帯に、旗江に次々に七人の訪問者があったことをつきとめるが、そのうちの三人は身もとがなかなか判明しない。

警察の捜査とは別途に、図らずも巻き込まれるようなかたちで、独自に事件の謎を追うのが荊木歓喜という医師である。ただし医師とはいっても自前の医院を持たず、どこかの病院に勤めているわけでもない。酒色を厭わず経済面では恵まれないが、ときに無料で若い女性の面倒

を見たりするため色街ではめっぽう人望が篤い。しかも過去に、勝手知ったる遊里の界隈で起きた犯罪事件の解決に貢献したことがあるそうで、所轄の警察署長とは昵懇の間柄だという。リベラルであると同時に、警察権力の要部に通じるパイプを確保している点で、推理小説の主人公には打ってつけの人材であろう。

その荊木歓喜が、第三章の中で「先ずさぐるべき謎は、マダムという人間にある」との心情を吐露するように、捜査が進むにつれて被害者の旗江の人物像が浮き彫りにされてゆく。旗江は実業家として並々ならぬ手腕の持ち主で、最初は吉原に一軒の店を構えるだけだったのに、短期間のうちに吉原にさらに二軒を加え、S町に「恋ぐるま」を含む二軒、そして「駅のちかくには大きなキャバレーまでつくった」という。そのわりには従業員たちの評判はすこぶるよく、同業者や街を仕切るやくざ者にも顔がきいたらしい。それほどの人物が、なにゆえに惨殺されなければならなかったのであろうか。いやがうえにも謎が深まる中で、第二の事件が勃発する。

本書を読み進めるにつれて旗江の存在性が徐々に大きくなってゆくのは、誰しも感じるところであろう。しかるに旗江は、物語の冒頭でバラバラに切り刻まれた死体として登場するにすぎず、生きている姿が読者の前に呈示されるわけではない。推理小説において、真犯人をつきとめるために被害者の身辺に探りを入れるのは常道だが、古典的な作品では被害者の人物像が鮮やかに浮上する例は概して稀であった。すでに死んだ人間の在りし日に焦点を合わせ、そこから物語をふくらませてゆく小説技法が盛んに用いられたのは、たとえばアンドリュー・ガー

ヴの『ヒルダよ眠れ』に代表されるように、欧米でもたぶん一九五〇年代からであろう。このあたりからも、本書の斬新さの一端がうかがわれる。

作中に売春防止法案の提出をめぐって代議士が暗躍する様子が書き込まれているので、本書の時代背景は昭和二十九年か三十年あたりと見てよかろう。周知のように売春防止法は昭和三十一年（一九五六年）に成立し、三十三年に施行された。現在では、いわゆる「赤線」地帯は吉原を指しており、新宿の「青線」地帯と双璧をなすように捉える向きもあるようだが、実態は必ずしもそうではない。江戸時代に高級遊廓として栄えた吉原とは対照的に、新興の大衆歓楽街である新宿が「赤線」に認知されず、一種の便法として「青線」と称されたという経緯もさることながら、それまで東京のみならず全国各地には、千箇所以上もの伝統ある岡場所が公然と存在したのである。したがって本書の舞台となる「S町」にしても、具体的な場所を推定するのは不可能ではないが、とくにその必要はなかろう。時代特有の雰囲気を味わえば、それで充分なのである。

このほか本書には様々な趣向が盛り込まれており、これは山田風太郎作品全体に共通していえることであろう。たとえば第二章から第三章にかけては「恋ぐるま」に所属するまゆみ、ユリ子、鮎子、朱実の四人の女性の証言が、それぞれの語り口で挿入されていた。また第六章には、被害者の旗江の息子にあたる車戸三樹が同人誌に寄せたという文章が、そのまま掲げられている。事件の周辺人物の手記を連ねる技法は、各自の見解の微妙な差異を通して叙述を立体化するとともに臨場感を増すのに有効であり、推理小説でも英国のウィルキー・コリンズの

『月長石』をはじめ、古くから用いられてきた。本書ではこの技法を部分的に採用することで、アクセントをきかせたと見られよう。

また第十一章には、探偵役の荊木歓喜が事件関係者を一堂に集めて、謎解きを試みる場面があった。これも古典的な推理小説では常套的な手法だが、周到にも作者は「余談になるが、むかしから探偵小説というものには、いろいろと約束ごとがあって……」などと皮肉めいた言をまじえている。むしろ荊木歓喜の謎解き場面を、新聞記者たちによる「嘘倶楽部」の会合に設定したことによって、さんざん使い古されて陳腐に堕した手法を逆手にとったと考えられなくもない。オーソドックスな推理小説に食傷ぎみの読者でも、ここではいささか煙に巻かれたような気分にさせられるにちがいない。しかも、いったん明かされた謎の背後に、驚愕の真相が隠されているのである。

さらにいえば、荊木歓喜が二宮尊徳を引き合いに出して歴史の裏読みを試みたり、「真の悪党というものは、決して悪いことはせんものだ……」との逆説を吐くところなどは、事件全体の構造を知ったうえで改めて思い返すと、なかなかに味わい深い。また瑣末なことながら、事件の鍵を握ると見られる件真弓が、霧島昇の往年のヒット歌謡曲『誰か故郷を想わざる』の一節を口ずさむシーンを描く一方、同じ歌の三番の歌詞の一部「都に雨のふる夜は」「遠く呼ぶのは誰の声」を第八章と第九章のタイトルに転用した洒落気にも、思わず頬を緩めさせられてしまう。

先にも述べた驚愕の真相について、以前には不可能にするトリックの冴えと見る評価

が支配的であった。たしかに真犯人を捜査線上の死角に巧みに配置し、最後で逆転するテクニックは侮れない。ある意味でこの発想は、推理小説としての本書の生命線であろう。しかしながら、どうもそれだけでは片づけられないような気もする。しいて掘り下げてみるなら意外な真相の実体とは、一人の女性が選んだ人生とキリスト教的世界観との相克であり、そこに捨て難い望郷の念が複合しているのではなかろうか。そのように考えたとき本書の結末は、単なる表現技巧の産物ではなく、弱さや哀しみを伴った人間の営みの一環として読者の胸に迫ってくるように思えてならない。

一読すれば誰にも自明のとおり、本書『十三角関係』はユーモアを基調とした推理小説のパロディと見ることもできるわけだが、同時にすぐれた謎解き推理小説の要件を満たしており、なおかつ深遠な洞察に基づいた本格的な小説でもある。本書が書かれた年代を考慮すると、甚だ貴重な存在といわざるをえない。四十年を経てなお自己主張を続けてやまない盛りだくさんな内容こそ、まさに山田風太郎作品の真骨頂であろう。ぜひとも味読していただきたい一作である。

本作品は、ロマン・ブックス（講談社、昭和三十四年六月刊）を底本としました。

〔お断り〕
本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。（編集部）

十三角関係

ミステリー＆ハードノベルス

著　者　山田風太郎
発行者　櫻井道弘
発行所　廣済堂出版
〒107　東京都港区赤坂6-17-5
電話　03（3584）7610（営業）
03（3584）6123（編集）
振替　00180-0-164137
印刷所　廣済堂印刷株式会社
〈編集担当〉伊藤秋夫

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-60525-6 C0193